

とある魔術の仮想世界[2]

小仏トンネル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ログアウト不可能、そしてゲームの世界での「死」は文字通り現実世界での「死」を意味する悪魔のデスゲーム「ソードアート・オンライン」が開始して約2年。その悪魔のゲームは、1人の少年とその仲間達によって終止符が打たれた

しかし、現実世界へと帰還した上条当麻を待ち受けていたのは、SAOで生き残ったはずの人々のほとんどが目覚めないという過酷な現実だった。現実には絶望した上条は煩悶とした日々を過ごし、次第にその心は死んでいった

そんなある日、上条の元をある人物達が訪れる。その人物達から興味深い話を聞いた上条は、新たな仮想世界へ旅立つことを決意し、もう一度その右手の拳を強く固く握り締める

これは、「失われた世界」と「失われた人々」を取り戻すための物語である

目次

このSSを読むにあたって作者から	1
フェアリー・ダンス編	
第1話 来訪者	3
第2話 手がかり	8
第3話 もう一度	19
第4話 独白	23
第5話 妖精の国へ	27
第6話 ログイン	32
第7話 出会い	38
第8話 初陣	43
第9話 大空を舞う	48
第10話 魔法	52
第11話 指南	56
第12話 噂	61
第13話 『閃光』	65
第14話 面影	72
第15話 矛盾	75
第16話 食い違う現実	79
第17話 再会	84
第18話 議論	89
第19話 並行世界	95
第20話 新パーティー	100
第21話 旅立ちに向けて	104

第22話	剣と拳	109
第23話	幻想殺し	116
第24話	内乱	121
第25話	世界樹へ	127
第26話	暗闇	134
第27話	追跡	140
第28話	集団戦法	146
第29話	奇策	151
第30話	ログアウト	157
第31話	忍び寄る闇	162
第32話	雷神	168
第33話	全ての真相	173
第34話	V S 雷神	179
第35話	全能	187
第36話	道は違えど	194
第37話	領主会談	199
第38話	最強 VS 最弱	205
第39話	願いの柱	212
第40話	He's mine!	216
第41話	架け橋	221
第42話	央都 アルン	227
第43話	グランドクエスト	236
第44話	限界	241
第45話	戦う理由	248
第46話	兄妹	252

第47話	天の高みへ	257
第48話	残り火	262
第49話	生還	268
第50話	真剣勝負	272
第51話	絆	279
第52話	団結	283
第53話	打開策	289
第54話	全身全霊	293
第55話	激突	300
第56話	異変	306
第57話	神の一撃	310
第58話	人の一撃	316
第59話	目覚め	321
第60話	祝宴	331
第61話	忘れられぬ日	338
最終話	エピローグ	351

このSSを読むにあたって作者から

どうもみなさん、こんにちは。作者の小仏トンネルです。

この度は何のご縁があつてか、数あるSS作品の中からこのSSまで足を運んでいただけたことを大変嬉しく思います。

同作者の「とある魔術の仮想世界」をお読みになってこのSSを閲覧して下さった皆様、いつもありがとうございます。それ以外の方々は初めまして。今後とも何かご縁があればよろしくお願い致します

ご挨拶はこの辺りにいたしまして、今回もこのSSを読むに差し当たつての注意事項をいくつか説明させていただきたく存じます

・既にタグ付けはしてあるのですが、本作品は「とある魔術の禁書目録」と「ソードアート・オンライン」のクロスオーバー作品となっております。クロスオーバーがどうしても苦手な方はこのSSは見なかつたことにしてブラウザバックを推奨します。

・前提としてこの作品は同作者の「とある魔術の仮想世界」というSSの続編です。前作を読んでいないと物語に齟齬が生じますので下記URLよりアクセスいただき、そちらを先にお読みになることを推奨いたします。

・とある魔術の仮想世界 URL

<https://syosetu.org/novel/135988/>

・この作品は両原作のネタバレ、ストーリーバレを多く含んでおります。禁書目録に至りましてはスピンオフ作品の「とある科学の超電磁砲」に関しても多くのネタバレを含んでおります。どうかご容赦下さい。

・本作品は作者の構想段階ではかなりの長編を予想しております。書くペースは極力維持していく所存ではありますが、どうか長い日取りと共に楽しんでいただきたく思います

・これも構想段階の話になるのですが、今作品は前作で登場したS

AOのキャラクター、禁書目録は上条以外のキャラクターがほとんど出てきません。あらかじめご了承ください

・ソードアート・オンラインに関しましては、魔法、武器類、アイテム、全体のシステムなどに関しまして作者なりのアレンジや変更があります

・そしてこれは「とある」シリーズに関しての注意事項になるのですが、基本的に未だに原作でも明確に明らかにされていない設定（魔王の顎や天使の力など）は作者の想像と自己解釈で書いていきます折、多少の既存の設定にも変更がございますのでご容赦下さい

・ストーリーの内容は作者なりに考えていく所存ではありませんが、ストーリーは基本的にソードアート・オンライン原作の物語をなぞりながらの内容になると思います。しかし、登場キャラの違い、両作品のキャラ同士の掛け合い、戦闘シーンなどはクロスオーバーの面白さを十分に引き出していく所存ですので、楽しんでいただければと思います。時間軸なども基本的には両原作を基準にしています

以上の点で1つ又は複数の該当項目がある方は先ほどと同じく本作品の存在は見なかったことにし、速やかなブラウザバックを推奨します。

該当項目が無かった方、もしくは「該当項目があっただけど我慢して読むぜ!」という方々、深い配慮と心の広さを海より深く尊敬すると同時にこれ以降、本SSに目を通して頂けることを作者としてこれ以上ない感謝を申し上げます。本当にありがとうございます

本当に大変長らく失礼致しました。完結まで頑張つて行きたいと思えます。ご意見、ご感想、アドバイスなどございましたらどうぞ遠慮なく申し上げて下さい。それでは、この辺で失礼します

最後まで本SS「とある魔術の仮想世界「2」」をどうぞお楽しみ下さい。

フェアリー・ダンス編

第1話 来訪者

「・・・もう2時半か」

上条がSAOから帰還して既に6ヶ月ほどが経過していた。季節は春。月日は丁度桜もそのほとんどが散り終わった5月の中旬。上条は無事にあのデスゲームから生還し、高校を無事に卒業した。そして学園都市内の大学に進学し真面目に通学しており、先ほど今日の最後の講義を終え昼下がりの中庭のベンチで一休みしていた

「さて、ぼちぼち行きますかなつと・・・」

「おーい上条当麻ー!!」

しかし、中庭のベンチから立ち上がり目的に進めようとした足をすぐさま誰かから呼ぶ声に引き止められた

「お?なんだ吹寄か」

「なんだとは何よ、失礼ね」

彼を呼ぶ声の主の正体は1人の女性だった。入学した後に気づいたことなのだが、何の因果か高校時代からの友人であった吹寄制理も同じ大学に進学していた

「確かさっきの講義で今日の大学終わりでしょ?」

「あ?ああ、そうだな。あ、悪いけど今日のサークルの飲み会なら・・・」

「パス。でしょ?」

「へ?」

「今日は『あの人達』の所に行くんでしょ?折角だし私も一緒について

行くわ」

「え…いい、いやでもあの病院に見舞いについて来るって言っても関係者以外は面会謝絶だって…」

「あのね、貴様が2年間寝たきりだった時に律儀に顔見に行ってたのはどこの誰よ？あの力エルに似た先生がいるならきつと口聞いてくれるわよ」

「あ、そうか…すまん…」

「いいのよ、別に謝らなくて。そりや実感湧かないし分かる訳ないわよね。ずっと目瞑ったまんまなのに誰がいつ自分のお見舞いに来てくれてたかなんて」

「…すまん」

そう言って吹寄は上条に笑いかけたのとは裏腹に、その言葉をかけられた上条は暗く低い声で返答した

「やっぱ…そうだよな…こんなこと意味ないよな…吹寄の前で言うことじゃないのかもしれないけど…行ってる側はこんなに辛い思いで通ってるのに…当の本人はお礼の一つも言わずに…自分を認知してるのかも分からないってのに…」

「…訂正しなさい、上条当麻」

「…え？」

「意味がない。なんて言わせないわよ。いい？その耳かっぽじってよく聞きなさい。確かに私もこの2年間はずつと辛かったわ。何日通っても、何ヶ月通い続けても、目の前の人は返事もしないし、顔色の一つだって変えてくれやしない。正直、病院を見るだけで泣きそうになる時もあった。途中で数えるのもやめたぐらい何度も投げ出そうとしたわ」

「…」

吹寄が上条の見舞いの為に通院していた頃の記憶を独白していく。辛さを絞り出したかのようなその言葉の一つ一つが自分によって生

まれていたものだと思うと、上条は心が痛んだ

「でもね、それ以上に目の前の貴様が目を覚ました時、どれだけ嬉しかったか正直言葉じゃ言い表せないわ」

「!!!」

「あ!の日、あの時に初めて思った。これまでの私の2年間に意味はあったんだってね。何度も投げ出そうとしたし、何度も貴様の前で挫けそうになった。それでも、ちゃんと意味はあったんだって貴様が目を覚まして私の名前を呼んでくれた時に、そう実感したのよ」

「だから上条当麻。貴様のやってることに意味はちゃんとあるのよ。何よりも嬉しいと感じるその日がいつかきつと来る。それに、貴様が自分で決めたことなんですよ?だったらこんな早くから簡単に投げ出すんじゃないわよ!男でしょ!」

「・・・そうだな。吹寄、いつもサンキューな。俺、元気出たよ」

「ったく・・・私は別にもう委員長じゃないってのに・・・いつまで貴様の面倒をみなきゃいけないのかしら?」

そう言っつて目の前の彼女は腕を組んで深いため息を吐いた

「そういえば、そもそもなんで吹寄は2年間俺の見舞いなんか続けてたんだ?」

「委員長だからよ」

「そ、その立場だけって理由で2年間やり通したって中々図太い性格してるなお前・・・」

「まあ世話焼きだし、貴様にまたクラスに戻って来てほしいってずっと思っつたのは事実だしね」

「左様ですか・・・」

「ほら、善は急げよ。行くなら行くでさっさと行くわよ」

「そうだな、サンキュー」

そう言っつて彼らは学園都市内の病院に向けて足を運び始めた

「こんにちはー」

「はい、こんにちは。今日もありがとうございます。御坂さんの面会でよろしいでしょうか？」

「はい」

「あのー…すみません」

「はい？今日はお連れ様が…つて、吹寄さんじゃないですか！お久しぶりです！」

病院の受付を担当している女性は上条の後ろに隠れていた吹寄の顔を見るなり、驚きの声を上げ、久しぶりに会えたことを喜んでいた。吹寄も2年間この病院に通い続けていたのだから受付の女性に顔を覚えられていて当然と言えば当然かもしれない

「はい、お久しぶりです。それでなんですけど私、彼女の関係者じゃないんですけど彼のお付きとして面会しても大丈夫ですか？」

「あ〜…そうですね…大変申し訳ないんですけど直接の関係がないと流石に…」

「やっぱりそうですよね…」

「なに、彼女ならば構わないさ。お通ししてあげなさい」

「あ、先生」

すると奥から受付に向かって歩いて来ていたカエルによく似た「冥土帰し」と呼ばれる医者が3人に話しかけた

「ところで君、丁度いいところに来たね」

「へ？俺ですか？」

「君に会いに来ている人たちがその奥にある客室で君を待っているよ」

「俺に会いに？一体誰がですか？」

「会えばすぐに分かるさ」
「??？」

流石にそこまで客室に來ていると言われる人物について煙に巻かれると氣になるのを通り越して煙に巻く理由を考え始める上条だったが、そんな彼を氣にせず冥土歸しは続けた

「そういう訳でだね、君は客室に、彼女は御坂君の病室に行くといい。彼女の病室までは僕が案内しよう」

「あ、わざわざご丁寧にありがとうございます。そういうことならまた後で会いましょ、上条」

「あ、ああ、分かった。こっちの用が済んだらそっちに行くよ」

その言葉を聞くと冥土歸しと吹寄は美琴の病室へと歩き始め、上条は先ほど言われた通りの客室へ向かい、その扉の前に立った

「えくつと…まあとりあえずノックしとくか…」

コンコンツ…

どこか不安げなに聞こえるような弱々しい音と叩き方で2回ノックをした上条。そしてその扉のドアノブに手をかける

「し、失礼しまーす…」

上条が客室の扉を開けたその先にいたのは、上条がとても良く知る三人だった

第2話 手がかり

「・・・え?」

「やつほー!かーみやん!」

「遅いぞ、上条当麻」

「土御門!?それにステイルも!」

客室の扉を開けて最初に目についたのは、入った扉に丁度向かいになる椅子に腰掛けたステイルⅡマグヌスと土御門元春だった

「なんだよ土御門!イギリスから来るなら前もってそう言ってくれよ!ステイルもいるならなおさらだぜ!」

「勘違いしないでもらえるかな、僕は別に君と日和に来たわけじゃない」

「おーっと、一番のメインを忘れてもらっちゃ困るぜい上やん」

「へ?一番のメイン?」

「彼女だ。忘れたとは言わせないぞ」

「・・・」

「彼女…って…」

椅子の配置の関係で、客室の扉に背を向けている椅子に腰掛けており、客室に入ってからその場に立ちっぱなしだった上条からはずっと顔が見えなかった人物が一人いた。その人物は女性だった。上条が片時も忘れることはなかった純白の修道服に身を包んだ少女…

「久しぶり、とうま。2年ぶりだね」

「インデツ…クス…?」

「えへへ、どう!?流石に2年も経てば少しは大人の女性としての色香も出たと思うんだよ!」

そう言つて元から大してない胸を張る彼女はその頭に10万3000冊の魔道書を記憶した「禁書目録」だった。もつとも、2年もの歳月が流れたが故に身長もいくらか伸び、引きずって歩いているように見えた修道服のサイズも丁度良くなり、どこか大人びた雰囲気纏っていた

「その喋り方！本当にインデックスじゃねーか！久しぶりだな！いやー全然変わってねーな！会えて嬉しいよ！」

「会えて嬉しいのは本当なんだけど全然変わってないって言われるのは嬉しくないかも！」

「ははは、悪い悪い！」

「全く。でもそう言う手前、とうまはこの2年間でかなり変わったかも」

「え？俺が変わったって？まあそりや少しは背も伸びたし、寝たきりだったとはいえ成長期なんだから二つも歳とりやそりや少しぐらいは顔つきも…」

「そういうことじゃないんだよ」

「へ？」

「彼女が言いたいたいの君のその『面構え』について言ってるんだ。正直二年前も褒められたものじゃなかったが、ことさら酷い面構えだぞ、今の貴様は」

ステイルが上条とインデックスの会話にそう口を挟んだ

「そうか…まあ…そう言われりゃ…ってか…そりやそうだよな…」

「…とうま…」

そんなステイルの指摘に自分自身で自覚しているのか、加えて思うところがあるのか、必要以上に重く受け止めてしまう上条。そんな上条の顔を心配そうにインデックスが覗きこんでいた

「さて、立ち話もその辺にしよう。とりあえずインデックスが座つた椅子の横に座れ上やん。今日は別に再会を促す為にわざわざ日本まで飛行機を飛ばした訳じゃない」

「え？あ、ああ…分かった」

そう言つてインデックスは土御門とステイルと机を隔てて逆側に置かれた元の椅子に座り直し、上条はその隣の椅子へと腰掛けたのを見ると、土御門がおもむろに口を開いて話し始めた

「さて、早速本題になるが上やん、俺たちも今の現状は把握出来ていない。あのデスゲームと化したSAOがクリアされたのにも関わらず、その時点でゲームをプレイしていた人のほぼ全てが目覚ましていないこともない」

「だが事態はそれだけに収まったことじゃない。貴様も話の片手間ぐらいには聞いたかもしれないが、学園都市統括理事長であり今回のSAO事件の真の首謀者であるアレキスターがああ『窓のないビル』で既に死亡していた。彼自身もまた一般のプレイヤーと同じようにゲームオーバーになれば現実でも命を落とすという条件の下にSAOにログインしていたと見て間違いないだろう」

土御門に続いてステイルも状況の説明に口を開いた

「お陰様で科学サイドと魔術サイドの勢力図はごちゃごちゃだ。あのイギリスの片田舎で死んだはずアレキスターが生きていたという事実に驚くのも束の間、科学サイドという最大の邪魔者がなくなつたのいい事に魔術サイドでは壮絶な覇権争いが始まった。こうして今日ここに来るまでも俺たちの予定は多忙を極めていた。インデックスの10万3000冊を求めて魔術教会同士の抗争が起ることもしばしばだ。事態は俺たちが考える以上に混沌を極めている」

「……………」

そんな土御門とステイルの話の話を黙って聞き入る上条。確かにアレイスターが死亡したという事実は自分が目覚めてから数日後には知っていたが、それをもって魔術サイドにも大きく影響していたとは想像もしていなかった

「ところが、その超多忙な予定に穴を開けてまで僕達が君の所に来たのには理由がある」

「・・・俺にその覇権争いの手助けをしろってか？」

ステイルの言う「理由」というのがなんなのかに予想を立て、上条はそんな疑問を投げかけた

「自惚れるな。確かに君の右手は僕達魔術師にとっては脅威だが二年間も寝たきりで身体も鈍りきったド素人を仲間に引き入れるほど僕らも見境がない訳じゃない」

「そ、それじゃあ一体何のために？」

「これを見てくれ、上やん」

そう言つて土御門は二人の間に置かれた机の上に何かを出し、それを滑らせるように上条に投げ渡した

「これは…ゲームのソフトか？」

『「アミュスファイア」…ナーヴギアの正式な後継機でフルダイブ機能に対応したゲームハードであり、ソイツはそのゲームのソフトだ」

「つまり…SAOと同じVRMMOか？」

そう言つて上条は渡されたソフトを手に取り、その目でじつと見つめ始めた

「アルフ…ヘイム…オンライン？」

『「アルヴヘイム・オンライン」』と読むらしい。通称『ALO』と呼ば

れていて『妖精の国』という意味らしい。コイツはSAO事件が起きて丁度1年が経過した頃に発売したソフトだ」

「・・・妖精の国…ってことはまったり系のゲームか?」

「いいや、これが中々ハードなゲームで、プレイヤー同士の間接戦闘であるPvPが基本…もといPK推奨が前面に打ち出されているVRMMOだそうだ」

「PKか…SAOじゃまずあり得ない話だな…」

「プレイヤーは最初に9つの種族から1つの種族を選んでアバターを作る。そしてその同じ種族を選んだ他のプレイヤーと協力して別の種族と戦い、このALOの世界の中心にそびえ立つ『世界樹』の頂点を目指す…というゲームらしい」

「なるほど…種族間抗争を進んでやってもらう為のPvP、もといPK推奨ゲームって訳か」

「だがこのゲームのハードなところはそれだけじゃない。SAOのようなソードスキルは存在しないどころか、いわゆる『レベル』という概念が存在しない。各種スキルが反復使用によつてその能力が上昇するだけで、HPは成長しても大して上がらない。攻撃力と防御力の大半は装備に依存し戦闘はプレイヤーの運動能力に委ねられる」

「そ、そいつあハードだな…ソードスキルを発動すればシステムアシストで身体が勝手に動いてくれるSAOとは雲泥の差もいとこだ…」

「それに加え、このゲームには今までにない機能がある。それがこのALOを一躍大人気ゲームに押し上げたんだ。その機能こそが『飛行』機能だ」

「飛行!?飛べんのか!?!」

「妖精だから翅がある。『フライトエンジン』なるものを搭載しているようだな、慣れると自由に空を飛び回れるようになるらしい」

「そりやまたすごいな…ぜひSAO時代に欲しかった機能だ…さぞ戦闘に幅が生まれただろうな…」

「で、ここからがこのゲームをわざわざ見せた本題なんだが、いいか?」

そう言うと、土御門の周りを覆う空気が変わり、サングラスの奥に見える瞳に鋭さが宿る

「・・・おう」

「このゲームのプログラムの基盤になっているのは、S A O サーバーのコピーであり、それに加えてS A O と同じ『カーディナルシステム』を採用している」

「!!!」

「基幹プログラム群やグラフィック形式は完全に同一だ。ただ、カーディナルに関しては少し古い。それでもこのゲームがS A O サーバーのコピーであることは明確だ」

「・・・」

「これだけでもS A O と関連づけるには十分だと上やんは感じるだろうが、俺たちが着目したところはそこだけじゃない」

「そこだけじゃない?」

「このA L O にはソードスキルがないと言ったが、A L O にはS A O がないスキル項目がある」

「そのスキルつてのは何だ?」

「・・・『魔術』」

「なっ?!?」

「厳密に言えばゲーム内では『魔法』と呼ばれているらしいが、どうやらこの魔法には発動時に呪文・・・つまりは『スペル』を唱えなければならぬらしい」

「・・・」

「その魔法と呪文が、俺たち現実の魔術師が扱う魔術と似通っている点が多く存在することが分かった」

「現実の魔術と・・・同じ・・・?」

「ああ、それに気づいたのは・・・実はそこにいるインデックスなんだ」

そう言うと土御門は上条から視線を切り、彼の隣に座るインデック

スの方に視線を運ばせた

「い、インデックスが!? ってかお前ゲームなんて……!」

「私も一度見てみたかったの。とうまの目が覚めたって聞いた時に、二年間もとうまは一体どんな世界で過ごしてたんだろうって。それでかおりに一杯頼んでやつとのことで1ヶ月くらい前からALOを始めたら……もうビックリしたんだよ! 私の中にある10万3000冊の中を探せばいくらでも出てくるようなスペルがいっぱい! これは絶対おかしいつて思ってたかおりに相談したら、もとはるが色々調べてくれたんだよ!」

「そうしてねーちゃんから報告を受けてこのゲームを調べていくうちにその2つの共通項が見つかったって訳だ。SAOと同じサーバーとシステム基盤に、SAOを作ったアレイスターが使いこなしていた魔術……これだけでも上やんにこの事態を伝えるには十分だと踏んだ俺たちは日本に飛んできた……って訳だ」

「まあ、最終的に日本行きが決定したのは彼女の熱烈なまでの頼み込みがあったからだ。教会のメンツも頭を抱え込むほどにな。精々後で彼女に礼でも言うことだな」

そう言うときステイルはタバコに火をつけ、タバコをその口に咥えその味を嗜み始めた

「……つまり、このゲームに隠されてる何かを解決すれば、SAOがクリアされても目を覚まさないアイツらが目を覚ますかもしれないってことなんだな?」

「まあ、その手がかりがあるとすれば恐らくこの世界樹の頂点だ。さつきも言ったがこのゲームはもう発売してから1年以上が経過してる。大半のエリアはもう明らかになっているが、この世界樹の上だけはまだ明らかになってない」

そう言うとき土御門はソフトのパッケージの裏面に書かれている世

界樹を指差して言った

「それに、SAO生還者を救えるという『可能性』があるってだけだ…
確証は持てない」

「…それでも…やるだけの価値はある…ようやく見つけたこれだけが
たつた一つの手がかりなんだ…それならそれに縋り付いてやるさ」
「…上やん…」

「土御門、このソフトもらっていいか？」

上条は机に置かれたソフトを再び右手に取り、目の前の土御門にA
LOのソフトを譲ってもらえないかと頼んだ

「それは俺じゃなくて隣のインデックスに聞いてくれ、そのソフトは
元々俺じゃなくインデックスの物なんだ」

「え、インデックスの…?」

「そりやそうだろう。バカなのか君は?元は彼女が君の後を追って始
めたゲームで気づいたおかげでここまで議論が進んだんだ。話を聞
いていればそれぐらい分かるだろう、それとも僕達がそんなゲームに
本気で興味を持つとも思ったのか?」

「そ、それもそうか…」

「あれー?いつだったかインデックスがゲームを始めたちよつと後ぐ
らいに必要な悪の教会のメンバー共有の新聞に付属してた電化製品の
カタログに目を通してアミューズフィアが掲載されてるページに折り
目をつけてたのはどこの誰だったかにやー?」

「つつ!?!土御門!なぜ貴様がそれを…!?!」

そんな風にステイルをからかう土御門と顔を赤くするステイルを
他所に上条はインデックスの方に向き直り、真っ直ぐな瞳で見つめて
口を開いた

「…インデックス、お前さえよければこのソフトを譲ってくれない

か？俺は目を覚ましてからずっと…こんな機会を探し求めていたんだ…藁にもすがる思いでずっとアイツらとまた笑う日々を求めてたんだ…だから…俺はどうしても…」

「いいよ」

「…へ？」

「うん、いいよ。そのソフトはとうまが持つて行つて」

上条が並々ならぬ決意を語るのを他所に、インデックスは何とでもないとしようような口調でそう言いながらソフトを持つ上条の手に自分の手を重ねた

「い、いいのかよそんな簡単に…これ言つてもそんな安くねえんだろ？そりゃ俺としても嬉しい話なんだが…お前だつてこのゲームやつてたんだろ？だつたら…」

「ううん、いいの。私はシスターなんだよ。迷える子羊がいるなら、導いてあげるのが私たちの役目。それに、私そのゲーム始めたのはいいんだけど全然得意じゃなくてももう数えきれないぐらい他の人にやられちゃったんだよ」

「ま、まあそれはなんとなく想像つくが…」

「それはそれで失礼かも！」

「す、スマン！」

「ごほん！でもね、とうま。これを私から貰うなら一つだけ約束して？」

「約束？なんだ？」

「絶対に短髪や他のみんなを助けてあげること!!!」

「!!!」

「確かにとうまが寝たきりになって離れ離れになった時、私もすつごく辛かったんだよ。でも、だからこそとうまの今の辛さが私には分かる。私は待つことしか出来なかったんだよ。でも、とうまはそれじゃダメ。そこに一筋でも希望があるなら、必ずそれを掴み取つて。とうまはあの世界でたくさんの人に助けてもらつたはずなんだよ。だつ

たら話は簡単。今度はとうまがみんなを助けてあげる番。だから、頑張って。とうま」

瞳の奥に暖かさを秘めて上条に優しく語りかけるインデックス。そんな彼女からの言葉と信頼を受け、上条の胸の内にはとても暖かく、煌々と燃える決意の火が灯されていた

「・・・ありがとうインデックス。約束する。俺は必ずみんなを助ける。そしてらいつかみんなが集まって美味しい飯でも食べよう」

「うん！約束だよとうま！指切りげんまん！」
「おう！任せろ！」

そう言って二人はお互いの右手の小指を差し出し、その指を繋いだ

「ユーびぎりげーんまん嘘ついたら針千本のーます！指切った！」

しかし、その瞬間悲劇は起きた

「あ

上条とインデックスは指切りの際に少々腕を大きく振りすぎていた。それはテンションが上がってしまった為まあ仕方のないことかもしれない。しかし、それはインデックスの身を包む修道服の無駄に広い袖も大きく揺れるということ。その修道服の裾が上条の右手に触れれば当然・・・

バツサアアアアアアアアアア!!!

「歩く教会」は破裂する

「きやあああああああああああああああああああああああ

ああああああああああ
「?!?!?!?!」

「のわああああああああ
ああああああああああ
?!?!?!?!」

「とうまの…バカああああ
ああああああ
ガブガブガブガブ
!!!!!!」

「ぎゃああああああああ
ああああああああああ
!!!!!!」
!!!!!!
不幸だああああ

第3話 もう一度

ガラガラガラ…

「やつと来たか上 Z Y …… 私の記憶が確かなら私達はお見舞いに来たはずなんだが、逆に貴様が他の誰かにお見舞いに来てもらった方がいいんじゃないかその傷は」

「もうほっといてくれ…」

その後、インデックスにひたすら噛まれ続けボロボロにされた上条は彼女達のいた客室を後にし、吹寄の待つ御坂美琴の病室へと足を運んでいた

「…にしても貴様は中々可愛い女の子のお見舞いに通っていたようだな」

そうやって吹寄は目の前のベッドに眠る美琴の淡い茶色の髪の毛を優しく撫でていた

「…中身は可愛いどころか、とんでもないお転婆少女だけどな」
「そうか…しかし貴様がレベル5の1人と知り合いだったとは驚いたがな」

「まあ俺はレベル0なんだけどな…その点、美琴はすげえよ…血の滲むような努力を重ねて自分の力でレベル5までたどり着いたんだ。言ってみれば俺とは真逆の人間さ」

そんな風に自嘲しながら上条は病室の端にある椅子を取り、吹寄の隣に置いて腰掛けた

「…で、そんなんで誤魔化し切れてると思ってるの？」

「…え？」

「何かあったんでしょ？大方さっきの客室に来てた人が関係してるのかしら？」

「な、なんで分かったんだ？」

「目つきよ」

「・・・目つき？」

「ここ最近の…というかSAOから目覚めた後の貴様はずっと死人のような虚ろな目をしていたが、今は違う。なんだか目の奥に覚悟のようなものが見える。今までとは大違いだ。むしろそれで気づくかない方がどうかしてる」

「・・・そっか…まあ吹寄には今まで世話になつてる訳だし、ちゃんと話しておかないとな」

そう言うとお上条は自分の荷物の入った手提げの中に手を突っ込み、ALLOのソフトを取り出すと、それを吹寄に差し出した

「・・・これ、ゲーム？」

「ああ、そのゲームの中に美琴やみんな…SAOに囚われたみんなを助ける鍵があるかもしれないんだ」

「・・・」

「だから俺、もう一度仮想世界に行かないと…みんなが助かるって確証はない。ひよっとしたら無駄足かもしれない。でも、それでも俺は何か手段があるならそれを信じて頑張ってみたいと思う」

「・・・そっか」

「止めないのか？」

「逆に止めてほしいわけ？」

「え？いやだって吹寄は世話焼きだし今までずっと心配かけてただろうから…そりや少しは反対されるかなって思ってたんだが…」

「そうね…本音を言うなら反対。大反対。ふぎけんなって言いたい。思いつきりビンタしてやりたいまでであるわね。あんな危険な目に遭ったばかりなのにまた同じ世界に行くつもりなのかってね」

「・・・」

「でも、上条のその目を見てたら…とても反対なんか出来ないわよ。それに、助けてあげたいんでしょ？もし私が上条と同じ立場だったら、例えば誰に反対されようと、自分の目の前にあるたった一つの手段を選ぶわ」

「・・・吹寄」

「ふっ…なんて面をしてるんだ貴様は。ほら、私のことを気にする暇があったら早いところ行きなさい。みんなきつと待ちくたびれてるわよ。早く自分を起こしてくれー…ってね」

「・・・ありがとう」

「どういたしまして」

吹寄に礼を言うと上条はベッドで眠り続ける美琴の手を取った

「美琴、待っていてくれ。今そっちに行く。待ちくたびれてるのは分かる。だけど、もう少しだけ待っていてくれ…約束する…必ず助けに行くから…」

「・・・」

そう祈るように美琴の手を強く握って自分の決意を美琴に向けて語った上条は、彼女の手をそつとベッドに置き直すと自分の荷物を持ち直して椅子から立ち上がった

「じゃあ吹寄、後のことは頼む。俺は寝る間も惜しんでこのゲームにのめり込むと思う。大学はしばらく休み続きになる。多分連絡もそう取れなくなる。その間みんなから理由を聞かれても何とか誤魔化しといてくれ」

「分かった。でもくれぐれも身体には気をつけんのよ」

「大丈夫だって、このゲームはSAOと違って死んでも死にやあしない」

「そうじゃなくって。寝る間も惜しむのは結構だけど、それでもちやんと休みながら食事も取って体調には気をつけろって言ってるのよ。」

そのせいでゲーム出来なくなったら本末転倒よ」

「あ、あははは…善処するよ」

「全く…まあいいわ。後のことは任せときなさい。貴様がない間の講義のノート取っとくし、出席も誤魔化しておくから」

「後これ、持って行きなさい」

そう言うと吹寄は自分の手首に通してあるヘアゴムを一つ外し、上条に手渡した

「？なんだこれ？ヘアゴム？」

「貴様は確か水瓶座でしょ？今日の朝のニュースの星座占いで水瓶座のラッキーアイテムはヘアゴムだったのよ。きつといいことがあるから、お守りとして持っておきなさい」

「相変わらずそういうの信じてるな…しかもそのラッキーアイテムって男子にはほぼ達成出来ない前提じゃねえか…」

「だから言ってるでしょ。1人で全部抱え込むんじゃないって。貴様だけじゃ出来ないこともあるんだから。そういう意味でも貰ったときなさい」

「・・・ああ、ありがとう、助かる」

そう言うと上条は吹寄から貰ったヘアゴムを幻想殺しでせっかくの幸運を打ち消さぬように左手で貰い、輪を器用に左手だけで広げて左手首に通した

「それじゃ、行ってくる」

「ええ、行ってらっしゃい」

ガラガラガラ…

上条は病室のドアを開けると、振り返ることなく自分を待つ人のために、自分を待つ人の病室を後にした

第4話 独白

「全くあのバカは…ふふっ…」
「……………」

上条が病室を後にし、病室に美琴と2人残された吹寄は上条の足音が聞こえなくなると美琴に向けて1人話し始めた

「本当にあの鈍感男は…気づいてんだか気づいてないんだか…なんで私が自分の星座を覚えてるのか不思議に思ったりしないのかしらね…」

「……………」

「ねえ、御坂さん…だったわよね？私なんとなく分かるんだけど、あなた上条のこと好きなんですよ？」

「……………」

ピッ…ピッ…ピッ…

しかし、美琴が吹寄の問いかけに答えることはない。代わりに返事をするのは無感情で一定な心音を伝える機械音のみ

「私もね…好きなんだ。上条のこと」

「……………」

「あはは…まだ誰にも話したことないんだけどね…でも、あなただけは特別。何でかしらね、初対面のはずなのにあなたには話したいって思ったの」

「……………」

「最初はね、なーんとも思ってたなかった。高校時代なんて、そんな私のことをみんなは『対カミジョー属性を持つ女』なんて呼んでたのよ？笑っちゃうわよね」

「……………」

「でもね、好きになっちゃったんだ。きつかけはお見舞いに通うようになってから。最初は本当に委員長だから、クラスにあいつが戻って来てくれないとクラスに活気が戻らないから。って理由だけで始めたことだった」

「.....」

「でもね、お見舞いに通うようになってたから気づいた。本当に寂しかったのは私だったんだって。アイツと過ごす日々が突然なくなつて悲しかったのは私の方だったんだってね。ほら、よく言うじゃない？本当に大切な物は失った後に気づくって」

「.....」

「でも、それをもってこれが恋だなんて最初は全く思わなかった。本当にただ寂しいだけなんだって思ってた」

「.....」

「でも、アイツがゲームに囚われてもうすぐ1年になるぐらいのある日に私：夢を見たの。その夢で私はいつも通りアイツの病室にお見舞いに行ってた。でも、病室のドアを開けたらアイツが目覚ましていて私に向けて笑顔を見せてくれる：そんな夢を見たの」

「.....」

「その夢を見て私はバツ！って飛び起きたの。そしたらいても立ってもいられなくなって、まだ夜中の3時ごろだったのに、私は着の身着のまま自分の家を飛び出したの。今の夢はきつと正夢なんじゃないか、今の夢はきつとアイツが目覚ましたことを私に教えてくれたんだ：そう思っただけ病院目がけて全速力で走り出した」

「.....」

「それで真夜中の病院に忍び込んで、アイツの病室にたどり着いた。ドアを開けたらアイツはきつと目を覚ましてくれてる：そんな淡い期待を寄せてね」

「.....」

「でも、アイツは目を閉じたままだった。私が体を揺すっても、返事の一つも返してくれない。今までと：何も変わってなかった」

「.....」

「そしたら私ね、涙が止まらなくなっちゃったの。もの凄く泣いたわ。それはもうわんわんと声をあげて泣き喚いたわね。アイツが寝てるベッドに縋り付いて、ちつとも動かないアイツの胸を借りてね。きつと今までの人生で一番泣いた自信があるわ」

「.....」

「それでその時に気づいたんだ。『ああ：私は自分ではどうしようもないぐらいにコイツの事が好きなんだ：』ってね」

「.....」

「きつと御坂さんもそうなんですよ？だつたらいつまでも寝てないできちんと女性として勝負しましょう？あなたが起きるまでは、私も手を出したりなんてしないから」

「.....」

「.....でも、きつと負けちゃうんだろうなあ：アイツはSAOに囚われてたみんなを助けたいって言うてるけど、本当はきつと誰よりも御坂さんのことを助けたいって思ってるんだと思う。今日のアイツの目を見てたら、それが嫌でも伝わって来たわ」

「.....」

「でも、それでもいいわ。私がアイツにあげたヘアゴムがアイツのお守りになってくれるなら、私はそれで本望。だって、私がアイツの助けになれるのなら間接的に私も御坂さんの手助けが出来てるってことでしょ？」

「.....」

「.....余計なお節介だったかしらね。本当私もこういう世話焼きなところ変わんないなあ：ありがとね、私の独り言にこんな長々と付き合ってくれて」

「.....」

「それじゃ、私もそろそろ行くわね。次に会う時はきつとあなたが目を覚ました時だと思うわ。そしたらアイツにあなたを正式に紹介してもらおうわね。そしたらよろしくやりましょう？女友達としても、恋敵としても」

「.....」

「・・・それじゃあね」

スタツ…ガラガラガラ…

そう言い残して誰の耳にも届くことのない独白を終えた吹寄は椅子から立ち上がり、美琴の病室を後にした

「……………」

ピツ…ピツ…ピツ…

病院の空いたドアから吹き抜けきた風が悪戯っぽく美琴の髪の毛を少し揺らし、その頬に一輪の桜の花弁が落ちていた。5月になり、ほとんど散っていたはずの桜の花びら。出会いと別れを意味する桜の花。彼女の頬にかかった桜の花がそのどちらを意味しているのか、それを知る者はまだ誰もいない

第5話 妖精の国へ

「さて、まずは買い出しだな…どんな感じのゲームか大体は分かったが、まだ詳しくは分からないし…最低でも2週間分の食料は溜め込んでおきたいしな…」

病室を後にし、病院の出入り口の自動ドアを背にしてこれからの私生活の作戦を考えていた

「でも…どうすっかなあ…大学入ってから結局バイトもしてねえし…この二年の巨額の入院費で口座も素寒貧だ…何より問題はALOの遊ぶための『アミュスフィア』とかいうゲームハードを俺は持っていない…一体いくらぐらいすんだ?」

そう言つて上条はポケットから買ったばかりのスマホを取り出し、アミュスフィアの値段を検索した

「…無理だ…」

しかし、その画面に提示されていた金額はとても上条の口座に預金されている金額では届くことのないほどの金額だった

「まあそりゃゲームハードだもんな…って感心してる場合じゃねえか…アミュスフィアはナーヴギアの後継機らしいからナーヴギアで動くかもとは思ったが…そもそもナーヴギアは政府の役人さんに証拠物として持つてかれちまったからなあ…」

「それにあの様子じゃインデックス達もソフト持つてきただけでアミュスフィアは持つてきてなさそうだったし…インデックスに譲ってもらつて郵送してもらうか?…いやでもアイツらも忙しいみたいだしそりゃ流石に迷惑だよな…どうしたもんか…」

ここまで来て新たな問題にぶち当たった上条はすっかり頭を抱えて悩みこんでしまっていた。しかし、金銭面の事情というのはどうにかしようとしてどうにかなるほど甘いものではない

「仕方ない…父さんと母さんに頭下げてお金振り込んでもらうか…もうどっちにしろそれしか方法ないもんな…さてそうなたらいくら振り込んでもらうか決めないと…」

ウィーン…

「なにやらお困りのようだね？」

「へ？」

病院の出入り口の自動ドアが開く音がしたかと思えば、誰かが上条に向けて話しかけてきた。上条がその声の方向へ振り返ると、そこにはカエルに良く似た顔をした医者が立っていた

「先生…」

「話の大まかな事情はさっきの彼らから聞いたよ。それに今の君の状況を察するに、ソフトを持つてるだけでハードがないし、それを踏まえたこれからの生活費も心もとないと見えるね？」

「な、なんでそこまで分かるんでせうか？」

「伊達に長いこと君を患者として見ていないからね」

「そ、その節は色々とご迷惑をおかけしまして…」

「まあそんなことより、そんなお困りの君にうってつけの物がある」

「え!? 本当ですか!？」

「僕の後について来るといい」

そう言うのと冥土帰しは病院の中へと戻り、上条もその後ろを歩いて付いて行った。そうしてしばらく病院の中を歩いていくと、階段を降りた先に何やら病人用のベッドに巨大な機械が備えつけられている一室へとたどり着き、冥土帰しがその部屋のドアを開け、上条も一緒

に部屋に入った

「えっと、先生…このバカでかい機械は一体何です?」

「これは『メデイキュボイド』と言って、いわゆる医療機器の一つだね」

「それで、この機械を俺に見せた理由は一体…」

「このメデイキュボイドはね、フルダイブ型VR技術を搭載した医療機器なんだよ」

「えっ!?フルダイブ機能を!?!」

「元々は手足が動かなくなった患者がリハビリのために仮想世界で手足を動かしたり歩く感覚を取り戻すために開発された代物でね。その出力はたかがゲーム機のアミューズフィアとナーヴギアなどは比にもならない。言うなればフルダイブ機能を医療用に転用した物と言えれば伝わるかな?」

「じゃあ、コイツを使えば…」

「ああ、ALLOにダイブすることも可能だし、体調面に関しても何の異常もない君なら例え1年以上飲まず食わずでダイブし続けても、当面は何の心配もないね」

冥土帰しの口から語られた内容は上条からすればこれ以上はないと思えるほど完璧な条件だった。しかし、だからこそ心の中に罪悪感が芽生えてしまった

「で、でもいいんですか?」

「ん?何がだい?」

「こ、こんな機械俺が使っちゃって…何より他にもこれを使う患者さんだっているんですよ?」

「そこは心配いらさないさ。メデイキュボイドはこれ一台しかない訳じゃない。それに、君がコレを通じてゲームの世界に行けば、結果的にこの病院で寝た切りの多くの患者が救えるわけだね?」

「…先生…」

「情けのない話だが、このSAO事件の患者だけは僕じゃどうやって

も治すことが出来ない。本来は患者のことを患者に任せるなんてことは言語道断なんだが…それでも僕も君と同じで彼らを何とかしてやりたい。だから上条当麻君、無理を承知で頼む。僕の為に患者のみんなを…」

「何水臭いこと言ってるんだよ先生。逆にこっちがお願いしたいし、お札を言いたいですよ。それに、俺だって何回先生に助けられたか分からないんだ。少しぐらいは恩返しさせてくれ」

「…すまないね。だが、困ったことがあればいつでも言いたまえ。君はいつまでも、僕の患者だ」

「ああ。ありがとう、先生」

「それじゃあ、ALOのソフトを僕に。もうこの瞬間から始めめてしまいが問題ないかな？」

「もちろんだ先生。もうこれ以上立ち止まったら発狂しちまいそうだ」

そう言つて上条はカバンからALOのソフトを取り出し、冥土帰しに手渡した

「それじゃあ早速準備に取り掛かろう。上条君はそのベッドに寝そべって頭にメデイキュボイドのヘッドギアを装着して待っていてくれるだけで大丈夫だね」

「はい、分かりました」

すると冥土帰しは病室を出て隣の制御室へと入り、上条はベッドで横になり、その頭にメデイキュボイドを装着した

「準備OKです、先生」

上条がそう言うのと病室のスピーカーから冥土帰しの声がマイク越しに聞こえてきた

『うむ、こちらも準備完了だ。いつでも行きたまえ。健闘を祈る』
「・・・ふうく・・・」

上条は目を閉じ、深く息を吐く。そして新たな世界に飛び立つ為の魔法の言葉を口にした

「リンクスタート!!」

第6話 ログイン

「さて、アバター登録といきますか…ALOはアバターの容姿は勝手にゲームが決めるみたいだし、そんなに手間はかからんだろ…まずはユーザーネームを…」

そうして上条は目の前のキーボードの役割をしているウィンドウを操作し、自分のユーザーネームを入力していく

「やっぱこれだよな…[Kamiiyan]っと…」

『[Kamiiyan]でよろしいですか?』

「[OK]っと…」

このように上条はなんの躊躇いもなく、かのSAO時代と同じ自分のユーザーネームを承認した。そう、いわゆるこれは上条の中のケジメなのだ。自分の戦いはまだ終わっていない。みんなを助けるまで、この名前を捨てるわけにはいかないという決意の表れだった

「では次に、あなたのアバターの種族を選択して下さい」

そうゲームのメッセージが伝わると、9つの種族の妖精のイメージホログラムが表れた

「えーなになに、サラマンダー…ウンディーネ…シルフ…ケツトシー…レプラコーン…っていやこれ種族多すぎだろ…いくら種族間の戦闘を促すゲームとは言ってもこりや多すぎるぜ…」

そんな愚痴を言いながらも手元のウィンドウを操作し、それぞれの

種族を一瞥していくと、ある種族の画面を前にして上条の手が止まった

「・・・『スプリガン』・・・か・・・」

上条は黒を基調とした幻惑魔法を得意とする種族の妖精であるスプリガンに一目置き、興味を持ったのかスプリガンの詳細に目を通し始めた

「まあ、やっぱり日本人は黒髪が一番似合うよな。よし！俺はこのスプリガンに決めませー！」

『『スプリガン』でよろしいですか？』

「[OK]！」

そんなあまりにも自由すぎる理由でスプリガンを選択した上条。そして彼の周囲の光景が薄っすらと変わっていき、ついにゲームの舞台の幕が上がるうとしていた

「この感覚は五ヶ月ぶりだな・・・やってやるぜ！」

「Welcome to Alfheim Online！」

そのシステムのテロップを最後に上条の周りは一瞬で暗転し、まばゆいばかりの閃光が辺りを包んだかと思えば目の前には果てしない青空が広がっていた

ビュオオオオオオオオオオオ!!!

「うおおおおお・・・すっげえなこれ・・・本当に飛んでるのか・・・俺・・・」

自分の身の回りの空気を切りながら空を泳ぐ上条。生まれて初めて味わう空を飛ぶと言う感触に心が踊る

「うっひよおおおおお!! たーのしいいいいい!! こりやみんなが夢中になって遊ぶワケだぜ!!」

空中浮遊を自身の思うがままに楽しむ上条だったが、その途中である異変に気付く

「しかし、これ意外と前に進まないもんなんだな：飛べるのは魅力的だけど案外走る方が早いんじゃないのか? っていうか：あれ：?」

ところが、上条はある違和感に気づいた。何故だか知らないが今のALO内で設定されている時間は夜らしい。綺麗な満月がフィールドの真上に浮かんでいる。しかし上条にはその満月がどうにも自分からどんどん離れていつているように見えていた

「ってことはだ：つまりこれは：飛んでるわけじゃなく：ひよつとして：」

そう、今上条は空気抵抗を自分の下側からしか受けていない。それはつまり：

「落ちてるだけだあああああああああ
!?!?!?!?!」

そういうことである。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
「ヤバイーヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!!!! なんとかしないと
おおおおお!! ログインして1分にも満たないで初死になって冗談
でも笑えねえええええ!!!」

「そうだ！飛べばいいんだ！…つて飛び方なんも分かんねええ!!」
「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああ?!?!?」

ズドーーーーー
!!!!!!

上条の健闘も虚しく、最後は地面に正面からものすごい勢いで叩きつけられた。上条の身体の周囲の地面はまるで隕石が落下した後のようなクレーターができており、遙か上空まで砂埃が舞い上がっていた

「ぐふっ…ふ、不幸…だ……………」

そう言いつつも足腰に力を込め、なんとか立ち上がった上条。HPは0になる寸前をなんとか維持していた

「痛てててて…生きてるのは不幸中の幸いか…てか逆に何で生きてんだ…HP残ってる方がおかしいだろこれ…こりや将来も楽な死に方は出来そうにないな…」

そんな自虐を混ぜつつ自分の被った砂埃を叩いて払いながら周囲を確認していた

「んで、えくつと?…ここは一体どの辺なんだ?」

上条が周りを見渡すと、辺り一面は森林で鬱蒼とした木々で囲まれており、目立つ建物は特に存在していなかった

「景観的にはSAOでいつか行つた『迷いの森』に似てるな…まあいくらか前向きなイメージだが…こりや下手したら脱出も手間だな。まあそうならないためにも今はきちんと現状把握だ」

そう言うの上条は右手を振り下ろしメインメニューを開こうとした。しかし、その右手が空を切っただけで何のアイコンも現れることはなかった

「あ、そういやチュートリアルでメニューは左手で開くって言ってたっけか…ほい…よし、出たな」

上条が左手を振り下ろすと、今度こそメインメニューのウィンドウが目の前に現れた。そしてそのウィンドウを指先で操作し、真っ先にあるボタンを探した

「ちやんとあった…ログアウト…安心したぜ」
「さて、とりあえずマップを」

ログアウトボタンを確認し安堵の息を吐くと、上条はメニューからマップを開いた。するとどうやらここは中立域の森の中であることが分かった。ここから少し離れた所には何やら街があるらしいが、どんな街かまでは分からなかった

「まあ現在地が分かっただけでもよしか…じゃあお次はステータスを…ってあれ…？あれれ？」

ウィンドウを操作してステータスを確認する上条。HPやMPはバリバリの初期値であろう数値は確認する事が出来たが、彼の目に止まったのは、今の自身が持つスキル項目だった

『索敵スキル』940…『盾スキル』が1000…他にも『筋力』に『敏捷』まで…これSAOと同じスキルとステータスじゃねえか…しかも数値まで…最後にSAOをプレイしていた当時の俺と…全くもって同じ…」

「それに加えて『コイツ』は…」

初期アバターにしては異常なほど多く所持しているスキルと桁外れのスキル熟練度を持つ自分のステータスに驚くこともさることながら、それぞれを確認しながらウィンドウをスクロールしていき、一番下のスキルにたどり着いた。そしてそこに記されていたスキルの名は…

「幻想…殺し…」

彼の右手に宿る力であり、剣の世界でもその猛威を振るった彼だけが持つ能力の名だった

第7話 出会い

「・・・やっぱり土御門が言ったことは本当ってことなんだよな…S
AOとほぼ同じサーバーを使ってるから俺のステータスもS A O当
初の物に限りなく近いんだろうし…でも一体どこからどうやってこ
のデータが引っ張られて来たんだ？」

上条は自分のステータスウィンドウをじっくりと見つめながら
様々な思考を巡らせていた

「まあ、そこはこの際気にしなくていいか。原因究明は今すぐにやる
べきことじゃないし…何よりみんなを助ける為にこの世界に来たな
らむしろ最初っからこのステータスは好都合だ」

「そういやこの世界での俺のアバターの容姿は結局どうなったんだ？
アイテムに鏡かなんかがあれば……ってなんじゃこりや…」

上条が自分のアイテム欄を開くと、そこには「????」と表記されたア
イテムが数えきれないほどズラリと並んでいた

「えっと…こりや一体どういうことだ？最初にゲームを始めた時はみ
んなこうなってる…ってそんなわけないだろうし…アイテムだけ
じゃなくて装備も同じ始末か…まあいいや、コイツも後回しだ」

「今の装備は…バリバリの初期装備だな…出来ればそれこそスキルだ
けじゃなくS A Oの時の装備があつて欲しかったんだが…まあそれ
が普通だし贅沢は言えないな。今俺が背中に背負ってる武器も初期
の片手剣って感じか…よし、OK」

そう言う上条は多少投げやりになりながらも自分の現状を把握
できたと踏み、自分のメニューを閉じた

「さて、と…なんだかんだでここがどの辺なのかは分からず終いだな
…手っ取り早く済ますにはどつかのプレイヤーに話を聞くのがベス
トなんだが…こんな森の中にそう都合よく誰かがいるはずもないよ
n…」

ドゴオオオオオオオン
!!!
「のわっ!?なんだ!?!爆発?」

上条から見て約100メートル先の北東の方向から爆発音が聞こ
えたかと思えば、黒煙がモクモクと地から天へと向かって狼煙のよう
に上がっていた

「…ひよつとして誰かがあそこにいるのか?…よし、物は試しだ。
いっちょ行ってるか」

そう行つて上条当麻は煙の上がつている方向へ颯爽と駆け出した

「ええい!もうしつこい!!」

一方その頃、謎の煙が上がっていた現場では間一髪で爆発系魔法を
回避した緑を基調とした風妖精『シルフ』の姿をした金髪の女の子の
プレイヤーが、赤を基調とした火妖精族『サラマンダー』のプレイヤー
三人を相手に奮闘していた

「しつこいのは君の方じゃないのかな?こっちは金と目ぼしいアイテム
を置いていけば見逃してやるって言ってるのに」
『『死亡罰則』負うぐらいだったらそっちの方がよっぽど懸命だと思う
ぞ?』

サラマンダーの内の二人がシルフの女の子に向けて問いかけるが、

シルフの女の子は鋭い目付きのままサラマンダーを睨みつけてこう言った

「却下！死亡罰則なんて別に惜しくない！レコンを殺ってくれた報復として最低でもあと一人道連れにしてやるから覚悟しなさい！」

「でも君、もう詰めじゃない？ほら、後ろ」

「ッ!!」

気がつけば、戦いながらも後退を続けていたシルフの女の子の後ろには大木がそびえ立っており、もう退路がなくなっていた

「へへへっ、悪く思うなよ嬢ちゃん？こっちの提案を聞き入れなかった君が悪いんだからな」

「さあ、いい声で鳴いてくれよ〜?」

「くっ…この変態サラマンダーども…!」

シルフの女の子は懸命に剣を三人のサラマンダーに向けて構えるが、サラマンダーは少女の剣など気にすることなく、じわじわと距離を詰めじり寄ってくる。そして少女に向けて飛び交かうとしたまさにその瞬間…

「どいてどいてどいてどいてどいてどいてどいてどいてくれー!!!!」

「「「え?」」」

!!!!!!!

ゴツチイイイイイン!!!☆

「のわあああああああああああああああああああ
!?!?!?!?」

何やらゴ○ブリ顔負けの素早さを誇る音速の黒い塊が何かを叫びながらサラマンダーの一人に激突した。サラマンダーは堪らずゆうに5メートルはぶつ飛ばされ、激突の現場では土煙が舞っており、土

煙の中から人っぽい物がのらりくらりと立ち上がった

「痛てててて…こ、こりゃ敏捷の上げすぎも考えモンだな…何よりまだゲームに慣れてないのにスピードなんて出しすぎていいモンじゃない…止まり方も満足に分かんねえつてのに…」

「おい！一体誰だテメー！」

「おう？」

「痛つてーじゃねーかそのツンツン頭！俺様に向けて頭突きとはい度胸だなあ!？」

「い、いや違うんだつて！俺はただプレイヤーがいたらゲームのことを教えてもらおうと思っ…んっ？えっ？待ってくれ、今なんて言っただ？ツンツン頭？」

「だからそれはテメーのことだ！このツンツン頭！」

ぶっ飛ばされたサラマンダーが槍の先端を上条に向けてブチ切れながら彼をツンツン頭だと揶揄した。それを聞くと上条は頭をガツクリと落とした

「とほほ…ひよ、ひよつとして俺はまた現実と全く同じ容姿のプレイヤーになってんのか…俺は一体どれだけ見ず知らずの人にプライベートを晒せばいいんだ…不幸だ…」

「おい！訳分かんねーこと言っ…んじゃねーぞ！邪魔するってんなら初心者と言えど容赦しねーぞ！」

「え？いや、邪魔つて…そんなつもりは…」

サラマンダーの1人にそう言われて周りの状況をぐるりと見回す。1人の少女を木に追いやり、それを大の大人の男三人が取り囲む。それがどんな状況を察するのは上条にとってそう難しいことではなかった

「なるほど、なるほど。状況はなんとなく分かりましたよ」

「何してるの!?!早く逃げて!」

シルフの女の子が自分の身の心配よりも上条を心配して逃げるように促した。それだけ聞けば上条は自分がどうあるべきか心に決めていた

「いやいや、重戦士三人で女の子一人に襲いかかるとは…ちよつとカッコ悪いんじゃないでしょうか?」

「んだとおテメエ!?!」

「初心者が舐めた口聞きやがって!」

「女の子の盾になってカッコつけていい気になってんだったらテメエ切り刻むぞ!」

「バカか。カッコつけててもカッコつけなくても、今にも負けそうな女の子を守る側に立てりゃ、それで死んでもこっちは本望なんだよ!?!?!」

そう言ってツンツン頭の少年は右手の拳を握りしめ、サラマンダー三人に向けて啖呵を切った

第8話 初陣

「そうかい…：だったらお望み通り…：ここで串刺しにしてやるよおお
!!」

先ほど上条にぶつ飛ばされたサラマンダーが真紅の翅を広げ、叫びながらその手に槍を構え、上条に向けて猛突進してきた

「ツ!!ダメツ!!!」

「死ねやああ!ああああ!!!」

「!!!」

「バキイイイイ!!!」

「ごぼっ…：ふっ…：!?!!!」

「…：え?」

「これでまずは一抜けだな」

ポウツ!!!

上条はサラマンダーの槍の突進を潜り抜けると、右ストレートを敵の顔面に叩き込んだ。するとたちまちサラマンダーのHPは全損し、赤いエンドフレームにその身が包まれた

(す、すごい…：す、素手で一発…：)

(なるほど…：こりや本当に『あの頃』と大差ないな…：ま、今の俺に関係してんのは『敏捷』と『筋力』と『幻想殺し』だけ…：他は研究の余地ありだな)

「ツ!!!野郎よくもっ!!」

ビュンツ!!

「遅いですのことよ?」

「なっ!!!」

ドゴオオオオオオオオオオ
「ぎやあああああああ?!?!」
ボウツ!!!

(・・・あそこで過ごした二年は伊達じゃない…ってことか)

上条はもう一人のサラマンダーが武器を構えるよりも早く、上条は驚異的なスピードで肉迫し、サラマンダーの顔面へ問答無用で右ストレートを叩き込んだ。そしてその強烈な一撃でもってHPを一気に0にし、その身体が燃えた

「す、すづ…」

その様子にシルフの女の子は感嘆の声を漏らした

「で、どうする?残ったアンタも殴りたいか?」

「・・・やめておくよ。魔法スキルがもう少しで900なんだ、デスペナが惜しい」

「へっ、正直なやつだな…そちらのお嬢さんはそれでいいか?」

「・・・あたしも別に構わないわ。ただし、今度はきっちり勝たせてもらうわよ」

「そちらのお嬢さんともタイマンは遠慮したいな…そんじゃ…」

そう言うのと残されたサラマンダーは背中中の翅を広げ、どこかへと向かって飛び去っていった

「・・・さて…なあ、この炎は?」

上条は全身に入れていた力を抜くと、自分の背後でゆらゆらと燃える二つの炎を指差してシルフの女の子に問いかけた

「しっ!それは『リメンライト』。蘇生限界時間が終わるまではそこで

ずっと燃え続けるの。だからヤツらの意識はまだそこに在るわ」
すうっ……………

「ふう、よし。消えたわね」

リメンライトが残っていないのを確認すると、シルフの少女は自分の剣を腰に据えている鞆へと納めた

「とりあえずお礼を言うわ、助けてくれてありがとう。あたしの名前は『リーファ』。種族はシルフよ」

「俺は上やん。種族は見ての通りスプリガンだ。…それでちょっと頼みがあるんだけど、アイテムで鏡とかあったら貸してもらってもいいか?」

「鏡? ああ、さっき自分の容姿がどうのって言ってたやつ? ちょっと待ってね…」

するとリーファは左手を振り自分のメニューを呼び出し、アイテムストレージから手鏡をオブジェクト化させた

「はいこれ、鏡」

「おお、すまん。サンキュー! …どれどれ…」

上条はリーファから手鏡を受け取ると自分の顔の写った鏡を覗き込んだ。するとそこにはやはり、黒髪でツンツン頭な現実と瓜二つな自分の顔が映っていた

「とほほ…やっぱり現実の俺の顔なのかよ…さっきのヤツが言ったからそうなのかもとは思ったけど…まあ仕方ねえか…」
「?」

上条は鏡を覗き込みながら何やらぶつぶつと呟いているが、何しろ呟いているだけなので耳が良いシルフのリーファと言えど、あまり明

「あの樹って…もしかして世界樹のこと？」

「ああ」

「…いいわよ。あたしこう見えてもまあまあ古参のプレイヤーなの。一通りの説明とかアドバイスは出来ると思う」

「良かった。ありがとう」

「じゃ、ここからちよつと遠いけど北に中立の村があるの。そこまで飛びましょ？」

「あれ？さつきマップを見た限りだとこつからは『スィルベーン』って街の方が近いんじゃないのか？」

「本当に何も知らないのね。いい？あそこはシルフ領よ？」

「…で？」

『「で？」って…あのね、あなたスプリガンでしょ？この森は中立域だからどんな種族でも攻撃されれば等しくHPが減少するわ。だけど、シルフ領のあの街の中は話が別。シルフのみんなにあなたは攻撃出来ないけど、逆に領土内のシルフはそれがアリなの。つまり、上やん君がシルフのみんなに袋叩きにされても文句言えないわよ？」

「別にみんなが即襲って来るわけじゃないんだろ？それに同じ種族のリーファもいることだし、だったら大丈夫だろ。あ、それと俺のことは別に呼び捨てでいいぞ」

「そっか…じゃあ上やん君がそう言うなら…あ…」

「ははは、まあそんな急には変えられないか」

「そうね…慣れて気が向いたら呼び捨てにすることにするわ。それじゃ、本当にスィルベーンに向かうけど、命の保障はないわよ？」

「ああ、大丈夫だ」

こうして二人は出会い、これから巻き起こっていく大冒険を共にすることになるとは、まだ誰も想像していなかった

第9話 大空を舞う

「じゃ、飛ぼつか」

そう言うとりーファは自分の背中から翅を出し、ゆっくりと浮遊し始めた

「ちよつ！ちよつと待った！」

「え？」

「そ、それ：：りーファは一体どうやって飛んでるんだ？」

「え？普通にだけど：：さつき上やん君も飛んでたんでしよう？落ちてきたって言ってたじゃない」

「え？あ、ああいやえつと：：なんて言うか：：むしろ無我夢中でやってたら何となくというか：：」

「なるほどね。補助コンローラーの存在も知らずにいきなり随意飛行にチャレンジした訳か」

そう言うとりーファは一旦地面に降り、背中の翅を下ろした

「上やん君、ちよつとそのまま後ろ向いてみて」

「ん？ああ、分かった」

上やんがりーファに背を向けると、りーファは上やんの背中の一点に手を当てた。すると、上条の背中から大小が対となった4枚の翅が生えてきた

「お、翅が出てきた！」

「今触つてるところ、分かる？」

「ああ、分かる」

「この辺がいわゆるあたし達の翅の中心。ここから仮想の骨と筋肉が

伸びてると想像して、意識をもって動かしてみて？」
「仮想の骨と筋肉…こ、こんな感じか…？」

上条がリーファに言われた通りの場所に力を込めると、背中の翅がバサバサと小刻みに震え始めた

「おお！上手い上手い！じゃあそのまま今の感じで、もう一度もつと強く力を込めて動かしてみて」

「よ、よし…いくぞ…」
バサバサ…バサツ！
「くっ…！ぬっ！」

一度広がった翅を一旦下ろし、先ほどより強く力む上条。するともう一度翅が小刻みに震えながら広がった。するとそれを見たりリーファが上条の背中をドンツ！と突き飛ばした

「えいっ!!」
ドンツツツ!!

「えっ!?ちよっ!?どわあああああああああああああああああああああああああああ
あああああ?!」
「よし！離陸成功！」

すると、上条の体がもの凄い勢いで空に向かってぶっ飛んだ。しかし、余りもの早さに上条の身体はあっという間に米粒ほどの大きさになり、やがて見えなくなった

「ちよっ!?やっば!?上やんくーん!!大丈夫ー!」

リーファも翅を広げ急いで離陸し、上条を呼んで探すのが、周囲のどこを見渡してもまるで見当たらない。いよいよ冷や汗が背中を伝ってきたその時、不意に上空から声が聞こえてきた

「ひいやっほおおおおおおおおおおおおおおお
「え、上やん君!」
!!!!!!!」

「見ろよリーファ!飛んでるぜ!俺ちゃんと飛んでるぜ!」

そう言いながら上条は空を自由気ままに飛び回り、旋回したり宙返りをしたりと完全に随意飛行を自分のモノにしていた

「す、すっごーい!上やん君すごいスジがいいよ!最初っからこんなに飛べた人初めて見たよ!」

「はっはっはー!こりゃいいや!どこまででも飛んで行けそうな気がするぜー!」

「さて、そういうことなら早速シルバーンに行こっか」

「よっしゃ!競争だぜリーファ!」

「ほほう?飛行と剣術においてはシルフじゃ右に出る者はいないとまで言われるこのあたしと競おうと?いいわ!受けて立ってあげる!」

そう言うリーファはみるみる内に加速し、上条を抜き去った

「なんの!俺だつて負けてたまるか!」

ビュオオオオオオオオ!!!

負けじと上条も加速し、リーファと肩を並べ、そのスピードを維持して飛行した。そうして二人ともMAXスピードでしばらく飛んだ後、夜の世界で一際輝く街が見えてきた

「おお!あれがシルバーンか!」

「ええ!思ったより早く着いたわね!それじゃ、真ん中の塔の根本に着陸するわよ……って上やん君、君『ランディング』のやり方解ってる?」

「ランディング?ランニングじゃなくて?」

第10話 魔法

「ぐふっ…ほ、本日二度目の落下…不幸だ…いやてかこれむしろ悪いのリーファだろ…」

元々さっきの落下でHPはギリギリであったはずなのに、今回の激突では伴った痛みと全く比例してないと言っているほどHPが減っていないかった。良くも悪くもやはりこの男は簡単な死には出来そうにない

「ごめんごめん、今ヒールしてあげるから」

少し笑いながらそう言うと、リーファは片手を上条にかざし回復魔法に部類される魔法のスペルを唱えた。すると、見たことのない文字が具現化した

「おお、すごい…それが魔法か…」

(コイツが…現実の魔術と同じ…)

「高位の治癒魔法は『ウンディーネ』じゃないと唱えられないからこれは気休めぐらいにしかならないけどね。でも一応必須スペルだし、上やん君もその内覚えて使えるようになっておいた方がいいよ」

「なるほど…そこは種族によっても魔法の得手不得手があるって訳か…」

「スプリガンの得意魔法は確かトレジャーハント系と幻惑魔法かな。どっちも戦闘には不向きだから種族ランキングだと堂々の不人気NO.1なんだけどね…つてあれ？あれれ？」

「ん？どうかしたか？」

「いや…んーっ…んーっ…やつぱりダメだ…一体なんで？」

「だからどうしたんだよりリーファ？」

「いや、回復魔法使っちゃんとエフェクトも出た筈なのに上やん君

の体力がちつとも回復してないでしょ？それに本当は青白い光みた
いなのが対象の身体を包むはずなんだけど…後なんか手応えがな
いって言うか…だからなんでかなーって…」

「…あーそゆこと…」

リーファの様子がおかしい理由を聞いた上条はゲームとしては絶
対におかしいことなのだが、簡単に納得した。なぜなら、彼にはあの
右手があるからである

「え〜？なんでー？今までこんなことなかったのにく…バグなのかな
？」

「大丈夫だリーファ。バグじゃないし謎は全て解けた」

「え、本当？なんで？」

「ワケを話すと長いからいつかその内話すよ。それより回復系のアイ
テムってなんかあるか？あつたらHPが心許ないしできたら欲しい
んだけど」

（…でもそう考えると俺に幻想殺しがある限り俺が回復魔法唱えて
も意味ないんだろうし、パーティーの仲間からの補助も受けられな
いってことだよな…そりゃなんつーかまあ…キツツイな…まあなん
とかなるか）

「えー！！気になる〜！まあいいや、その内話してくれるなら。はい
これ回復ポーション」

「悪いな、サンキュー」

上条はリーファから手渡された回復ポーションを飲み干した。す
るともはや残っているかすら怪しかった上条のHPは半分まで持ち
直した

「っペー…生き返った…」

「さて、それじゃあ気を取り直してお店に行きましょうか」

「おう、ゴチになります」

へリーファちゃん!!

「お?」

「レコン!」

リーファの名を大声で呼びながら、『レコン』と呼ばれた一人の緑色の髪をしたオカツパ頭のシルフの少年が上条達に向かって近づいてきた

「良かった!無事だったんだね!…ってなんでこんなところにスプリガンがいるの!?!」

「ああ、この人がさっきのサラマンダーからあたしを助けてくれたの。上やん君、紹介するわ。コイツは私のフレのレコン。ついでに言うと、さっき私たちが絡まれてたサラマンダーからコイツと一緒に逃げたんだけど、レコンだけ先にキルされちゃったの」

「レコン?」

「違うわ!レ・コ・ン!」

「お、おう。なるほど…ってことは俺が駆けつける前は二人で行動してたってことか。よろしく、レコン。俺は上やんだ」

「あ、これはご丁寧にどうもどうも…ってそんなことよりリーファちゃん!本当にいいの!?!ここシルフの領だよ!?!まさかスパイとかじゃ…!」

「あのねえ、自分を助けてくれた恩人をそのままほっとける訳ないでしょ?それこそシルフの恥よ。それに、上やん君はスパイなんて出来るほど頭の良い人じゃないわよ」

「なんかその言い方は語弊を感じるんだが…」

「そ、そっか…そう言えばリーファちゃん、シグルド達がもういつもの酒場で席取って待ってるって」

「あ、そっか今日は分配の日だったっけ。うくん…いいや、あたしはパス」

リーファは腕を組んで少し悩むように唸ると、あつさりと元々組ま

れていた自分の予定を切り捨てた

「えっ!? 来ないの!?!」

「うん。上やん君にお礼に一杯奢る約束してるから」

「おいおい、なにも俺を気にしてそこまでしてくれなくていいぞ?」

「いいのよ。だって元はと言えばさつき一杯奢るだけじゃなくてこの世界のこと色々教えるって約束したじゃない。じゃ、そういうことだから! レコンお疲れ〜」

「え? お、おい…」

「あ!?! り、リーファちゃあん…」

そう言うとりーファは上条の手を取りグングンと歩き始めた。上条も止める隙間を見つけられずそのまま腕を掴まれて連行された

第11話 指南

「で？さっきのレコンってヤツはリーファの彼氏なのか？」

「は、はあ!?!?!/ / 違うわよ！アイツはただのパーティメンバーよ！

/ / /

リーファに手を引かれ連行された上条が連れていかれた先はオシャレな店構えと内装をしたバーだった。リーファと上条の二人は自分の好みの飲み物を注文すると話を始めようとしたが、結局二人の話は恋バナから幕が上がった

「それにしちゃ随分と仲良さそうだったように思えますがねえ？」

「り、リアルでも知り合いつつだけ。本当にそれ以上はなんもなし！

/ / /

「へえく…いいねえ最近の若者は…」

リーファの赤くなった顔や面白いほどバカ正直な反応に上条の顔は自然と緩み、ニヤついて話を聞いていた

「な、なによ！どうせ上やん君だってあたしとそんなに歳変わんないでしょ!?!」

「なーにを言いやがりますか。これでも上やんさんは今年で大学デビューですのことよ？あ、でもだからって敬語とか使わなくていいぞ。むしろ今の方がやりやすい」

「え!?!大学生!?!ってことはあたしが今高1だから3つも離れてるんだ…へえく…にしては態度とか立ち振る舞いは大学生らしくはないよね。本当は歳誤魔化してんじやないの?」

「い、いやまあ色々とあんだよ、色々」と

（まさか貴重な高校生活真っ只中の二年間がSAOに囚われてたおかげでその辺の心の成長のベクトルが違うとは…言えねえよな…）

「ま、とりあえず助けてくれてありがとう。乾杯！」

「おう！乾杯！」

ゴクツゴクツ……！

「つぶはあ……まあ確かに助けられたからいいが、随分と好戦的な連中だったよな……あーいう集団PKとかPVPつてのはよくあるものなのか？」

「まあ、サラマンダーとシルフは元から仲悪いってのもあるんだけどね。でも、あーいう組織的なPKが出るようになったのは最近だよ？きつと近いうちに世界樹攻略を狙ってるんじゃないかな？」

「!!それだ！その世界樹つてヤツについて詳しく聞きたい！」

リーファが発した「世界樹」という単語に上条は反応を示し、テールブルに身を乗り出してリーファに問いかけた

「そういえば上やん君そんなこと言ってたっけ。でも一体なんで？」

「あの世界樹に俺がALOを始めたきっかけがあるからだ」

「お、大雑把だね……でもまあそれが普通だよね、きつとALOをやってる全プレイヤーがそう思ってる。てかそれがALOのグランドクエストだし、最大の目的だもんね」

「グランドクエスト？なんだそりゃ？」

「簡単に言えば、世界樹の周りには上空へ行くのを阻害する障壁が張られていて天辺まではたどり着けないのよ。でも、世界樹の根元で受けられるクエストがあつて、そのクエストをクリアすると世界樹の上にある空中都市に行けるようになるの」

「その世界樹の根元で受けられるクエストがグランドクエストか」

「そ。そして空中都市に最初にたどり着いて『妖精王オベイロン』に謁見した種族は全員、『アルフ』っていう種族に生まれ変わる。そうすれば滞空制限時間もなくなって、いつまでも自由に飛べるようになるのよ」

「なるほど……そりゃ魅力的な話だな……で？その空中都市つてのが世界樹の天辺なのか？」

「それがどうなのかはまだ誰にも分からないの。なんでかって、世界樹の根元はドーム型の空洞になっててそこを守るNPCのガーディアンがめっちゃめっちゃ強い。おかげで未だに誰もグランドクエストを攻略出来てないし、世界樹の構造を詳しく知らないの」

「へえ…そんなに強いのか…」

「ALOが正式にサービスを開始してもう一年経つのにまだクリア出来ないなんて、そんなのアリだと思う？」

「そうだな…何か他の鍵になるクエストがクリア出来てないのか…単一の種族だけじゃ絶対にクリア出来ないようになってる…つてどこか？」

「へえ〜？良い勘してるじゃない。あなた本当にビギナー？」

「まあ、これが初めてのVRMMOって訳じゃないからな」

「ふーん…前はこういうゲームやってたの？」

「まあこんなゴリゴリのPK推奨のハードなゲームじゃなかったよ」

（嘘は言っていないよな。俺はラフコフじゃなかったし）

「そう…ちなみに見落としクエストの方は今みんな躍起になって探し回ってるわ。でも、後者はまず無理ね」

「無理？…なんでだよ？」

「だって矛盾してるもの。最初に謁見した種族しかアルフになれないのに、他の種族と協力して攻略しようなんて思う？」

「そりやそうか…それにこのゲームは元々種族間抗争が前面に打ち出されてるゲームなんだからな…」

「そうね…元々このゲーム自体が北欧神話がベースになってるからね。北欧神話って結構死ぬ死まないの血みどろの戦いが多い神話なところもあるから」

「北欧神話？」

「ええ。サラマンダー…ウンディーネ…シルフ…スプリガン…大半の種族は北欧神話の生き物の名前がそのまま妖精の種族名になっているの」

「へえ…でも、そうなると種族間の友好関係が築かれるのは絶望的…つまり、世界樹の攻略は事実上不可能…」

「そうね…あたしはそう思う。でも、諦めきれないよね。一旦飛ぶこととの楽しさを知っちゃったら…例え何年かかってでもつて…」

「バアンツ!!!」

「それじゃ遅えんだ!!」
「!!!」

上条が怒号と共に右手の拳をテーブルに叩きつけた。グラスのなかのドリンクがゆらゆらと揺れ、その水滴が周囲を濡らした。そう、上条は自分で分かっていたのだ。確かに学園都市に入院していることSAO患者は学園都市の医療技術により最先端の延命措置を受けられるのでまだしばらく寝たきりでも多少は問題がない。しかし、それ以外の世界各地の病院で寝ているSAO患者の人々にはもうそんなに長い時間をかけてはいられないのだ

「か、上やん…君…?」

「あ、悪い…つい取り乱した…」

「………」

「でも、俺はどうしても世界樹の謎を解き明かさないといけないんだ」「なんで…そこまで…」

「……たくさん…多くの人の運命がそこにあるかもしれないんだ」

「……どういうこと?」

「すまん、色々と教えてもらっておいで悪いんだが…それは言えない…」

「……ねえ、話してよ上やん君」

「……え?」

「確かにあたし、上やん君とはほぼ初対面だし、歳下だし、頼りないってのは分かる。でも、それでも話を聞いてあげるくらいの手助けは出来るよ」

「い、いやでもそれは…」

「それにね、上やん君。自分で気づいてる?」

「気づくって何に?」

「今、上やん君…泣いてるんだよ？」
「…え？あ…」

リーファにそう言われて自分の右頬に触れた上条。するとその頬には一粒の涙がつつたっていた

第12話 噂

「う、嘘だろ…なんで…今まで碌に泣いたことなんてなかったのに…」
頬をつたった涙を拭き取りながら上条は目元をゴシゴシと擦り、少しだけ目の周りが赤く充血していた

「ねえ、辛いんでしょ？だから泣いちゃうんでしょ？この世界では涙が我慢出来ないの。だから…話してみてよ。あたし、力になれるよ？」

「…ごめん、リーファ」

ガタツ！

そう呟くと上条は椅子から腰を上げた

「え？ちよつ、上やん君？」

「ダメなんだ…もうこれ以上誰かを巻き込む訳にはいかない…確かにリーファの言う通りだ…俺は今、泣くほど辛い。でも…それでもやらなきゃダメなんだ。無理だって言われたぐらいで…心が折れてちやダメなんだ…一人で戦うつてのは…そういうことだ…」

「…上やん君…」

「おかしな話だよな…SAOじゃずっとソロやってたつもりなのに…いつも気がつけば誰かがそばにいて…一人だつて気は全然しなかった…でも、今は…どこを見回しても…一人だ…」

「でも…約束したんだ。インデックスと…吹寄と…先生と…美琴と…みんなと…俺を助けてくれた全員に約束したんだ。だから俺は…たとえ一人でも、どんなに無理でもやらなくちゃならねえんだ!!」

そう言いながら上条はリーファに背を向け、店を出ようと歩き始め店の出口のドアノブに手をかけた。しかし、その時

「じゃあ！あたしが連れてってあげる！」

「……へ？」

「だから！あたしも世界樹と一緒に行ってあげるって言うてんの！上やん君を一人にしない！」

「…いや、人の話聞いてたんでせうか？もうこれ以上誰も巻き込む訳にはいかないってないって聞こえなかったんでせうか？」

「言つとくけどもうとつくに巻き込まれてるわよ。だったらもう乗るかかった船でしょ？とことん付き合うわよ。それに『俺を助けてくれた人』にあたしは含めてくれないのかしら？」

「……いやあでもやっぱり出会ったばかりの人にそこまで世話になる訳には…」

「それに、世界樹までの道は分かるの？」

「うっ…」

「世界樹のグランドクエストはどうするの？一年以上攻略されてない世界樹を1人で突破できるの？」

「ぐっ…い、いやまあ何とかするしかないさ…」

「いいの！もう決めたの！」

そう言つて頑なに譲ろうとしないリーファはふんっ！と強めに鼻から息を吐くと、上条から顔を逸らした。しかし、店の蛍光灯のせいなのか、その頬が妙に赤らんでいる気がした

「…っただあゝ…リズを彷彿とさせるじゃじゃ馬っぷりだなお前は…分かった分かった。じゃあ一つ提案がある」

「提案？」

「…明日、俺の事情を何もかも包み隠さずに話す。この世界に来た理由も、世界樹を目指す理由も、今までの俺になにがあったのかも、何もかも」

「!!!」

「長い話になると思うが、それを聞いた上で本当に俺について来たい

と思ったなら、俺もリーファと一緒に世界樹を目指すことにする。でも、俺の話を聞いて付いてこれないと思ったなら、俺一人で世界樹を目指す。もちろん明日話すことは他言無用だ」

「・・・分かった。それでいい。じゃあ、あたしそろそろ落ちないといけないからログアウトさせてもらうわね。その：明日の時間はどうする？」

「大丈夫だ、リーファに合わせてる」

「分かった・・・それじゃ午後3時にまたここに集まりましょ」

「分かった」

「それと、上やん君はログアウトするならこの店の上の宿屋を使ってね。変なところでログアウトすると、次にログインした瞬間に周りのシルフからフルボッコにされるかもしれないから」

「わ、分かった・・・」

「それじゃ、また明日」

「おう、また明日」

シュンツ・・・

そう言っって手を振るとリーファは自分のメニューのウィンドウのログアウトを選択してゲームを終了し、その身体はまばゆい光の中で消えていった

(さて・・・まあ俺は別にログアウトする必要はねえし・・・ 明日の3時まではまだまだ時間もあるし・・・とりあえずはアイテムの買い出しと装備を揃えて・・・後は周辺調査かな・・・後は・・・この世界でも『アレ』が使えるのか一度ぐらいは試しておきたい・・・一通りが終わったら俺も仮眠をとろう・・・)

自分のこの後の予定を大雑把に考えながらドアノブに手をかけた上条。しかし、自分が意図していないにも関わらずドアノブが勝手に回った。かと思えば何人かのシルフが一気に店へと入って来た

「おわっ?!?!」

「あ、す、スマン…」

「いや、気にするな…出会い頭で驚いたただけだ…ってスプリガン!？」

店に入って来た男性は上条の身なりを見るなりスプリガンだと判断し、シルフの領に別の種族がいることに驚愕し半歩だけ後ずさった

「あ、悪い！友達と会ってただけなんだ！すぐに出て行くから！」

「あ、そうなのか…悪い。種族が違うってだけでこんな過敏に反応しちゃまって」

「いやいや、気にしてませんのことよ？」

「おーい！なにやってんだよー！早く入れよなー！リーダー！」

「あ、お、おう！すまん、それじゃ」

「おう」

(…分かつちやいるんだが…やっぱああいうパーティーってのは…いいよな…)

上条はそう思いながらシルフの男性に別れを告げると、シルフの団体がぞろぞろと店へと入って来た。上条は店の出入り口は一つしかないため、全員が入りきってから店を出ようと思いついていたところ、シルフの集団の中の一部から何やら話し声が聞こえてきた

「いやー！でも本当に噂に違わぬ剣さばきだったよな…あのウンディーネ」

「ああ！本当に目に見えない早さだったよな！俺なんか反撃する間もなくやられちゃったぜー！」

「まさに噂通り！まるで『閃光』のような早さのレイピア使いだっただぜー！」

「…え？」

第13話 『閃光』

〔『閃光』って…それは…S A Oプレイヤー時代の美琴の通り名じゃねえか！〕

シルフの集団の雑談を立ち聞きしていた上条はその話の内容を聞くなり、血相を変えてシルフの集団の中の1人に話しかけた

「なあ！ちよつとアンター！」

「ああ？どわあ!?スプリガン!?!」

「今の話！もつと詳しく聞かせてもらえないか!?!」

「・・・は?？」

「今の閃光のような早さを持つレイピア使いのウンディーネの話！もつと詳しく知りたいんだ！」

「はあ!?!なんでそんなことをシルフでもないお前に…!」

「頼む！その子、俺の知り合いかもしれないんだ!?!どうしても会わなきゃいけない人なんだ!?!この通り!」

上条は直角に腰を曲げて頭を下げ、シルフの男性に頼み込んだ

「いや、だからさあ…」

「いい、俺が話してやる」

シルフの男性はめんどくさそうに上条をあしらおうとするが、そんな彼を止めたのは、先ほど上条と店内で出会い頭に激突しそうになったシルフの集団のリーダーだった

「ほ、本当か!?!ありがとう!?!本当にありがとう!?!恩に着る!!」

「えっ!?!ちよつ…リーダー!?!」

「気にするな、元を辿れば最初に彼の気分を害したのは俺たちの方だ。」

みんなは先に自分の飲みたいものを飲んで、食いたいものを食っててくれ。今日は俺の奢りにする」

「お!?本当家リーダー!?みんなー!今日はリーダーの奢りだぞー!」

「イエーイー!」「太っ腹ー!」「愛してるぜー!」

「全く…元気なやつらだ…」

「あ、えつと…俺の名前は上やんだ。種族は違うがよろしく頼む」

「ああ、すまないな。俺に続いてすっかり気分を悪くさせてしまつて」「いや、仕方のないことだろ。そういうゲームなんだから。むしろ俺の方が場違いだ、すまん」

「なに、これでもこの人数のパーティーのリーダーを担う人間だ。義理立てと人情には自信がある」

「それで…ワガママを言うようだが…その…」

「レイピア使いのウンディーネの話か?」

「ああ、俺の知り合いかもしれないんだ」

「実はな、俺らのパーティーは今日まさに、世界樹攻略を目標に世界樹の根元にある『央都 アルン』を目指してこのスイルベーンを出発したんだ」

「おう」

「ところが、だ。スイルベーンがやつと見えなくなったぐらいのところである1人のプレイヤーが俺たちの前を飛行していてな。最初はスイルベーンからそう遠くないし、同じシルフのプレイヤーかと思つた」

「だが近づいてプレイヤーを確認してみるとウンディーネでな。向こうはたった1人だし、俺たちの旅立ちの初狩りとして狙うことに決めたんだ」

「なるほど…」

「それで戦闘を始めたはいいんだが、そしたらそのウンディーネがめちゃめちゃ強くてな。レイピアの切っ先が全く見えないぐらいで蘇生する間も無くあつという間に全滅だ。そして旅立って1時間もせずに全員シルフ領に強制送還だ。全く災難だったよ」

「それで全員揃つた後、アイツはきつと最近シルフの間で噂になつて

る『閃光の如き速さを持つレイピア使いのウンディーネ』だろうって話になったんだ」

「!!!」

「まあ…それでその後は敗戦を祝してヤケ酒でもしようって話になってこの店に来た…ってことだ」

「そつか…ありがとう。それで、そのウンディーネはどんなヤツだった?」

「判別できた限りはおそらく女性だろうな。背丈はお前より一回り小さいぐらいで…どこに向かったかまでは分からんが方角的にはこつから世界樹に向けてまっすぐだな。だが飛行スピードは向こうも本気で走ればめっちゃ速いんだろうが、俺たちが追いつけたぐらいだから普段移動する時はそんな早い方じゃないんだろ。まだそう遠くには行つてないかもしれん」

「!!悪い!色々とありがとう!それじゃ!」

「バァン!!!」

シルフの男性のその言葉を聞くと上条は脇目も振らず駆け出し、店の出入り口のドアを乱雑に開けて飛び出した

「後はそうだな…髪の毛は腰ぐらいまで伸びてて…あつ!おい!行っちゃまった…」

「おーい!リーダー!リーダーも早く食べよー!」

「ちきしよー!一人の女の子に負けるなんて情けねー!!あーもうチキショー!ヤケだー!ヤケ酒だー!!」

「おーう、分かった今行く。…まあなんとかなるか。あんだけ急いで飛び出したってことはその2つの容姿の特徴だけで探してる人と一致したんだろ…」

—————

「よしー行くぜー!」

ビュンツツツ
!!!!!!

上条は気合を入れると背中から翅を広げ、思いっきりスイルベーンの地を踏み切って大空へ向かって飛び出し、今の自分が出せる最高スピードで飛行を始めた

ゴオオオオオオオオオオ
!!!!!!

「世界樹に向かえばいいんだよな！お前はデカすぎて目立つから助かるぜ!!」

世界樹へと進路を向け、風を切りながらグングンと加速していく上条。曲がりなりにシルフでもトップクラスの飛行速度を誇るリーファにも負けず劣らずの飛行速度を上条は持ち合わせているため、スイルベーンが見えなくなるほど遠くなるのにそれほど時間はかからなかった

「さて、あの人の情報通りならそろそろ目を凝らして探し始めないと…今も飛んでる保証はないし滞空時間の限界が来てたら地上にいるだろうから下の森の方も気にしとかねえと…」

自分の眼下に広がる木々の隙間に目を配りながら空を泳ぐ上条。搜索の為に適度な速さに速度を落としたり

「えーっと…ウンディーネってのは確か青色を基調にしてる種族だったよな…緑の中から青を探すのか…こりや骨が折れるな…いっそサラマンダーとかなら探しやすいんだが…なんだって美琴のヤツはウンディーネを…ん?…アレは…?…」

そんな愚痴を零しながら美琴と思わしきウンディーネの搜索にあたる上条は何やら森の木々の隙間から1人のプレイヤーの人影を見

つけた

「!!あのプレイヤーの色は…青…ってことはウンディーネだ…」

自分が剣の世界で戦っていた間、常に傍にいる訳ではなくとも、いつだって自分の助けとなり、力になってくれた女の子がいた。周りから自分だけの時間が進み始め、失意の念にかられてなお、ずっと追い求めた女の子がいた

「アイツだ…美琴だ…そこにいるのか…美琴…美琴ツ…!!」

シユンツ!…ズダンツ!ダダダツ!

上条はもういても立ってもいられなかった。ずっと探し求めていた女の子がそこにいると分かれば、身体は勝手に動き出していた。背中中の翹をしまい、乱暴に着地すると目の前の女の子の方へ向かって走り出した

「美琴!!!」

「?…!!…へ?」

「…え……………」

その名を叫んだ。追い求めた彼女が自分の方へと振り向いた…はずだった

「えっと……………どちら様ですか?」

「美琴じゃ……………ない……………」

目の前にいる月明かりに照らされて輝く青の彼女は、自分の求め続けた女の子とは似ても似つかなかった。自分より一回り小さい背丈に、凜とした顔立ちで、腰に細剣を携え、青色の綺麗な髪が丁度腰の

あたりまですらりと伸びている女の子。確かに上条は例外だが、この世界は自分の容姿がそのまま反映される訳ではない。それでも、違うと感じた。一目見れば分かるはずだ。それほどまでにあの二年間で彼女を理解していたから。だからこそ、上条は自分の目の前の彼女が、御坂美琴でなかったことを受け止め切れなかった

『ミコト』さん…という人を探しているのですしたら…人違いだと思いますよ？」

「……………あ……………」

「……………？もしも？あの、大丈夫ですか？」

「……………あ、ひ、人を探してるんだ…君と同じくらいの背丈で…ウン
デイナー…かも…しれなくて…」

あまりにも大きすぎた悲しみと、どうしても現実を受け入れられなかった上条は言葉が出なくなっていた。辛うじて言葉をなんとか絞り出す、その言葉はどれも途切れ途切れで、不鮮明で今にも消えてしまいそうな声だった

「……………ごめんなさい」

「え？」

「だってあなた…すごい…悲しそうだから…私があなただ探してる人じゃなくて…ごめんなさい…」

「い、いやっ！そんな！謝らないでくれ！わ、悪いのはこっちの方なんだ！勝手に人違いして…勝手に落ち込んで…全部…俺が…勝手に…」
「いえ…その、私もかれこれずっと人を探しているの…私があなたと同じ立場だったら、きつと同じ反応を思うわ…だから…ごめんなさい…」

「……………」

「……………」

気まずさのあまり互いにかけるべき言葉がみつからず、言葉が出て

こなくなった空気の悪さから上条とウンディーネの女の子は互いに視線を逸らし、顔を俯かせていた

「・・・あの、一つお願いがあるんだけど・・・」

「あ・・・なんですか？」

「その・・・出会ってすぐでなんなんですけど、俺と戦ってくれませんか？」

「えっと、あなたと私が？」

「ああ」

「・・・いいですよ。でも私、あまりこのゲームを始めてから日を重ねた訳じゃないですけど、それでも結構強いわよ？レイピアの腕も性能も女の子だからといって見くびらない方が身の為ですよ。それに、あなたのその初期の片手剣じゃどうしようも出来ないと思いますけど・・・」

「いいんだ。そこはなんとかするから」

（・・・確かにこの子は美琴じゃない・・・でも、この世界の『閃光』が美琴じゃないと決まった訳じゃない・・・このシルフ領の周辺にいるウンディーネなんてこの女の子ぐらいだろう・・・なら、せめてこの子が『閃光』と呼ばれている本人なのかそうでないのかだけでも戦って確かめられれば・・・今はそれでいい・・・）

「・・・分かったわ。やるからには手加減しないわよ」

「恩に着るよ。ありがとう」

その言葉を皮切りに女の子は腰に据えた鞘から細剣を抜き、上条は背中の鞘から片手剣を抜いた

第14話 面影

(剣を振るのなんて75層以来か…まあマトモに使ってたのなんざ1層の時ぐらいだけど…果たして今の俺がこの子を本気にさせるほど上手くやれるもんか…)

「さ、私は準備OKよ。お好きな時にどうぞ？ビギナーさん」

「そうかい…それじゃあ…遠慮なくっ！」

ビュンツ!!!

「ツ!?速っ!?」

「うおおおおおっ!!!!」

ザンツ!!!

上条は思い切り足に力を込め地面を蹴ると、最高速度で少女へと肉迫し、その剣で胸元に斬撃を見舞った。ノーガードだった為、少女はモロにダメージを受け、HPがかなり損なわれた

「くっ…！やったわね…はあっ!!」

ギン！キンツ！キキキキキンツ！

「は、速すっ…!?」

「そこっ!!」

「ツ!?しまっ…!!」

ザシユツ!!!

「いいっ!?」

上条の初撃をもらい、彼は慢心して挑むべきでない相手と判断した少女は、一気に前進し上条との間合いを詰める。そして驚異的な速さで連続してレイピアの斬撃を繰り返した。上条は連撃こそ全て剣ではたき落とし防ぎ切ったが、防ぎきった安心の末に隙を見せた一瞬を少女は見逃すことなく、渾身の突きを叩き込んだ

「やああああああああ!!!」

「うおおおおおおお!!!」

ギンギンギンギンギン!!!

「せいっ!!」

「だりや!!」

ガキイン!!!ギリギリッ:!!

互いの踊るように鮮やかな剣戟の末、その刀身がぶつかり合い、つばぜり合いになって火花を散らした

「ッ!やるわね…その反応速度といい先読みといい…あなた本当にビギナー…?」

「へへっ…そっちこそ、戦闘はプレイヤーの運動能力に依存するこのハードなゲームでそれだけの剣術を持つてるなんて只者じゃないだろ…?」

「お褒めに預かり光栄だわ…なら…これでっ!!」

!!!

ズバババッ!ギンッ!キインッ!!

それは流星の如く速く、鮮やかな剣技だった。常人であればその剣技を初見で防ぐ術はない。しかし、現に上条はその全てをはたき落した。それはなぜかと問われれば、上条にとってその剣技は『初見』ではなかったからだ

「っ!!これも防ぐなんて…!」

「…中段3連…下段切り払い往復…斜め切り上げから上段2連突きの計8連撃…その動きは…」

『スター・スプラッシュ』

「ッ!?あ、あなたっ…!」

「まさか君は…S A Oプレイヤーだったのか…?」

見間違はずもなかった。あの剣の世界で共に戦った仲間：御坂美琴が好んで愛用していた剣技だった。すっかり上条の脳裏に焼き付いていた彼女の剣技を、目の前の少女はソードスキルのシステムアシストなしで完璧に再現していた。その華麗な動きに、上条の目には目の前の少女とかつての美琴の面影が重なって見えていた

「・・・そっちこそ、この剣技の太刀筋と名称を知ってるってことは、元SAOプレイヤーなのね・・・」

「・・・そうか：俺以外にもう1人だけ目覚めた人がいるとは聞いてたけど：君のことだったのか・・・」

「・・・もう1人？」

「君も知ってるだろ。SAOに囚われた末、ゲームがクリアされたのにも関わらず、クリアまで生き残った約6000人の中から目覚めたのはたったの2人だけ。つまり、俺と君がその2人なんだ」

「・・・えっ？ちよ、ちよつと待って：あなた一体何を言っているの？」「そっちこそ、それだけの剣さばきを見せてくれておいてシラを切るのか？同じSAOプレイヤーだったんだ仲良く出来るはずだ。実はこのALOにはまだ現実で目覚めていない約6000人を助けられる方法があるかもしれないんだ。良かったら話だけでも・・・」

「ちよつ！ちよつと待ってば！2人しか目覚めてない・・・？まだ目覚めていない6000人・・・？あなた一体何を言っているの？SAOに囚われて生き残った人達は：ゲームクリアと同時にちゃんと全員解放されたじゃない・・・！」

「・・・えっ？」

第15話 矛盾

「そ、そつちこそ一体何を…1万人があの世界に囚われてその中で俺たちは生き延びて目覚めたんじゃないか!」

「ええ、そうよ…あの事件の被害者総数は10000人…忘れるはずもないわ…死亡者数3853名…生存者数6147名…その6147人はちゃんと目覚めてそれぞれの生活に戻ってるじゃない!」

「…どういうことだ…?」

上条とウンディーネの少女の語る真実は、一部を除いてそのほとんどが錯誤していた。目覚めた6000人と、未だ目覚めることのない6000人。目覚めた2人は自分と目の前の少女だけのはずなのに、その数は膨大なほど違っていた

(メディアが嘘の情報を流してたのか…? いや、そんなはずは…カエル顔の先生だってそう言ってたし、俺からナーヴギアを回収しに来た政府の役人さんだってそう言ってた…なら嘘をついているのはこの子自身なのか? いやでも、この子の反応と口振りからしてどうにも嘘をついているようには…)

「…分かった。とりあえず一旦剣を下ろそう。君とは落ち着いて話
がしたい」

「…そうね。私もそれに賛成」

そう言う上条とウンディーネの少女は鞘へと剣を戻し、身体に入っていた力を抜いた

「俺の名前は上やん。その…元SAOプレイヤーだ」

「私の名前はアスナ。あなたと同じSAO生還者で、攻略組だった」

「ツ!?こ、攻略組だって…!?!」

「ええ」

「・・・実は俺も攻略組の1人だったんだが：アスナなんて名前は聞いたことがない。SAOでのアバター名はなんだったんだ？」

「えっ!?あなたも攻略組!?私はSAOでも今のアバター名と変わらずアスナのままでけど：あなたこそSAOではなんて名乗ってたの？私は立場上攻略組を指揮することがしばしばあったけれど、上やんなんて名前は一度も見たことも聞いたこともないわよ？」

「・・・いや、俺もSAOからアバター名は一切変えてないんだが：おいおいこりや一体どーなってんだ・・・」

「どうせだから入っていたギルドの名前も教えておくわ。攻略組最強ギルド『血盟騎士団』に所属していて、私はそのギルドの副団長だった。通り名は『閃光のアスナ』。気づけば勝手に知名度は上がっていったんだけど：これでも聞いたことはないかしら？」

「!?嘘だろ：それは全部：美琴と同じ・・・」

「・・・ねえ、あなた本当に攻略組?やっぱり私、あなたみたいな人見たことも聞いたこともないんだけど・・・」

「・・・じゃあ俺からも聞かせてくれ。『幻想殺し』『超電磁砲』『原子崩し』『一方通行』『神聖剣』：これらのユニークスキルから1つでも聞いたことがあるものは？」

「い、いまじんぶれいかー?れーるがん?何を言っているのかさっぱりだけど：『神聖剣』なら聞いたことも見たこともあるわ。だってそれは血盟騎士団の団長：ヒースクリフの：茅場晶彦が使っていたユニークスキルじゃない」

「なっ!?そ、そこだけは一致するって：あーもう訳がわからん!ちきしょー!なにがどーなってんだー!?!」

もう一体二人の間の話の食い違いが多すぎて何からどう話せばいいか訳が分からなくなり、上条は頭を乱暴に掻き毟った

「ねえ、上やんさん：あなたの探している人はミコトさんって名前なの?」

「え?ああ、そいつも元SAOプレイヤーで攻略組なんだが：その様

子じゃ美琴の名前も聞いたことはなさそうだな…」

「そうね…残念だけど…」

「あ、そうだ。確かそっちも人を探してるって言ってたよな？その、プライベートを侵害しない限りで教えてくれるならその人の名前を聞いてもいいか？」

「えつと…私の探している人は『キリト』君っていう名前で、同じくS A O 生還者なんだけど…聞き覚えは？」

「…すまん、聞いたこともない名前だ」

「そうよね…お互いの話で自分と周りの立場や事情や人物が錯誤しているのに、キリト君が一致するなんておかしな話だし…」

「うーむ…あ、そうだ！我ながらナイスアイデア！なあアスナさん」

上条は思考の末何かをひらめくと自分の手の平をぼん！と叩くと、アスナに話しかけた

「え？は、はい？」

「良かったら明日の午後3時、シルフ領のスイルベーンにある酒場に来てくれないか？」

「明日の3時にスイルベーンの酒場に？一体どうして？」

「実は、ある一人の女の子に、S A O のことを含めた俺のこれまでの経歴と、なぜA L O に来たのかの理由を話すつもりなんだ。ところがこれを全部話すととなると中々に長い話でな、どうせならアスナさんも含めて一気に説明しようと思っただけど、出来るならそこでアスナさんの知ってるS A O の話とそれに関連する話をもっと詳しく色々と聞かせて欲しい」

「なるほど…上やん君の言うS A O の話と…A L O に来た理由…それに私の知ってるS A O の話をね…」

「ああ、違う種族の領などこ申し訳ないとは思いますが、実はその一緒に話すつもりの子がシルフの女の子でな。それでこの子が中々古参のプレイヤーらしくて、A L O 内の事情にも結構精通してると思うんだ。それで、アスナも人を探してるってんなら、その子からそのキリトっ

て人に関する情報が何かしら聞けるかもしれない」

「・・・うん、確かに余計な手間を全部省くならその方法が一番手っ取り早いわね・・・私の方としても君の言うSAOの事情は気になることだらけだし・・・その上キリト君の情報が聞けるかもしれない可能性があるあるなら・・・分かった。明日の3時にスイルベーンの酒場ね。なら今日はスイルベーンの宿屋で落ちることにするわ」

「本当か!?ありがとう!」

「あ、それと私のこと呼ぶなら別に呼び捨てでも構わないわよ?私は多分これからも上やん君のこと君づけで呼ぶけど」

「そっか・・・じゃあアスナ、一先ずのところはよろしく」

「ええ、こちらこそよろしく」

こうして上条とアスナは握手を交わし、スイルベーンへと到着した後、アスナはスイルベーンの宿屋でログアウトし、上条はベッドで仮眠を取った。この出会いがこれからの自分たちの運命の歯車を大きく変えることになるなど、まだこの時の二人は知る由もなかった

第16話 食い違う現実

「・・・上やん君、これは一体どういう状況？」

「・・・？どうしたんだよりリーファ、そんな仏頂面して」

「あのねえ！こんな煩雑な状況になるなら説明しておくのがスジって
もんでしょ!?!しかも増えたメンツが女の子ならなおさら!」

「は、はあ!?!いやそりやリーファは落ちてたんだから仕方ないことだ
ろ!それにこの場に男女は関係ないだろうが!」

「あ、あるの!関係大アリ!／／／」

「んな理不尽な!?!」

「あ、あははは・・・」

ただ今の時刻は午後3時。世間的に言えばこの時間はお菓子の時
間なのだが、この三人を囲むテーブルには茶菓子など一切なく、上条
とリーファの痴話喧嘩をアスナは苦笑いしながら見ていた

「まあいいわ。そこも含めてちゃんと説明してよね」

「おう、そこんところはこの上やんさんに任せなさい!」

「まったく・・・えつと、アスナさん：でしたよね?あなたの細剣さばき
の噂はかねがね聞いてました。あたしの名前はリーファ。一応この
黒いのを世界樹まで道案内する予定なんです。よろしく」

「あ、うん。上やん君から聞いたんだと思うけど、私がそのアスナよ。
種族は違うけど仲良くしましょう?こちらこそよろしくね、リーファ
ちゃん」

「さて、それじゃあ早速だが話を始めてもいいか?それと、何度も言う
ようだがこの話は他言無用だ」

「うん」

「ええ」

上条の顔つきがマジメなものへと変わり、テーブルの周りの空気が

ガラリと変わる。リーファとアスナは上条の提案を了承すると、上条はゆつくりと話し始めた

「まずは大雑把にだけ説明しようと思う。2年前、ナーヴギアという人間の意識を仮想世界へとダイブさせる革新的なゲームハード、そしてソードアート・オンラインという世界初のフルダイブ式VRMMOゲームが発売された。そのゲームを発売初日に入手し、プレイした計1万人のプレイヤーは仮想世界に囚われ、SAOの世界でのゲームオーバーは現実世界での『死』を意味する。デスゲームになり、プレイヤーはインクラッドの100層を突破してゲームをクリアしなければログアウトはできなくなった。世界ではこれを『SAO事件』と呼ぶようになった……ここまではリーファもアスナも知ってるか？」

「うん、あそこまでは有名な事件だもんね。分からないはずだよ」
「私も特に問題ないわ」

「それで、俺もそのSAOの世界に囚われて『浮遊城 インクラッド』の第100層のクリアを目指し、色々なことがあったが、攻略組の仲間たちや様々な人の力を借りて、約2年かけて75層までたどり着いたんだ。でもその75層でのとある出来事がきっかけで、SAOを開発し、デスゲームへと変貌させた張本人である茅場晶彦：アバター名をヒースクリフと名乗る男と対決することになったんだ」

「でも、実は茅場はある人物の手ですつと利用されていただけだった。その茅場を利用していた真の黒幕こそが、あの学園都市統括理事長の『アレキスターIIクロウリー』だったんだ」

「???」
「???」

上条の話を聞いていたリーファとアスナはその話疑問を抱いたのか、互いに視線を合わせ首をかしげたが、上条が話を続けようとしていたので一先ずは話を聞くことにした

「それから俺とアレキスターは死闘をくり広げた。そしてやっとのこ

とで俺はアレイスターに勝ち、ゲームがクリアされたんだ。俺は病院で目を覚まし、これでやっとSAOに囚われた全員が現実に帰って来られたんだ…と、そう思っていたんだ」

「でも、目を覚ました俺とは裏腹に他のSAOに囚われたプレイヤーのほとんどは目を覚まさなかった。俺が病院の先生に聞いたのは、目を覚ましたのは俺を含めて2人だけ…囚われた10000人の内3853人が命を落とし、ゲームをクリアするまで生き残っていた6147人の内、2人だけが目を覚まし、残る6145人は安否不明。計画の首謀者であったアレイスターはゲームクリアと同時に既に死亡していた…と、ニュースやメディアではそう報じられていた」

「?!?!」

「だけど、俺は現実の知り合いからこのALOのコンピューターはSAOのコピーサーバーだと知らされて、その他にもいくつかSAOとALOには共通項があることが判明したんだ。だからきっと、未だに目覚めないSAOプレイヤーのみんなを助ける鍵がALOにあると踏んで俺はこの世界に来てリーファと出会った…って感じた」

上条が話し終わると、アスナは「なるほど」と納得していたようだが、リーファは口元に手を当て、何やら思索してから口を開いた

「…どういうこと…? あたしが知ってるSAO事件とは一部が重なっているだけで…根本的に全く違う…」

「…え?」

「ねえ、リーファちゃん。良かったら大体でいいからリーファちゃんを知ってるSAO事件について話してくれない?」

「えっと…あたしの知っている限りはSAOのサービス初日に1万人が囚われてゲームをクリアするまでにおよそ2年の歳月が流れて3853人が死亡して6147人がゲームをクリアするまで生き残っていたっていうところまでは同じ…でも、あたしが知ってるSAO事件は、ゲームがクリアされたと同時に生存者は全員現実で目を覚ましたはずだよ?」

「なっ…?!」

「それじゃあやっぱり…リーファちゃんの知ってるSAO事件は私と同じ…上やん君の言うSAO事件だけがこの3人の中では別物の話…」

「それに付け加えるなら、『学園都市』って一体何？『アレイスター』クロウリー』って一体誰？そんな街も人も聞いたことがないし、今初めて聞いたわ」

「…えっ？」

「そうね。そこに関して私にはリーファちゃんと同じよ、上やん君」

「…え？…がっ！学園都市だよ学園都市！世界中の人や学生なら誰もが一度は夢を見る科学の街！人口約230万人が住んでその8割を学生が占める学生の街！行ったことはなくても聞いたことぐらいいはあるはずだ！」

「…ごめん、やっぱりその説明を聞いても分からないし、そんな街があることも知らないわ…」

「嘘…だろ…」

アスナがそう断言すると上条は驚愕の顔を浮かべ、開いた口が塞がらなくなっていた

「正直なところ、あたしが詳しいのはALOのことだけで、上やん君の話はにわかにも信じ難い話だし、今ここですんなりと解決できそうにはないわ」

「…そうか…」

「でもちよつと待ってて。実はあたしのフレンドの中に1人、アスナさんや上やん君と同じSAO生還者がいるの」

「えっ!？」

「実はその人、色々と訳アリで種族はスプリガンなんだけど、スプリガン領を拠点にせずにこの世界中を放浪してるの。確か今は『ケットシー』の領あたりにいるって言ってたし、ここからそう遠くないところにいると思うから、メッセ送ってこっちに来るように言ってみるね」

そう言うとりーファは手慣れた手つきでメニューを開き、キーボードで文を打つとフレンド欄からある人物を選択しメッセージを飛ばした

「え、えつとりーファ…ちなみにその人SAOについての知識はどのくらいあるんだ…?」

「うーん、あたしも詳しく聞いたことないから分かんないけど…それでもその人のALOでの剣筋を見た限りALOじやかなりの手練れに部類されるはずだし、SAOでもそれなりの腕前を持ってたと思うから、詳しいんじゃないかな…まあ大丈夫大丈夫! 『四人寄れば世界樹の知恵』って言うでしょ!」

「そ、それを言うなら『三人寄れば文殊の知恵』でしょりーファちゃん…シャレてるつもりかもしれないけど…そもそも人数が違うし『樹』の字すら違うわよ…」

「いいのいいの!細かいことは気にしない!…つて返信はや!?なににな…『分かった。20分後にはそっちに着くと思う』だってさ!」

「まあいいか…今は一人でも多くの知恵が欲しいし…にしても今のをもう一回説明せにやならんのか…」

「まあまあ、どうせ3時だしおやつでも食べながら気長に待ちましようよ。どれどれ…」

「アスナもノリノリかよ…」

「まあいいじゃん。ずっと頭を捻ってれば解決する話じゃないんだし、それに物事考えるには糖分は必要不可欠だよ?」

「この世界で摂取できる糖分も所詮は仮想なんですがりーファさんそれは…」

第17話 再会

「あくむっ…むぐむぐ…んっ！美味し〜っ!!」

「でっしょー!?これはシルフの自慢なんだけど、このお店のショートケーキは見た目も味もシルフ領では一番…いや、ALO内でも1番だと思うわ!」

「あむっ…もぐもぐ…うん、悔しいが確かに美味しい…」

(…シリカがもしこの場にいたなら…美味そうに食べたんだろうな…)

リーファの言うSAOに詳しいフレンドが来るまでの間、現在の時間が3時ということもあり、すっかり間食モードになってしまった。三人はそれぞれ店のスイーツを注文し、リーファも自慢するその味を嗜んでいた

「もぐもぐ…あ、そうだ」

「ん?どうしたの上やん君?」

「あのさ、俺はとりあえずこの世界に来た理由を話したけど、アスナがこの世界に来た理由はなんなんだ?」

「あ、それあたしも気になります。普通ならSAOに囚われていた過去なんてあつたら、仮想世界が怖くなって二度とVRMMOなんてやらないと思うんですけど…一体なんですか?」

「…そうね。そういうば確かに昨日、上やん君にはちゃんと話すつて約束したもののね」

二人にそう聞かれると、アスナはケーキを食べていた手を一旦止め、フォークを置き咳払いをすると、ゆっくりと話し始めた

「確かに私も最初は躊躇した。やっぱりあんな怖いことがあつた後に、もう一度仮想世界に行くなんて…つてね。でも、それでももう一

度行かなきゃって思ったの。もう一度、彼に会うためにね」

「・・・彼？ああ、昨日アスナが言ってた探してる人のことか」

「うん。その人も元SAOプレイヤーだったって上やん君には話したよね？実は私とその人、SAOの世界では結婚して夫婦になったの」
「あー、そういえば結婚システムなんてのがSAOにはあったな・・・結局上やんさんには最後までなんの縁も所縁もないシステムでしたが・・・」

「でも、私と彼はゲームクリアと同時にお互いに引き裂かれてしまつた・・・何度も何度もSAO事件を捜査してる政府の役人の人に掛け合つたのに、『プレイヤーの個人情報やプライバシーに関する一切開示できません』って言われちゃってね・・・現実世界でその人と再会することは叶わなかつた・・・」

「あれ？でも確かどこかの廃校になつた学校を改築して、SAO生還者のための学校があるって聞きましたけど・・・そこでは再会しなかつたんですか？」

「ううん、実は私の両親・・・まあとくに母親が『そんな得體も知れない異常者ばかりの学校に入れられるか』って反対して強引に別の学校に入らされたの」

「そ、そんな・・・」

「もちろん、生還者の学校には入れなかつたけど、自分でその学校に足を運んだわ。でも、受付の人に『この学校の性質上、他の学校の生徒さんを入れる訳にはいかないし、生徒の戸籍を明かすわけにはいかない』って為すすべなく門前払いにされたの・・・」

「でも、諦めきれなかつた。何とかして彼ともう一度会いたい。だから私は仮想世界にもう一度行くことを決めたの。確かに私たちを悲劇に巻き込んだのは仮想世界だけど、私たちが出会って、私たちを繋げてくれたのもまた仮想世界なんだから」

「なるほどな・・・それで巷じゃ人気のVRMMOのALOを始めた・・・っていうことか」

「うん。それでかれこれ両親の目を盗んでALOを始めて、ひたすらALOの中を飛び回り続けて2ヶ月ぐらい経つんだけど、一向に彼の

手がかりは掴めなかった…だったら、飛び回りながら色んな人を倒して自分の名前が噂で飛び交うぐらい有名にしようって考えたの」

「なるほど…確かに名前が売ればその噂をどっかで聞きつけて会いに来てくれるかもしれないもんな。それもS A O時代と似たような『閃光』なんて通り名まで売ればなおさらその人はアスナだって気づいてくれるわけだ」

「まあ、彼もA L Oをやってくれてるなんて保証はどこにもないんだけどね。でも私、信じてるんだ。例えA L Oじゃなくても、きつと彼も私を探してどこかの仮想世界を歩いてくれるんだ…ってね」

「…素敵なお話ですね…女の子だったらそんな運命の出会いに憧れちゃいますよ」

「だから私、どこかの仮想世界で必ず彼と再会して、したら今度は現実世界でちゃんとお互いに顔を合わせて、恋人になろうって思うんだ…彼と…『キリト君』と…」

そう言うときアスナは頬を赤く染め、両手を自分の胸に置き、優しくぎゅっと握り締めた。自分が愛し、自分を愛してくれた人のことを考えながら、いつか必ず再会の日が来ると願って

「…え…？」

「なるほどな…俺もその気持ちは良く分かるよ。やっぱり俺も美琴だけじゃなく、再会したい人がいっぱいいるからな。その人達に再会できるなら…例えどんなに無茶だとわかってい…」

「ご…ごっ！ごっ！ごめん上やん君！ちよ、ちよちよちよっ！ちよつとタンマー！あ、アスナさん…今なんて…？」

「え？仮想世界で再会したら…今度は現実世界でちゃんと顔を合わせて恋人になろうって…」

「そ、その後！その人の名前！一体なんて…!？」

「え？えつと…キリト…」

ガチャ！ギイ…バタンツ！

「おーいリーファア？言われた通り来てやったぞー。一体なんなんだ？俺に聞いてほしい話があるってのは…」

「・・・お、お兄・・・ちゃん…」

「げっ!?あ、あのなあ・・・ALLOでその呼び方はやめろってあれ・・・ほ・・・ど・・・」

「・・・き、キリ・・・ト・・・くん・・・?」

「・・・あ・・・アスナ・・・なの・・・か・・・?」

酒場の扉を開いたスプリガンの少年とアスナの視線が重なると、全ての時間が止まったかのように、その場の空気が凍りつき、その空気とは対照的に二人の視線が熱く交わり合っていた

「・・・アスナ・・・アスナ!!」

「キリト君ツ!!」

ダキッ!!

「えっ!?!?」

「やっぱり・・・やっぱりそうだったんだ・・・よかったね・・・よかったねお兄ちゃん・・・やつと・・・やつと会えたんだね・・・」

まるで運命の再会を果たしたような熱い抱擁を交わす二人を見た上条は、目の前で何が起こっているのか分からず驚愕の表情を浮かべ、リーファの目からは次々に大粒の涙が溢れ始めた

「ずっと・・・現実で目覚めてからずっとアスナを探していたんだ・・・やつと・・・やつとまた会えた・・・もう・・・もう二度と君を離したりしない・・・!」
「うん・・・うん・・・!私もずっとキリト君を探してたの・・・諦めなくてよかった・・・また会えて本当に良かった・・・私ももうキリト君と離れたくない・・・!」

「当たり前だ・・・死んだって離すもんか・・・好きだ・・・大好きだ・・・アスナ・・・」

第18話 議論

「へえ…じゃあつまり今ここの人間関係を整理するとだ。リーファが呼んだS A Oに詳しい人つてのがこのキリトさんで、フレンドではあるけど実は自分のお兄さんで」

「うん」

「俺が昨日偶然出会ってこの場に連れてきたアスナがずっと探してたS A O時代の旦那さんもこのキリトさんで、キリトさんもずっとこの世界でアスナを探して飛び回っていたところ、これまた何の因果かリーファに呼び出された結果、ここでついに感動の再会を果たした…つてことか？」

「そうなるわね」

「なんでリーファがアスナの名前を聞いても分からなかったのかつてのは…キリトが誰かを探してA L Oを始めたのは知ってたけど、その名前と事情までは知らなかったから…と？」

「うん、そんな感じ」

「…改めて振り返るととんでもねえな。普通偶然が重なるに重なってそんな上手いこといくもんかね」

先ほどまで現状の理解が全く追いついていなかった上条だが、スプリガンの少年ことキリトを含めた各々からの説明を受け、やつとのことで現状を理解し、整理していた。しかし、改めて今自分の目の前の状況を認識すると、その奇跡とも言える人の繋がり方に感服を通り越して半ば呆れていた

「でもそう言うけど、上やん君がアスナさんとあたしに会わなきゃ、あたしとアスナさんの繋がりには出来なかったし、なおかつ上やん君がS A O生還者でS A Oの話をしなかったらお兄ちゃんはここに来る理由すらもなかったんだから、これは要するに上やん君がここにいる全員を繋げてくれたと言っても過言じゃないんだよ？」

「いやまあそりやそうかもしれませんがね…」

「そうだ、まだ自分から名乗っていなかったな。改めまして…リアルじやリーファの兄で、SAOではアスナと夫婦だったキリトだ。呼び捨てで呼んでくれて構わない。よろしく頼む」

「俺は上やんだ。説明された通りだが色々あってアスナとリーファと出会った。こちらこそよろしくなキリト。えーつとそれで…そのちっこい妖精さんの名前が…」

「ユイです！私はSAOのメインシステムであるカーディナルのメンタルヘルスカウンセリングプログラムのAIプログラムでした！このALOでは『プライベートピクシー』としてパパをナビゲートしています！」

「…おう！とりあえず今の自己紹介で上やんさんはユイちゃんのことを理屈じや理解できないことが理解できましたのことよ…ま、とりあえずよろしくな」

「はい！パパとママ共々お世話になります！上やんさん！」

「はは、まあ多分これからお世話になるのはこっちの方なんだけども…」

「そうだ。元はと言えばリーファから聞いてほしい話があるって聞いたんだが…SAOに関することなんだろう？一体どんな話なんだ？」

「私も気になります！」

「そ、そっか…お兄ちゃんとユイちゃんはまだ知らないのか…えーつと…上やん君説明よろしく…」

「…また俺が一から説明するんでせうか？」

「だって全部説明すると長いし」

「まあ仕方ないな。これは俺の問題だし、話を聞いてくれるだけでもありがたい訳だ。えーつとまずは…」

「…訳が分からないな…」

「やっぱりか…」

先ほどリーファとアスナにした説明と同じ話を一通りキリトとユイに話したのだが、キリトでさえもいくら頭を捻ろうが答えは出てこず、上条はガツクリと肩を落としていた

「ユイ、今の話を聞いて分かることやおかしいことはあつたか？」

「そうですね…そもそも基本的に全てがおかしいことなんですけど…このALLOがSAOのコピーサーバーであることは知っていました。それと上やんさん、少し失礼しますね」

「え？お、おう…」

そう言うとユイはスイッチと上条の方に寄り、彼のツンツン頭へ乗った。そして目を閉じて意識を集中すると、上条のデータをスキャンし始めた

「やっぱり…上やんさん、アイテムストレージの中にデータ不詳の謎のアイテムがいくつも入っていませんか？」

「え？あ、ああ。確かに入ってるぞ。最初見たときは何が何やら訳が分からなかったから消さずに今まで放置してたけど…」

「恐らくそのアイテムは、全てSAOの時に上やんさんが入手してストレージに入れていたアイテムで、ALLOにログインしたことでそのアイテムデータが破損したものです」

「えっ!? ってことは元々はこれ全部SAOのアイテムなのか!？」

「はい。ですが、ALLOの運営側のエラー検出プログラムに引っかかる前に、全て破棄してしまった方がいいです」

「そ、そっか…よし」

「アイテムを全て消去しますか？」

「…ぐっ…改めてこういうことを聞かれると勿体無い気がする…」

上条は自分のメニューのウインドウを操作し、アイテムストレージを開いて消去の手順を辿る。すると、最終確認のためのウインドウが表示され、つい決心が鈍って指先を引っ込めてしまう

「なーにモタモタしてんのよ上やん君。ほれっ！」

「へ？のわーっ!? なななっ!? ちよっ!？」

「OK」ピコンッ！

ウインドウを前にして悩む上条を見るなり、じれったくなくなったリーファが上条の手を取り、その指でOKボタンをタップした。そしてその瞬間を持って上条のアイテムストレージは完全にすっからかんになった

「これでいいんでしょユイちゃん？」

「はい。もう問題ありません」

「ううっ…：こうしなきゃいけないと分かっていることなんだが…：不幸だ…：」

「でも破損してたとはいえ、なんでSAOのアイテムがそのままアイテムストレージの中に残ってたんだ？」

「ああ、それなんだけど…：別に残ってるのはアイテムだけって訳じゃないんだ。スキルとかステータスとか…：その他にも俺のデータはほとんどSAOをプレイしてた当時のまんまなんだ」

「えっ!? 嘘!? なるほど…：それでビギナーなのに私と互角に渡り合える訳ね…：」

「このALOでの戦闘は当の本人の運動能力に依存するというのですが、実際に算出される攻撃のダメージ値は、正確には攻撃のスピード、武器のステータス、そして相手の防御力なども加味して決定されます。上やんさんの場合は極端に高い筋力ステータスや敏捷が攻撃の威力とスピードを補正しているのだと予測されます」

「えっと…：ちなみにその上やん君の敏捷と筋力のステータスって…：」

「まあ両方ほぼMAXだな」

「チートじゃん!? えー、いいなー。このゲーム初めて1年以上経つのにあたしなんてまだまだだよー…」

「いやまあそりやコツチも2年間ゲーム漬けにされてた訳で…なんだったらキリトやアスナだってSAOはそれぐらいのステータスになってたろ?」

「ま、まあそりやそうだが…俺はちゃんと初期値からこのゲーム始めたぞ?」

「私もよ」

「え?」

「俺の場合は政府の役人に掛け合ってユイのデータが残ってるナーヴギアからユイを復元して、アミュスファイアに移行させただけなんだ。俺も最初はナーヴギアでやろうと思ってたんだけど、妹…スグにそれを話したら止められてな。あえなくアミュスファイアを強制的に買わされたんだ。でも、SAOのセーブデータがそっくりそのまま引き継がれるなんてそんなの知らないぞ?」

「私はナーヴギアは政府の人に持って行かれちゃったから、アミュスファイアを買って一からALOを始めた感じかな?」

「考えられるとしたら…上やんが使ってたナーヴギアに保存されてたSAOのセーブデータがそのまま…つてとこか?」

「え?俺も別にナーヴギアでこのゲーム始めた訳じゃねえぞ?」

「…どうゆうことだユイ?」

「すいませんパパ。私もそこまで詳しくは分かりませんでした…ですがおそらく上やんさんのキャラクターデータについては、SAOとALOのセーブデータのフォーマットがほぼ同じであることが要因となつて、ALOのセーブデータにSAO時代の上やんさんのステータスがどこかからロードされてそのまま書きされた…ということだと思えます」

「なるほど…つまり、何らかの原因でナーヴギアにあるはずの俺のSAOのキャラクターデータがこのALOと結びついた…つてことか」「はい。そうなります」

「でも、それを解明できても私たちの世界と上やん君の世界のSAO生還者の数の違いは何も分からないよね？」

「ま、まあそれは……」

アスナがそう言うのと上条は言葉に詰まり、キリトもその件に関しては腕を組んでうなるばかりでまるで何も閃かないようだった。しかし、そんな中リーファがおそるおそる手を挙げた

「あ、あの……？」

「ん？どうしたリーファ？なんか分かったのか？」

「え、えーっと……分かったって訳じゃないんだけど……可能性の一つとして……というか……いやどうなのかなあ……」

「いや、遠慮せずにぜひ言ってくれスグ。今はどんな小さなことでも発言してくれた方が議論しやすい」

キリトがリーファのことをそう促すと、リーファは深く息を吐くと軽く咳払いをしてゆっくりと口を開いた

「え、えーっと……じゃあ言わせてもらうね？多分あり得ないとは思っただけど……その……上やん君の現実世界とあたしたちの現実世界って……その……」

「『並行世界』……ってことなんじゃないかな？」

第19話 並行世界

「ぼ、ぼられるわーるどお？なんだそりゃ？」

リーファの発言の突拍子のなさど、その言葉の意味がイマイチ掴めず、上条の頭の中は軽く混乱していた

「・・・なるほど：確かにまずあり得ないとは思うが：可能性としては捨てきれないな・・・」

「へ？」

「そうだね：むしろそう言ってくれた方がしつくり来るかも・・・」

「そうですね：そもそも上やんさんという存在が異質とも言えますし・・・」

「え、えっ？ちよつ、みんな並行世界ってなんのことか分かってんのか？」

自分だけが周りの空気からズレていると分かると、上条はみんなに並行世界とは何なのかと疑問を投げた

「え、えーつと：なんて言えばいいのかな：並行世界っていうのはつまり：あたしたちが今生きている現実の世界とは別の『あり得たかもしれないもう一つの世界』のことを言うの」

「・・・どゆこと？」

今度はいきなり話のスケールが世界単位になったということもあり、リーファに説明されても上条はその言葉の意味を理解できず、そのイメージが全く掴めていなかった

「つまりこういうことだよ。君は今、ある山道を歩いているとしよう。やがてその歩いている道が『右と左』の二手に分かれたとす

る。そうだったら上やんはどっちを選ぶ?」

「あ?世界がなんだのって言い出した後になんだって急にそんな心理テストみたいなこと…」

「いいから。右か左どっちだ?」

「ん〜:右:かな?」

「よし、今上やんは右を選んだ。だけどここで一旦時間を巻き戻してみよう。もし仮に、二手に分かれた道の左を選んでいたらどうなる?」

「どうなるって:そりやそんな時は左に進むんじゃないの?:…:あつ!」

「察しがついたみたいだな。そう、つまり並行世界ってのはまず、世界が一つしかないと捉えているとそこから抜け出せないんだ。でも、自分や世界のみんながありとあらゆる生活を送る中で、ありとあらゆる選択や行動によって世界が変わっていき、同じ時間の流れの中に複数の枝分かれした世界が存在してるって考えることもできる」

「そのいくつにも分かれた世界:こうなつてればこういう世界ができた。こういう世界もあったかもしれない。そういう複数の世界もあるかもしれない世界の一つ一つが…」

『並行世界』:ってことか:」

「その通り」

「今の私たちに置き換えるなら、学園都市という街が『ある世界』と『ない世界』。SAOで生き残った『全員が生還した世界』と『上やんさんを含めた2人だけが生還した世界』というように分類できます」

「付け加えると、SAOをプレイしていたプレイヤーのみんなもそれぞれの世界の人になっていていいな。俺たちのSAOに上やんやミコトさんがなくて、上やんのSAOには俺たちがいなかった。:まあ創始者の茅場みたいな例外はあるけどな」

「なるほど:確かにリーファが言った『あり得たかもしれないもう一つの世界』っていう表現がしっくりくるな」

「まあ:普通はそんなのあり得ない話だから言い渋ったんだけどね。だってこの並行世界の話を信じるってことになる、あたしたちに

とって上やん君は宇宙人も同然だよ?」

「う、宇宙人て…別の世界ってだけで同じ地球人だろ?」

「だが、平行世界ってのは別に地球だけじゃない。時間の流れが同じってだけで地球の周りの宇宙全体が違う過去を辿っていて、違う未来をこれから歩むと言ってもいい」

「…つまり何か?上やんさんたちの現状はさしてそういうSF系の映画と大差ない?」

「大差ないっていうか…もはやそんなあり得ないことが起こってる時点で映画に間違いないと思う」

「…マジか…今まで何回もあり得ないことにぶつかって大半のことじゃ驚かないつもりでいたが…今回の件は流星に開いた口が塞がらないな…」

並行世界というとんでもないスケールの話に、今まで学園都市で壮絶な日々を過ごしてきた上条でさえも今回の話には驚愕の色を隠せなかった。しかし、間髪入れずにアスナが新たに話題を切り出した

「でも、仮に私たちの生きている世界が並行世界だとしたら、完全に別の世界に生きていることになるわけでしょ?だったらどうして私たちはそもそもこのALOで出会ったの?」

「おそらく…本来枝分かれしているはずの私たちの世界において、偶然にも共通して存在する『ALOという仮想世界』に上やんさんだけが迷い込んでしまう形で繋がったのだと思います」

「それは…私たちの二つの世界はALOだけ繋がっているってことなの?ユイちゃん」

「断定はできませんが…上やんさんの現実世界にはきちんと『上やんさんの世界のALO』があるのだと推測されます。しかしどういう訳か上やんさんだけは『私たちの世界のALO』にログインしてしまっただ…ということだと思います」

「…でも、その原因はわからない…?」

「そうですね…申し訳ないですが…」

上条にそう聞かれるとユイは本来自分の役目であるサポートを十分にこなせなかったからか、シユンと落ち込んでしまった

「あーいや、気にしないでくれ。むしろここまで分かっただけでもかなり助かった。ありがとうな」

「まあそもそも住んでる現実世界が違うのにどうやってこっちのALOに迷い込むのかって話だからね…」

「でも言ってしまうえば、今までののは全部確証がある話じゃない。どこまでいっても机上の空論だ」

「なに、気にすんなよキリト。それに、何も分からなくても俺のやることは何一つとして変わらないさ」

そういうと上条は店の窓から、天へと向かってそびえ立つこの世界の中心の樹木へと目を向けた

「世界樹に目が覚めない人たちを救う鍵があるかもしれないから世界樹を指すって言ってたけど…本当にあの上になんかそんなものがあるの？だってそもそもここは上やん君の世界のALOじゃないんだよ？上やん君が探してる鍵があるとすればそれは上やん君の世界の方のALOなんじゃないの？」

「普通に考えたらそうかもな…だけど、今の俺にとっちゃこのALOが全てなんだ。それに、あの上にはまだ誰も辿り着いてないんだろう？だったらそれこそ何があるか分かんねえじゃねえか。何かあるか分かんねえからこそ確かめに行くんだ。実際に行つて確かめるまで、みんながそこに絶対いないってまだ言い切れないはずだ。その証拠に、何も分からないままこの世界に迷い込んだ俺がここにいらる」

「そ、そりゃそうかもしれないけど…」

「だから俺、行くよ。なんで俺だけが目覚めて、なんで俺だけがこの世界に迷い込んだのか、真実はなんなのか。みんなを救う鍵はどこにあ

るのか、あの樹の上に行けば全部…何もかも分かるはずだ」

そう言うと、上条は一人席を立ち、店の出口に向かって歩き始めた

「ちよ、ちよっと！ほ、本当に行くつもりなの!?一人じゃ無理だってあれほど言ったじゃない！」

「止めないでくれリーファ。無理かもしれないけども行かなくちやいけないんだ。じやなきや、俺は何も分からないままだし、誰も救えないままだ。そんなのは…もうたくさんだ…」

「上やん…君…」

「だから、ここから先は俺一人で行く。誰かをこれ以上巻き込む訳にはいかないし、みんなはもうこの世界に来た目的を果たしたんだ。手伝ってくれる義理はない。短い間だったけど力になってくれてありがとう。この恩はいつか必ず…」

「なに勘違いしてるんだよ、上やん」

「…へ？」

キリトが不意に上やんの言葉を遮った

第20話 新パーティー

「俺たちの目的は最初っから、世界樹を攻略することだろ？」

「・・・え？い、いやだってお前とアスナはお互いを探す為にALOを始めたんじゃない？」

「最優先の目的はもちろんそうさ。でもそれが達成できたからってALOをやめるつもりなんて毛頭ないよ。じゃないとアミユスフィアとALOのソフト買ったお金が勿体ないしな。アスナもそうだろ？」

「ええ、もちろん。むしろキリト君と会えた今は世界樹の攻略が一番の目的になったと言っただいいわ」

「私もパパとママと同じくです！」

呆氣にとられる上条に向けて、キリトとアスナとユイはそう宣言した

「お兄ちゃん・・・アスナさん・・・ユイちゃん・・・どう、上やん君？これで全員目的は同じだよ？」

「いや・・・どうって言われてもな・・・」

「それに、恩を返すなら俺たちの方さ上やん。さつきも言ったが、曲がりなりにも俺とアスナを引き会わせてくれたのは上やんがいたからなんだぜ？」

「いや・・・でもそれこそ本当に確証ないんだぞ？無駄足になる可能性だっけ否定できないぞ？」

「それこそ無駄足にかかる時間は少ない方がいいでしょ？上やん君は一刻も早くSAOから目覚めないみんなを助けなきゃいけないんだから。それだったら人数は多い方が世界樹を攻略できるのも早いんじゃない？」

「・・・ぬう・・・」

「一緒に行こうぜ上やん！」

「そうだよ上やん君！持ちっ持たれっだよ！」

「あたしに至っては最初に世界樹まで案内するって約束したでしょ！」

「いやそれは俺の事情を全部聞いて納得したら付いて来るって話だったはずでは…」

「今納得した！意地でも付いて行く！」

「んな横暴な…」

「私はいつだってパパとママと一緒にです！」

「…………どはあ…」

反論の悉くを打ち砕かれ、ついに弁解の余地がなくなった上条。みんなからひとしきり言葉をかけられた後、腕を組んで考え込むと、深くため息を吐いて言った

「ぬあああああああ!!分かったよこの頑固者ども!!だったらとことん俺の冒険に付き合ってもらおうぜ!?後悔すんなよ!」

「「もちろん(です)!!」」

こうして満場一致で世界樹攻略という目的が定まったことで、上条をリーダーとしたパーティー申請がなされ全員がなんの躊躇いもなくその申請を受けるのかと思っただが…

「あつーあ…ちよつと待って…」

「ん?どうしたんだスグ?」

リーファだけがパーティー登録申請のOKボタンを前にして、一度手を引つ込めた。そしてそのウィンドウを一旦脇によけると、自分のメニューを呼び出して今参加しているパーティーの詳細を示すウィンドウを開いた

「このパーティーを離脱しますか?」

「「??」」

「んむむ…パーティーに参加するのは都合のいい時だけでいつでも抜けていいって約束だったし…いいよね！えいっ！」

「OK」へピコンッ！

上条たちが不思議そうに見つめる中、リーファは数秒悩んだ後に今参加しているパーティーを離脱するか問うウインドウのOKボタンを押し、今自分が参加していたパーティーを脱退した

「え？勝手に抜けちゃっていいのかスグ？それ今まで参加してたパーティーだろ？」

「いいのいいの！そういう契約の元に参加したパーティーだったし、お兄ちゃんや上やん君のパーティーの方が絶対面白いと思うし！」

そう言うリーファは脇に置いておいた上条がリーダーのパーティー登録申請のウインドウを目の前に戻し、OKボタンを押し、無事にパーティーメンバーが「上条、キリト、アスナ、リーファ」の4人となった

「よし、これで一先ずはOKだな。次は冒険のための買い出しだ！」

「「おーーー!!」」

こうして4人は酒場のドアを開いて酒場を出ると、これからの冒険の準備を整えるためにスイルベーンの市場へとくりだした

—————

「…なあ、気づいてるか？どうやらついにこの世界に『幻想殺し』が来たようだぜ？」

「貴様に言われずとも気づいているさ…だが、『槍』の完成に『アレ』はもう既に必要ない」

何かの世界の果てのどこかで、誰かが話していた。もはやその場を

世界と捉えるべきなのかは分からない。あまりにも異質で、そこにいる『彼ら』の存在は異次元の域だった

「うにやー、てゆーかそろそろこのバカでかい樹の上にも飽き飽きしてきたんですけどー…」

「そいつにや正直俺も同感だな…少しぐらいは外で羽を伸ばしたいってもんだ…」

「愚痴を零す暇があるなら槍の完成を急げよ『黒小人』。槍さえ完成すればこの樹の上で退屈することもない」

「なあ、てことは『マリアン』は別として俺はこっから出てもいいわけだよな？」

「…そんな身勝手な言動が許されるとも？もしもその気があるのならその腕を切り落とされるぐらいの覚悟があるんだろうな？『雷神』」

「まあ待て待て神様さんよ。確かに幻想殺しは槍には必要のないことかもしれないし、もはや今の段階じゃなーんの足しにもならんさ。だが、アレは今のアンタの思想とは相容れないモンだし、何より邪魔でしかないだろ？」

「………」

「だろお？アレをほつといて万が一にもここに辿り着くようなことがありや、脅威にもなり得るだろ？それに下手すりゃアンタの世界の邪魔になりかねない。だったら芽は早いうちに摘んどくのが定石じゃねーのか？」

「とかかこつけて戦いだけじゃないのか？アンタは」

「生憎、戦闘狂なもんでな。経験値は多い方がいい」

「…いいだろう、今回は特別に外出を許す」

「恩に着る。そんじゃ、ぼちぼち行つてくるぜ。『オーデーオン』」

こうして動き出した世界の裏でも強大な何かが蠢き出していた。彼らという存在とその思惑を、まだ上条達は知らない…

第21話 旅立ちに向けて

酒場を出た上条一行は世界樹攻略への長旅を想定し、スイルベーン
の市街地のショップで消費アイテムなどを購入してからこの街を出
ようと決めた

「さて…じゃあまず上やんの装備だな。その装備じゃまず世界樹攻
略は無理だ」

「だろうな…ステータスはチート並でも装備はバリバリの初期装備だ
からな…」

「そういえば上やん君いくらぐらいお金持ってるの？」

「え？えーつと…」

アスナにそう聞かれ上条はウィンドウを呼び出し、自分のステータ
スを確認し、複数ある項目から自分の所持金の項目を探した

「んー…この『ユルド』ってやつがそうか？」

「そ。いくら？確か上やん君、あたしのこと助けてくれた時にサラマ
ンダーの人二人ぐらい倒してくれたから少しは溜まってると思うけ
ど…」

リーファに言われ自分のウィンドウに表示されているユルドの金
額に目を凝らし、その全額の確認の為に上条は指で数の位を数えた

「えーつと…いち、じゅう、ひやく、せん、まん…2713万623
9ユルド…だな」

「2713万ユルド?!?!」

上条の口から伝えられた金額を聞くなり、他の3人が口を揃えて同
じ金額を復唱し驚愕しながら上条の顔を見た。

3人の大声に周りのシルフ達は一体何事かと4人へと視線を向けていた

「え〜つと…ひよつとしなくてもこの金額って初期金額よりも大分多い?」

「大分どころじゃないわよ!2000万ユルドもあれば一等地にちよつとした城が建つわよ!」

「お、おいバカ!スグ!そんなこと大声で言ったら…!」

ザワザワザワザワ…

「おい聞いたか?2000万ユルドだってよ?」
「だったらアイツを今ここでPKすれば…」
「よせよ、聞こえるって…」

ヒソヒソヒソヒソ…

「言わんこつちやない…」

「あ…ご、ごめん…」

「ひ、一先ず武器屋に向かってダツシユ…かな?」

「そ、そうだな…買い出しは必要だし…それが一番か…」

「よし…走れっ!」

ダダダダダダダツツ
!!!!!!

周りのシルフ達が上条の所持金を聞きざわつき始めてしまった為、4人はその場のシルフ達の目を振り切るように全速力で武器屋へと駆け出した

—————

「はあはあはあ…不幸だ…」

「ぜえぜえぜえ…2000万ユルドも持つてるやつどこが不幸だ…むしろ巻き込まれてる俺たちの方が不幸だろ…」

「はあはあはあ…でもやつぱりアイテムとかステータスが引き継がれてたみたい、上やん君がSAOにいた頃の所持金が引き継がれてた

のかな？」

「はあはあはあ…ど、どうかな…S A Oでの通貨はユルドじゃなくて
コルだったし…いやでも通貨が変わっただけで金額の数字は変わら
なかったのかな…ユイちゃん何か分かる？」

ピュン！

アスナが呼びかけるとキリトの胸ポケットから小さなプレイヤー
トピックシーが勢いよく飛び出した

「はいっ！そうですね…おそらくは上やんさんがS A Oプレイ時の最
後のコルの所持金額がそのままユルドに変換されただけだと思います
す」

「げほっげほっ…そ、そりやありがたい話だな…それなら確かに不幸
とか言っちゃダメだな…」

「ま、とりあえず金がある分にはいいだろ。ここが武器屋だ。さ、入ろ
う」

カランカラン！

4人は武器屋に入ると、上条は各々のアドバイスを聞きながらまずは
全身を包む防具を揃えた。結局S A O時代と同じで防御力だけを
重視した鎧系の防具ではなく、敏捷を殺さない洋服系の防具を選択し
た

「こんなもんか…どうだ？」

「うん。似合ってると思うよ。ねえリーファちゃん？」

「うん！ゴ○ブリっぽさが増して似合ってると思うよ！」

「それは似合ってるって言わないと思うんでせうが…」

「ま、まあスプリガンである以上防具の着色が黒になるのは仕方ない
さ…俺もスプリガンだけ…」

「まあしょうがねえな…さて、お次は盾だな」

「へえ…上やん君は盾が欲しいタイプなんだ」

「どうする？盾だったら色々なタイプの形があるけど…」

「円形一択だな」

「随分なこだわりだな？」

「まあ俺の戦闘スタイルだと円形が一番性に合うんだよ」

「え？別に上やん君ただの片手剣と盾装備の標準型でしょ？だったら戦闘スタイルも何もないし盾の形状にそこまで拘る必要はないんじゃない？あ、もしかして実はランス使いとか？あれ？でもランス使いなら円形はむしろ不向きなんじゃ…」

「あー…まあ追い追い説明するよ。あ、すみません円形の盾で一番いいやつ下さい」

「はい、円形の盾ですとこちらになりますね。こちら80万ユルドになります」

「はいどうぞ」

「毎度ありがとうございます」

NPCの武器屋の店員に盾を買い求めると、高額のユルドを請求されたが、上条は持ち前の所持金でもって何の躊躇いもなく会計を済ませた

「まだ各パーツの防具を揃えて盾を買っただけなのにもう見慣れたわね…あの大金を躊躇なく使うあの大盤振る舞いっぷり…」

「いいなあ上やん…俺もSAOの時はそんなぐらいい稼いでたのに…」

「さて、そんなじゃ消費アイテム買いに行くか」

「え!?ちよつ、何言ってるの上やん君!?まだ片手剣にしろ何にしろ何も武器を買ってないじゃない!?!」

そう言って武器屋から踵を返し、雑貨屋へ向かおうとした上条。しかし、そんな上条の姿を見て、一番大切な武器をまだ購入していないのに店を出ようとした上条の肩をアスナが掴んで止めた

「あ、あー…まあいいんだよ。俺にとって武器なんて飾りにしかなん

ないから初期のまんまで。それに多分金の無駄になるから」

「何その理論?」

「いやまあアスナとはちゃんと剣で戦ってたから分からんだろうけど…その点リーファは見てただろ?俺が昨日の赤い連中倒した時」

「え…?そ、そう言えば片手剣なんて一回も抜かずに確かに素手で…ってはあ!まさか上やん君の戦闘スタイルって盾と素手?!?!」

「ま、そういうことだな」

「べ、別ゲームにもほどがあるな…」

「あ、そうだ。リーファ、後で俺とデュエルしてくれよ、色々と試したいことがあるんだ。そんな時に俺が素手で戦う理由を教えるよ」

「え?ま、まあ別にいいけど…なんであたし?」

「?いやなんでもなにもリーファがいいからだよ」

「は、はああああああつ!?!/!/」

(おー、スグも上やんも中々隅に置いとけないな)

「じゃ、決まりだな。よし、消費アイテム買いに行こう。回復系アイテムは上やんさんにとっては必須アイテムだからな」

「いや別に上やん君じゃなくても必須だと思っけど…」

上条の言い方も多少問題があつたが、様々な勘違いを引き起こした末、二人のデュエルを後に控え、一行は市場のアイテムショップに立ち寄ると体力回復アイテムや魔力回復アイテムや蘇生アイテムなどを買い込み、ようやく旅の準備を全て整えたのだった

第22話 剣と拳

「よし、じゃあこの辺でいいか」
「そうね」

装備やアイテムなどの買い出しを終えた上条一行は、リーファと上条のデュエルの為にスイルベーンを出て少し歩いたところにある丘の上に来ていた

「でも、なんでわざわざ一旦スイルベーンを出る必要があったんだ？」
「スイルベーンはシルフの領だから基本は他種族から攻撃される分にはシルフのHPは減らない：って話したよね？でもデュエルなら話は別。ちゃんと他種族が相手でも領土内のシルフのHPは減る」
「だったらなおさらなんで？」

「だってあんなにいっぱい建物がある場所でデュエルしたら満足に飛べないでしょ？」

「それもそうか」

「じゃ、お互い逆向きに10歩歩いたところからスタートね。あたしからデュエル申請送るから」
「了解」

お互いに確認を取るとリーファと上条は背を向け合い、指定したスタート位置に向けて歩き出した

「さて、お二人さんのお手並み拝見だな」
「パパー！私も見たいですー！」

「あ、悪い悪い。ほら、出ておいでユイ」
「ピューンッー！」

「ふうー…ありがとうございます。パパー！」

「ほら、ママの膝の上においで？ユイちゃん」

「ありがとうございます！ママ！」

「なあアスナ、この中で俺とユイだけなんだかんだで上やんの戦ってるところを見てないんだが、やっぱり強いのか？」

「どうかなあ…私が戦った時の上やん君は盾無しだったけど片手剣で戦ってたし…私も上やん君が本当は素手で戦うって知ったの武器屋が初めてだったから…でも、私と片手剣で戦った時は初見で私のレイピアの連撃をはたき落したわ」

「へえ…流石は並行世界かもしれないとは言え元S A O攻略組ってとこだな…楽しみだぜ…」

キリト一家は上条とリーファのデュエルの邪魔になるといけないと思い、丘の上の芝生に飛んでそこに腰掛け、二人のデュエルを観戦しようとしていた

「でも本当に大丈夫ー？あたしこれでもリアルじゃ剣道やってて全中ベスト8の実力者だよー？少しは手加減した方がいいー？」

互いに10歩ずつ距離を取ってからリーファが上条にそう呼びかけた

「へー、リーファちゃんってリアルじゃ剣道やってるのキリト君？」

「ああ。全中ベスト8なだけあってかなり強いんだぞ。俺もS A Oから戻った後、リアルでリハビリがてらスグと手合わせしたんだけど歯が立たなかったよ」

「へー、そんなに強いんだ…」

「なーにを言いやがりますかー。上やんさんだって仮にもS A Oクリアした身ですぞ？リアルも合わせたら潜り抜けた修羅場の数は数えきれませんのことよ？」

リーファの心配や手加減など無用だと言わんばかりに上条は詳細

には言わないまでも、自分のこれまでの武勇伝を誇らしげに語った

「じゃあお言葉に甘えて本気でいくわよー？ 思いつきりぶった切られ
ても後で恨んだりしないでねー？」

「デュエル申請を受諾しますか？」

対戦者：Leafa

対戦形式：1vs1

「そつちこそー！ 俺も思いつきりぶん殴るけど後で怒んなよー？」

「出来るものならどうぞー？」

「あんにやろう…歳上を舐めてくれやがって…目にモノ見せてくれよ
うじゃありませんか」

そう言うとお上条はデュエル申請のウィンドウに表示されたOKボ
タンを押し、どちらかのHPが0になった時点で決着する「完全決着
モード」を選択すると、デュエル開始までのカウントダウンが始まっ
た

（へえ…完全決着モードで申し込んでくるとはね…面白いじゃない…
！）

（…さて、この世界での俺の右手がどんなもんなのか確かめないと
な…目標はリーファに魔法を使わせてそれに右手で触れることだ…）

それぞれの思惑を胸に、リーファは鞘から剣を抜き、剣道の基本で
ある攻防にバランスの取れた中段構えを取る。対する上条は背負っ
た盾を左手に持ち自分の前で構え、右手の拳に力を込めた

「3…2…1…Start！」

「ツ!!やあああああああああああああああああつ
!!!!」

ガギイインツ!!!

スタートの合図と同時にリーファが翅で低空飛行し、弾丸のように上条に突撃したが、上条はそれを盾で防いだ

「最初っからかつ飛んでくるとはな…飛行に自信があるって言うだけのことはあるぜ…」

「自信があるのは飛行だけじゃないわ…よっ!!」

ガッ!ギイン!ギンツ!

「でいっ!めん!めえーんっ!」

剣道仕込みの掛け声と打ち込みで上条へと斬りかかるリーファ。しかし、上条は焦ることなく持ち前の反射神経とSAOで培った防御術を駆使し、リーファの斬撃を確実にいなしていた

「えいっ!はああっ!やあああっ!」

「おおく…やるなあ上やん…ここまでスグの剣を一回も喰らってないどころかカスリもしてないぞ」

「あの鉄壁っぷり…まるで『団長』ね…」

「俺もそう思ってたところだよ…正直あの固さは俺でも通るかどうか…そういう点では『あの男』を彷彿とさせずにはいられないぜ…」

「えい!くっ!めえーんっ!!」

「ほらどうしたリーファ!?こんな剣筋じゃ俺には届かないぜ!」

(くっっ…!固すぎっ!このままじゃ埒が明かない!だったら!)

バツ!…スタツ!

「お?急にどうしたリーファ?」

「上やん君の防御の腕前は分かった。悔しいけど、あたしから攻めるだけじゃその守りは崩せない。だから今度はそっちから打ってきなさい!」

リーファは攻めてばかりでは上条の盾を崩すことは出来ないと観

念し、真後ろに飛んで後退し距離を取ると、上条に向けてそう宣言し、地に足を降ろし再び中段構えで剣を構え直した

「す、すごいな上やんは…スグの方から早めに見切りをつけて後退したとは言え…スグの攻撃をガードし切るなんて…」

「ほうほう…なるほど…では失礼して…」

すると上条は腰を落とし、右手を下ろし、盾を着けている左手を振りかぶった。その姿はまるで、さながら野球の投手が「アンダーロー」でボールを投げる予備動作のようだった

「…？ねえ、キリト君。あんな構え見たことある？」

「いや、剣道でもあんなのではないし、おそらくは上やんの自己流だろ。まったく…とことん面白いヤツだ。次は一体なにが飛び出すんだ…？」

（来るなら来なさい…！どんな攻撃が来たとしても拳の動きなんて所詮は直線的なもの…それを避けて一太刀入れるなんて造作もないこと…！）

「ふんっ!!!」

ブオンツ!!シユルルル!!!

「…？へ？なんで盾!?キヤアツ!」

シユルルルル……………

上条は振りかぶった自分の左手に着けた盾を思いっきり投げ飛ばした。するとその盾は空気を切りながらリーファ目がけて真っ直ぐに飛んでいき、彼女の頬を掠め、そのまま通り過ぎていった

「わー!上やんさんすごいです!」

「じ、自分の盾を投げ飛ばして攻撃に使うなんて…」

「おいおいフリスビーかよ…仮にもアイツの盾そんなに軽くないぞ…一体どれだけ筋力あるんだ…」

上条の常軌を逸した戦闘スタイルに驚くユイとは対照的に、アスナとキリトはもはや驚愕を通り越して半ば呆れ果てていた

「本つ当になんてヤツなの!?!でもこんなの大してダメージになんてならないし虚仮威しにしか…!」

「そ。こんなのは所詮、ただの虚仮威しだ」
「なっ!?!」

上条が投擲した盾に不意を突かれ、リーファはすっきり気を取られていた。その隙を見逃さず、上条は一瞬で彼女との間合いを詰めていた

「くっ!!」

「遅いっ!!」

ドゴオオオオオオツ!!

「……カハツ……!」

リーファが上条から距離を取ろうとするが、その前に彼の右手による渾身のアッパーカットが炸裂した。リーファのHPが減少し、強烈に視界を揺らす衝撃に身体が宙を泳いだ

「お、女の子に本気のアッパーカットなんて…ゲームだしデュエルで仕方ないとは言え、あまり見ていて気分が良いものじゃないわね…」

「か、上やんのやつ…嫁入り前の可愛い妹を…後で覚えとけ…」

「…ひよつとしてパパってシスコンさんなんですか?」

「な、なんてこと言うんだユイ!?!誤解だ誤解!別に俺はシスコンじゃない!大体自分の妹が男に殴られて何も思わない兄の方がどうかしてると思うぞ!?!」

「そ、それもそうですね…」

「ツ!まだまだあつ!・e i r s l ・ t a …!」

リーファは宙に浮いた自分の身体を翹を広げることによってその体勢を整えた。そして剣を握っていない左手を前に突き出すと、上条へ狙いを定め魔法の呪文を始め、彼女の身体の周囲を詠唱された光の文字が覆った

「喰らええっ!!」

(来るかっ!?!攻撃魔法!!)

詠唱が終わり、魔法を発動したリーファの左手から無数の風の刃が吹き荒れ、上条へと襲い掛かった。そして上条は待ち侘びたと言わんばかりに魔法の風刃へと右手を伸ばした

第23話 幻想殺し

「・e i r s l ・ t a f i m m g r ? n n v i n d r !」

ビュオオオオオツツツ!!!

(もらった！今の上やん君の手には身を守る盾もない！それにこの間合いで風魔法のスピード！どうやったって避けられるハズが…！)

「ツ!!!」

パキイイイイン!!!

「……え？」

(……よし。回復魔法も俺には効果なかったしそれが普通だと思ってたけど、攻撃魔法を相手にすんならこんな便利なモンはないな)

リーファが放った無数の風の刃は、上条が目の前に突き出した右手に当たった瞬間、跡形もなく崩れ去った。故に

彼のHPはちつとも減少せず、リーファの唱えた魔法はなんの意味も成さなかった

「……え？今…上やん君が何かやったの？私にはリーファちゃんの魔法が上やん君の右手に当たった瞬間に打ち消されたように見えたけど…」

「あ、ああ…俺にもそう見えた…でもそんなこと本当にあり得るのか？」

「う、嘘…一体なんで…」

魔法がかき消えたという事実の上条以外の3人は驚かずにはいらなかった。なにしろ、この世界を生きる上での醍醐味とまで言われている魔法が右手に触れるだけであっさり無力化されたのだから

シユルルルル…ガシツ！

「へ？？」

「いやー、ありがとなりリーファ。おかげで試したかったことが全部確かめられたよ」

各々が呆気にとられている間に、上条がリーファに向けて投げ飛ばした盾は弧を描いて持ち主の元へとブーメランのように戻ってきていた。その盾を上条は左手でしっかりとキャッチし、また左手にはめ直した

「リーファも結構やるなあ。剣道全国ベスト8の剣術もさることながら、最後の魔法は流石に右手がなけりや正直やばかったぜ」

「そ、そりやどうも…」

「でも、今回はこれでOKだ。元々はそのつもりだったしな。また今度本気でやり合おうぜ。リザイン！」

「WINNER Leafa!」

そう言うの上条はデュエルで自らの負けを認める「リザイン」を言い、デュエルの勝者を告げるWINNER表示が両者の前に現れ、リーファの勝利を告げた

「わ、わーい勝ったー…ってそんな訳いくか！ 100歩譲ってリザインしたのはいいとして…何よさっきの!? 一体どうやったの?」

「あー、盾投げたやつか? あれ最初はまあ苦労したんだよ…全然狙いもマトモに定んなくてよく自分の狙い通りに投げられるようになるのに半年かかって、そっから何にも阻まれさえしなけりやブーメランみたく戻って来るようにマスターするのに1年…いやー長かった長かつt…」

「それも驚いたけどそうじゃなくて!最後のあたしの魔法をどうやって防いだかって聞いているの!!」

『『幻想殺し』だよ』

「…い、いまじんぶれいか?」

「そ。俺の右手だけに宿った俺だけの固有スキル：まあ早い話がSAO時代に使ってたユニークスキルだ」

「・・・どゆこと?」

「おーい！リーフアー！上やーん！」

デュエルを終えた2人の元へと離れた場所で観戦していたキリト一家が駆け寄ってきた

「2人ともお疲れ様！」

「おう、サンキュー。アスナ」

「サンキュー・・・じゃありません！ちゃんと説明しなさい！」

「まあそれが普通だよな：SAOやってたキリトとアスナなら分かるだろう？ユニークスキルってヤツが」

「あ、ああ。俺もそのユニークスキル使いだったから一応な・・・」

「え！本当かよ!?!どんなユニークスキルだったんだ!?!」

「えーつと・・・二刀流って言って・・・片手剣を両手に装備して戦えるようになるヤツだけど・・・」

「俺らの方のSAOにはなかったヤツだな・・・でもいいなあ・・・なんだって俺はこんな地味なヤツで・・・」

「人のなんてどうだっていいでしょ！魔法が効かないスキルだって不思議でしようがないわよ！」

「正確には『効かない』んじゃないかって『打ち消す』んだけどな。それと補足するなら『魔法』と『スキル』だ。一応右手限定で攻撃力も上がってる。だから俺の場合は武器を装備するよりも素手で殴った方が強い」

「つまり、魔法とスキルならありとあらゆるものが無効にできるのか?」

「まあ右手で触れればな。他にSAOじゃ街中みたいな安全圏内でも相手を殴ったり、俺の右手が相手に触れてる間に他の誰かが相手に攻撃すればHPを減らせる。でも効果のある範囲は俺の身体全体じゃなくて右手から先だけなんだ」

「狭っ!？」

「だから身体の右手以外の部分に攻撃が来たら防げない。オマケに魔法がないSAOで無効化出来るのなんてスキルだけだ。だから向このスキルなんて無効化して役に立つのはブレスとかの遠距離攻撃系スキルだけで、ソードスキルはスキルの効果を打ち消すだけで剣自体は消えないからそのまま自分に襲いかかってくる」

「じゃ、弱点だらけだな…」

「それで上やん君の戦闘スタイルは盾に素手で、盾を相手に投げたり相手が普通じゃ考えない戦法なんだね」

「まあSAO時代は対人戦なんてほとんどやんなかったけど、ぶん投げた盾でモンスターがノックバックして隙だらけになったところをぶん殴るってのはよくやった戦法だったな」

「…でもそれ言っちゃえばめっちゃめっちゃ狩りの効率悪いよね」

「まあ上やんさんの場合は狩りに出掛けてもモンスターのポップ率が異様に低いから効率なんてあったモンじゃなかったけどな」

「え？SAOでは倒したモンスターがまたポップするのは確率ではなく、経過時間で一定の数出てくるはずですが…」

「それがこの右手はそういうシステムすらも超越するレベルで上やんさんから運気を奪っていつてるんだなこれが。おかげで毎日不幸の連続だ」

「い、今の上やんの現状を考慮するなら笑えないな…」

上条の幻想殺しの特性を正しく理解した上でその弱点の多さや理不尽な仕様に同情と憐れみの目を向ける4人。当の上条でさえも、もうそんな目で見られるのは慣れっこなのでそこまで深く言及はしなかった

「まあとりあえずこれでここでやりたい事は全部終わったんだ。HP回復したら世界樹に向けて出発しようぜ」

「そうね。じゃあ出発の為に一旦スイルベーンの中央の1番高い塔に戻るわよ」

「え？なんでだよ？わざわざ塔に戻んなくてもこっつから飛べばいいじゃねえか」

「長距離を飛ぶなら普通は塔のてっぺんから飛ぶんだよ。飛距離が稼げるからな」

「なるほど…」

「さー！そういうことならボサツとしてないで行きましょう！夜までに森は抜けておきたいし！」

「「おーおー!!!」」

こうして上条一行は新たな旅立ちの為、スイルベーンへと飛び立った

第24話 内乱

「さて、着いたわね」

「じゃあ早速中に入って上までいこうぜ」

スイルベーンへと戻った上条一行は、世界樹攻略へ向けた出発の場となるスイルベーンの中央にある一番高い塔の前に来ており、そのまま中へと入っていった

「あれ？てっぺんまで登るって聞いたから階段しかないような建物だと思ってたけど、結構中はシルフの人達で賑わってたんだな」

「まあ、これだけ立派な建物をただ出発の為だけの物にしちゃうのも勿体ないからね。ほら、あそこのエレベーターを使えば一発でてっぺんに…」

「リーファ!!」

「?リーファ、誰か呼んでるぞ?」

「え?...ツ!?シングルド…」

リーファの名を呼ぶ声の方へと振り向くと、3人組のシルフの男性がおり、その3人の中心に立つ男はリーファからシングルドと呼ばれていた

「パーティーからお前の名前が消えていてもしやとは思ったが…まさかパーティーを抜ける気なのか?リーファ」

「...うん。まあね」

「残りのメンバーに迷惑がかかるとは思わないのか?」

「パーティーに参加するのは都合のいい時だけで、いつでも抜けていって約束だったでしょ?」

「だがお前は既に俺のパーティーの一員として名が通っている。理由もなく抜ければ、こちらのメンツに関わる」

「ッ……」

以前自分が告げられた話と内容が違う上に、身勝手な言い分と理不尽な都合の身の上話に思わず表情を曇らせるリーファだったが、そんなリーファとシグルドの間に上条とキリトが割って入り、リーファの隣にアスナが寄ると、その身を案じさせるように彼女の肩に手を乗せた

「大丈夫よりリーファちゃん。あんな人の言うことなんて聞く必要ないわ」

「あ、アスナさん……」

「……何だ貴様ら？ ウンディーネとスプリガンが一体なんの用だ？ 俺は今大切なパーティーメンバーと話をしていたんだ。そこを退いてもらおうか」

「仲間はアイテムじゃないぜ？」

「……なんだと？」

「あらあら、そんな簡単な言葉の意味も分からないんでせうか？ 他のプレイヤーをアンタの大事な剣や鎧みたいに、装備にロックしておくことは出来ないって意味で言ったんでございますのことよ？」

険しい声と口調で上条とキリトの2人に退けと言ったシグルドに向けて呆れたようにキリトと上条は言った

「お兄ちゃん……上やん君……」

「貴様らッ……！ クズ漁りのスプリガン風情がつけあがるな！ どうせ領地を追放された『レネゲイド』だろうが！」

「失礼なこと言わないで！ キリト君と上やん君はあたしの大切な新しいパーティーメンバーよ！」

「なっ!? リーファ！ よもやそんな他種族共と組むとは……まさかお前もこの領地を棄ててレネゲイドになる気なのか!？」

「……ええ、そうよ。あたし、ここを出るわ！」

声を荒げて問いかけるシグルドに向けて、多少戸惑いながら言葉の間こそ空いてしまったとはいえ、リーファは真っ直ぐな眼差しと声でそう答えた

「ッ！小虫が這い回るぐらいならば捨て置こうかと思ったが：泥棒の真似事とは調子に乗りすぎたな！ノコノコと他種族の領地に入ってくるからには切られても文句は言わんだろうな!？」

「・・・はあ~~~~~」

とうとう堪忍袋の緒が切れたシグルドは腰に据えた鞘から剣を抜き、その刃を上条とキリトに向けるが、それを見たキリトは呆れたようにため息を吐いた

「！このっ…!!」

「お？なんだ？闘るか？」

「無論！」

「ちよっ！今はヤバイっすよシグさん！こんな人目のつくところで、無抵抗のプレイヤーをK i l l したら…」

「ッ!!」

ザワザワザワザワ…………

「…チツ、精々外では裏切り者らしく逃げ隠れることだなりーファ。今俺を裏切れば、近いうちに必ず後悔することになるぞ」

「・・・そうかよ」

ビュンツ!!!

「ならそっちこそ、最初に俺らをぶった切っておかなかったことを後悔すんなよ？」

「なっ?!?」

バツキイイイイイ!!!!!!

「ぎゃあああああああ!!?!?」

戦闘態勢を解こうと剣を鞘に戻そうとするシグルドなどお構いなしに、上条が一瞬で彼の正面へ移動すると、シグルドの顔面に渾身の右ストレートが突き刺さった。思わぬ一撃に堪らずシグルドはゆうに3.4メートル以上ぶっ飛ばされた

「し、シグさん!？」

「や、野郎本気で……!」

「……いいさ。100歩譲って、俺もスプリガンなのにシルフ領を我が物顔で歩いている非はある。俺を馬鹿にするなり罵倒するなりは、別にそっちの自由でいいさ」

「クソツ……このゴキブリ風情が……他種族ではこちらのHPを減らせまいと大目に見てやろうと思ったが……そちらがその気ならば仕方がない……ん？一体なんだこれは？俺のHPが減っている……だと!?バカな!?ここはシルフ領だぞ!?俺が貴様のHPを減らすことは出来ても、貴様が俺のHPを減らすことは不可能なハズ……そもそも攻撃することさえ……!」

「でもな……仮にもお前の仲間だったリーファを……今の俺のかけがえのない仲間のリーファを傷つけることだけは許さねえぞ!!!」

「なるほど……確かにこの場で俺たちスプリガンは攻撃できないが、上やんの場合そもそも攻撃する武器がない上、加えてあの右手だ。SAOじゃ圏内でHPが減らせる訳だが、さしずめこの世界じゃ『中立域も種族領も関係なしにHPを減らせる』訳か」

「だ、黙って聞いておけば……勝手なことを抜かしおって……俺はいずれこの種族を虐げる男だぞおおお!!!」

ブオンツ!!!

上条の拳でぶっ飛ばされ倒れていたシグルドが立ち上がると、その剣を大きく振りかぶり、上条に向かって振り下ろした

「いいぜ……それでもテメエがリーファを自分に縛りつけて……言いなり

に出来ると思ってるなら…」

「死ねええええええええ!!!」

「まずはテメエのその身勝手な幻想をぶち殺す!!!」

ドゴオオオオオオオオオオオ!!!

「……がつ……!」

シグルドの剣筋を見切り、いとも簡単にその刃をかわした上条はもう一度シグルドの顔面にありつたけの力を込めた右の拳を叩き込んだ。たちまちシグルドのHPは底をつき、その身体が足の先からゆっくりと緑の炎に変わり始めた

「……覚え……ている……すぐに……貴様を……殺しに……サラ……ま……ん……」

ボウツ!!!

シグルドは消える直前に何かを呟いていたが、全てを語り終えるまでにリメンライト化し、その口から全てが語られることはなかった

「う、嘘だろ……本当にシグさんが……」

「い、いやその前にどうやって他種族の領地でPKなんて……!」

「で?…どうする?お前らも一緒に燃え尽きるか?」

「ひいっ!」

「やめといた方がいいんじゃないか?無抵抗の俺やアスナに剣を向けて周囲の反感を買うのはそっちの勝手だが、唯一抵抗できる彼に立ち向かったところで、殴られまくって顔面モザイクアートになるオチは目に見えてるぜ?」

「し……失礼しましたあ……!!!」

ピュ~~~~ン!!!

まるでギャグ漫画やギャグアニメのワンシーンのようにシグルドの部下の2人は一目散に塔を飛び出し、上条達の前から去っていった

「おととい来やがれバアー！カアー！！！」

「いや上やん、何もそこまでギャグマンガ調にしなくていいぞ…」

パチパチパチパチパチパチ
!!!!

「お？」

「カツコよかったぞー！」「スカツとしたぞー！」「素敵ー！」「お前達はシルフの誇りだー！」「ヒューヒュー！」

パチパチパチパチパチパチ
!!!!

「あ、あははは…こりやちよつと目立ち過ぎたな…」

「もう！上やん君があそこまで派手に暴れるからでしよ……とりあえず、私たちがここに居続けてもこの騒ぎは止まないでしょうし、早いところエレベーターに乗って上に行きましょう？」

「そうだな。そうしよう」

絶するリーファ。すると、そんな二人を遠くから見ているキリト夫妻が耳打ちで話し合っていた

「ねえねえキリト君、あの2人なんだかい感じじゃない?」

「そうだな、まあスグのあの反応から見ると、スグが多少なりとも上やんを好意的に想ってるのは確実だろうな」

「でも、肝心の上やん君は全く気づいてなさそうだね。どこかの誰かさんと同じで」

「ど、どうもすいません…」

「でもいいなありーファちゃん：私もまた誰かを好きになったばかりの初々しい気分味わってみたいなあ…」

「・・・その気分を味わいたいからって浮気はしないでくれよ?」

「ママ! 浮気はダメです! ママにはパパしかいません!」

「ち、違うわよ! そういう意味じゃなくて…! / /」

「そう言えばスグは初恋：なのか?」

「リアルではそういう話はしないの?」

「まあそうだな：基本的にはそういう話はしない：かな? でもリアルじゃかなりモテるらしい」

「へ〜：リーファちゃんも上やん君も隅に置けないな」

「・・・そうだな、俺も上やんだったら安心してスグを任せられる」

「もうキリト君、それじゃお兄ちゃんじゃなくてお父さんみたいだよ」

「え? あ、そう言われればそうだな：参った参った! あははは!」

「私もパパの自慢の娘ですから! 私が誰かのお嫁さんにもられる時は全力で死守して下さい!」

「おー、ユイもいつかは誰かのお嫁さんになるのか。それはパパも楽しみだな」

「止めてくれないんですか!」

「おーいキリトー! アスナー! そんなところでイチヤついてないで早く行こうぜ!」

「違うよー! 上やん君の方がリーファちゃんとイチヤイチヤしてたから気まずくて入れなかったんだよー!」

「いやしてねえよ!?!」

こうして後ろから2人を見守っていたキリト達も上条達の方へと歩み寄っていき、塔の端へと4人が横一列に並んだ

「よし…みんな準備はいいか!?!」

「おう!」

「うん!」

「ええ!」

「はい!」

上条の呼びかけにキリト、リーファ、アスナ、ユイの順番に返答し、全員が背中の翹を大きく広げた

「よーし!しゅっぱーて…」

「リーファちゃーん!!!」

「ずこーっ!!だ、誰だ…折角上やんさん御一行が気持ちよく旅立とうとした時に…」

「よ、よりにもよってレコンか…」

上条一行がまさに飛び立とうとしたその瞬間、背後のエレベーターからリーファを呼ぶ声の方に振り返ると、レコンがこちらに向かって走って来ていた。そんな彼の姿を見たリーファは何やら面倒そうな顔をしていた

「ひどいよー!!一言声かけてから出発してもいいじゃない!」

「ごつめーん、忘れてた♪」

「ガクツ…所詮僕の存在なんてその程度だよ…それよりリーファちゃん、パーティー抜けたんだって?それにシグルドが領土内なのに他種族にぶっ飛ばされたって…」

「あー、うん。色々あってね。まあ大半はその場の勢い半分だけど

ね。で？レコンはどうするの？」

「決まってるじゃない！この剣は！リーファちゃんの為だけに捧げてるんだから！」

「えー、別にそんなのいらなーい」

「え、ええええええ……」

カツコよく自身の腰に据えた短剣を掲げたレコンだったが、リーファにあっさりとフラれてしまい、大きく肩を落とし落胆した

「す、スグも中々辛辣だな……」

「ま、まあそう言う訳だから、僕も当然ついて行くよ……って言いたいところだけど、ちよつと気になることがあるんだよね」

「え、なに？」

「まだ確証はないんだけど、少し調べてみるから僕はまだシグルドのパーティーに残るよ……それとえーつと、リーファちゃんの新しいパーティーのみなさん」

「「？」」

「彼女、トラブルに飛び込んでいく癖があるんで気をつけて下さいね」
「ああ、任せとけ。いざという時は何としてでも、俺がリーファを守る」

「へえええええつ！／＼／＼」

「それから！言っておきますけど……」

「……おう？」

上条の一言にまた頬を紅潮させるリーファを他所に、レコンは上条の目の前へと近づいていき、2人の顔の距離が10センチもないほどまで迫ったところで口を開いた

「言っておきますけど！彼女は僕の……！」

「ツ！！／＼／＼」

ガスツ！！

「んぎやああああ〜っ?!?!」

ガスッ!ガスッ!ガスッ!

「しばらく!中立域にいますと!思うから!何かあったらメールで!ねっ!」

「痛い!痛い痛い!!リーファちゃんそんなに踏まないで!!」

レコンが上条に何を言おうとしたか察知したリーファは、彼の足を思いつきり踏みつけ、そこからまたさらに言葉の節に合わせて何度も踏みつけた

「なありーファ、お前やっぱレコンと付き合ってるんじゃないのか?」

「は、はあっ?!?／＼違わよ!前も違ってたでしよ!それにあたしたちのどこをどう見たら付き合ってるように見えんのよ!?!／＼」

「え?いや普通に仲良いし、レコンも今『リーファちゃんは僕の』って言うってたし、そりや要するにリーファはレコンの物で、それは恋人なんだろ?」

「違わっ!!／＼耳の聞こえ方と解釈が都合良すぎよっ!たまたまそこでレコンの言葉が途切れただけ!!それに誰が好き好んでこんなパツとしない奴と付き合うのよ!／＼」

「そ、そんなにハツキリ言われると流石の僕でも立ち直れないよ!」

「や、やっぱリーファちゃんって、レコン君に対してはひたすら辛辣だよねキリト君!」

「人間の恋心というのは良くも悪くも複雑なものなんです。パパもママもそうだったんですか?」

「そ、それもそうだが!上やんの鈍感っぷりもどうかと思うぞ俺は!俺も人の事言えた義理じゃないが、アレよりはまだマシな気がする!」

「ったくもう!じゃあそういうことだから。さっきも言ったけど何かあったらメールしなさいね。ああもうこんな時間!急がないと今日中に森を抜けられないわ」

「そうだな、それじゃあ改めまして出発だ！目指すは央都アルン！そして世界樹のてっぺんだ！」

「「おーーーーー!!!」」

ビュン!!ゴオオオオオオオ
!!!!!!

こうして塔の頂点から飛び立った上条一行は、世界樹を目指し、その翹で大空へと羽ばたいて行った

第26話 暗闇

スイルベーンを旅立ち、世界樹を目指して飛び立った上条一行。しばらく飛行を続けていたが、そんな空を泳ぐ最中、上条はリーファへと話しかけた

「ところでリーファ、塔の一件でシグルドのやつが言ってた『レネゲイド』ってのはなんなんだ？」

「ああ、えっと…自分の種族の領地を棄てたプレイヤーはレネゲイド…つまり、『脱領者』って呼ばれて蔑まれているのよ」

「そ、それはなんかなあ…そこまでしなくなつて普通のゲームなんだから領地出たぐらいで蔑むんじゃないかって純粋に楽しめばいいのによお…」

「そうだよね…なんでみんな、縛ったり縛られたがるのかな…折角翅があるのにね…」

「………」

「だからね、あたし、上やん君に感謝してるの」

「ん？お、俺に感謝？」

「うん。ずっとスイルベーンを出ようと思つてたの。でも、あのパーティーのこともあつて、旅立つ明確な機会と決心がつかかなかつたんだけど、そんなあたしの背中を、上やん君が押ししてくれた」

「いやいや、俺はそんな大した事としてねえよ。それに、最後にシグルドにちゃんと自分の意思を真っ直ぐに伝えられてたじゃねえか。あれは紛れもなく、リーファ自身の決意の表れだよ」

「う、うん…ありがと…／＼／＼」

「おーい！二人ともく！ルグルー回廊が見えたぞく！！」

そんな会話を交わす二人に、先方を飛ぶキリトが呼びかけた。そしてその進行方向へ目をやると、巨大な山岳と、その麓に小さな洞窟が見えた

「了解お兄ちゃん！さて、それじゃ一旦降りようか上やん君」
「え？なんでわざわざ降りるんだ？山飛び越えりやいいじゃねえか」
「あの山は飛行限界高度よりも山頂が高いせいで、山越えには洞窟を抜けないといけないの。シルフ領からアルンへ向かう一番の難所：らしいわ。あたしもここから先は初めてなのよ。まあ世界中を飛び回ってたお兄ちゃんとアスナさんは初めてかどうか分かんないけど」
「なるほどね…」

そう言つて上条一行は少しずつ減速していき、ゆっくりと「ルグルー回廊」と呼ばれる洞窟の入り口へと降り立った

「それじゃ、早速中に進みましょう？洞窟の中にある中立都市『ルグルー』が今日のあたし達の目標地点で、そこまで行ったら今日は一旦みんなログアウトね」

「よっしゃ！後少しだ！気合い入れていこうぜーみんな！……ん？」

「……？どうかしたの上やん君？」

「……いや、今なんか誰かに見られてる感じがして…」

不意に誰かの視線のような物を感じ取った上条は周囲を見回し、周囲にそれらしき人がいないかどうか確認した

「誰かに見られてる？ユイ、近くにプレイヤーはいるか？」

「いえ？反応はありません」

「んー…ひよつとしたら『トレーサー』がついてるのかも」

「トレーサーって？」

「追跡魔法よ。大概は小さい使い魔の姿で術者に対象にしたモンスターやプレイヤーの位置を教えるの」

「探知機みたいなもんか…解除する方法はないのか？」

「トレーサーを見つけられれば破壊することは出来るし解除は可能だけど、そもそも術者の魔法スキルが高ければ高いほど術者との間に取

れる距離が増えて、低ければ低いほど距離が短いものだから、中立域のこんな深くのフィールドまで追ってくるのはほぼ不可能ね」

「なるほど…じゃあ俺のただの勘違いか自意識過剰か…とりあえず先を急ごうぜ」

「うん、そうだね」

そうやって上条一行は洞窟の奥へと入っていき、その道を道なりに進んでいったが、その途中で洞窟の内部に光が届かなくなり、その視界が闇に包まれ周りがほとんど見えなくなってしまうた

「うわ…結構暗いな…こりや何も見えないぞ」

「そうだね…ねえお兄ちゃん『暗視能力付加魔法』使える？」

「そりやもちろん」

「じゃあお願い」

「了解、つと…」

「O s s n a n t t l y s a a u g a」

リーファにそう頼まれると、キリトは呪文の詠唱を行い、暗視能力付加魔法が発動した。すると、全員の視界が鮮明になり、本来は暗くて先も何も見えないはずの洞窟の内部がハッキリと見えるようになった

「おー、明るーい！ありがとうお兄ちゃん！」

「ありがとうキリト君」

「お安い御用さ」

「え？俺暗いままなんだけど」

しかし、この男、上条当麻にはあらゆる異能の力を問答無用で打ち消してしまう「幻想殺し」が右手に宿っている為、キリトの暗視能力付加魔法が効いておらず視界は依然として闇に包まれていた

「え? あーそつか…上やんには幻想殺しがあるから補助魔法が効かないのか…参ったな…」

「……じゃありーファちゃん代わり上やん君と手を繋いで誘導してあげればいいんだよ♪」

「あ、なるほど…って…え…? ええええええええええええ!? / / / / /」

「おおっ! なるほど! そりゃいいやアスナ! ナイスアイデアだ! それなら何の問題もない!」

上条への対応に思考をこじらせるキリトを見ていたアスナがまるで頭の中の電球に光が灯ったような明るい口調でリーファにそう告げた。すると、頬を赤く染めて慌てるリーファを他所に、キリトもアスナのアイデアに大賛成とばかりに乗っかっていった

「もっ、問題なくない!むしろ問題アリ!問題大アリ!! / / / /」

「えー?でも上やん君と手を繋ぐだけだよー?」

「頼むよスグ、上やんに魔法は効かないし、それしか方法がないんだ。上やんが周りが見えなくて壁に激突しまくるのも悪いし頼むよ…」

「そ、それでも無理なものは無理! / / / /大体、何も私じゃなくてもお兄ちゃんかアスナさんが上やん君と手繋げば問題ないじゃん!」

「わ、私キリト君以外の男子と手を繋ぐのは…ちよつと…」

「うっ…じゃ、じゃあそれこそお兄ちゃんが…」

「いやそれこそ俺がみんなに魔法かけた術者本人だし、もし何かの不经意间上やんの幻想殺しが発動したらまた一気にみんな視界が暗くなるし、もしその隙に敵が来たら誰も対応できなくなるかもしれないぞ?」

「う、ううう… / / /」

「あ、あー…リーファ?別に嫌だったら無理に繋いでくれなくてもいいんだぞ?俺は壁伝いに手を置いて注意深く歩くから。それに何よりリーファも急に俺の右手に触れて視界が暗くなるリスクもあるからな。気にしないでくれ」

「えっ!? あ、ち、違うの!違って別に嫌とかじゃないの!そ、その…な

んて言うかえくつと…／＼／＼」

上条にかけられた誤解をどうにかして解きたいと思い、弁解を図るリーファだったが、どう言ったらいいかが分からず、手をわちやわちやさせ慌てることしか出来なかった

「大丈夫だって、気にしてない。そりゃ恋人でもないのに大学生のおっさんの手なんて触りたくねーもんな。だから大丈夫…」

「せ、背中ツ!!」

「…はい?」

「背中だったら…触っていいから…／＼／＼そのまま私の後ろ付いてきて…／＼／＼」

「お、おう…そうか…それなら…まあじゃあ失礼して…」

そして上条は右手でリーファにかけられた暗視能力付加魔法を打ち消さぬように左手を前に出し、ゆっくりと彼女の背中に優しく触れた

ピトツ…

「うひゃん?!?!／＼／＼」

「あ、悪い。くすぐったかったか?」

「や、やっぱ背中じゃなくて肩!肩なら大丈夫だから!／＼／＼」

「お、おう…分かった…」

ガシツ…

「お、OK…大丈夫…／＼／＼」

「よ、よし…キリト、こっちは大丈夫だ。先に進んでくれ」

「OK。上やんも足元には気をつけてスグの肩を離すなよ」

「大丈夫だ、任せとけ」

こうして上条の問題も解決したことで、一行は再び洞窟の奥へと進み始めた。しかし、リーファと上条の先方に行くキリトとアスナの間

では

「キリト君、 ナイス♪」

「アスナの方こそ、本当にいいアイデアだったよ。まあ、手を繋ぐまではいかなかったけどな」

「何かこういう誰かをくっつけようとするのって楽しいよね♪」
「そうだな♪」

こうして各々の陰謀が渦巻く中、上条一行はルグルー回廊の奥へと歩を進めていったのだった

第27話 追跡

「ところで上やん君って魔法が効かないんでしょ？じゃあ回復魔法とかステータス補助魔法とか能力付加魔法を上やん君に唱えても意味はないの？」

洞窟を歩きながら進む上条一行。そんな中、アスナが上条へと向けてそんな疑問を持った

「そうだな。さっきもそうだったけどアスナ達のMPが減るだけで俺には何の兆しも見られない…って感じた」

「なら、上やんが自分で魔法は唱えられないのか？」

「え？あーそりゃ確かに試してなかったな…いやでも多分無理だよ」

(現実でも無能力者扱いだし…)

「まあでも確かに自分で自分に回復魔法とか唱えても、結局はその右手が打ち消しちゃうから無理かもしれないけど、例えば対象が自分じゃなかったら平気なんじゃないかな？」

「…と言うと？」

「相手を対象にする攻撃魔法とか…スプリガン得意の幻惑魔法とか！」

「…なるほど。一理あるっちゃあるか…いやでも多分無理だぞ？」

「まあまあ、一回ぐらい試してみてもいいんじゃないか？」

「…そうだな、試してみるか」

「えーっとそれじゃ、私が上やん君の肩に手置いといてあげるから、一旦私の肩から左手離して、自分のステータスを開いて魔法スキルの項目を開いてみて？」

「えっと…こうか？」

そう言われ、リーファは上条の左肩に手を置き、上条は自分の左手を振ってステータスウィンドウを開いて、魔法スキルの項目をタップ

した

「そう、それでここ。ここをタップすると幻惑魔法の呪文が出てくるから読んでみて」

「えーつと…なにになに…せあー…うらーぎ…のーと…でいぷと…あうが…」

「発音下手くそすぎ!?!上やん君本当に大学生!?!」

「上やんさんにこういうのを求めちゃダメなんだよ…もつと簡単なのねーのか?三節ぐらいのやつ」

「三節のなんて短すぎてないわ!まーでも、今唱えようとしてるのは難しい方の幻惑魔法だし…じゃあこっちの攻撃魔法は?比較的短い簡単だと思っけど…」

「えーつと…」

「それとアドバイス。機械的に丸暗記するんじゃないわ、力の言葉の意味を覚えて、魔法の効果と関連をつけて記憶するのよ」

「…なんでゲームの中でまでこんな英語の勉強みたいなことせにやならんのですか…」

「ほら、泣き言言ってるじゃない。今は試しに一回唱えてみるだけでしょ?覚えるのは後回しにして、とりあえず一回本気で発音まで気をつけてしっかり唱えてみて?」

「…っしや!そうことなら一回本気でいくぞ!」

そう言うとお上条は気合いを入れ直し、右手を前に突き出してウインドウに表示された呪文を詠唱した

「E k s k ■ t t u t t u g u s m ■ r s t r i ■ a !」

…シーン…

「…我ながら完璧だったと上やんさんは思うんでせうが?」

「な、何も起こらないね…」

「…やっぱ俺に魔法は無理か…まあ分かつちやいたけど…」

「ま、まあ相手の魔法も上やん君には効かないんだし似たようなもん

だよ…」

「・・・不幸だ…まあいいや、暗記の手間が省けたと思えば」

そう言いながら魔法を使えない事実にはガックリと肩を落とした上条は、思考を無理矢理プラスに変え、モチベーションを保った

ピコンッ!

「あれ?メッセ入った…ごめん上やん君、私左手離すから上やん君の左手肩に戻して」

「はいよ」

「えーつと…またレコンか…どうせ大した内容じゃないんだろうけど…なにになに…」

「やっぱり、思ったとおりだった。気をつけて、s

from Recon」

「・・・何これ?sって…さ…し…す…もおんななのよ…」

「ん?どうしたリーファ?」

「あー…えつとね…」

「みなさん!接近する反応があります!」

そう叫びながらキリトの胸ポケットから顔を出したユイの言葉に、一瞬で上条一行の表情が緊迫した表情に変わった

「モンスターか?ユイ」

「いえ、プレイヤーです…多いです…確認できるだけでも12人…」

「12!?!」

「随分と多いわね…」

「どうする?逃げるか?受けて立つか?」

上条が3人に選択を求める。3人は何秒か思考を巡らせたが、その

中で最初にリーファが口を開いた

「・・・ちよつと嫌な予感がするの…隠れてやり過ぎそう?」

「隠れてつて…一体どこに?」

「ま、そこは任せてよ。アスナさん、手伝ってもらえますか?」

「オツケー、リーファちゃん」

「リーファ、肩に乗ってる上やんの手もらうぞ。ほら上やん、こつちだ」

「え?お、おおつと!」

キリトが上やんの左手を掴むと、洞窟の壁が凹んでいるスペースへと彼を引つ張っていった

「ほら、もつと詰めて詰めて!」

「お、おう…」

「それじゃアスナさん、いきますよ!」

「OK!」

「P i k s r v s s g r e n n l o p t!」

リーファとアスナの二人が呪文を唱えると、隠蔽魔法が発動し、4人が入り込んだ凹みを偽装された新たな岩の壁が覆った

「ナイスだスグ、アスナ」

「パパ、もうすぐプレイヤーが視界に入ります」

「え?今どうなってるの?俺何も見えないんだけど…」

「隠蔽魔法使ったのよ。喋る時は最低限の声でね?あんまり大きい声出すと魔法が解けちゃって丸見えになっちゃうから」

「その前に俺の視界を丸見えにしてほしいんだが…ん?あれは…なんだ?」

「え?上やん君何も見えないんじゃないの?それに目が見える私たちでもまだプレイヤーは見えないけど…」

「いや、プレイヤーじゃなくて…お前らは視界が明るいから分かんないかもしれないけど、そこに小ちやい赤い光が二つ浮かんでんだよ。なんつーか…『コウモリの目』みたいな感じで…」

「?!?!」

「何でそれを早く言ってくれないんだ上やん!!」

「え? あつ、おい! 大声出したら隠蔽魔法が切れるんじや…!」

「もう隠蔽魔法なんて関係ないわよ! 上やん君が見えてたのは高位魔法の『トレーシングサーチャー』よ! 潰さないとつ…!」

「任せてつ! Ek s k · t t u t t u g u s m · r s t r i

· a !」

ビュビュビュビュビュツ!!!

「ギキイツ!!」

ズバアアアアツ!!

アスナが両手を前に突き出し魔法を唱えると、その手の先から無数の針が飛びだし、コウモリの姿をした追跡魔法の使い魔へと突き刺さり、オブジェクト破碎音とともに崩れ去った

「あつ! その魔法さつき俺が唱えたやつ!」

「言ってる場合か! 逃げるぞ! みんな走れ!」

「えっ!? 俺何も見えねーんだけど!」

「あー! もうめんどくさい! 左手借りるわよ!」

ガシツ!!

「おおおおおおお?!?!」

ダダダダダダダツ!!!

使い魔を撃墜し、すぐそこまで接近しているであろう12人のプレイヤーを振り切る為に4人は一斉に走り出した。しかしその内の1人、上条当麻は先ほど手を繋ぐのをあれほど避けていたリーファにガツシリと左手を握られ、走っているというより半ば引っぱ張られていた

「な、なあっ！何で逃げるんだ!?また隠れ直すのはダメなのか!？」

「トレーサーを潰したところで敵にももうバレてる!とても誤魔化し切れないの!それに、さっきのトレーサーは火属性の使い魔なの!つてことは今接近してるパーティーは……!」

「えーっと……『サラダンマー』か!」

『サラマンダー』よ!それじゃただ美味しいサラダ食べてるみたいでしようが!」

「ほら!中立都市の『ルグルー』が見えてきたわ!」

「おっ!視界が明るくなってきた!」

「じゃあ早く自分で走って!」

「了解!」

上条達が走っていると、洞窟の先から光が差し込み始め、上条の了解の返事を聞いたリーファが上条の手を離れた

「おー!綺麗な湖だなー!地底湖ってやつか!」

「呑気に感心してる場合か!」

そのまま自分の足で走って行くと、巨大な空洞にたどり着いた。その空洞には下に水が溜まった湖が出来ていた。そしてその湖の中心に、まるで要塞のような城壁に囲まれた中立都市のルグルーが見えた

第28話 集団戦法

「何とか逃げ切れそうだな！」

自分たちを追っているであろうサラマンダーのパーティーからひたすら走って逃げていた上条一行は、中立都市ルグルーへと続く橋を駆けていた

「よし！これで中立都市に入ればプレイヤー同士の戦闘は出来なくなるわ！」

キュウウウウウウン…

「!!まづい！アレは！」

しかしルグルーへと逃げ走る上条一行の頭上を二本の赤い閃光が通過していき、彼らを追い越した

ズゴゴゴゴゴ!!ズズウンツ!!

「な、何だあ!?壁ができたぞ?!!」

その二本の閃光はルグルーを覆う城壁の手前の地面に着弾し、爆発した。すると、地面から巨大な壁が現れ、ルグルーへの入り口を塞いでしまった

「土魔法の障壁!?これじゃ街に入れない!!」

「魔法!?だったら話は簡単だ！俺の右手が触れれば…!」

「待って!!」

「いつ!？」

魔法で作り上げられた障壁に上条の右手が触れようとした瞬間、アスナの空気を振動させるような短くも迫力のある声の上条の右手に待ったをかけた

「い、いきなりどうしたんだアスナ？ビツクリしたじゃないか…」

「ねえみんな、考えてもみてよ？」

「考えるって…何を？」

「上やん君はALLOを始めたばかりだし、魔法も使えないからあんまりイメージ湧かないかもしれないけど、追跡魔法なんて普段使う？」

「でも、好戦的で集団PKをよくやるサラマンダーなら話は別かもしれないんじゃないですか？」

「それもそうだけど、多分トレーサーが私たちについてかなり時間が経ってる。それに私たちは暗視能力付加魔法でもないと碌に前にも進めないような洞窟に入ったのよ。普通なら4人ぐらいだったら諦めると思わない？」

「そ、そう言われれば…」

「つまり、今私たちを狙っているプレイヤー達は、そこまでしてでも私たちをキルしなきゃいけない理由があるのよ」

「!!!」

「なるほどな…言われてみれば確かに…でも、一体なんで…」

「それは…連中に聞いてみればいいんじゃないか？」

「へ？」

「さつき上やんだって言っただろ？逃げるか戦うかって。俺たちにそこまで用事があるってんなら受けて立とうぜ？そしたら後は簡単だ。切り倒して俺たちをつけ狙う理由を聞き出す！」

ブオンツツツ!!!

そう言うときリトは、自分の身長にも迫るほどの大剣を、自分の背中の中の鞘から引き抜いた

「…そういうことなら…まあいっちょやりますかあ…」

続いて上条も背負っていた盾を持ち上げ、その左手に構えた

「ちよつ、ちよつと待つてよ!?! サラマンダーがこんな高位の土魔法使えるってことは、向こうにはよっぽど手練れのメイジが混ざってるってことだよ!?!」

「どんだけ強い魔法だろうと、上やんさんには効きませんのことよ?」

「そ、そうかもしれないけど…」

「そうだぞスグ。それに忘れたのか?」

「え?」

「死んだら終わりのSAOを生き抜いたプレイヤーが…ここには3人もいるんだぞ?」

「…お兄ちゃん…」

「まあ、そういうことだ。やろうぜリーファ。それに言つたら?」

「な、何を?」

「いざという時は、なんとしてでも俺がリーファを守るって」

「わあああああ!?!?!?!」

微笑みながらそう言った上条の言葉を聞いたリーファは、彼の顔を見つめた瞬間にまたもや茹でダコのように顔が一気に沸騰した

「よし! そういうことだ! 俺と上やんで敵に切り込んでいく! スグとアスナは後ろでサポートを頼む!」

「了解キリト君!」

「もーっ!! どうなつても知らないからね!」

ダツダツダツダツ!!

キリトと上条が前衛となり、リーファとアスナが後ろに下がり後衛を担当する簡単な陣形を組むと、正面から上条達をずっと追っていたであろうサラマンダーの集団が近づいてきた

「おいでなすつたな…先方の3人はタンクか…超えられるか上やん?」

「おうよ!」

「よし、それなら…」

「ツ!?待ってお兄ちゃん!あの3人の後ろ!!」

「後ろ…!? 3人の回復アシストのメイジにそのまた奥に6人の攻撃魔法のメイジか…ゴリゴリの集団戦法だな…」

「?キリト、アレはどういう戦法なんだ?」

「典型的な集団陣形だよ。洞窟の中じゃ飛行補正がかかって飛べなくなるから地上戦しか出来なくなる。だから先方にタンクを3人置いて敵を近づけさせず、その奥からタンクがダメージを受けた時に回復するメイジと、相手に遠距離魔法で攻撃するメイジを配置するんだ。正直厄介だよ」

「なんだ、思ったより簡単に突破出来そうだな」

「え?」

「キリト、耳貸してくれ。俺に考えがある」

「お、おう」

ゴニヨゴニヨゴニヨ……

「えくく…別にいいけど…俺そういうのあんまり得意じゃないぞ?」

「別に得意じゃなくてもいんだよ。大事なのは相手に一瞬でもそう思わせることだ」

「まあそういうことならとりあえずはやってみるよ。けどもし失敗した時は?」

「強行突破」

「…そりや最高だ」

「キリト君!来るよ!」

「Ek verpa einn brandr muspilli,
kalla bresta bani, steypallu
ndr dr·tt!!」

ボボボボウツツ!!!!!!

アスナの警告の直後、前衛に置かれたラマンダーの頭上を飛び越え、6つの曲線弾道爆裂魔法が上条とキリトに襲いかかってきた

「来るぞキリト！上手くやれよ！」

「了解!!」

ドゴオオオオオオオオオオン!!!

襲いかかる爆裂魔法に対して、2人は一切防御の姿勢を取ることもしなかった。そしてそのまま爆裂魔法が直撃し、2人を含めた辺り一帯が炎と爆煙に包まれた

「!?キリト君！上やん君！」

「2人とも大丈夫!?!」

・・・ボボウ……

「!?そつ、そんな!!」

「う、うそ……」

爆煙が晴れ、立ちこめる黒い霧の中にリーファとアスナが見たのは、2つの黒いリメンライトだった

第29話 奇策

「ひゃっほー！2キルー！」

「なんだよ、カゲムネさん達を殺ったって言うぐらいだからもつと手応えあると思っただのによお…」

「おい、まだ気を抜くな。向こうにはまだウンディーネを含めて2人残っている。あのスプリガン2人を蘇生される前に焼きはr…」

「そうだな、回復役を先に狙っておくのが集団戦の定石だもんな」

「でも流石に女の子2人を12人でいじめるのは紳士的じゃないと思いますのことよ？」

「なっ!？」

完全に2人のスプリガンを焼き払ったと思いついていたサラマンダーの攻撃魔法隊の目の前に現れたのは、リメンライト化したはずのキリトと上条だった

「きつ、貴様ら一体どうやって…！」

「いや普通にアンタらがリメンライトに夢中になってる間に煙に紛れてタンクの人たちの横をこっそり通って来たけど」

「そこも重要だけどそうじゃなく！死んでリメンライト化したんじゃないのか!？」

「あーあれな、あれは幻惑魔法だよ」

「ツ！そういうことかよっ…姑息な手使いやがって…！」

「そっちの方が人数は多いんだからそれぐらいは勘弁してくれてもいいだろ？」

「チツ！攻撃メイジ隊は距離を取れ！一旦後退してから攻撃を再開する！」

ダダダダダッ!!!

「さて、じゃあキリト、後ろのタンクと回復メイジの6人は任せる。俺もあっちの攻撃役のメイジ6人をぶっ飛ばす」

「そうだな、それで丁度6対6だ」

「そんじやま、背中はお互いに預けるとしようぜ」

「おう、頼りにしてるぜ、上やん」

「任せとけ、キリト」

ダツ!!

2人はお互いに背を向けると、それぞれの標的に向けて駆け出した

「うおおおおおおお!!!」

「くっ…!全員攻撃開始!!!」

「E k v e r p a e i n n b r a n d r m u s p i l l
i , k a l l a b r e s t a b a n i , s t e y p a l l
n d r d r . t t t !!!」

ギュアアアアアアアツツツ!!!

「ふんっ!!」

バキイイイイン!!!

6人のサラマンダーのメイジへ向かって突撃する上条に6つの火球が襲いかかった。しかし、彼は自分が突き進む道の妨げになる火球だけを判断し、その右手で火球を打ち消した

「なっ!?爆裂魔法を打ち消した…だと!?!」

「オラア!!」

ドゴオオオオオツツ!!!

「ギヤス!!」

ボウツツ!!!

「次ツ!!!」

「ひいひいひいひい!!!」

バキイイイイイツツ!!!

ボウツツ!!!

「い、一瞬で2人を素手で…!お前は一体…!」

「ただの平凡な大学生さ」

ドゴオオオオオオオオオオン!!!

「・・・これのどこが平凡だよ・・・」

ボウツ!!!

敵の爆裂魔法を打ち消し、敵陣に飛び込んだ上条はあつという間に3人のプレイヤーをその右手の拳で沈め、それぞれリメンライトとなつて燃えた

「く、クソツツ！よくも隊長を!!このウニ頭やろおおおお!!」

ガキイン!!

「ツ！クソツツ！」

「あばよ!!!」

ドガアアアアツ!!!ボウツ!!!

杖で襲いかかってきたサラマンダーの攻撃を盾で難なく防ぐと、その顔面に拳をぶち込み、エンドフレイムと共に真っ赤に燃え上がった

「ば、バケモンだ…逃げろおおおお!!!」

ダダダダダダダダダダ……

「え!? あ、おい待てよ！俺だけ置いて行くなよ！ちよつとおおおおおおお!!!」

「さーて、残るはお前だけだな」

ザツザツ…

「ひ、ひいつ!?」

ゆつくりと残された1人のサラマンダーににじり寄る上条。そんな彼の異常なまでの強さとオーラに、残されたサラマンダーは腰を抜かしてへたり込んでしまった

「た、頼むっ！何でも言うことは聞く！だから命だけはっ…!!」

「おう、もちろんだ」

「・・・え?」

「さて、モノは相談なんだがね君」

素っ頓狂な声をあげるサラマンダーを他所に、上条はへたり込む彼と同じ目線になるまで腰を落とし、自分のウインドウを開き、あるページを相手に提示して見せた

「これ、今の戦闘でゲットしたアイテムとユルドなんだけど…」

「そ、そんなの見りやあ分かるよ…」

「今から俺たちがする質問に答えてくれたらあげちやおうかなうんて…」

「えっ?!?……マジで?」

「ああ、マジマジ。けどちゃんと嘘偽りなく質問に答えること。これが条件だ」

「・・・よし、その取引受けた」

「っしや!話が分かる人で助かったぜ!」

「おーい上やん!すまん!調子に乗りすぎてこっちは全員ぶった切っちゃまった!お前の方で……って心配することなさそうだな……」

「おうよ。上やんさんにぬかりはありませんのことよ?」

こうして上条達はサラマンダーの集団を見事に撃破し、後方支援をしていたリーファとアスナが歩み寄ってきたところで残されたサラマンダーに尋問を始めた

「確か今日の夕方ぐらいだったな…さっきのメイジ隊のリーダーの人から携帯メールで呼び出されてログインしたらさ、お前たち4人を12人で狩るって言い出してさ」

「うんうん」

「最初はまあ別に集団PKなんて珍しくもないから思わなかったんだけど、なんでもう出かける前の最初っから標的も決まってるのかなっ

て思ったら、古森でカゲムネさんのパーティーをやった連中だつて言うから、なるほどなって」

「カゲムネ…？古森…？ああ、俺がリーファを助ける時に倒した人たちのパーティーのことか」

「で？なんで私たちを狙ったの？目的は仇討ち？」

「いや、俺も最初はそう思ったんだけど、実際はもつと上のメンツの命令だったらしい。なんか…『作戦の邪魔になる』って…」

「その作戦ってのは？」

「俺みたいな下っ端にや教えてくれなかつただけだし、近々相当デカイことを狙ってるみたいだぜ？今日なんてログインした時、すんげえ人数の軍隊が北に飛んで行くのを見たよ」

「北…世界樹攻略に挑戦するつもりなの？」

「まさか。最低でも全軍にエンシエントウエポン級の装備が必要だつてみんなで金貯めてる真っ最中だぜ？」

「ふーん……」

「俺が知ってるのはこんなとこだな…それよりアンタ！さつき約束した物はちゃんと貰えるんだろうな!？」

「ん？ああ、もちろん！俺はエギルみてえにはなりたくねえからな。ほれ」

「おっほい！サンキュー！恩に着るぜ！また美味しい話があつたらよろしく頼むよ！」

そう言うサラマンダーのプレイヤーは上条一行に背を向けると、足早にその場を立ち去っていった

「おう！今日はありがとなー！お互いナイスファイトだったー！」

「…まあ、これで当初の目的は果たせたからいいんだけど…本当に男の子って…」

「身も蓋もない…ですよね…」

「全くです。パパは上やんさんみたいになつちやダメですからね！」

「お、おう！はははは…」

(俺も残り1人にしたら上やんと同じような条件で話を聞こうと思っ
てたなんて口が裂けても言えない……)

「さ、そんじゃ目的も達成したことだし、ルグルーの街に入ろうぜー
！」

第30話 ログアウト

「うわー！ここがルグルーかー！結構お洒落な街じゃない！」

「本当だな…街の雰囲気は洞窟の空洞にマッチしていい感じだ」

「あ、ねえねえキリト君！あのアクセサリーすごく可愛い！」

「えー…俺より上やんの方がお金持ってるじゃないか…」

「もう！キリト君に買ってもらうのがいいの！」

「ははは、分かってる分かっている。ちよつとからかってみただけさ。すいません、これを彼女に…」

ここは世界樹の前に佇む山岳地帯にポツカリと空いた洞窟、ルグルー回廊の途中にある、中立の地下都市「ルグルー」である。周りの地底湖からまるで浮かんでいるように見えるこの街は、中立都市なだけあって、様々な種族のプレイヤーが行き交い、地下を照らす灯の彩が美しい街だった

「よし、一先ずは今日の目標は達成だな。みんなこの後ログアウトするんのか？」

「俺とスグはどうせ家で2人だし配慮し合えば別にまだ出来ないことはないんだが…アスナはどうだ？」

「うーん…私は流石にそろそろログアウトしないとマズイかなあ…」

「じゃあキリもいいし、みんなで宿屋に泊まってログアウトしない？」

（まあ、俺は本当はログアウトなんてする必要ないんだけど…みんなに気使わせちゃうし言わねえ方がいいよな）

「そうだな、それが一番だ」

「よし、じゃあ宿屋に行こつか。ユイちゃん、ここから一番近い宿屋はどの辺にある？」

「はいママ…この先の角を曲がって右です！」

こうして上条一行はユイのナビゲート通りに宿屋にたどり着き、そ

れぞれ一部屋ずつ宿の部屋に泊まることになった

「とりあえず明日はどうする？俺はいつでも大丈夫だけど」

「えー、大学生なのに大丈夫ー？」

「ほっとけ、大学生は基本的に授業かバイトがなけりや暇なんだよ」

「明日は日曜だし、私も特に用事はないからいつでも大丈夫だよ？」

「俺も大丈夫だ。まあスグが許してくれただけ……」

「本当だよ。アスナさんを探したい気持ちは分かってたけど、三日三晩ダイブし続けてログアウトしてすぐに貧血でぶっ倒れたこと、あたし忘れてないからね？」

「あ、あの時はどうもすいませんでした……」

「ははは、キリトも結構無茶するんだな」

「笑い事じゃないんだよ本当に？私はニユースで聞いたことがある程度で実体験はないけど、現実ではゲームに夢中になりすぎて体調崩してる人いっぱいいるんだよ？」

「まあVRMMOはかなり精神力使うからな……ゲームは一日一時間！

……は無理だとしても根詰めすぎるのは良くないな」

「で、その……スグ……明日は……」

「んー……しようがない！今回は上やんさんのお手伝いもしないといけないから特別に自由にプレイすることを許しますー！」

「よっしやー！」

「ただし！無理は禁物！私も一緒に行くからね！」

「え？明日は日曜だけどスグは剣道部の部活があるんじゃない？」

「えー？明日は風邪引きそうな気がするー♪」

「……いい根性してるぜ……」

「いや、そんな気使わなくていいんだぞリーファ？現実のことも大切だろうし別に俺は……」

「いいの！今回のサボりは上やんさんと上やんさんの世界のSAOに囚われたみんなを助ける為の慈善事業なんだからノーカン！」

「さ、サボってるっていう自覚はあるんだね……」

「ま、そういうことならみんな明日は10時半にダイブしよう。明日

は一気に洞窟を抜けて央都アルンに向かう。異論は？」

「ない！」

「OK！」

「うん、大丈夫だよ」

「それじゃみんな、今日はおつかれ！また明日頑張ろう！」

「はいー！じゃ、おやすみー！」

「うん、みんなおやすみ」

「おう！また明日なー」

ガチャ！ガチャ！ガチャ！ガチャ！

4人はそれぞれ一日の別れを告げると、ALOからログアウトするため、それぞれ宿から与えられた部屋へと入っていった

バタンツ！

「さて、どうするかなあ…現実では8時ぐらいだろ…まあ街で飯でも食うべきか…」

しかしそんな中、この男上条当麻だけはログアウトの手順を踏まずに、自分の部屋でこれからの自分の予定を練っていた

「まあ別に俺はログアウトする必要がないってだけでログアウト出来ない訳じゃないからな…ログアウトするってのも一つの手だが…」

「忘れかけてたけど、問題は俺が今いるのは並行世界かもしれないってことだよなあ…みんなもう気にせず落ちたけど、俺は下手に落ちて再ログインしたところで、次もこっちのALOに入れるって保証はねーからな…最悪自分の世界のALOにログインしちまってキリト達と離れ離れになっちゃうかもしれないねーし…」

「でもそれを試すためにログアウトするってのもアリかもしれないねーな…ログアウトして先生とか土御門たちに並行世界のこととかこのALOについて聞けば何か分かるかもしれないねーし…」

「…そうだな。一応ほぼ丸2日ダイブし続けちまった訳だし、まだ

8時ぐらいなら先生も病院にいるだろうし話をして、土御門にも事情を…後は世話にもなってるし吹寄に一応なんとかなってるって電話して…」

「後は美琴のやつにも顔を…：…ッ！」

一度ログアウトして現実世界に戻ろうかと考える上条。そんな彼の脳裏に、不意に御坂美琴の姿がよぎる。彼女のことを思い浮かべた瞬間、そんな自分の考えが矛盾にまみれていることに気づいて頭を振るった

「ええいつ!!ダメだダメだっ!何を急に弱気になってんだ俺は!現実に戻らなくたって自覚してんだろうが!それにみんなを助けるまでは戻らないって決めて、現実のみんなにそう誓ってコツチに来たんだろうが!しっかりしろ!」

「…はあ、ダメだな。ログアウトがあるってのはこんなにも甘えが生まれて、心に余裕が出来て、安心感があるもんなのか…S A Oじゃこんなこと一回もなかったから知らなかったぜ…」

コンコンツ…

「ん?」

自己嫌悪に陥り、頭を垂れる上条の耳に不意に聞こえてきたのは、自分の部屋のドアをノックする音だった

(一体誰だ?宿の人か?それともキリト達の中の誰か落ちずに俺んとこに来たのか?)

「どなたですかー?」

「私よ私ー。ちよつとここ開けてくれなーい?」

(私?ってことは女子…ってことはアスナだな。リーファの一人称はあたしだし)

「はいはいいただきますー」

ガチャ!

「急にどうしたんだよアス…ナ…？」

「やつほー♪」

「…え？」

「元気してた？」

「みこ…と…？」

上条がドアを開けたその先に立っていたのは、先ほど彼の脳裏をよぎったまさにその少女、御坂美琴だった

第31話 忍び寄る闇

カチヤツ…

「ふう、疲れた…」

そう言いながら電源の切られたアミユスフィアを頭から外し、自室のベッドから起き上がる彼女。ALOではリーファと名乗る現実のその本人、桐ヶ谷直葉は外したアミユスフィアをベッドの脇に置くと、部屋の電気をつけることなく、真っ直ぐに部屋を出た

ガチヤ！ガチヤ！

「あ、お兄ちゃん」

「やあスグ、お疲れさま」

そんな彼女のことを親しげにスグと呼ぶ少年。彼こそは桐ヶ谷直葉の兄であり、ALOの世界をキリトとして闊歩する桐ヶ谷和人である

「いやあ……本当に今日一日色々あったねえ…ALO始めてからこんなに濃い一日を送ったのは初めてだよ…」

「そうだなあ…その辺も含めて色々話しながら夕飯にしないか？俺もう腹ペコでさ…ほら」

ぐううううううう……

そう言いつつ和人が自分の腹部を指差すと、彼の腹の虫が一際大きな音で鳴いた

「もうお兄ちゃんってば…じゃああたしが適当に夕飯作っとくから、先にお風呂入っというて？」

「りよーかい」

「スグ、上がったぞー？」

「おっけー、こつちも丁度今出来たところだから」

風呂で洗った頭部をタオルで入念に拭きながら和人がドアを開けリビングに入ると、テーブルにはスープとサラダとハンバーグ、白米と彩りよくバランスの取れた夕食が並べられていた

「おお、今夜は随分と豪華だな。昨日のハンバーガーだけとは大違いで」

「まあ今夜のハンバーグもそのハンバーガー作った挽き肉の残りなんだけどね。それに、あれだけ記念すべきことがあったんだからちゃんとお祝いしないと」

「お祝い？」

「アスナさんとの再会、本当におめでとう。お兄ちゃん」

「スグ……」

「さ、食べよ食べよ！」

「……ああ、ありがとう」

そうやって和人と直葉はテーブルを挟んでお互いに向かい合って置かれたイスに座ると、それぞれ箸を持ち、夕食を食べ始めた

「……うん、美味しい！」

「そりや良かった…ズズズツ」

「それで、スグは上やんのどこが好きなんだ？」

「ブフーーーーーッ!!!」

和人から唐突にそんなことを聞かれた直葉は、口に含んだスープを
高校生の少女とは思えぬほど豪快に吹き出した

「(づ)ほつ(づ)ほつ!は、はあぁっ?!／／／きゅ、急に一体なに?!／／／」
「いやあ、そりやあ兄としては妹の好きな人が身近にいるかもしれないと分かれれば考え方も色々変わってくるからさ」

「べ、別にあたしは上やん君のことなんか…!上やん君…なんか…」

〔俺がリーファを守る〕

「~~~~~ツツ!!／／／／／」

ボンツ!!／／／

「あー、こりや確定だな…てかスグ隠すの下手すぎ…」

「う~~~~／／／悪いのは上やん君の方だもん…あんなカッコいいこと言われたりされたりしたら誰だって…／／／」

「…でも、いいのか?」

「えっ?なにが?」

「上やんは…遠い…俺たちとは違う別の世界の存在かもしれないんだぞ?」

「………」

真剣な面持ちで和人からそう告げられた直葉は、口を閉じて俯いて少し考えこむと、その口を開いた

「確かに、あたしたちの現実とは離れ離れかもしれない…でも今は、ちゃんと繋がってる。もう一つの現実…仮想世界で繋がってるなら…あたしはちゃんと自分の気持ちと向き合える」

「…そうか」

「で、お兄ちゃんも本当のところはどう思ってるの?」

「え?」

「お兄ちゃんの方こそ、隠すの下手くそすぎ。本当は別の世界の存在『かも』なんて思っていないでしょ?」

「あ、あはは…バレてたか」

「そりや兄妹だからね」

「…まず結論から言うなら、俺もそういうSF的なことにめっちゃく

ちや知識がある訳じゃない。だけどそれでも俺は上やんと俺たちが住んでる世界は別のものだと思ってる」

「それはどうして?」

「一番の要因は上やんが口にしたアイツの名前と…あの人物だな」

「えっと…それは一体…」

「これを見てくれ」

そう言うと和人はポケットから自分のスマホを取り出し、ある画面を表示したまま直葉に差し出した

「なにこれ? Webページ…? なになににえーつと…?!?」

「イギリスのオカルティスト、本名『アレイスター・クロウリー』。俺たちの世界の正史では、既に彼は1947年にイギリスの片田舎で亡くなっているんだ」

「アレイスターさんが…私たちの世界にも…」

「ああ、俺もかなり前に小耳程度に聞いた名前だったんだよ。ぼんやりとしか覚えてなかったんだけど、上やんにその名前を聞いてもしかしてと思って試しに調べてみたら、彼は俺たちの世界じゃとつくに過去の人間だったことが分かった」

「同姓同名の別人とかつてことはないの? 茅場さんみたいに一部の人は上やんさんの世界にも…」

「そう、それもだよスグ」

「え?」

「俺たちの世界の歴史には、SAOを作りあげた茅場晶彦なんて人物は1人しかいないだろ?」

「……」

「上やんの話の通りなら、茅場とアレイスターは同じ時代と同じ場所にいたことになる。でも俺たちの世界の歴史はそうじゃない。じゃあ1947年に茅場が仮に生きてたとして、そんな大昔…とまでいなくてもそんな今ほど科学技術が発展していかない時代にSAOやナーヴギアが開発できたのか? って疑問がどうしても残る」

「SAOを実際にプレイして、ヤツと：茅場と直接剣を交えたからこそ分かる。多少の違いはあれど、あのインクラッドは：アイツにしか作れないものだ。でもそれは今日までの技術の発展が土台にあるからこそだ」

「……」

「だから、上やんのいる世界が俺たちと同じ世界なんてことはまずあり得ないはずだ。俺たちの世界ではアレイスターと茅場は何がどうなっても同じ時間に地球に存在した事実はない。どうやったって時間軸に辻褃が合わなくなるんだ」

「……そうだね。あたしもなんとなくだけど、そんな感じはしてた。並行世界かもしれないって言い出したのはあたし自身だし、何より過去の事象や出来事に矛盾や謎が多すぎたから……」

「SAOを生き抜いたはずなのに目を覚まさない約6000人に：現実に戻った2人：そしてその人達を救う鍵があるかもしれないというALOの世界樹：そして学園都市という学生の街：正直どれをどう考えても繋がらない」

「SAOに囚われた人達を助ける術がなんでわざわざ別のゲームであるALOにあるの？もし仮にそれがあったとして、本当にあたしたちの世界のALOにあるの？だとしたらなぜ、上やん君の世界の人達を救う術がなんであたしたちの世界に流れ込んで来たのか……」

「考察するにはあまりにも状況が混沌としすぎている。上やんに至っても俺たちは上やんという『人物』は分かっている、彼という人間の『正体』ははつきりと分かっているからな……いずれにしても問題は山積みのままだ」

「そうだね、今日のサラマンダーの一件もあったし……」

「……？いや多分アレはこの件とは何も関係ないと思うぞ？」

「え？ど、どうしてそう思うの？」

「だってサラマンダー達が狙ってたのはあくまで『俺たち』であって、『上やん』には何も言及していなかったじゃないか」

「……待ってよ……それじゃあ……」

ピリリリッ！ピリリリッ！

直葉の頭の中では、予想し得る最悪の事態が予感されていた。すると、まるでそんな彼女の不穏な予感を煽るようにテーブルに置かれた彼女のスマホが着信を知らせた

「長田くん…レコンからだわ…!」

ピッ!

「もしもし!長田くん!」

『あ、もしもし!直葉ちゃん!?大変なんだ!シングルドの野郎、僕たちシルフのことを売りやがったんだよ!』

「その売った相手はサラマンダーで間違いない!」

『え?う、うん…でもなんで直葉ちゃんがそれを…』

「そこはいいから!それで連中は一体何をするつもりなの!」

『襲撃だよ!直葉ちゃんも知ってるでしょ!?!明日行われるシルフとケットシーの間で結ばれる同盟条約の会談場をサラマンダーの軍隊が襲撃するつもりなんだ!!』

「……………えっ?」

第32話 雷神

「みこ・・・と・・・？」

「やつほ、久しぶり。元気してた？」

ドアを開けた先にいた彼女、御坂美琴はそんな軽い挨拶をして上条に手を振った。そしてその当の上条は彼女の出現に呆気に取られ、まるで亡霊でも見るかのような目で彼女を見つめていた

「そんな・・・そんなハズあるか！だって・・・だって今お前は・・・！」

ガシツ!!

「あ」

??ビキビキビキツ!!

?!?!なっ?!?

「おーあ、こんな簡単にバレちまうとは・・・やつぱその右手の前じゃこんな術式はカモフラージュにもならねえか」

驚愕する上条が思わず乱暴に美琴の肩へと両手で掴みかかると、彼の右手が触れた彼女の左肩から音を立てて彼女の身体にヒビが入った

「お前！美琴じゃないな！誰だ?！」

「やれやれ、結局こうなるのか・・・まあ致し方ないか・・・」

すると御坂美琴という幻想の殻が粉々に砕け散り、その内側から長い金髪に白い肌の、女性的な印象を持つ少年が全身をさらけ出した

「一先ずは『雷神 トール』・・・とでも自己紹介しておこうかね・・・」

「雷神・・・トール・・・」

トールと名乗る少年は、黄色と黒を基調にしたピツタリとした上着とズボンを着用し、肩には黒のストールを巻いていおり、どこか飄々とした風貌の男だった

「……で？その雷神様が一体俺に何の用だ？」

「まあまあ一旦そういう話は置いておいて……ところでどうだい？一瞬とはいえ焦がれ続けたみこっちゃんの顔が見れて嬉しかったかい？」

「ツ!!テメツ……!!」

「おつと」

ブンツ!!バシツ!!

トールの言葉にブチ切れた上条は我を忘れ、怒りのままにトールの顔面を右拳で殴ろうとしたが、あっさりとトールの掌で掴まれてしまった

「チイツ……!!」

「おいおい、そうカツカすんなよ。こっちは何も戦争しに来たわけじゃないんだ」

「……もう一度だけ聞く。何が目的だ？」

「やれやれ、まあとりあえず一旦落ち着いて冷静になれって上条ちゃん。ほら、右手も離すから」

パツ……ストーン……

「そら、立ち話つてのもなんだろう。そこまで俺の用件が聞きたいなら付いて来いよ」

「……望むところだ」

—————

「……何これ？」

一旦宿を出た上条当麻は今、ルグルーの街中にあるハンバーガー

シヨップで遅めの夕食にありついていた。そのこと自体にはさして問題は無いのだろう。なぜならキリト達がログアウトした後、自身のこれからの過ごし方の計画の一つに夕食は真っ先に出てきたからだ。しかし、問題になっているのは…

「何って新発売のサルサバーガーセットだぜ?…うえっ、個性を強く出そうとし過ぎて味がメチャクチャ濃いなこれ。ていうか辛い!!なんだかんだでベストセラーのラージバーガーがなくなるなら理由が良く分かる」

「そうじゃないよ馬鹿じゃないの!? さっきの一触即発の雰囲気はどこにいったの!? あの雰囲気からして俺達っ! 超っ!! て・き・ど・う・し!! サシで顔合わせてのんびりご飯食べている構図がおかし過ぎるっ!!!」

「いや、一触即発ってのは正しくないだろ。上条ちゃんが殴ってきた時点でもうそりゃ一触即発の空気打ち破ってケンカに突入してんだよ」

「んな細けえこたあどうだっていいんだよ!」

そう、問題となっているのは先ほどまで宿屋でいがみ合っていた雷神トールとこうして2人でハンバーガーを食べているというこの構図そのものである

「なんだなんだ。ちよつと話をしようぜってのがそんなにおかしいかよ? それともアレか? 俺がみこつちゃんに化けて出てきたのがそんなに許せなかったのか? もつと背丈が小さくてしかも巨乳の保護欲丸出しの女の子だったらあのまま自室のベッドに押し倒して熱い一夜を過ごしてたかい?」

「舐めているのかね?」

「だからそうならねえように配慮したんじゃないか。わざわざお前の最もよく知る女の子の一人に姿を変えてよ」

「あれ、どういう理屈なわけ?」

「魔術について詳しく語ったって理解できねえだろ。まああれだ。北欧神話じや自分の武器を奪われた雷神が、盗人をおびき出すために美貌の女神フレイヤに化けるっつー話があつてな。そこらへんの伝承を基に変装術式を組み上げたってわけだ。その関係で女の子にしかなれねえがな」

「それで美琴に化けた訳か」

「まあ上条ちゃんの幻想殺しに触れた瞬間に一発でおじやんになったけど」

「・・・で？俺に対する用件つてのは一体なんだ？」

「ん？ああ、そうだそうだった」

するとトールは手に持ったハンバーガーを包み紙に丁寧に包み直し、お盆の上に置くと、喉を鳴らし真剣な面持ちで上条に向けて言った

「俺は上条ちゃんとケンカしに来ただけだ」

「・・・それで俺が『はい、そうですか。じゃあ一つ拳でよろしく』なんて言うとも思ったのか？」

「いいや、思うさ。これからする話を聞けばな」

「話？」

「みこっちゃん達が今一体どこにいるのか知りたくはねえか？」

「!!!」

「ついでに俺の身の上話も聞いてもらう。質問も自由にしてくれて結構だ。俺が知ってることで話せることは可能な限り話す。それを上条ちゃんが聞きたいってんなら俺は喜んで話そう。だけど代わりに、俺のケンカに付き合ってもらおう。どうだ？」

「ケンカつてのは…殺し合いか？」

「そりゃケンカした時と場合によるな」

「・・・分かった。話を始めろ」

上条は少しの間自らの選択を考えると、トールを真っ直ぐに見据え

てそう答えた

「まずは、俺たち『グレムリン』の話だな」

「グレムリン？」

「この世界…ALOには俺を含めて3人の構成員だけがログインしている。ちなみに活動拠点は上条ちゃんもお察しの通り世界樹の上だ」
「そうかよ…その話を聞く限り、アルンに転生出来る空中都市があるなんて全部嘘っぱちか…」

「そうだな。そんなのはこのゲームの売り文句に過ぎない。そのグレムリンは俺を含めて…まあ軽く100人以上はいる魔術師の組織さ。結論から言うなら、このALOつー世界そのものを作ったのは俺たちグレムリンだ」

「なるほどな…だからこのゲームの魔法は俺たちの世界の魔術と似通ったところがあったのか…」

「そうだな。そして俺たちグレムリンの目的は『オティヌスを魔神として完成させ、その力で自分達の望みを叶えてもらう』ことだ」

「オティヌス？一体誰だ？」

「まあ簡単に言えばグレムリンのトップ…俺の上司であり魔術を究めた者…いわゆる『魔神』だ」

『魔神』…ね…要するに魔術の神様ってことか？」

「そこはさして重要でもねえから大雑把に話を済まして先にいきえてえんだが、俺たちがこの世界を作った目的は『主神の槍』を完成させる為だ」

「ぐんぐにる？」

「北欧神話の最高神、オーディーンが扱っていたとされる伝説の槍を模した霊装さ。そこでこっからがかなり理屈めいた話になるんだが、いいか？」

「ああ、構わねえよ」

第33話 全ての真相

「まあなんで槍が必要かって話になるんだが、そもそも魔神の力つてのは強大過ぎてな、オティヌスの力を整えるために槍が必要なんだよ」

「強大過ぎるって…どう言う理屈だ？単純に魔術の神だから魔神なんだろう？魔術を究めてんなら、霊装なんか頼らずにそれを制御できてこそその神なんじゃないのか？」

「それがそう簡単にもいかねんだなこれが。オティヌスは魔神であるが故に『無限の可能性』を持ってんのさ」

「無限の可能性？」

「まあやろうと思えばなんでも出来る…程度に思ってくれりや結構だ。だが、無限の可能性を持つってことはとんでもなくリスクなことでもあんのさ」

「はあ？なんでだよ？何でも出来るんだろ？そのどこがどうリスクーなんだよ」

「それがジレンマなんだよ。無限の可能性があるってことは、あらゆる物事に対して『成功する可能性』も『失敗する可能性』も均等に持ち合わせちまってるんだよ」

「…なるほど、無限なだけであって100%の望んだことが出来るわけじゃねえってことか」

「そうだな。そしてその失敗の可能性を取り除き、オティヌスの魔神としての力を制御するのが…」

「主神の槍…ってことか」

「へー？察しは人並み以上にいいな？流石はアレイスターからSAOの真実を聞いてヤツをぶっ飛ばしただけのことはある」

「…それでそっちの身の上話は終わりか？」

「まあとりあえず一区切りだな。まだ話せることはあるが」

「なら一つ質問だ。なぜ俺たちのことをそこまで知ってる？」

「ああく…その説明をするにはまた面倒なんだけどよお」

「オティヌスはな…その魔神の力と魔術でもって『位相を好きなように改変出来る』」

「位相を…改変する…?」

「ああ、上条ちゃんも気づいてんだろ?このALOは上条ちゃんが生きてきた世界のALOじゃねえ」

「……」

「そう、このALOは真正銘、オティヌスが作った『位相』で、ついでに言うとお条ちゃんのツレが住んでる現実世界はオティヌスが作り変えて出来た上条ちゃんの世界とは異なる世界だ」

「なっ!?!」

「だけど、オティヌスだって最初にいた『元いた自分の世界』つつーのがあるわけだ。けどな、自分の力を使ってやたらめったらに改変し続けてた結果、ある日『元の世界』を思い出せなくなって、その世界に戻れなくなったのさ」

「そして試行錯誤の結果、『元いた世界とほぼ完璧に同じ世界』を作りあげたんだが、いかんせん魔神つてのは完璧な存在だ。『ほぼ』なんてもんじゃ納得できなくてな、その世界にどこか違和感を覚えた。その過程で出来ちゃったのが上条ちゃんのツレたちの現実世界だ」

「……」

「だから今度は『完璧な元の世界を作る』為に自分の無限の可能性を制御する槍を求めたのさ。つまるところ、オティヌスの目的は『元の世界に帰る』。ただそれだけなんだよ。SAOに囚われてた上条ちゃんならその気持ち分からなくもないだろ?」

「……で?俺の質問にそろそろ答えてもらおうか」

「そりゃー勿論、上条ちゃん達が槍を作るのに必要だったからだ」

「俺たちが…必要…?」

「何か思うところはなかったか?望んだものを作り出すことが出来る文字通り『万能の位相』…ありとあらゆる理論を超越した…『鋼鉄の城』」

「ッ!?!アインクラッド…!」

「そ。だから都合が良かったんだ。オティヌスの無限の可能性を制御

する槍は、オティヌスと同等の無限の可能性を持っていなきやならねえ。だから望んだものをありのままに作り出すことの出来る『インクラッドそのもの』を利用して槍を作り出すと考えたのさ」

「だけど…インクラッドはもうなくなつたはず…」

「確かに上条ちゃんとアレイスターの決着と共にインクラッドは崩壊を迎えた。だがそこにはインクラッドを生き延びた6145人がいたろ？」

「は？人がいたところでインクラッドなんて元に戻らねえだろ？」

「正確にはインクラッド自体が必要な訳じゃねえんだよ。本当に重要なのはインクラッドを創り上げる『要素』だ。だからオティヌスはインクラッドを生きた人々のインクラッドに関する『記憶』を槍に組み込む為に、上条ちゃんの世界のインクラッドで生きた6145人の意識をこのALOって位相に幽閉した…って訳だ」

「ツ!!テメエツ!!」

「まだだ。話は終わってねえ、まだ殴りかかるのは早いぜ上条ちゃん」
「……クソツ…」

そう短く吐き捨てると上条は殴りかかった拳を解き、立ち上がりかけた椅子に再び腰掛け直した

「さて、じゃあなんで上条ちゃんの世界のALOはノータッチで、ツレの世界のALOに俺たちがいると思う？おかしいとは思わないか？」

「……言われてみれば…なんでだ？なんで俺たちの世界じゃなくわざわざ二度手間になるようなことを…」

「そんなの簡単さ。このALOって世界はSAOを生きた連中を幽閉しやすいようにSAOのシステムを参考にオティヌスが作ったものだからさ」

「…意外だな、魔術師ってのはそんな機械仕掛けなことも出来るのか」

「『十分に発達した科学技術は魔法と見分けがつかない』なんて言葉がある。逆もまた然りさ」

「・・・なるほど」

「付け加えるなら『合理的な規模を超えた物は存在した時点で魔術的意味合いを帯びてしまう』ってとこだな」

「・・・『宇宙エレベーター』と同じか」

「ま、そんな感じだ。まあ多少足りない部分は魔術で補わさせてもらったけどな」

「・・・で？話を戻せばなんでそもそも俺がいた世界のALOはノータッチでわざわざこのキリト達の世界のALOでそんなことを始めたんだよ。別にわざわざ他の世界でやんなくても俺たちの世界側でやりや良かっただろ」

「そりや上条ちゃんの世界のALOはこっちの世界で俺たちがALOを創り上げる前に、SAOとはなんの関係もない『ただのゲーム会社』の社員の誰かが作った真正銘ただのゲーム』だったからだ。だから別の世界でやろうってことで上条ちゃんのツレの世界に白羽の矢が立ったわけだ」

「はあ!?それこそおかしいだろ!こっちの世界のALOには前にインデックスが来てんだぞ!」

「おいおい知らねーのか?今や上条ちゃんの世界じゃ魔術サイドは覇権争いの真っ只中なんだせ?」

「そ、そりやインデックス達から聞いて知ってるが...それとこれとで一体なんの関係が...」

「アプローチの仕方は違えど、俺らグレムリンも魔術組織の端くれだ。その覇権争いに参加しないと思うか?」

「!?ま、まさか...!」

「ああ、今の混沌とした魔術サイドの状況なら、イギリス清教にスパイを送り込むなんざウチの魔神様の采配をもってすれば造作もないことだ。禁書目録のALOのソフトをウチらのALOにログインするソフトにすり替えさえしまえば、後はほっといても俺らのALOにログインするって寸法だ」

「SAOに囚われた人達だけじゃなくインデックスまで...!」

「そしてこっちの思惑通り、禁書目録のALOが上条ちゃんの手へ渡

り、招かれるべくして上条ちゃんがこの世界に来た…ってことだ」
「……」

「だが、そうした後で手違いが起こってな。上条ちゃんには元からその右手があるからこっちの世界に無理やり引きずり込めないのは分かった。その他にもう1人、S A Oの世界でシステムや世界の理…位相の枠を超える力を持ったヤツがいた。ソイツだけは正直迂闊に手を出せなくてA L Oには幽閉できなかった」

「…なるほど…それが俺の他に世界に戻ったもう1人…さしずめ…一方通行か？」

「ああ、ご名答。だがそのA L Oに幽閉できなかった学園都市第一位の力が嬉しい誤算だった。S A Oプレイヤーの記憶からアインクラッドを再現していく過程で、75層のエイワスと一方通行の戦闘の痕跡が掘り起こせた。そして上条ちゃんも知つての通り、アイツはの力は、アレイスターがS A Oの世界そのものを肯定させる『ピース』だった」

「おかげでその『天使の力』をも超える力をそっくりそのまま組み込まれた槍は完成に大きく近づいた挙げ句、布石を打っておいた後で上条ちゃんの幻想殺しはお役御免になった訳だ」

「…で？もはや俺の幻想殺しはあらゆる世界の基準点になる邪魔な物でしかないから潰しに来たってか…？」

「ま、そんな感じだ。スパイを送り込んでまで打った布石は無駄足になっちまった。だがその右手をそんなに疎ましく思うなよ上条ちゃん。上条ちゃんがこの世界に来た時、最初っからステータスがバカみたいに高かっただろ？」

「ああ…S A Oをクリアした時のステータスと全く同じだった」

「あの理屈は結構簡単でな、上条ちゃん今学園都市の病院のメディキュボイドでログインしてるだろ？」

「!?な、なんでそれを…！」

「そりやそのステータスが何よりの証拠さ。上条ちゃんはS A Oに口グインするためのナーヴギアの電源をずっと病院から引っ張って病室のベッドで寝てたよな？」

「ああ」

「だからナーヴギアのセーブデータ自体は病院のコンピュータに残ってんのさ。そらそうだろ？あの病院は何人もSAO患者を抱え込んでんだから電源もデータメモリも一括管理した方が都合がいい」

「それで同じ病院のメイキキュボイドにログインしたから病院の管理するデータに保存されてる俺のSAO時代のデータが引つ張られてきて、SAOサーバーのコピーであるこのALOにそのまま書き込まれたってことか…」

「ひゅー♪これまたご明察。まあそうじゃなきゃ俺たちも困るんだがな。ただの一般プレイヤーの上条ちゃんが来ても俺たちには何の得にもならねえからな。『幻想殺し』を持った上条ちゃんをALOにログインさせるにはそれが一番手っ取り早かった。まあでもいいだろ？最初っからそんだけ強いんだから面倒な育成もしなくてすんだろ？」

「なるほどな…まあお前のいう通りステータスがそのままのおかげでALOでの冒険は余計な手間が省けた」

「まあ、って訳で…粗方の事は話し終えた。約束通りいっちょ俺と殴り合ってもらおう」

「…言われなくてもそのつもりだ。表に出ろ、拳で語りてえことが有り余ってる」

「ヒュー、こりゃ想像よりも楽しいケンカになりそうだ」

こうして上条とトールはハンバーガーショップを後にし、ルグルーの町外れへと向かっていった

第34話 VS雷神

「街から出るぞ、ここじゃ人目につきすぎる」

「いや？人目なんて別にどうとでも出来るからそんなに気にしなくていいぜ？ほら、そこんとこの広場なんてどうだ？」

ハンバーガーショップを後にした上条とトールは互いの戦いの為の場所を探していた。するとトールは街の中にあるそこそこ広い空き地を指定した

「なるほど、人払いか…懐かしいな…」

「まあこういう時の為のモンだからな。これで周りの人目を気にせず存分に暴れられる」

「おいおい、確かに人の心配はしなくていいけどオブジェクトの破壊はどうすんだよ？」

「んなもんウチの魔神様がその内勝手に直すよ」

「そうかよ…で？形式はデュエルでいいのか？ここは中立域だから…って要らねえ世話か…ここは仮にもお前らの世界だもんな」

「ああ、俺はそもそもどの種族にも属してねーから中立域もクソもねえし、上条ちゃんには幻想殺しがあるから何の問題もない。けどね、余裕ぶっこいてたら死ぬぜ？」

「おいおい、SAOじゃないんだぞ？ここは？俺が使ってるのはナーヴギアでもねーのにどうやって殺すんだよ？」

「まあ見とけて」

そう言うトールは、何もない空間に手をかざすと、その手の先に上条も見慣れないウインドウが現われた

「管理者権限、システムコマンド『ペイン・アブソーバ』をLv. 0に」
ピピピピピピピッ……シユン…

ツールがウィンドウをいじくり、そう指示を出すと、ペイン・アブソーバと呼ばれるシステムの10を指していたゲージが一気に0まで減少した

「？」

「さ、上条ちゃん。騙されたと思って一回頬を思いっきりつねってみろよ」

「・・・こうか？」

グニツ!!

「痛っ!?こ、これ…これじゃまるで…本当に現実の自分の頬をつねったような…」

「そういうもんだ。普段はこのペイン・アブソーバはLv. 10に設定されててな。そのレベルじゃ攻撃されても攻撃されたところにちよつと違和感感じる程度なんだが、今のLv. 0の状態だと、現実の自分の痛覚からダイレクトに切られた痛み、殴られた痛みが生じる」

「なるほどな…そりゃ嫌でも全力で戦わざるを得ないな」

「そういうことだ。だが気をつけろよ?いくら上条ちゃんがメデイキュボイドでログインしてるとはいえ、今のままで死ぬまで攻撃受けたら勿論現実じゃショック死するぜ?」

「そうかよ…だが、それはお前も同じなんじゃないのか?お前はやろうと思えば自分は例外に設定することも出来るだろ」

「いや、そんな白状な事はしねえよ。俺は正々堂々としたケンカが好きなんだね。なにより、そんな命を懸けない戦いは経験値にならねえよ」

「なら、手加減しねえぞ…」

そう言うの上条は自分の背負った盾を左腕に構え、深く腰を落として臨戦態勢を取った

「手加減なんざ、した瞬間に首が飛ぶと思つた方がいいぜ?上条

ちゃん」

「……………」

「……………」

「!!!!」

「!!!!」

ドウツツツツ
!!!!!!

語る言葉がなくなつた上条とトールの間に無言の空間が訪れたかと思えば、今度は一瞬で殺伐とした空気が辺りを包んだ。そして両者は思いつきり地面を蹴り、相手の懐に飛び込んでいった

「おおおおおおお!!!!」

ドツゴオオオオオオオオオ!!!!!!

「くっーっ！おおおおおっ!!!!」

「づっーぬあああああつ!!!!」

突進の勢いそのままに上条の右拳とトールの右拳が激突し、世界がまるごと激震し、およそ拳がぶつかっただけとは思えないほどの轟音が響いた

「クツソ…マジで痛つてえな…」

「そりゃこっちのセリフだつつの…初撃でこの手応えか…こりや期待できそうだ…楽しませろよベイビーー!」

ブオオオオオツ!!!

「ツ!?なんだ!?!」

拳がぶつかり合つた衝撃と痛みにたまらず後ろに退く両者。しかし、トールはそんな状況をも楽しんでいるようにほくそ笑むと、自分の右手を真横に差し出し、その五本の指先から五つの青白い閃光が飛び出した

「ほらよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつっつ!!!」
ジジジッ!!!ガリガリガリッ!!!

トールがそのまま右手を掬い上げるように振るうと、指先の閃光と接した大地を高熱で溶かしながら上条へと迫っていった

(あれは…電気かつ!?!指先から放電してその熱で溶接や溶断に使うようなバーナーを…!アレじゃ盾も意味ねえ…!当たれば一瞬で真つ二つだ…!)

トールの指先の閃光と抉られていく地表を見てそう判断した上条は、五本の溶断ブレードから逃れるように横に飛び退き、その勢いそのまま飛び前転で受け身を取って回避した

「よく避けたな上条ちゃん!ならこれでどうだ!?!」

ブオオオオオオオオツツ!!!

今度は五本の溶断ブレードが周りの建造物を輪切りにしながら横薙ぎに振るわれる。その一本一本のブレードの全長はゆうに100メートルまで達していた

「くっ…!」

しかし、上条は冷静に状況を判断し横薙ぎに振るわれる溶断ブレードを腰を低く落とすことで回避した

「もらったあつ!!」

ブオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!!

「おおおおおおおおおおおおつ!!!」

ブンツ!バキイイイインツ!!!

根こそぎ建造物を薙ぎ払った溶断ブレードを放つ右手が真っ直ぐに突き出され、今度は真っ直ぐに五本の閃光が射出される。しかし、これを上条は己が右手を振るい、全て打ち消してみせた

「ビューー！流石だ幻想殺し。だが魔術を打ち消せるだけでいい気になつてたら俺は倒せねえよ」

ビュンツ!!!

直後、トールはその脚にありつたけの力を込め地面を蹴ると一瞬で上条に肉迫し、彼のこめかみ目掛けてハイキックをしかけた。そしてその脚が上条の側頭部に直撃するかに思えたが…

ガアンツ!!!

「ツ!?なんっ!?」

「そつちこそ勘違いすんなよ。どんな魔術があろうが、所詮ここはゲームの中だ。俺の反応速度と敏捷は現実とは比べ物にならねえし、盾を使った防衛なら死んだら終わりのあの二年で嫌になるほど身についてんだよ!!」

ドゴオオオオオツツツ!!!

「あがつ!?はっ?!?!?」

トールの蹴りはいつの間にか彼の顔の前に割り込んでいた盾によつて阻まれた。そして、モーシヨンの大きいキックを防がれた為、バランスを崩し隙だらけになつた彼の腹部に上条の右手が突き刺さつた。そしてトールのHPが減少しながら、その身体もゴロゴロと転がっていったが、受け身を取ることで体勢を立て直した

「逃すかつ!!」

ブンツ!!バシンツツ!!!

「ツ!?なにつ!?」

「こつちだつて仮にも神の名を冠する『雷神トール』を名乗つてんだ。

こんな簡単にやられてたまるかよ」

ズドンツツ!!!

「ごはっ!?!」

「どおらあああああつ!!!!」

バキイイイイイツツツ!!!

「うおわあああああつ!?!」

追い打ちをしかけた上条の右拳をトールはがっちりと掴むと、その手を離さず、上条の腹部に膝蹴りを叩き込んだ。そして左手の拳で彼の顔を殴り飛ばした。そして驚くことにその二撃のみで上条のHPは一気に危険域へと達していた

「ごほっ!ごほっ!クソツツ:いくらなんでも重すぎだし効きすぎだろ...」

「悪いいな、俺にこの『力帯』がある限り、俺は聖人レベルの怪力が発揮できるんだよ」

そう言つてトールは自分の腰に巻かれているベルトのようなものを指差した。それは北欧神話に語り継がれる『トール神』その人が扱っていたとされる通称『メギンギョルズ』である

「ははっ、聖人ね...今の喰らえば神裂のが可愛く思えるぜ...」

「感傷に浸つてるとこ悪いが、今度はそれだけじゃねえぜ」

『『投擲の槌』』

トールがその名を呟くと、彼の周りの空気が一変し、彼が纏うオーラも先ほどまでとは比べ物にならないほど強力なものに変わったのがピリピリと張り詰めた空気を通じて上条にも伝わってきた

『『ミョルニル』:魔術の知識はからつきしの俺でもその名前だけなら知ってる...北欧神話の雷神トールが使っていたっていう...』

「そうだ。まあ俺の『投擲の槌』はちよつと特殊でな。現実にいる俺たちの仲間の一人から魔力の供給が受けられるって代物だ…まあ何はともあれ、これが『雷神』の本気…」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
!!!!!!

「これがお前に受け切れるか?!?上条当麻あああ
!!!!!!」

トールの両手の指先から全長2キロはあろうかという溶断ブレードが噴き出した。そしてその計10本の閃光が斜めに振り下ろされ、空間を引き裂きながら巨大な十字を描き、上条へと襲い掛かった

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「……………」

しかし、上条当麻は自身が焼き裂かれる危機が目の前に迫っても微動だにしなかった。なぜなら既にそれを見ただけ直感したからだ。このトールの一撃は一方通行の『黒い翼』と同様、あらゆる幻想を殺す右手でも殺し切れぬ一撃であると

「……………そうかよ」

オオオオオオオオオオオオ……………

微動だにしなかった上条が最初に動かしたのは口だった。どこからともなく風が吹き荒れ、彼の周囲の空間が萎縮した。そんな囁くほどの声の中で、重く威圧するような力を持った「何か」が彼の内側から顔を出した

「だったら、俺もこっから先は『本気』でやらせてもらう」

バオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ
!!!!!!

霧散した。雷神ツールが『投擲の槌』から魔力のバックアップを受けた上で放った最強の10本の溶断ブレードが跡形もなく散った。上条の周りの萎縮した空気が一気に爆発し、幻想殺しなどでは到底打ち消しきれない巨大な熱の刃をいとも簡単に掻き消した

第35話 全能

「・・・嘘だろ」

ギオオオオオオオオオツツツ!!!

唸る、程度の形容では失礼極まりないだろう。雷神の持つ極上の溶断ブレードをいとも簡単に散らした『見えない何か』はおぞましくも勇猛に吼えた。ビリビリと空気を震動させるような雄叫びと、張り詰めた重圧が辺りを包む。その空気に触れたトールは、細胞が一瞬で凍りつくような感覚に思わず身震いした

「・・・いいね…ソレだよ…これ以上ない経験値だ…ソレを超えれば俺は…」

語り継がれし北欧神話。その神話に存在する神々の中でも名高き「雷神 トール」。しかし、今でこそ雷神と称される本来のトール神とは、農耕、製造、気象、災害というありとあらゆる全てを司る「全能の神」

「上出来だ上条当麻!!こんなに後腐れなく『全能』を解放できんのは初めてだぜ!!」

屈託のない笑みを浮かべたトールは、かの神話で『全能』と称されたトール神の能力を再現するが如く組み上げた術式を発動する。それは「必ず勝てる位置に移動する」術式。トールを事象の中心に置き、彼が動くのではなく、相手を含めた世界全体が動くという全能の名に恥じぬ反則じみた術式

「おおおおおおおおおつっつ!!!」

ドウンツツツツ!!!

「・・・あは、ははは・・・まさか俺の術式ごと動いた世界を食い潰して世界の位置を元に戻すとはな・・・あく痛つてーなちくしょう・・・」

自分の術式が完全に破壊されたと理解したトールは呆れたように渴きながら笑っていた。そして右腕が消し飛んだ痛みを誤魔化すように肩口に自身の左手を当てた

「どうする？まだやるか？」

「ははは、やるならやれよ。やるつーか『殺る』だけだな・・・全く何が経験値だ・・・経験値にすらならねーよ・・・こんな完膚なきまでに圧倒されちやよお・・・ほら早く殺れよ。自分が救いたい人達を奪っていった連中の首だぜ？」

「・・・行けよ」

「・・・は？」

そう言うと上条は呆気にとられるトールを他所に、自分の右手から出た透明で見えない「何か」を自分の内側に戻した

「別にお前を倒したところでみんなが戻ってくる訳じゃねえだろ。それ、さっきのが真正正銘お前の本気なんだろう？だったらこの先どこでお前が立ちはだかろうと俺には関係ねえよ」

「・・・あつはっは！相変わらず甘いな上条ちゃんは・・・だがいいねえ、ここまで完敗させられた上で情けをかけられたつーのに、今は逆にこれ以上ないぐらい清々しいぜ・・・負けを認めるつてのも存外悪くない」

「だけど覚えとけ。今度俺の前に現れてみんなを救う邪魔をするなら、次は容赦しない」

「あいよ・・・まあそうならないように、次会う時までにはもちよい経験値積んで強くなっておかねーとな・・・」

『減らず口はその辺にしておけよ雷神』

どこからともなく声が聞こえたかと思えば、まるで亡霊のような何かが2人の間に何かが割って入るように現れた

「ッ!? 誰だっ!？」

「・・・ちっ、なんだ来ちまったのかよ『オティヌス』」

魔神オティヌス。御伽噺にいる魔女のような尖った三角の帽子に、片目を隠す眼帯。革の装束の上からさらに羽織ったマント。そして露出の度がすぎるまるで下着のような服。そんな見た目14歳程度の少女が一瞬にして目の前に現れた。その少女は、片方しかない瞳を動かして雷神ツールと上条を見た

「ッ!!？」

その視線に上条は気圧されていた。常軌を逸したその佇まいは北欧神話の最高神の名に恥じぬ迫力だった。アレイスターを目の前にした時とはまた違った感触だった。彼の時は強さの中にどこか不気味さが混じっていたが、彼女は違う。微塵の不気味さもない純粹な戦える次元の違いだった。ただただその雰囲気圧倒されていた

「まだ槍の製造途中だったのにこんな場所まで来てよかったのか？」

「誰のせいだと思っている」

上条はその出で立ちを見るなり、これならツールの言っていた魔術を極めた神であり、世界を創造し、作り変えるほどの力があると納得できた

「だよな…まあ失敗したよ。俺じゃ無理だ」

「私は幻想殺しを消せと命令したはずだが？オマケにこちらの内情を幻想殺しはいくらも既に理解していると見えるな」

「やるならやれ」

雷神トールはつまらなそうにそう言って魔神を司る少女の瞳を真っ直ぐに見据えた

「・・・そうか」

ズドンッ
!!!!

「ッ?!?!」

「・!?!・へっ・・・あばよ、上条ちや・・・」

ゴオオオオオオオオオオ・・・

「トーーーーーールウウウーーーーー!!!」

鈍い音と共に、いきなり雷神トールの首が切断された。その生首が宙を舞いながら燃えていき、頭が燃え終わったのと同時に残された身体も燃え上がった。しかしそこには、このゲームの死者の魂であるリメンライトは残っていないかった。つまり、雷神トールは真正銘この世を去ったのだ

「なに、そう心配そうな顔をするな幻想殺し。雷神トールという『存在』そのものをなかつたことにしただけだ。痛みなど感じる暇もなく楽に逝つただらうさ」

「テンメエエエエエエエエエエエエ!!!」

「フツ・・・悪いがその右手は私には届かんよ」

シュンッ!!ブンッ!

「クソッ!!逃げるのか!?!オティヌス!!」

激昂して少女に右拳を振るつた上条だったが、オティヌスは転移結晶を使ったかのように姿形が消え、上条の右手が空を殴った。姿の見えなくなった魔神に向かって叫ぶと、どこからともなく少女の声が聞こえて来た

『なにも別に逃げる訳ではない・・・君を葬ることなど造作もないこと

だ。だが不幸な貴様なら分かるはずだ、私の身体は今も「無限の可能性に含まれる負の50%」などという菌痒い枷に悩まされている。槍の完成の手前まで来ているというのに、こんなところで表か裏かのコイントスに興じるほどバカじゃない』

「槍が完成するならSAOから幽閉したみんなはもう無関係のはずだ！槍が完成したらみんなを解放しろ！そうすりや自分の元いた世界を戻すなり作るなり自由にすればいい！」

『雷神め…余計なことをベラベラと…残念だが槍は完成しても彼らを解放することは出来ない。彼らはそもそも槍を構成するアインクラッドそのものを再現する為のピースだ。槍が完成した後もそのピースとしての役割を果たしてもらわねば槍が崩れてしまう』

「だったら俺が力づくでも取り戻すぞ！世界樹の上で首を洗って待つてやがれ！」

『それは好都合。私も少々「世界の基準点」である貴様の右手を疎ましく思えていてな。槍の完成の後わざわざこちらから出向く手間が省けるよ。まあ、君がグランドクエストをクリアして世界樹の上まで登れるかどうかは知らんがな』

「んなもん知るかよ…グランドクエストだろうがなんだろうが…テーマのその身勝手な幻想は必ずぶち殺して俺はみんなを助け出す！そして絶対に元の世界に帰るからな!!」

『そうか、ならば健闘を祈るよ。精々足掻けよ、幻想殺し』

そう最後に告げると、少女の声が消え、代わりにルグルーを行き交う妖精達の喧騒が聞こえて来た

「人払いが解けたのか…トールはああ言ってたが、このオブジェクトが戻るにはまだ時間がかかるだろうな…変に目立つ前に宿屋に戻るか…」

そう思い広場から離れようと一歩踏み出したその瞬間、後ろから自

分を呼ぶ声が聞こえた

「あつー！ やつと見つけた！ 上やん君！」

「え、リーファ!? なんだお前ログアウトしたんじゃないのか!? ていうかここオブジェクトがいくつも壊れてて危険だからとりあえずここを離れた方が…」

「そんなことどうでもいいの! とにかく大変なの! このままじゃ種族同士の戦争が起きるかもしれない! そうなったらとても世界樹攻略なんて出来る暇がないの!」

「・・・おう?」

第36話 道は違えど

時刻は午前10時半。日曜のこの時間であるならば多くの者は休日を謳歌し、寝て過ごすなり、家族や友人と遊戯に浸るなど今日という日の過ごし方はそれぞれであろう。そんな中、上条、キリト、リーファ、アスナの4人はALLOの中立都市ルグルーのとある酒場で飲み物も頼まず話し込んでいた

「えーっと、アスナもコッチにログインして大体の事情を聞いたことだし一旦話を整理すると…」

「俺が昨日スイルベーンの塔でぶっ飛ばしたあのシグルドってヤツをレコンが怪しく思ってたところ、実はシグルドのヤツはサラマンダーと内通してて」

「うん」

「この後一時間足らずで『蝶の谷』を抜けたあたりの場所で始まるシルフトケットシーの同盟条約が調印される領主会議をサラマンダーの大部隊が襲おうとしていて」

「おう」

「もし仮にシルフトケットシー両種族の領主が討ち取られたら、もちろん同盟は破談、シルフト側から漏れた情報のせいで領主を討たれたらケットシー側も黙ってない。下手したらシルフトケットシーで戦争になるかもしれないと」

「うん」

「それに加え、領主を討ち取ったサラマンダーは領主下に蓄積される資金の3割を入手出来て、10日間街を占領して税金を自由にかけられる。そうなればサラマンダーは十分な資金操りでもって万全の状態です世界樹攻略に挑めると…そういうことだな？」

「うん。間違いないよ」

「おいおい…それ本当にゲームの規模の話かよ…」

（ま、そんだけの戦力集めたところで本当に世界樹が攻略できるのか

…正直あのオティヌスの口振りからじゃ分からないな…」

「だからね、上やん君。これはシルフ側の問題なの。あたしはこれからシルフのみんなを助けに行かなくちゃ。だから上やん君はアスナさんとお兄ちゃんと一緒に世界樹まで行って。あたしも追いつければ追いつくけど…多分会談場に行ったら生きて帰れないわ。領地のスイルベーンまで死に戻りになるから…あまり期待はしないで」
「リーファ……」

「もつと言うなら、世界樹を攻略したいなら上やん君はサラマンダーに協力するべきだと思う。スプリガンの上やん君なら傭兵として雇ってもらえるかもしれないから」

「…よし、なら話は早いな。俺も領主会談場まで行くよ」

「「えっ!?!」」

「え?なんかおかしいなと言ったか俺?」

上条の決断に驚いた3人に対して上条はキョトンとしながらそう聞いた

「ツ!!見損なったぞ上やん!確かに君には世界樹までどうしても行かないといけない事情があるかもしれない!だけど、だからと言って俺たちをここであっさり切り捨てる上にスグ達シルフを踏み台にして行くのか!」

上条の態度に激怒したキリトが思わず上条の襟首に掴みかかり、自分の怒りをありつけたけ上条にぶつけた

「ちよっ!?!やめてよキリト君!確かにキリト君の言いたい気持ちも分かるけど、上やん君の立場になって考えればその選択が現状一番早く世界樹の上に行ける選択なんだよ!」

「でもっ!!」

「おいおい早とちりするなよキリト。何も俺は領主会談場でサラマンダーに交渉して傭兵として雇ってもらいに行くわけじゃない」

「・・・え?」

そう言われて思わず襟首を掴む握力が緩まると、上条はキリトの手を下ろさせ、崩れた服を直しながら話を続けた

「むしろ逆だ。俺はサラマンダーからシルフとケットシーの領主会談を守りに行く」

「えっ!?で、でもそれじゃ・・・!」

「いやなに、もし仮にリーファと別行動するなり、サラマンダーに味方するなりしても、それじゃ結局どっちにしてもリーファを踏み台にしちまつてるからな。それはちよつと上やんさんのにも面白くない」

「で、でも・・・!上やん君には助けなきやいけない人たちがたくさん・・・!」

「それに、リーファが最初に約束してくれたんだぜ?」

「え?」

「俺を世界樹まで連れて行ってくれるって言っただじゃねえか。俺、リーファを嘘つきにしたくないし、ちゃんと俺を約束通り世界樹まで連れて行ってくれよ」

「!!!」

「!!・・・全く・・・本当にいつも無自覚でそういうこと言っちゃうんだから上やん君は・・・」

「いつも?いつもって何のことだアスナ?」

「当の本人がこれなんだから・・・はあ・・・ならこういうのはどう?上やん君とリーファちゃんはこの後すぐ会谈場まで救援に行く。私とキリト君はその分の時間ロスを少しでも緩和する為に先にアルンまで行って、少し覗く程度に世界樹のグランドクエストに挑んでみて情報を集める。どう?」

「・・・分かった。でも本当に覗くだけにしてくれ、世界樹の中で何が待ってるか分からないからな」

「よし、考える時間も惜しい。それでいこう。そっちの事はよろしく頼むぞスグ、上やん」

「オツケー。そつちも気をつけてねお兄ちゃん」

「ああ、任せてくれ。それと上やん」

「お?」

「すまん…さつきはつい早とちりして…胸ぐらまで掴んで怒鳴り散らして悪かった」

「気にすんなって。そりやリーファはキリトの妹だからな。こんなに可愛い妹なら大切に思うのも分かるし、逆にあそこまで妹の為に必死になれるんだ。俺もそういうヤツがパーティーに…仲間になってくれて良かったと思うよ」

「か、かわっ!?!/!/」

上条の何気なく言った言葉に思わず顔が赤くなるリーファ。そんな彼女を見て少し笑うと、キリトはもう一度上条に向き直った

「はは、そうか…。ありがとう。くれぐれもスグのこと、よろしく頼む」

「ああ、任せろ。ああ言った手前だ、何があっても俺がリーファを守る」

「頼りにしてるぜ、相棒」

「任せとけ、相棒」

ゴツンッ!

そう言っつてキリトが右手の拳を上条に向けると、その拳に上条が自分の拳をぶつけた

「さて、じゃあ行くぞリーファ。ほれ」

「…? ほれって?」

「いやだから、俺の手を握れって」

右手を出して自分に握手を求める上条の意図が掴めず、リーファは首をかしげた

「いやそうじゃなくて、なんでいきなり握手？」
「だって洞窟の中じゃ飛べないだろ？だからほら」
「いや『ほら』って言われても…まあいいけど…」

結局上条の求めた握手の意図が掴めずじまいだったが、リーファは
渋々その手を握った

「よし。しっかりと掴んどけよ？途中で振り落とされても知らねーぞ
？」

「え？」

バビュンツ
!!!!!!

「え？」

へいやあああああああ…!!

リーファの手をガツチリ握ると、上条はありったけの力で地面を蹴って走り出した。もはや音速にも近い早さで二人が目の前を通り過ぎた為、キリトとアスナは一体何が起こったのか理解できなかつたが、段々遠くなっていくリーファの悲鳴を聞いてようやく自分達の目の前を通り過ぎたのがなんだったのか理解が追いついた

「…えーつと…いくら何でも上やん君早すぎない？」

「通り過ぎる時フォーミュラカーみたいな音したけど大丈夫か？ありや早過ぎて逆にゴキブリなんて呼ぶのは失礼だな…」

「…リーファちゃん、大丈夫かな？」

「…さあ？」

第37話 領主会談

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお!!!」

「いやあああああああああああああああああああああああ
あああああああ?!?!」

ドドドドドドドドドドドドツ
!!!!!!

シルフ領から世界樹までたどり着くまでの一番の難所と言われる
ここ、ルグルー回廊では今、一人のプレイヤーが目にも留まらぬ早さ
で疾走し、一人のプレイヤーがその手にしがみつきながら勝手に引つ
張られ、悲鳴を上げながらではあるが、同じく目にも留まらぬ早さで
洞窟を疾走(?)していた

「出口だ!!!」

「えええっ!?!」

上条に言われ、リーファは手を引かれている間ずっと瞑っていた目
をようやく開いた。するとその先には、洞窟の出口から射し込む光が
見えたかと思えば、あっという間に洞窟の出口から外へ出た

バンツ!!

「とうっ!!!」

「うわあああああああああああああああああああ?!?!?!」

「ほらリーファ!早く翹出さないと落ちるぞ!」

「はわわわわわ!ほっ……」

しかし出口を出ると道がなくなっておりその先は崖だったが、上条
は崖で思いっきり跳躍し空へと飛び出した。そして背中から翹を出
し、飛行を始めると、それを見たリーファも慌てて翹を出し飛行姿勢

を整えると、ほっと胸を撫で下ろした

「寿命が縮むかと思ったわよ!?ってかもう縮んだわよ!!」

「ははは、なるべく時間はかけたくないからな…どわっ!?」

「え?急にどうしたの…うわっ!?おっいきい…これが…世界樹…?」

「こんなに近づいてやがったのか…」

洞窟を抜けて正面を見ると、二人の視線の先には天に向かって高くそびえ立つ世界樹があった。外にいれば世界樹は基本的にどこからでも見えるのだが、先ほどまで洞窟にいたせいかわorld樹を目にするのが久しぶりな上、ルグルー回廊を抜けたことでぐっと距離が近づいた為か、今までよりもさらに巨大に見え、二人は呆気に取られていた

(あの樹の上にオティヌスが…SAOから囚われた美琴やみんながいるのか…待ってるよ!全部終わらせてすぐに助けに行くからな!!)

「領主会談が行われる近くの蝶の谷ってのはどの辺なんだ?」

「え?えつと…確か…」

上条にそう聞かれるとリーファは左手を振って自分のウィンドウを開くと、マップ画面を表示し、自分達の現在地と領主会談場が行われる近くの蝶の谷の位置を確認すると、目指す先を指差した

「北西のあの山の奥よ!」

「会談が始まるまでの残り時間は?」

「えつと…あと20分…!」

「間に合うか?」

「私たちのトップスピードならなんとか…!」

「よし…飛ばすぞリーファ!はぐれるなよ!」

「そっちこそ!」

ギョーンッ!!ギョーンッ!!

一方その頃、会談場では6人のケットシーとケットシー領主「アリシャ・ルー」を含めた計7人のケットシーと、同じく6人のシルフとシルフ領主「サクヤ」を含めた計7人のシルフが対面用の長机に向かい、会談を始めようとしていたその矢先……

「お、おい……アレは……サラマンダーじゃないか!？」

「なにっ!？」

「どうしてサラマンダーがこんなところニ!？」

ズラリと領主会談場を取り囲むサラマンダーの大部隊。シルフとケットシーの両者が気づく頃にはもう既に完全に包囲され逃げ場がなくなっていた

「このままじゃ逃げられないヨ!」

「くっ……やるしかないのか……!？」

「……」

スッ……

シルフとケットシーの14人がそれぞれ武器を構え、臨戦体勢をとると、サラマンダーの軍隊の指揮官が片手を上げ、攻撃用意の指示を出す。そしてその片手が振り下ろされ戦いの火蓋が切つて落とされようとしたまさにその瞬間……!

ドオオオオオオオンツツツ
!!!!

「うおわあ!？」

「こ、今度は一体何だ!？」

「見たところプレイヤーみたいだね……でもあれは……スプリガン……?」

「……」

スクッ……

突如としてサラマンダーの軍隊とシルフとケツトシーの両者の間に、黒い何かが凄まじい土煙を巻き上げながら飛来した。やがて土煙が晴れると、そこには着地してからおもむろに立ち上がった上条がサラマンダーに睨みを利かせていた

「双方！剣を引け！」

ザワザワザワザワ……

「な、何が何やら……」

「サクヤ!!」

「リーファ!?!どうしてここに!?!」

リーファは翅を背中にしまい着地すると、自分の種族の領主であるサクヤの元へと駆け寄った

「えつと……簡単には説明出来ないの……ただ一つ言えるのは、あたしたちの運命は『あの人』次第ってことだわ」

「このサラマンダーを率いてるリーダー！出て来てくれ！話がある！」

上条がサラマンダーの軍隊に向けてそう叫ぶと、サラマンダーの軍隊が道を開け、その奥からゆつくりと一人の男が姿を現した。そして上条もその男と話をするべく、同じ目線で話せるよう翅を広げ飛び立った

「俺を呼んだのは貴様か？こんなところに何の用だ？どちらにせよ殺すことに代わりはないが、その度胸に免じて話だけは聞いてやろう」

サラマンダーの軍隊の奥から現れたリーダーの男は、ガツシリとした体格の持ち主で、装備品は周りのサラマンダーからは一線を画すほど絢爛な一級品の物で、その背丈は上条よりも一回り以上大きかった

「俺の名は上やん、見ての通りスプリガンだ。話を聞いてくれることには感謝する。俺の要求は簡単だ、今はあまり事態を荒げたくない。せつかく遠出してくれたところ悪いがここは穏便に軍を退いてくれな
いか?」

「そんな明確な理由もない要求をこちらが受け入れるとでも?」

「だろうな。だからこの要求を受け入れないならコツチにも考えがある」

「・・・ほう? 一体何だ? 言ってみろ」

「全員まとめてかかって来い。俺が全員ぶつ飛ばす」

「三・・・三」

「・・・クツ」

「アツハツハツハツハツ!!!」

ゲラゲラゲラゲラゲラ!!

上条の一言に周りが沈黙し、数秒の間が生まれる。しかし、サラマンダーの誰かが少し噴き出して笑った瞬間、上条の目の前のリーダーも大声で笑い始め、彼の周りのサラマンダーの軍隊も大声でゲラゲラと笑い始めた

「クツクツク・・・そうそうか。ここにいる68人のサラマンダーの軍隊を貴様1人で相手すると?」

「ああ」

ドワツハツハツハツハツハ!!!

「あ、あのバカはなんてことを・・・!」

「な、なありーファ・・・本当に彼に任せて大丈夫なのか?」

「ハツハツハツ! カツコつけたところ悪いが、そんな初期の片手剣を

装備してる折、单身こんなところに乗り込んでくる貴様のような愚か者の相手は俺一人で十分だ」

スウーツ…シヤキイン！

そう言うサラマンダー軍隊のリーダーは背中の鞘から赤く輝く一振りの両手剣を抜き放った

「そうだな…俺の攻撃を30秒耐え切ったら貴様の要求を受け入れてやろうじゃないか」

「へえ、随分気前がいいじゃないか」

「なに、貴様にはそれこそ随分と笑わせてもらった。芸者の芸を見たからにはそれ相応の対価を支払わねばな」

そう言いながら両手剣を構えるサラマンダーのリーダーの様子を伺うと、上条も自分の背中の盾を左腕に装備し、右手の拳をより強く握り締めた

第38話 最強 VS 最弱

「・・・マズいな」
「え？」

今にも剣と拳を交えようとしている両者を下から見守るシルフとケットシーの中から、シルフ領主であるサクヤが怪訝そうな顔で呟いた

「あのサラマンダーの両手剣…あれは『魔剣 グラム』だ。両手剣スキルが最低でも950ないと装備出来ないと聞く」

「きゅ、950!？」

「ああ。あれを装備しているということはアイツが『ユージーン将軍』だろう…実際に本人を見るのは私も初めてだが…知っているかリーファ？」

「な、名前ぐらいは…」

「その多くの肩書きもさることながら、純粋な戦闘力では全プレイヤー中最強と言われている…!」

「全プレイヤー中…最強…!？」

「ああ、私にはスプリガンの彼がどういう素性が知らんが…果たして30秒凌げるかどうか…」

「・・・上やん君…!」

「……………」
「……………」

一方のユージーンと上条は上空で睨み合っていた。この戦いはデュエルではない。よって戦いの明確な始まりを告げるゴングが存在しないが故、互いに隙を探っていた。すると…

チカツ…!

「ッ!?!」

雲の間から差し込めた太陽の光がユージーンの魔剣グラムに反射し、一際眩しく輝いた。その眩しさに堪らず目を閉じた上条の隙を見逃さず、ユージーン将軍は上条に切りかかった

「でやあああああッ!!!」

「クッ!」

咄嗟の事ながらもユージーン将軍の初動に対応した上条は一步後ろに退き、自分へと襲いかかる彼の剣の描く軌道の先に盾を構えた。しかし……

フツ…!

「なっ!?!」

スピント!!

事もあろうに彼の剣が上条の構えた盾に当たる瞬間に非実体化し、彼の盾をすり抜けて来たのだ。上条は戸惑いながらも自身の並外れた反応速度でかわすが、ツンツンと尖った髪の毛の先を切り裂かれた。そして休む間もなくユージーン将軍がもう一度切りかかってきた

「そ、そんなのアリかよっ…!?!」

「残念だがアリだ! 堕ちろ!」

フツ…!ズバァン!!

「がはあああッ!?!」

ドゴオオオオオオオオオオ!!!

もう一度切りかかってきた剣から身を守る為に盾を構えたが結果

は同じで彼の剣が上条の盾の前で非実体化し、彼の盾をすり抜け終わったところでもう一度実体化した。その刀身が上条の身体を切り飛ばし、岩壁に叩きつけられた

「ちよっ!?今のなに!?アイツの剣が上やん君の盾をすり抜けたように見えたけど!?!」

「あの魔剣グラムには『エセリアルシフト』っていう剣や盾で攻撃を受けようとしても、非実体化してすり抜けてくるエクストラ効果があるんだヨ!」

「そんな無茶苦茶な!?!」

リーファの疑問にケットシーの領主であるアリシャ・ルーが答えると、魔剣グラムの規格外の能力にまたしても驚愕の声を漏らした

「いや本当無茶苦茶だろ…それどうやって防げと…それがスキルに部類されるなら俺の幻想殺しが効くかもしれないけど…非実体化しなだけで消えないからただ右手ぶった切られるだけだよな…」

「でやあああああっっっ!!」

ブオンツ!!

「うおっ!?ああもうクソツッ!絶対30秒耐え抜いてやる!」

それから上条はユージーンの魔剣をかわし続けながら隙をついて拳を叩き込もうとするが、防御不可能の魔剣グラムに対する恐れから攻めあぐねていた

「ふんっ!!!」

ズバアンツ!!

「どわあああああっっっ!?!」

それに加え、どうしても条件反射で襲いかかる剣に対し左腕の盾で防ごうとしてしまう。右肩から脇腹にかけて斜めに切りつけられ上

条はバランスを崩しかけたが、背中 of 翅を目一杯に開いてブレーキをかけ、空中にホバリングした

「冗談抜きで効くなあ…おい！もう30秒たってんじやないのかよ！」

「悪いな、やっぱり切り切りたくなつた。要求を呑むのは俺の首を取るまですに変更だ」

「おいおい武器もインチキなら装備してる本人もインチキかよ…！」

ユージーン of 宣言により戦闘が続行されるが、戦況は火を見るよりも明らかであり、彼の剣を防ぐ手段を持たない上条のHPはみるみる内に削られていった

「厳しいな…プレイヤー同士 of 実力は互角と見えるが、武器 of 性能がもはやゲームバランスを逸脱してる…！だがそれ以上に彼はなぜ素手でしか戦わないんだ!？」

「それが…上やん君なの…でも上やん君なら…きつともう一度…」

リーファが祈るように両手をキツく握りしめた。いつだって自分の想像を超え、いつだって自分には出来ないようなことを当然のようにやってのけた彼ならば、きつと目の前の猛炎の将を叩き伏せてくれると信じて……

(クツソ…もう後がねえ…このままアイツの攻撃もらい続けてたらいとこ2、3発が限界だ…どうする…この状況を打破するにはもう「アレ」ぐらいしか…)

(でも…本当に「アレ」を人前で晒していいのか？それもこんな大人数に…よく考えろ…テメエの空っぽの脳みそ捻り出してでm…ッ！)

ユージーン of 猛攻を飛び躲しながら策を練る上条。しかし、彼の思考が彼の隠している最大の「禁じ手」を使用するように急かす。だが、

そんな思考を振り切り頭を一旦リフレッシュするように頭を振ると、彼の中で何かが閃いた

(・・・いや、いける・・・あの方法なら誰にも見られずに・・・)

(やるしかねえ！もうどつちにしろ背に腹は変えられねえんだ！お前はこんなところで死に戻りしてる暇なんてねえだろ!!)

そう自分の中で己を鼓舞すると、上条はユージーンに背を向けて逃げるのをやめ、飛行速度を翹で殺しながら振り返り、空中でホバリングしながら猛炎の将に向き直った

「ほう？観念して切腹する気にでもなったか？」

「誰が切腹なんてするか。本当の勝負はこつからだ！ついてこい！」
ビュンツ!!

上条はユージーンを挑発するように宣言すると、ホバリングをやめ、自分たちの決闘を観戦している場所から少し離れた地上に向かつて急降下を始めた

「ほう？地上戦を選ぶか・・・いいだろう！とことん付き合つてやる！」
ビュンツ!!

「ツ！見て！上やん君たち地上に降りていくわ！」

「それはいいが・・・果たして地上に降りて形勢は逆転するのか？天地関係なく魔剣グラムのエセリアルシフトは発動するんだぞ？」

「・・・あれ？ね、ねえ見て！あのスプリガンの子！地上に降りて行くに連れてどんどん加速していくヨ!?あのままじゃ着地する前に地面に激突してHP全損しちゃうヨ！」

「ふん、頭が狂ったのかそれともヤケになったのか・・・だが逃がさん！
貴様は俺がこの手で切り伏せる!!」

ギュンツ!!

すかのような暖かな光だった

第39話 願いの柱

「クソツ……これでは何も見えん！時間稼ぎのつもりか!？」

立ち込める砂煙の中、ユージーンはなんとか速度を落とし、地割れにより崩れた大地に降り立ったが、あまりにも濃すぎる砂煙のせいで上条の姿を視認出来なかった

「いやあ『索敵』ってのは便利だよなあ……洞窟じゃ探す敵がいなかったからそうもいかなかったけど、こういう状況なら話は別だ。この砂煙の中でも俺にはお前がどこにいるかハッキリ見える」

そう言うの上条は左手の盾を背中に戻し、代わりに鞘に収めた頼りない片手剣をゆっくりと引き抜いた

「ツ！どこだ!?!どこに行った!?!その姿を見せろ！」

どんどん不鮮明になっていく視界の中、どこからか上条の声が聞こえ、ユージーンは周囲へと気を配り、臨戦体勢を崩さない。魔剣をその手で握りしめ、上条を切り伏せんとその姿を見せる機を待つ

「……頼むみんな……俺にもう一度だけ……大切な仲間を守れるだけの力を貸してくれ」

上条は剣の柄を両手で握り、目を閉じて思い出す。共に生死を分ける戦場を駆け抜け、鉄の城を……剣の世界を強く生き抜いた彼らを――

「――『天叢雲剣』」

神話に語り継がれし剣の名を告げる。上条の持つ片手剣にヒビが

星屑のようだった。思わずリーファは見惚れてしまい、気づけばそう
咳いていた

「おい、アレを見ろ！」

光の柱が完全に消えると、サクヤが何かを見つけそこを指差して叫
んだ。するとそこには、距離が遠すぎてイマイチハッキリとは見えな
いが、空中に赤いリメンライトが浮かんでおり、それを手に乗せた黒
いプレイヤーが鞘に剣を戻しながら、こちらに向かって飛んできてい
た

「赤いリメンライト……と……スプリガンの少年……ということとは……」

「ユージーン將軍が……負けテ……」

「上やん君が……勝った……」

「……………」

3人は確認を取るようにそれぞれの顔を合わせると、少しの間を置
いてリーファとアリシャが飛びつきりの笑顔を見せ、サクヤが扇子を
広げ張りのある声で周囲の沈黙を破った

「見事！見事！」

「すっごーい！！ナイスファイトだヨー！」

ワアアアアアアアアアアアア!!!

アリシャ・ルーがそれに続き、すぐにシルフとケットシーの12人
が加わった。するとどうだろう、自分達の將軍を討たれた筈のサラマ
ンダーの軍隊からも拍手の波が広がっていき、割れんばかりの歓声が
上がった

「わあ！すごい……本当にすごいよ上やん君！」

リーファは思わず感動し、涙を流しながらこれ以上ないくらいの笑顔を見せた。敵味方、種族関係なく彼らの戦いを素晴らしいと認めたこの歓声を、リーファは一生忘れられないだろう

「はっはっは、いやどーもどーも」

戦場から戻ってきた上条は自分のツンツン頭を右手で恥ずかしそうに掻きながら、リーファ達のところへ着地した

「すまん、誰か蘇生魔法頼めるか？」

「解った」

上条の願いをサクヤが聞き入れると、上条は左手に浮かんでいる赤いリメンライトを差し出し、サクヤが蘇生魔法の詠唱を始めた。やがて彼女の両手から青い光が迸り、赤い炎を包み、その中央からユージーンがのっそりと立ち上がると、体を慣らすように首の骨をコキコキと鳴らし、両肩を回した

「・・・ふう：見事な腕だな、俺が今まで見た中で最強のプレイヤーだ。貴様は」

「そりやどーも」

「貴様のような男がスプリガンにいたとはな……。世界は広いということか。しかし、最後の『アレ』は一体なんだ？」

「ただの切り札だよ」

「・・・ふっ：全く面白いヤツに巡り合ったものだ……」

そう言うとユージーンは自身の右手を上条の前に差し出し、上条はその手の意図を理解すると自分の右手を差し出し、互いに熱い握手を交わした

第40話 He's mine!

「で、どうするんだ？要求を受け入れないなら俺たち68人のサラマンダーを全員ぶつ飛ばすんじゃないのか？」

肉体を取り戻し、上条と握手を交わしたユージーンはまるで冗談でも言うかのように上条にそう聞いた

「いやあ、ここは日本人らしく大将の首を獲ったんだから大人しく退いてもらいたるところだが…やるってんなら全員相手になるよ」

「ふっ…だそうだ！サラマンダーの中で誰か彼に挑むヤツはいるか!？」

「無理無理！」「俺はちよつと…」「俺は見る専なんで…」

「ふっ、我が軍隊ながら腰抜けばかりだな…まあ、アレを見た後ならば当然か…」

「ははは、まあそりやそうさ」

「ところで、『今は事を荒げたくない』と言っていたな？ケットシーでもシルフでもないスプリガンの貴様がなぜそんなことを？」

「ああ、俺は絶対に最初に世界樹のてっぺんに登らなくちゃいけないんだ」

「…ほお？だからここで俺たちサラマンダーが万全の準備を整えて世界樹攻略で先を行かれるのが困る…というわけか」

「んー…まあここまで来るのに紆余曲折はあったんだけど、大体はそういうことで合ってるよ」

「ふっ…貴様なら世界樹攻略もやってのけそうだがな…だがいずれ貴様とはもう一度戦うぞ」

「ああ、もちろんだ」

するとユーゾーンを含めたサラマンダーの軍隊は身を翻し、翅を広げ飛び立っていった。無数の赤い妖精たちは見えないほどに小さくなっている、やがて完全に見えなくなった

「いやあ、サラマンダーの中にも話の分かるヤツがいるじゃないか」

「いやもう…本当上やん君ムチャクチャすぎ…」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてないわ！」

「ンンツ！」

「あ、サクヤ…」

「すまんが…状況を説明してもらえると助かる」

リーファと上条が自分たちの勝利に一喜一憂しているところに、サクヤが咳払いをして話しかけて来た。そしてリーファと上条は自分達がここに来た経緯を大雑把に話した

「…なるほどな…確かにシグルドの態度に苛立ちめいたものがあつたのは私も感じていた」

「苛立ち？何に対して？」

「シグルドはパワー思考の男だからな。キヤラクターの数値的能力だけでなく、プレイヤーとしての権力も深く求めていた…故に彼には勢力的にサラマンダーの後陣を拜しているこの状況が許せなかったのだろうな…」

「だからサラマンダーと内通してスパイ活動じみたことをしてたってことか…いやあ、このALLOは人間の欲を試す陰險なゲームだなあ全く…」

「ふふふっ、全くだ」

上条の言葉にサクヤも少し笑って賛同した

「それで…どうするの？サクヤ」

「どうするとは…シグルドの処分がか？」

「うん。やっぱり懲罰金とか？」

「いや、別に金は要らないさ。そうだな…まあヤツはスイルベーンから追放してレネゲイドとなつて中立域を彷徨ってもらうことにするか。いずれそこで新たな楽しみが見つかることを祈るとしよう」

「えっ!? つ、追放!?! いいの!?! 仮にもシグルドには執政部の一員だし軍務を任せてるんだよ?」

「なに、適任者なら他にもいるさ。それぐらいの肝っ玉が据わっていなければ領主など務まらんさ。それに、私の判断が間違っているか、正しかったのかは次の領主投票でシルフの民が決めることだ」

「領主つてのも中々大変そうだな…」

「ともかく礼を言うよりリーファ。執政部への参加を頑なに拒み続けた君が救援に来てくれたのはとても嬉しい」

「え? リーフアもシルフのお偉いさんに推されてたのか?」

「ま、まあね…でも私には人をまとめる自信なんてなかったし、自由に飛び回れる一般プレイヤーの方が性に合ってるから」

「それにアリシャ、シルフの内紛のせいでケットシーの皆まで危険に晒してしまってすまなかったな」

「いやいや! 生きてれば結果オーライだよ!」

そうアリシャ・ルーは呑気な声に続けてリーファに向けてウインクしたが、それに対してリーファはぶんぶんと首を振った

「ううん。あたしは何もしてないよ。お礼ならこの上やん君にどうぞ」

「そうだ、そういえば君は一体…」

「そうそうキミ、随分強いネ? 知ってる? さつき君が倒したユージーン將軍ってALLOの中じゃ最強のプレイヤーって言われてるんだヨ」

「へえ…まあそうだろうな。確かにあの武器は厄介だったけど、アイツはあの武器の性能に頼りきりな訳じゃなく純粋な剣術も相当だったからな」

「それに拳だけで地割れを起こしてこの辺り一帯の範囲を覆う砂煙を起こす筋力も異常だけど、最後の光の柱。アレもどうせ君がやったんでシヨ?」

「さあ、どうだろうな」

「私これでも噂には敏感な方なんだけど君みたいなプレイヤー見たこともないし聞いたこともなかったヨ。スプリガンの秘密兵器：だったりするのかな?」

「まさか。ただのどこにでもいる平凡な大学生だよ」

「ぷっ。にやはははは!!」

掴みどころのない上条の態度にひとしきり笑うと、アリシヤはすいっと上条の方に寄り、彼の右腕を取って胸に抱いた

「お、おおおおおおおっ!!／／／」

「フリーならキミ、ケットシー領で傭兵やらない?三食オヤツに昼寝つき…今ならオマケで好きなケットシーの女の子を添い寝させてあげるヨ?」

「なっ!?!」

「おおっとルー、抜け駆けはよくないな」

そう言うのとサクヤも上条に近づき、着流しの袖を上条の左腕に回し、その豊満な胸を押し当てた

「なああああああああっ!!／／／」

「上やん君…と言ったかな。どうか、個人的な興味もある折、こちらの領民も世話になっていようだし…今回の件の礼も兼ねてこの後スイルベーンの酒場で酒でも……」

「あーっ!ずるいよサクヤちゃん!色仕掛けはんたいい」

「人のこと言えた義理か!密着しすぎだお前は!」

「あばばばばばばばば……」

自分に言い寄ってくる2人の領主の肌の感触と大人の色香に上条はすっかり当てられてしまい、なんの対処もすることが出来なかった。しかし、そんな二人を見たリーファはズカズカと近づいていくと上条の裾を掴んで言った

「だ、ダメです！上やん君はあたしの……うえ!?／／／」

「……リーファ?」

「……あ、あたしの／／……えーつと……／／／」

飛び出して二人の間に割って入ったはいいが、適切な言葉が見つからずどんどんと顔が紅潮していき、最終的に言葉に詰まってしまった

「ねえねえサクヤちゃん、これは……」

「……ああ、どうやらそういうことらしいな」

スツ……

「お?」

サクヤとアリシヤはリーファの様子を見ると何かを察したように抱きついていた上条の腕から離れた

「全くリーファ、そういうことなら早く言ってくれよ。じゃなければこんな無粋な真似はしないというのに……」

「え?」

「応援してるヨ♪」

「ち、違う違う!／／／そういうことじゃなくて!!」

「隠さずとも同じ女なら分かるさ。影ながら応援させてもらうよ♪」

「いやああああああ!!」

「?」

そんなこんなで二人の領主による上条への誘惑は終わり、妖精の世界は日が沈み始め、蝶の谷周辺が燃えるような夕焼けに包まれた

第41話 架け橋

「それでリーファ、君は彼と一緒にアルンへ行くのか？物見遊山か？それとも…」

「領地を抜ける…つもりだったけどね。でも、いつになるか分からないけどきつとスイルベーンに帰るわ」

「そうか、ほっとしたよ。必ず戻ってきてくれよ。彼と一緒にな」

「途中でウチにも寄ってねくん。大歓迎するヨ♪」

「うん！もちろん！」

その後、本来行われるはずだったシルフとケットシーの領主会談が執り行なわれ、両種族同意の下、同盟条約の調印が終わると皆が帰投の準備を終え、別れの時間となった

「重ね重ねになるが今日は本当にありがとう。君たちの救援がなければサラムンダーとの格差は決定的なものになっていただろう。何か礼をしたいんだが…」

「あーいや、別に見返りを求めてやったことじゃないから上やんさん的にはそんなに気を遣わないでほしいんですのことよ？」

「ねえサクヤ、アリシャさん。今度の同盟って、世界樹攻略の為のなんでしょ？」

礼をしたいというサクヤの申し出を洩る上条だったが、そんな彼の隣にいたリーファが一步前に踏み出して両種族の領主に問いかけた

「ああ…まあ究極的にはな」

「その攻略に…あたしたちも同行させてほしいの。それも、可能な限り早く」

リーファの願いを聞いたサクヤとアリシャは一度互いの顔を見合

わせると、まるで当然だと言わんばかりの顔で答えた

「同行は構わない…というより、むしろこちらから頼みたいぐらいだよ。しかし、なにをそんなに急いでいる？」

「…俺がこの世界に来たのは、世界樹の上に行かなくちゃならないからなんだ…そこにいる…俺が焦がれ続けた人達に会うために…」

「…？妖精王オベイロンとその空中都市の妖精達のことか？」

「いや、違う。リアルで色々と事情があつてな…俺の冒険はそこにたどり着かないと終わらないし、俺のこれからはなにも始まらないんだ」

理由と訳を問うたサクヤに、上条は首を横に振って真っ直ぐな眼でそう答えた

「でも…攻略メンバー全員の装備を整えるのにしばらくかかると思うんだヨ。とても一日や二日じゃ…」

「いや、気にしないでくれ。協力してくれるって言ってくれるだけで、心の支えになる。それに、あんまり多くの人を巻き込むつもりはないからな。後はなんとかするよ」

「そうか…すまない…」

「あ、そだ。もし金に困ってんならコイツを資金の足しにしてくれ」
ピコンツ…ガシャツ…

「えー、わざわざ悪いヨ。助けてもらった上に援助だなんて」

「いやなに、もし手伝ってくれるってんならそりゃこつちもお礼しなきゃいけないからな。そうだな…契約の前金だとも思ってもらってくれ」

そう言うとお上条は自分のウインドウを開いて大きな袋に詰められた所持金をオブジェクト化し、アリシヤに手渡した瞬間…

ズンツ!!

「うわあ!?!ちよっ!?!」

「あ、大丈夫か?」

「う、うぐ…大丈夫…うえ!?!ちよ、ちよサクヤちゃん!これ…見てこれ!」

「ん?」

アリシヤは上条から手渡された袋を両手で抱え込むと、その袋の中をチラツと覗き込むなり信じられないものを見たような表情に変わり、そんな彼女に呼ばれサクヤも袋の中を覗き込んだ

「なっ!?!10万ユルドミスリル貨がこんなに!?!こ、これ総額いくらだ!?!」

「まあざつと2000万ユルドぐらいかな」

「2000万ユルド!?!」

「い、いいのか?一等地にちよつとした城が建つぞ?」

「構わねえよ。俺にはもう必要ないモンだからな、遠慮なく使つてくれ」

「これだけあればかなり目標金額に近づけると思うヨ〜!」

「大至急装備を揃えて、準備が整ったら君のお供のリーファにメールで連絡するよ」

「ああ、よろしく頼む」

「うん!それじゃありがとう!また会おうネ〜!」

そう言い残してシルフとケットシーの皆は翅を広げ飛び立っていき、夕陽の向こう側へと消えていった

「さて、俺たちも行くかリーファ」

「そうね…てゆうか上やん君!」

リーファ強い語気と共にズカズカと上条へと近づいていき、上条への眼前へと迫り彼の目を睨みつけた

「な、なんでせう…?」

「上やん君、サクヤとアリシャさんに抱きつかれた時ドキドキしてたでしょ」

「そ、そりや男なら仕方ないと思いますのことよ!?!」

「でも上やん君、あの二人が自分から離れていった時ちよつと残念そうにしていた」

「し、してねーよ!!」

「そこでムキになるところがなおさら怪しい」

「うぐっ……」

「ふんっ!上やん君なんてもう知らない!今回も後先考えずに無茶ばかりして!」

「す、すみませんでした…」

「……でも、ありがとう」

「え?」

「きつと上やん君がいてくれなきゃ、今回の件はどうにもならなかったと思う。だから今度はあたしの番。絶対に助けようね!みんなのことー!」

「……ああ、ありがとう。リーファ」

飛びつきりの笑顔でリーファは上条にそう言い、上条は礼を返した。しかしリーファは少し間を置いた後、夕陽に映えるような物憂げな表情を浮かべた

「ねえ、上やん君…」

「ん?なんだ?」

「名前…聞いてもいい?」

「……名前?ああ、俺の本当の名前ってことか…でもなんで急に?」

「もしも…世界樹のてっぺんに行ってみんなを助けたら…上やん君はもうこの世界に戻って来ないんでしょ?」

「え?な、なんでそう思うんだよ?」

「あたし、思うんだ。あたしと上やん君が繋がっている世界はこの世界だけで…あたしたちの住んでる現実の世界はきつと違う世界なんだろうって…」

「リーファ…」

「でも、上やん君の名前を知っていればいつかきつと現実でも繋がれると思うんだ。現実の私たちに翅はないかもしれない…でも、繋がりたいっていう思いがどこまでも飛んでいって、いつかまたきつと会えると思うの」

「だから、名前はあたし達の世界の架け橋…かな。だってあたし達はリアル顔も知らないんだから名前が分からないと、出会っても分からないでしょ？」

「そうか…分かった。俺もリーファ達とはいつかまた現実で会いたいからな。俺の本当の名前は『上条当麻』だ」

「上条…当麻…うん、ありがとう。じゃああたしの名前も教えておくね。あたしの名前は『桐ヶ谷直葉』。まあ周りが知人しかいない時はお兄ちゃんが『スグ』って呼んでるから分かりやすいかな？」

「そっか、桐ヶ谷直葉か…でも、てことはキリトも桐ヶ谷なんだろう？じゃあキリトのなま…いや、やめとくか。こういうのは本人に直接聞いた方が意味があるからな」

「ふふっ、うん、そだね。お兄ちゃんもきつと上やん君から直接名前聞かれないと思う」

「あ、でも大事なことから一つ付け加えてておくぜリーファ」
「え？」

「俺が思うに…現実世界と仮想世界はきつと俺たちにとっては変わらない場所なんだと思う。そこに人がいれば、そこにいる誰かと話して…同じ感情を共有できる…つまり、仮想世界だって言い換えるなら現実そのものなんだよ」

「だから、リアルでも繋がりたいと思うのはもちろんだけど、俺とリーファは『仮想世界って現実』でちゃんと繋がってるんだぜ？」

「…ぷっ…あはははははは!!」

「え？今の笑うとっ？」

「あはははは!!…ううん、違うのな、なんでもない…あははっ!」

「ひ、ひでーな…人が折角いいこと語ってやったっていうのに…」

「うん、ありがとう。私、これでも今すっごい嬉しいんだ!」

「え?それってどういう…」

「それっ!」

フワツ!

「ちよっ!?!いきなりかよ!?!」

フワツ!

上条が話し出すよりも先にリーファは翅を出して空に浮かび上がった。それを見ると上条も慌てて翅を広げて空に浮かび上がった

「さー!行こう上やん君!アルンまでひとつ飛び!まさか夕方までかかると思わなかったからね!お兄ちゃんとアスナさんもきつと待ちくたびれてるよ!」

「ったく…ああ!行こうぜ!」

ビュオオオオオオオオオオオ…

(お兄ちゃん…上やん君は…一緒だよ。仮想世界がもう一つの場所だって認めてる…私が誰よりもカッコいいと感じたお兄ちゃんど!)

夕暮れ妖精の世界を飛びながら、リーファは兄の姿と上条の姿を心の中で重ねながら翅を目一杯に打ち鳴らした

第42話 央都 アルン

「・・・『ソレ』をここで振るうとは・・・よく貴様の心がそれを許したものだ。幻想殺し」

上条の天叢雲剣が放った光の柱は世界樹の頂上まで伸びており、それを横目で見ていた世界樹の住人、オティヌスはそう呟いた

「退屈しのぎに外を眺めるのもいいとは思うがね、なんやかんやで完成したよ?」

「・・・ほお?それは本当だろうか?マリアン」

「そこに関しちや嘘なんかつかないでしょーよ。ほれ、ソコに」

褐色の肌はその瞳には眼鏡。銀髪を三つ編みにし、素肌にオーバーオールを着込む彼女「マリアン」スリンゲナイヤー」は世界樹の枝の先にある鳥籠の中に佇む長い棒のような物を指差した

コツコツコツ…

「ついに…ついにこれが私の手に…」

その『槍』の穂先は、ナイフのように尖った刃ではなく、両刃の剣を無理矢理に接続したような幅広の刃。その刃の根元と槍尾が捻れ狂った黄金の槍という形をしたオティヌスの持つ『無限の可能性』の象徴。それに彼女の手が伸びた瞬間……

ガシャンツ!!

「・・・どういうつもりだ黒小人」

「どういうつもりかどうか、一番よく分かってるのはアンタじゃないのか?オティヌス」

鳥籠の扉が完全に閉まり、オティヌスと槍は鳥籠の中に囚われた

「よもや仲間を殺されたからなんて世迷言を言い出す気ではあるまいな」

「違う違う、アンタは私に与えすぎたんだよオティヌス。そりや槍はアンタの莫大すぎる力と無限の可能性を制御するってそれだけの代物だ。だがあの6000人から得られたアインクラッドは違う。私もつい夢を見ちまった…これならわざわざアンタに夢を叶えてもらうまでもないってな。そういうもんだろ?」

そう言うとマリアンはオティヌスの前に鞘に収まった黄金色に輝く一本の剣を差し出した

『戦乱の剣』か…全くどいつもこいつも剣なんて物に魅了されるとは…」

「世界を終わらせる剣…この鞘から抜かれた剣の刀身を見たものは恐怖心から自ら死を選ぶ…だがもし仮に、この剣が全ての姿を晒した時、どうなるかなんてのは想像に難しくはないだろ?コイツは概念だけならアンタが求めた槍をも超える逸品さ」

「なるほど…ということは『やはり』この槍は偽物か…」

「…やはり?」

ズドンツツツ

!!!!!!

「…へ?」

マリアンの口から素っ頓狂な声が漏れた。何やら胸の方に違和感を感じ俯いて自身の胸を見ると、そこにはぼっかりと穴が空いていた

「…あふっ!?がっ!?な、なんで…!!」

コツコツコツ…

「舐めているのか貴様は?私は仮にも魔神だぞ。あの棒切れが槍でないなんてことは見なくても分かる」

「うわあ~~~~~!!」

「おお~~~~~!!」

上条とリーファは長い飛行の末、夜の世界で一際眩しく輝く街を訪れていた。その街を目にした彼女達の瞳も街の光に負けなくらいに眩しく輝いていた

「ここが世界樹の根元…」

「うん、間違いない。ここがアルンだよ!アルヴヘイムの中心…世界最大の都市…!」

「ああ、ようやく着いたな」

上条とリーファは遥かなる星空に向かって伸びた世界樹と夜に煌めく街を、これまでの冒険を思い出しながら感慨深く見つめていた

「だけどリーファ、そつちにキリトかアスナから連絡来てるか?」

「え?私のはてつきり上やん君の方に連絡が来るのかと思ってたけど…」

「つてことは両方とも何の連絡もなしか…まさかまだコツチに着いてねえのか?」

「うーん、何も起こってなければ普通に着いてるはずの距離だと思っただけど…ここに来るまでの道で何かトラブルでもあったのかな…」

「だよなあ…もし仮にアルンに着いてるとしてもこのバカ広い街からあの二人を探すのは骨が折れるぜ…」

「とりあえず何か連絡があるまで街の人にお兄ちゃん達を見かけた人がいないか聞いてみましょう?」

「そうだな、それが一番だ」

こうして二人はアルンの街へとくり出し、道行く人にキリトとアスナを見かけていないかを聞いた

「すいません、ちよつといいですか？」

「ん？僕の事かい？」

「実はあたし達、はぐれちゃった仲間を探しているんです。スプリガンとウンディーネの二人組で、プライベートピクシーを連れているんです。どこかで見かけた覚えはありますか？」

「スプリガンとウンディーネの二人組かあ…ごめん、ちよつと見た覚えはないかなあ…」

「そうですか…すいません、ありがとうございます」

「あ、ごめんなさい。ちよつといいですか？そこのお姉さん」

「ん？どうかしたの？」

「実は仲間を探していて。ウンディーネとスプリガンの二人組を探してるんです。歳は丁度高校生くらいの」

「うーん、そういうスプリガンとウンディーネの二人組は見なかったかな。明らかに大人のスプリガンとウンディーネの二人は見たけど」

「あ、それは多分違いますね。すいません急に呼び止めたりしちゃって」

「いえいえ、こちらこそ力になれなくてごめんなさい。それじゃ」

「はい、ありがとうございます」

手を振って別れを告げるレプラコーンの女性に、上条は礼代わりにその後ろ姿にお辞儀をした

「ごめん上やん君、あたしの方は何も収穫なし。そつちは？」

「や、こつちも特にはないかな。しかし流石世界の中心だな。いくら中立域と言えどこんな他に種族に分け隔てなく接してくれるなんて…」

「うん、みんないい人ばっかりだよね。ここにいる人達はみんな心の底から自由にこの世界を飛び回ってゲームを楽しんでるって感じがする」

「…そうだな」

「?どうかしたの？」

「いや、なんでも。それより早いとこ二人と落ち合わないと…あ、すいませんちよつといいですか?」

そうやって上条は自分達二人の目の前を通り過ぎかけたノームの男性に声をかけた

「ん?どうしたんだい?この辺じゃ見ない顔だね、この街は初めてかい?」

「あ、はい。それでちよつとお聞きしたいことがあってですね…」

「構わないよ。やっぱりにここに来た目的は世界樹なのかい?」

「はい…えつとそれもあって、ここに到着したら落ち合おうって言っていた二人組みと連絡が取れなくて探してるんです。高校生くらいのスプリガンとウンディーネの二人なんですけど、どこかで見かけませんでしたか?」

「ああ…そんな感じの二人を僕の友人が見たって言ってたよ」

「ほ、本当ですか!?!どの辺にいたとか分かりますか!?!」

「確か30分ぐらい前に世界樹の根本のゲートに入って行ったのを見たって言ってから…多分グランドクエストに挑んだんじゃないかな?」

「!!!」

「そ!その友人が言うには、最初はたった二人で挑むなんて無謀だと思ってその後ろ姿を見てたらしいけど、ドームに向かう二人を見てたらなんだか只者じゃないオーラを感じたらしくてね。もしかしたらと思つて、20分ぐらい待つてただけで一向に出てくる気配がなく

「すいません!その世界樹のドームってどこに!?!」

「え?えつと…ここを道なりに真っ直ぐだけど…」

「ありがとうございます!行くぞリーファ!!」

「うん!あ、すいませんわざわざありがとうございました!」

ギョーンツ!!

「え?どわああ!?!」

スプリガンの男性の話の聞くなり、背中から翅を出し、自分の持つ最速で飛び出した二人。その場には烈風が吹き荒び、その風に吹き飛ばされノームの男性は尻餅をついた

「お兄ちゃん…アスナさん…!」

「間に合ってくれよ…!」

世界樹の根本を目指しアルンの街中を翅を鳴らしてひたすら真っ直ぐに翔んでいく二人。そのまま進んだところ前方に巨大な階段が見えた

「あの階段を登れば世界樹のドームだな!」

「……?ちよ、ちよつと待って上やん君!階段の下のところ!」

「え?下って……あつ!」

「お兄ちゃんとアスナさんだわ!」

これから今まさに駆け登ろうとしていたその時、リーファが指差した階段の一段目にキリトとアスナが腰掛けていたのを見つけ、上条とリーファは翅を閉まって二人の側に降り立った

「なんだよ二人ともく着いたなら連絡ぐらいしてくれよ。覗くだけって言いつつ今も世界樹の中で二人だけ残されて戦ってんのかと思っつてめちやめちや焦つ……て……?」

「……」

「……」

「おにい……ちゃん……アスナ……さん?」

上条は思わず二人に話しかけていた口を閉じた。なぜなら自分話しかけた二人がまるで路頭に迷ったような暗い顔で俯いたままだったからだ

「ど、どうしたんだよ二人とも…なんかあったのか？」

「…ねえ上やん君」

「お、おう。なんだ？」

「あれは…あのグラントクエストだけは…絶対に無理だ…」

「…え？」

「話すよ、あの扉の向こうで一体何があったのか…」

第43話 グランドクエスト

遡ること30分前、次第に夜が訪れたアルンの街を歩き世界樹の根本へとたどり着いたキリトとアスナは、妖精の騎士を象った二体の巨大な彫像が守るゲートの前に立っていた

「ここが…」

「ああ、世界樹の頂上にたどり着く為の唯一の道だ」

『未だ天の高みを知らぬ者よ、王の城へ到らんと欲するか』

「グランドクエスト『世界樹の守護者』に挑戦しますか？」

騎士の像からどっしりとした威厳の込められた声が聞こえ、キリトの手にクエスト受注のためのウインドウが表示された

「アスナ、分かっているとは思うけど…」

「うん、無茶はしないよ。今回は情報収集のためにちよこつと覗いて適当に戦っていきるとこまでいっただけ。ここで死に戻りしたら元も子もないもんね。でも、無茶しちゃいけないのはキリト君も同じだよ？」

「ああ、分かっている…よし、押すぞ」

「OK」 ピコンッ！

『さればそなたが背の双翼の、天翔に足ることを示すがよい』

ズゴゴゴゴゴゴ…ズズンッ！

扉を塞いでいた彫像の剣がゆっくりと動き、それと同じくして巨大なゲートが開いていき、やがて重低音と共に完全に開ききった

「行くぞユイ、しっかり頭を引っ込めておけよ」

「はい。パパ…ママ…頑張っ…」

ヒョコツ…

そうやってユイはキリトの胸ポケットにすっぽりと頭の先まで入り込んだ

「行くぞ、アスナ」

「うん、キリト君」

ブオンツ!! シャキイン!!

ついに開いた世界の中心の巨大な扉の前でキリトは背中の大剣を振り下ろし、アスナは腰の鞘から細剣を抜いた

コツコツコツ…

「…中は暗いね…」

「ああ…暗視能力付加魔法が必要なのか？」

「…うん、待って。明るくなるみたい」

ブウウウウン…

建物の中の明かりが灯され周りを見渡すと、そこはとてつもなく広い円形状のドームだった。樹の内部分らしく壁や床を蔦が覆っており、壁にはいくつものステンドグラスが張り巡らされており、天に向かって壁伝いにほぼ垂直に伸びた壁のその先には…

「あつー！見てキリト君！あの一番上のところ！」

「ああ、見えてる」

ドームの天蓋の頂点に蕾があり、中心に円形の扉が見えた。4枚の石版がまるで花卉のようで、あそこにたどり着けばあの蕾が咲き先の花道が開くのだと想像するのは難しくなかった

キリトは自身の戦闘本能の赴くままに黒い大剣を白銀のガーディアンに向かって振るい続けた。その剣に切り裂かれたガーディアンは立ち所に白煙を上げて四散する

(よし！コイツら一体一体の強さはそんなに大したモンじゃない！数さえ凌ぎきれば…！)

「キリト君！後ろ！」

「ッ!?クソッ！」

「!!!」

ドスッ!!

「がっ!!」

ガーディアンが背後からキリトに向かって突進していき、その手に握られた剣が彼の背中に突き刺さり、不意に痛覚に鋭い痛みが走った

(なん…だ…?…これ…いつもと違う…仮想空間でダメージを受けた時に感じる違和感とは違う…これじゃまるで本物の…痛み…?)

「くっ…だあああっ！ぬあああああっ!!」

ズバンッ!!バアアアン……!!

キリトは自分が感じた鋭い感覚を誤魔化すように雄叫びながら回転し、ガーディアンの首を大剣で切り落とす。すると背に刺さった剣は消え、やがて痛みに似た感覚はなくなった

「何だったんだ…今の…」

「キリト君！回復行くよ！」

「あ、ああ！頼む！」

「
• fylla heilagr austr brott
dr banni!」

キユイイイイイイイ!!!

アスナがキリトに向けて右手を伸ばし回復魔法を唱えると、治癒をもたらす光がキリトを包み込み、背中の赤く染まった傷口を塞ぎ減少したHPバーを全快した

「よし！行くぞ!!」

ズバンツ！ズバンツ！ドスツ!!ザクツ！ザンツ！ザンツ！

「うああああああああ!!!」

ドゴオオオオオオオオオオン!!!

「道が開いた！前進するぞアスナ！」

「うん！」

ギユンツ！ギユンツ！

迫り来るガーディアンを次々に切り倒していき、その集団の中に強引に抜け道を作り出した。そして二人はその道を全速力で無我夢中で駆け抜けた

第44話 限界

「ツ！ダメ！止まってキリト君！」

ズザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザ！！！！！！

ガーディアンを退けて出来た道を全速力で駆け抜けたキリト達の前にまたしてもステンドグラスから出現したガーディアンが先へ進ませまいと道を塞いだ

「また出てきたか…！アスナ下がってくれ！俺がピンチになったら回復頼む！」

「任せて！」

「うおおおおおおおおお！！！」

ズバンツ！ズバンツ！

シユンツ！シユンツ！

「クソツ！次から次へと…これじゃ数が多すぎてキリがない！！覗くだけ程度でこれか！これじゃ後戻りしようにも…！」

「！！」ギユンツ！

「！！」ギユンツ！

「なっ!?両側から!?しまっ！t…！」

ガキイン！ザクツ！

キリトは両側から迫ったガーディアンの右の剣を己の大剣で受け止め、左の剣を自分の腕で受け止めた。当然のごとく左の腕に刺さった剣は無慈悲にキリトのHPバーを減らした。しかしそれ以上に……

「ツ!!あぎっ…!!？」

(やっぱりそうか…ここで受けるダメージは…現実の痛覚を通じてダイレクトに伝わって…！)

キリトは自分の左手に走った鋭い痛み思わず顔を歪めた。まるで「本当に左腕を切りつけられたかのような痛み」が彼を襲ったのだ

「クソツ!!でやああああああああああああああああああ!!!」

ズバァンツ!!ズバァンツ!!

「はあ…はあ…はあ…次いいい!!」

そしてまた痛みを紛らわすように咆哮すると、大剣を両手で持ちそのまま水平になぎ払った。ガーディアンが二つに別れ、エンドフレイムとなって燃え上がり白い煙がキリトを包み込んだ

「!!!」
「!!!」
ズバァンツ!

ズバァンツ!

「うあああああああつ?!?!」

(!?キリト君なんであれだけの攻撃でそんなに怯んで…まだHPも半分減ったぐらいなのに…ううん!悩んでも仕方ない!私は私のやるべきことを!)

「
f y l l a h e i l a q r a u s t r b r o t t s u
d r b a n i !」

キュイイイイイイイイ…

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

ギインツ!ズバァンツ!!ドスツ!!ザンツ!ブスツ!ズバァンツ!!

自身のHPが全回復してることに気づかないままひたすら白銀の騎士を切り伏せていくキリト。白いバラのように咲く断末魔の炎を掻い潜っていき顔を上げると、天蓋に視線を向けた。すると意外なほど近くに天空都市へのゲートが迫っていた

(後戻りする道もガーディアンだらけ：距離的には頂点にほど近い：
だったらいつそのこと：覗くだけなんて言わずに上やんの言うあの
先を目指す！)

ギユンツ!!

ドスツ!!

「ツツ!!」

天蓋へ向かって上昇しようとしたその時、冷たく輝く光の矢がキリ
トの足を貫き細く鋭敏な痛みが足から全身に伝わり彼の動きが止
まった。そしてその瞬間を狙い定めたかのように、ガーディアンの放
つ矢が雨のように降り注いだ

ピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュ
ピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュ
!!!

「!!ヤバい…!」

「 s . r l i n d . s y n j a , b u r t e i m i o g
s v e r ! 」

コオオオオオオオオオ…!!

キンキンキンキンキンツ!!

「ツ!?アスナ!!」

降り注ぐ無数の矢を見たアスナが防御魔法を詠唱した。魔法で呼
び出された無数の蝶がキリトの身を包み込み、光のシールドが矢を弾
き返すが一矢一矢を弾く度に蝶の壁が削られ、アスナのMPがみるみ
る減らされていく

「ツ!?ダメツ！防ぎきれない!!」

バキイイイイイン!!ピュピュピュピュピュピュピュピュピュ
!!!

「~~~~ツ!!うおおおおおおおおおおおおお!!!」

キインツキインツキインツキインツ!

アスナが展開した光のシールドが音を立てて崩れ去り、降り注ぐ矢を大剣ではたき落としていくキリト。しかし、ゆうに100本を超える矢はキリトの速さの限界を上回り、彼の身を貫いた

ドスツ！ブスツ！ドスツ！ザクツ！ザシユツ！グサツ！！

「あーあがつ！！あうっ！あゝ！あああああああああああ！！」
ヒユウウウウウウウウウウ：

矢が身を貫く度にHPが減少していきその度に身体に痛みが伴う。鍼治療なんて生易しいものではなく、その痛みが走る度にキリトは悲鳴をあげ、飛行姿勢を維持出来なくなりその身体がゆつくりと落ちていった

「ツ!?キリト君!？」

ガシツ！！

「・・・うあ：ダメ、だ：アスナ：」

「大丈夫！分かってる！ここは一旦逃げよ：ツ!?：嘘でしょ：」

ズザザザザザザザザザツ！！

落下してきたキリトをアスナが空中で受け止め、彼に肩を貸して天蓋から背を向け撤退しようとするが、すでに彼女らの四方八方はガーディアンが埋め尽くしており、まるで監獄に閉じ込められたように逃げ場がなくなっていた

「こんな：こんなものって：：でももうやるしかない：：」

シャキーン！

「キリト君待って！私が今道を開けるから！」

「!?だ、ダメだ！行くなアスナ！」

「はああああああああつ！！」

ズバツ！シャキーン！キインツ！

「!!!」

ピュピュピュツ! ドスドスドスツ!

「痛っ!? え…う…きやつ! うあつ!」

アスナはその正確無比な細剣さばきでガーディアンを撃破していった。しかしガーディアンは彼女の全方位を取り囲んでおり、彼女にはどうしても死角が出来る。そして左から1本の矢が襲いかかりアスナの腕に刺さり、その矢は彼女の痛覚に本物の痛みを伝えた。その感覚に彼女が困惑していると、立て続けに2本の矢が背後から彼女の体を貫いた

「ゴガアアアア!!」

グサアアアアアツ!!!

そして白銀の騎士はその神々しい外見にそぐわない叫びを放った。直後、白銀の刃がアスナの身体を背中からブスリと貫いた

「いつ?!? うあああああああああああああああああ!!!」

「アスナ! アスナあああああ!!!」

ガシツ!!!

「クツソオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ゴオオオオオオオオ!!!

身体を貫かれた激痛にアスナが絶叫する。そんな彼女の元にキリトが慌てて駆け寄り、剣が刺さったままの彼女の華奢な身体を抱き締めた。そして一目散に出口に向かってその翅を全力で打ち鳴らし急降下していく

「そこを…どけええええええええええええええええええええええ!!!」

ガンツ! ガンツ! ドガガガガガツ!!

出口までの道すらも塞ぐガーディアンをキリトはあえて倒さず、ひたすら押しつけていき、出口までの最短の道を強引に開かせた。しかし……

「!!!」

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン!!

ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！

「ツ！ツツ！……ツツ！」

ガーディアンの集団が決して二人を逃すまいと無数の光の矢を放ち、キリトの背中に矢が刺さっていき筆舌し難い苦痛がキリトを襲う。唇を噛み締めその痛みを耐える。耐える。耐える。

「うああ!!」

吼えながら出口から差し込む光に向かって飛ぶ。その間にも自分の身体に矢が刺さっていき、HPはとつくに危険域に到達しているがそんなのは気に留めなかった。自分の腕の中のアスナをこれ以上傷つけさせまいとキツく抱きしめながら自分の身体を盾にする。一心不乱に出口を目指し……そして……

バンツ！ゴロゴロゴロ!! バタツ……

「ああっ！はっ！うああっ！はあっ！はあっ！はあっ！」

世界樹のドームから飛び出した。しかし飛翔の勢いを殺しきれず地面を何度も転がり、そしてやっとのことで二人の身体は仰向けに止まった。キリトのHPはもう残ってるのかすらあやふやだったかなんとか逃げ延びた。生きているという事実を確認する為に息を何度

も吸って吐いてを繰り返す

「はあ…はあ…はあ…アスナ…」

「キリト…君…」

ダキツ…

「怖い…痛い…痛かった…痛かったよ…私死ぬんじゃないかって…怖くなつて…それで、それで…」

「もういい…何も言わなくていい…アスナは生きてる…こうして俺の腕の中にいる…それでいいんだ…」

「ひっく…キリト君…キリト君…うわあああああああああああああああああああああああ
あああああああああん!!!」

「アスナ…大丈夫…大丈夫…」

アスナの瞳から涙が溢れ、キリトの胸に縫りついて泣き叫んだ。続いてキリトの瞳からも光る雫が溢れ、アスナの温もりを感じながら静かに涙を流した。二人の涙はやがて妖精の世界の中心に、いくつもの染みを作った

第45話 戦う理由

「そ、そんな……」

(トールと戦った時に使ってたペインアブソーバーってヤツか…オ
ティヌスのヤツ…なんだってそんなマネを…!)

「クソツ!!」

二人の話を聞いたリーファは思わず口を塞いでその目に涙を浮か
べ、上条は苦虫を噛み潰したような顔で、こみ上げた悔しさに身を任
せ、振り絞るような声と共に地団駄を踏んだ

「痛みもたしかに問題っちゃ問題だが…それ以上に厄介なのはあの
ガーディアンの数だ…ユイ…どうだ?」

ピュンツ!

「そうですね…あのガーディアン・モンスターは、ステータス的にはさ
ほどの強さではありませんが、出現数が異常です…あれでは攻略不可
能な難易度に設定されているとしか…」

「だろうな…」

「それに加え、いつもはLv. 10に設定されているペインアブソー
バーがあのだームの中だけはLv. 4にまで減少しています…現実
の身体には影響はありませんが…痛覚そのものは現実から僅かに
劣っている程度でダメージを受けた時の痛みは普段のものとは比べ
る想像を絶します…」

「そんな…そんなのもうゲームじゃ…」

「ねえユイちゃん、あの痛みの仕様はグランドクエストが出た当初か
らあのシステムだったの?」

「いえ…それがどうやら…急にシステムが変更されたようです…パパ
とママがグランドクエストに挑んだ瞬間にペインアブソーバーのLv
vが切り替えられたようで…ですがおそらく、これからあのドーム内
のペインアブソーバーが戻ることはないと思われそうです…」

「・・・分かった、ありがとう。二人ともごめんな。俺のためだけに辛い思いをさせちまった・・・みんなには感謝してもしきれない。今までありがとう。後は俺一人で全部終わらせる」

「「えっ!?!」」

「ま、待ってよ上やん君!無理だよ!ユイちゃんも言ってたけどあのグランドクエストは攻略不可能な難易度に設定されてるとしか思えないの!それに一人でなんてとても...!」

「だったら、その攻略不可能な設定を超えればいいだけだ。それに、穴が開くことには開けられるんだ。だったらそこに全力をぶつける」

「た、確かに異常なのは上やんさんのステータスとスキル熟練度も同じですから・・・瞬間的な突破力だけならあるいは・・・可能性があるかもしれないません・・・」

「ほら、ユイちゃんもこう言ってる」

「で、でも!上やん・・・君は耐えられるのか...?身体を裂く剣に、身体を刺す弓矢・・・それを君は...!」

「屁でもねえよ」

「!!!」
「!!!」

キリトの疑問に上条は自分の目の前の階段の先でそびて立つ世界樹を真っ直ぐな眼で見据え、そう言った

「そんな痛みなんか気にならねえ・・・よっぽど痛かった・・・よっぽど辛かったんだ。俺だけが帰ってきた・・・みんなが取り残されたんじゃない、俺だけが取り残されたんだ・・・どれだけ願ったか・・・この心を締め付ける痛みがなくなればいいと何度も思った・・・あの現実の心の痛みに比べれば・・・そんなの何ともない」

スタツ・・・スタツ・・・

上条は一段、また一段と目の前に広がる階段を踏みしめながら登り始めた

「たとえば無限の敵が立ちはだかろうと…」

一段。

「たとえば痛みでこの身体が灼かれようと…」

一段。

「たとえばこの右手がなくなっても…」

一段。

「最後にあの世界のみんなと一緒に笑って現実に帰れるなら…俺はそれでいい」

そしてまた一段と、上っていく。

「それが俺の戦う理由になる」

右の拳を握りしめて、始まりの時から何一つ変わらない『幻想殺しの少年』は、世界を、人々を、取り戻す

「そこに助けたい誰かがいるなら俺は…何度だって戦い続けられる」

「上やん…」

「上やん君…」

「上やんさん…」

「上やん君…」

いずれ天へと続く階段を上る少年は決して振り向かなかつた。彼の背中はどこか哀愁に満ちていて、それでいてなお、何よりも堂々としていた。そんな少年の後ろ姿はいつしかキリト達からは見えなく

なった

「待ってるよみんな…今そっちに行くからな…」

『未だ天の高みを知らぬ者よ、王の城へ到らんと欲するか』

「グランドクエスト『世界樹の守護者』に挑戦しますか？」

「OK」 ピコンッ！

『さればそなたが背の双翼の、天翔に足ることを示すがよい』
ズゴゴゴゴゴゴ…ズズンッ！

世界樹のドームへの扉を塞ぐ彫像の剣がゆっくりと扉から退いた。
そして常闇が口を開けるようにそのゲートが開いた

「行くぞ…オティヌス…」

背中を盾を左腕に備え、幻想殺しを右の拳に携え、上条当麻は宵闇
の中へと進んでいった

第46話 兄妹

「・・・上やんのヤツ：今ごろ上までたどり着いたかな・・・」

「・・・どうだろうね」

「ユイ、世界樹の中の事情は分かるか？」

「いえ・・・申し訳ありませんパパ：流石に内部の事情までは詳しく分からないです・・・」

「・・・そうか」

上条がグランドクエストに挑んでからおよそ20分が経過していた。上条の後ろ姿を見送ることしか出来なかった彼らは、リーファが祈るように世界樹を見つめ続け、世界樹へと続く階段にキリトとアスナは未だ腰を下ろして落胆していた

「・・・上やん君・・・」

リーファは世界樹へ一人で挑んだ少年のことを思い、その胸の前でキュツときつく手を握った

「・・・やっぱりあたし、あそこに行ってくる」

「!!よ、よセスグ！どうやったって無理なんだ!!」

「だからって！このまま上やん君を見殺しにしろって言うの!?!」

「・・・ああ、そうだ」

「~~~~~ツツ!!」

スパアantz!!

階段を上ろうとしたリーファを止めるためにキリトがリーファの前に立ち上がった。そして彼女に現実を突きつけるようにそう告げた。リーファは自分の唇を噛み締めると、キリトの頬に平手打ちを見舞った。周囲に乾いた音が鳴り響き、彼の頬が赤く染まっていた

「最っ…低っ!!お兄ちゃんだつて…お兄ちゃんだつて分かつてるでしょ!今世界樹を上ってる上やん君の肩にはどれだけの人の命が預けられてるのか分かつてるでしょ!」

「…ああ、分かつてる…それでも…それでも俺はスグをあの痛みに晒す訳にはいかない!俺には…目に見えない世界の6000人の命よりも…目の前のスグの方が大事だ!!」

「ツ!!そう…悪いけど…だったらあたし…お兄ちゃんのことぶつた切つてでもその先の道通るから…!」

「シャキーンツ!!」

「ツ!!そうか…悪いけど俺も譲らないぞ…たとえ何があつてもこの先にスグを通すわけにはいかない…!」

「ブオンツ!!」

世界樹へ続く階段に立ち塞がるキリトに向けてリーファは腰に据えた鞘に納められた長刀を抜き、同じくキリトも重低音と共に空を裂きながら背中の大剣を抜いた

「ちよっ!やめなよ二人とも!そんな…そんなことしたって何の意味もないよ!!」

「止めないでくれアスナ。これは…俺たち兄妹の問題なんだ」

「キリト君!!」

「…ふふっ…あたしたち『兄妹』の問題…ね…」

キリトのそんな言葉を聞いたリーファは、突然顔を下に俯かせ乾いたような声で微かに笑った

「…え?」

「ねえ、お兄ちゃん…あたし…知ってるんだ。あたしたちが本当は…血の繋がった本物の兄妹じゃないってこと」

「ツ!?な、なんでその事をスグが…!」

「知ってるの…あたしもう知ってるんだよ！あたしはその事をもう2年も前から知ってるの！」

「2年も前…ツ！…そうか…俺がまだSAOにいる時に…」

「そう…お兄ちゃんがSAOにいる時にお母さんから全部聞いた…でもお兄ちゃんはずっと前から知ってたんでしょ？お兄ちゃんが剣道をやめてあたしを避けるようになったのは、それが原因だったからなんでしょ？」

リーファの言葉は何一つとして間違っていないかった。全ての言葉が凶星を突かれていたからこそ、キリトは何も言い返すことができず、彼女から視線を逸らした

「あたしが本当の妹じゃないって知ってたからあたしを遠ざけてたんでしょ…だったら…だったらなんで今さらになって私に構うのよ！」
「ッ!!」

「あたし…お兄ちゃんがSAOから戻ってきてくれた時…嬉しかった…小さい頃みたいに仲良くしてくれて…すごく嬉しかった…仮想世界をもう一つの現実だって受け止めて…アスナさんを探し続けたお兄ちゃんを…誰よりもカッコいいと思った…」

「スグ……」

「リーファちゃん…」

「でも…今のお兄ちゃんなんか…今のお兄ちゃんなんかに分かるわけない!!自分の目の前の人は何度声をかけてもなんの反応もなくて…待ち続けることしか出来なかったあたしの気持ちなんて!上やん君を見捨てた今のお兄ちゃんに理解出来るはずなんかないっ!!」
「!!!」

激昂するリーファの頬には涙が伝っていた。感情が昂ぶりすぎたため、涙腺から流れる雫に歯止めが効かなかった。それでもなお、彼女はキリトに向かって感情を投げ続けた

「だからあたし…上やん君の気持ちが…痛いほどよく分かった…待ち続けることしか出来ない気持ちも…探し続けた手がかりをやつと見つけて自分から誰かを助け出せるって分かったなら、そこにどれだけ全力をかけたくなるかなんて…上やん君を見ただけで分かった…」

「助けてあげたいと思った…出来るなら一緒に戦ってあげたいと思つた…上やん君がお兄ちゃんと同じに見えたから！仮想世界を同じも一つの現実だと思つて！その世界を全力で生きようとしてた！あたしはそんな世界で戦う上やん君を助けたいと思つた!!」

「でも…違つた…お兄ちゃんは…お兄ちゃんは上やん君を見捨てた！上やん君にとつての現実を…あたしたちにとつてのもう一つの現実世界を…無関係だつて切り捨てた！」

「ち、違うんだスグ！俺はただ…！」

「あたしに傷ついてほしくない？痛みを感じてほしくない？笑わせないでよ…お兄ちゃんがいつの間にかどんどん自分から遠ざかつていくあたしの心の痛みも分からないくせに…あたしの気持ち勝手に分かつた氣になつて…」

「今さらになつて兄貴ヅラしてあたしの邪魔しないでよつ!!」

「!!!」

「カランカランツ…！…カラン…」

リーファの言葉の終わりとともにキリトの顔は血の氣が引いていき、顔面蒼白になった。そして全身の力が抜けていき、その手に握られた大剣が音を立てて地に落ちた

「…もういいでしょ。あたし、行くから」

「リーファちゃん！」

「…ごめんなさい、アスナさん…それでも私…行かなきゃ…行かなきゃいけないんです」

ギユンツ!!

リーファの名を叫んで手を伸ばして彼女を止めようとするアスナ

だったが、リーファはその手が自分を掴むよりも早く背中から翅を出す
すと、世界樹を目指し飛び立った

「ッ!? スグ!!」

「リーファちゃん!!」

「リーファさん!!」

ゴオオオオオオオオ!!!

「待っててね上やん君…今助けにいくから!」

空を切りながら飛ぶリーファはあつという間に階段を上りきり、
ドームに続くゲートを開け放ち、ドームの中に飛び込んだ

第47話 天の高みへ

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」
「バゴオオオオオオン!!!」

上条がグランドクエストに挑んでから既に15分ほどが経過していた。天井に咲く花の中央で待つ四枚の岩壁を直指して一心不乱にその特異な右手を振るい続け、上条はドーム内のおよそ中間地点にまで迫っていた

「ゴガアアアア!!!」

ガキイン!!

「うおらあああああああああああああああああああ！！！！」
「バキイイイイイイイツツツ!!!」

攻撃を盾で防ぎ、右手で一撃を叩き込み、ガーディアンが爆散する。これをひたすらに繰り返した。既に何十体ものガーディアンを沈めたが、彼のHPは未だに安全圏内を保っていた

「はあ…はあ…くそつ、本当にキリがないってのはこのことだな…」

「ゴガアアアア!!!」

ブンツッ！ドガアアアアン!!

「だけど俺は…諦める訳にはいかねえんだよ!!」

ガーディアンが振り下ろした剣を避け、カウンターを叩き込んだ。白銀の鎧がガチガチと悲鳴をあげ、その四肢が煙となって弾けた

「まだまだあ!!」

『中々どうしてやるじゃないか。幻想殺し』

「ツ!?オティヌスカ!?!」

『いかにも』

意気込む上条の耳に不意にオティヌスの声が聞こえた。しかし、ドームの中に隻眼の魔神の姿はなく、彼女の声が聞こえた瞬間に周りのガーディアンはその場で動かなくなった

『なに、私が直接出向いて世界を丸ごと終わらせてもいいんだが…この世界は曲がりなりにもゲームだ。楽しんでるか？』

「なにがゲームだ！わざわざペインアブソーバーまでいじくりやがって！お前のせいでキリトとアスナは…ッ!?待てよ…世界を丸ごと終わらせるって…まさかお前…!」

『ん？ああ、察しの通り槍なら完成したさ。もうコレは私にとってお前を消す為の余興でしかない』

「野郎…!」一体どうすりゃみんなを助けられるんだ!」

『簡単な話さ。私の槍を破壊すればいい。私の槍はいわば約6000人のSAOプレイヤーの記憶から作った鋼鉄の城そのもの…私の槍を破壊すれば槍を形作っている彼らの意識は元の世界に戻っていく…まあ出来もしないとは思うがな』

『しかし一筋縄で行くと思うなよ。この世界で貴様が死ぬということとは貴様の精神が行き場を失くすということに他ならないのだからな』
「俺の…精神…?」

『ああ。何しろ貴様は我々の生み出したALOのソフトで意識だけをメデイキュボイドによって元いた世界とは異なる世界に飛ばしている。普通にログアウトする分には話は別だが、貴様に死に戻りなどという道はない。もし仮に貴様が蘇生猶予時間外を超えて強制ログアウトしようものなら、貴様の意識は元の世界に戻ることなく無数の世界を永遠に放浪することになる』

「んなっ!」

『まあ世界の基準点となる貴様の幻想殺しという『概念そのもの』がリメンライトと共にその場に残りはするが…それは貴様の意識がなくなった後に私が丁重に潰すでしょう。そうして私が望む本当の世界

がようやく完成する』

「ツ！テメエツ：！！」

『さて小休止は終わりだ。今は丁度ドームの中間地点か：精々私が痺れを切らして世界ごと終わらせる前にガーディアンどもを退け私の元にたどり着くことを期待しておこうか』

「ゴガアアアア！！」

シユン！シユン！シユン！シユン！シユン！シユン！シユン！シユン！シユン！シユン！シユン！シユン！シユン！シユン！シユン！

オティヌスの言葉の終わりと同時にガーディアンが再び行動を始め、ステンドグラスからも次々に新しい敵が湧き始めた

「望むところだああああああ！！」

バキツ！ドゴツ！グシャツ！ドガツ！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

ズガアアアツ！！

「クライン：！！」

ドゴオオオツ！！

「エギル：！！」

バキイイイツ！！

もしも誰かが彼の戦い目の当たりにしたのなら、たった一人の孤独な戦いだと言うだろう。しかし上条当麻がそれを聞けば、それは違うと言うだろう

「アルゴ：！！」

ドガアアアツ！！

「シリカ：！！」

バゴオオオン！！

「リズ…！」
ガキイイイン!!

そう、彼の中では紛れもなく生きています。あの剣の世界を共に生きた仲間達が。白銀の騎士を拳で落とす、振り下ろされる剣を盾で弾く度、その記憶を蘇らせてその名を呼ぶ。そして彼の脳裏に蘇るのは…一人の少女が眠る病室のベットの前で何度も夢見た…必ず取り戻すと誓った彼女との時間…

「美琴おおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」
ドガガガガガガガガガツツ!!

右手を前に突き出し、翅を懸命に打ち鳴らしてガーディアンの大群を強引に掻き分けて進む。未だ届かぬ天の高みへと、少年は手を伸ばす

「ああああああああああああああああああああああ!!!!」
ドガガガガガガガガツツ…ガシツ!!
「ツ?!」

しかし、突き進む上条の足を一体のガーディアンが掴み、その飛翔に待ったをかけた。彼を止めた守護騎士が白銀の仮面の向こう側でほくそ笑んでいることを想像するのは難しくなかった

「クソツ！離せこのつ！俺はこんなとこで止まってる場合じゃ…!!」
ドスツ!!
「ツ?!がっ?!」
ドスツ！グサツ！ドスツ！ズブツ!!
「いぎっ?!ぐっ?!ツっ?!あがあっ?!」

足を掴まれ空中で身動きの取れなくなった上条の身体を彼目掛けて突進したガーディアンが貫いた。そしてまた一本、もう一本と剣が彼の身体を貫いていき、激痛を伴いながら彼のHPは容赦なく減らされていった

「……あ……終われ……ねえんだ……俺は……何が何でも……テメエら全員……ぶっ飛ばして……みんなに……会いに……」

「…………ギギギ」

ズバンツ!!!

そして、どこまでも無慈悲な守護騎士の冷たい白銀の剣が振り下ろされ上条の首を刎ねた。その瞬間、上条の眼から見える世界がぐるりと回りHPが完全に底を突いた。そして……

「You are dead」

「……………あ」

ボウツ!!!

目の前に血で染まったような赤い文字が広がった瞬間、上条の体はあっけなく碎け散り黒いエンドフレイムに包まれた。そして無情にも彼の視界は闇に包まれた

第48話 残り火

(俺は…負けたのか…)

「蘇生猶予時間 600…599…598…」

リメンライトとなった上条の闇に包まれた視界は少しづつ晴れていき、白黒のモノトーンのような彩度が失われた光景が広がっていた。そして目の前にはシステマ的な文字で蘇生猶予時間と減少していく秒数が表示されていた

(これが0になったら…俺の意識は…どこもしれない世界をさまよいつけるのか…)

(…ごめん…ごめんなみんな…後もう少しだったのに…あのゲートの奥にはみんなが待ってるのに…届かなかった…)

上条は意識の中で懸命にドームの天蓋に咲く花に右腕を伸ばそうとした。しかし、そこに残っているのは彼の右腕という概念だけであつた。無論その伸ばした腕が届くはずもなく、そんな上条を嘲笑うかのようにガーディアン達は壁に貼り付けられたステンドグラスの中へと帰投していく

(…ちくしょう…ちくしょう…ちくしょう…ちくしょう…ちつきしよおおおおお…)

もはや悔しさを噛みしめる歯や口すらもなかった。そこにあるのはただの小さな残り火。自分に救えなかった人々を懸命に救おうと魂を燃やした少年の、どこか虚ろな最後の灯火だった

(父さん…母さん…ごめん…俺、二人が死んだ後にいく天国にいけるかどうかも分かんねえや…いつも迷惑かけてばっかで…心配させて

ばっかで…本当にごめん…)

(カエル顔の先生…ごめん…先生が託してくれたみんなのこと…助けられなかった…俺を信じてくれたのに…ごめん…)

(吹寄…ずっと俺の世話してくれて…ありがとう…心配してくれて…励ましてくれて…力になってくれて…ありがとう…でももう…会えそうに…ねえや…ごめん…)

(…美琴…SAOの時より前…学園都市で一緒にいた時から…ずっと俺の支えになってくれたのに…肝心な時に助けてやれなくて…ごめん。俺たちは会えるのかすら分かんねえや…だけど…俺は最後に一目…)
(お前を…)

「やはりこんなものか…思い返せば実につまらん余興だったな。まるで時間の無駄だ…まあ、無限の時を生きる魔神にとっては時間の無駄など些細な問題に過ぎないが…」

そこは世界樹の上かも分からぬ空間だった。オティヌスだけが存在する世界で、その世界で彼女は玉座に腰掛け、立体映像で映し出された世界樹のドームを監視しており、リメンライトとなった上条を一瞥するとそう呟いた

「さて、長かった苦しみはもうこれで終わりだ…後はヤツの幻想殺しをあの残り火ごと潰し…私は…私が元いた世界へと…」

ピコンッ!

「…チツ」

「グランドクエストの挑戦者が現れました

a >」

< ↓ Leaf

「全くどいつもこいつも往生際の悪い…まあいい…精々激痛にその身を灼かれるサマを退屈しのぎに見物させてもらおうか…」

「ッ!!!」

ギョーンツ!!

世界樹のドームの内部へと侵入したリーファの取った行動は至ってシンプルだった。自分の翅が許す限りのスピードで高みへと飛翔し、ステンドグラスから湧き出るガーディアンをことごとく無視して進んだ

「あれは…上やん君のリメンライト…!?!」

「ゴガアアアア!!」

「邪魔っ!!」

キーンツ!!ビュンツ!!

天蓋へと翔けるリーファが視線の先に見つけたのは、世界に取り残された一つの黒いリメンライトだった。しかし、その先に一体のガーディアンが立ちはだかり彼女に白銀の剣を振り下ろすが、リーファはそれを長刀で防御すると、それ以上そのガーディアンには目もくれず、黒い残り火に向かって飛んだ

「上やん君!!」

シルフの少女は両手を伸ばし、リメンライトとなった上条を包み込んだ。しかし、すでに頂上のゲートにかなり接近しておりガーディアンはこれ以上の侵入は許すまいと、びっしりと密集し幾重もの鉄の壁を作った。しかしリーファは上条のリメンライトを確保した途端、ガーディアンの壁など目もくれず急激にUターンし一直線に出口を目指した

(もう今はこれ以上ここにいたらいけない……！蘇生時間にはまだ余裕がある！外に出て上やん君を蘇生させてから今度は私も一緒にもう一度……！)

ブスツ!!

「いづつ!?!」

しかし、そんな彼女を逃すまいとガーディアンは白い光の矢を放った。その矢は正確にリーファの背中に突き刺さり、リーファは激痛に顔を歪めた

ドスツ!グサツ!ザシュツ!ブスツ!ガツ!ドスツ!

「あうっ!ひぎっ!はぐっ!うあっ!うぐっ!」

出口に向かってダイブし続けるリーファに向けて放たれる矢の雨が、立て続けに彼女の身体を貫いた。HPがガクン、ガクンと減少していき、もはやその痛みは筆舌に尽くしがたいものだったが、リーファは息を詰まらせながらもその翅を広げ出口を目指した。しかし、そんな彼女を二体のガーディアンが襲った

ブオンツ!

「くっ!」

「ゴガアアアアアアアアツ!!!」

ザシュツツツ!!!

「あっ………」

ドサツ!!ザザザツ!!

迫り来る二本の剣をリーファは最初の一本こそかわしたが、二本目を躲しきることは叶わなかった。もはや痛みにも声をあげることすら叶わず、間近に迫っていた床に激突した

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン

と黒い残り火はドームの外へと飛び出した

第49話 生還

「はあっ！はあっ！はあーっ！」

未だかつてない程の絶望的な状況からどうにか生還し、リーファはその体を石畳に投げ出して何度も荒い息を吐いていた。自身を蝕んでいた痛みはドームを出たことですからすっかり消え、今では少し違和感が残っている程度だった

「上やん…君…」

そして彼女の腕の中には小さな黒い残り火。感傷に浸る暇はないと左手を振ってアイテムウインドウを開く。その中から『世界樹の朝露』という蘇生アイテムをオブジェクト化させると、青い小瓶を手に取り、小瓶の中の輝く液体を上条のリメンライトに注いだ

シューウウウウウ……

「上やん君！よかったあ…間に合っ t…」

ガシツ!!

「痛っ!?!」

「どうしてだリーファ! どうしてあんな危険なマネした!?!」

黒煙に包まれリメンライトから実体化した上条を見るなり、リーファは立ち上がって彼と視線を合わせ安堵に胸を撫で下ろそうとしたが、そんな彼女の両肩を思いつきり掴み、上条は怒号にも近い声で彼女を問いただした

「だ、だって…あのままじゃ上やん君が…」

「誰がそんなことしろって言った!?! 後は全部俺一人でやるって言っただろうが! なのに…それなのに…! あんな無茶しやがって! 次も

ドームの中のペインアブソーバーがL.V. 4のままだなんて保証はどこにもねえんだぞ?!

「だ、だって…だって…」

ガバツ!!

「…ふえっ!?!/ /」

「無事で…よかった…本当に…」

自分を叱りつける上条の言葉にリーファは思わず涙を溢しそうになったが、その前に上条の腕の中に包み込まれていた。そして上条はそんな彼女の存在を確かめるようにリーファをきつく抱きしめた

「ちよ、ちよ…上やん君…嬉しいんだけど…そろそろ苦しい…/ /」

「…えっ?のわあっ!?!す、すまんリーファ!わ、わざとじゃないんだ!体が勝手に…!」

「あ…う、ううん…いいよ別に。あたしは上やん君と違って心が広いからそんなことじゃ怒らないよ」

「いや心が広いってお前な…怒るっただってあんなだけ無茶すりや俺じゃなくたって怒るぞ…それこそキリトとか大激怒だろ」

「…どうかな…」

「…え?」

呆れたようにリーファに声をかける上条だったが、当のリーファは何やら後味の悪いような顔で俯いて石畳を見つめていた。すると、何やら階段を上る足音が近づいてきた

タツタツタツタツ!

「いた!スグ!上やん!」

「リーファちゃん!上やん君!」

「キリト!アスナ!」

「よかった…無事だったのね!」

「ああ…クリアに至るまでは叶わなかったが…リメンライトになった

ところをリーファに助けってもらって何とか戻ってきた」

「・・・そつか・・・」

「？」

アスナは上条が無事だったと安堵すると、上条は自分に起きた事情を説明したが、その話を聞いた途端アスナは暗い表情を浮かべ、上条から視線を逸らした

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

しかしその一方でキリトとリーファの二人は互いを真剣に見つめ、何も語らずその視線を逸らさなかった

「な、なあアスナ・・・あの二人なんかあったのか？」

「しっ！今はダメです上やんさん！」

「え？お、おう・・・分かった・・・」

上条はアスナに密かに耳打ちで二人の事情を聞こうとしたがユイにそう指摘され、一先ずは二人を見守ることにした

「・・・お兄ちゃん・・・言っておくけど、あたし間違ったことをしたとは思ってないからね」

「・・・ああ、分かってる。ごめんスグ・・・間違っていたのは俺の方だ」

「・・・・・・・・え？」

「上やん、頼みがある」

「え？俺？」

「俺と・・・一度だけデュエルをしてくれないか？」

「・・・その理由は？」

「正直なところ俺は・・・SAOとあまりに状況が違いすぎるこの世界も・・・このALLOの世界のことをSAOと同じようにこの仮想世界がも

う一つの現実だと受け入れきれなかった。アスナを見つけ出す為の手段の一つで…この世界は所詮ただのゲームだと…そう思い込んでいた」

「だから俺は確かめたいんだ。上やんからはこの世界がどう見えているのか、上やんはSAOでも、このALOでも同じように仮想世界をもう一つの現実だと受け入れて戦ってきたはずだ」

「キリト君…」

「俺はもう一度思い出したいんだ…俺がSAOで感じた世界はどうだったのかを…そうじゃないと、俺は今ここで上やんやスグと一緒に戦う資格がない」

「お兄ちゃん…」

「パパ…」

「だから頼む上やん、一度だけでいい。俺と真剣勝負でデュエルしてくれ」

「…分かった。受けて立つぜ」

こうして上条一行はアルンの北側にあるテラスへと移動した。次第にALO内の時間設定は夜を超え、日の出とともに妖精の世界を柔らかな陽射しが照らしていた

第50話 真剣勝負

「じゃ、始めるか」

「おう、先に言っとくけど、スグの時みたいにリザインは無しだからな
上やん」

「もちろん」

そう言うときリトは上条にデュエル申請を送り、上条はデュエル申請を「完全決着モード」で承認し、デュエル開始までのカウントダウンが始まった

「始まるんだね…お兄ちゃんと上やん君の真剣勝負が…」

「うん…生き抜いたSAOは違う世界だったけど…正真正銘それぞれのSAOをクリアに導いたプレイヤー同士の戦いだよ…！」

「パパ…上やんさん…頑張つて！」

がらんとした石畳の中央に、小柄な黒い人影がぽつんと二つ。両者は10メートルほどの距離を置いて向かい合い、その光景を上空からリーファとアスナとユイは見守っていた

「3…2…1…」

「行くぞ！上やん!!」

ブオンツ!!

「来い！キリト!!」

ザンツ!!

カウントダウンが0に近づき、キリトは自分の背丈ほどある大剣を抜き放つ。一方の上条は盾を左腕に装備し

右手の拳を握り、大地を踏みしめた

「Start!」

「うおおおおおおお!!」
ダダダダダダッ!ガキインツ!!

スタートの合図とともに両者は一斉に駆け出した。キリトの大剣が振るわれ、上条は盾でそれを受け止めた

ガリガリガリツ!!!

「でやあっ!」

ブンツ!!

「ツ!!うおおおおお!!」

ガキインツ!!

最初は大剣を受け止める盾を両手で支えていた上条だったが、盾から右腕を離すと右ストレートをキリトに向けて放つが、キリトはそれをかわしてもう一度大剣を振るい直したが、またも上条は盾でその一撃を防いだ

(強い...!初見で俺の右拳をかわす並外れた反応速度に...卓越した剣術...!流石だぜキリト!世界は違えど同じくSAOをクリアしたプレイヤーだけのことはある!)

(流石だよ上やん...油断も隙もあつたもんじゃない...茅場に引けを取らないその防御術と...迷いのない拳...こうして君と本気で戦えることを光栄に思うよ...今...本当の意味で俺は...君と...)

(ああ、分かる...言葉にしなくても...こうして戦っているだけで分かる...俺は今...本当の意味でお前と...)

(同じ世界で戦っている!!)

「うおおおおおおお!!」

「うおおおおおおおっつっ!!」
ガキインツ!!

両者の剣と盾が熱くぶつかり合い火花を散らす。両者の実力はほぼ互角。攻撃を喰らえばお返しとばかりに反撃を繰り返す。HPの減少は常に平行線をたどっており、一進一退の攻防が続いていた

「す、すごいです……」

「あれ…本当にあたしたちと同じ人間よね？」

「うん…でもきつと…もう二人にとっては勝ち負けなんてどうだっていいんだよ。ただお互いが見てる世界がどう映っているのか…それを知りたいと思うことに、もう現実も仮想世界もないんだよ」

「…はい。きつと」

アスナの言葉が心に染み渡り、本気でぶつかり合うキリトと上条を見てリーファは優しく微笑んだ

「キリトツ!!」

「シャキンツ!!フォンフォンツ!!」

「ツ!?!」

「パシンツ!」

「…これは…」

「そういうモンなんだろ？お前が使ってたユニークスキルは。そんな初期の片手剣で心許ないかもしれないねえけど…見せてくれよ…お前の本当の本気ってやつを」

「!!なるほどそういうことか…そういうことなら勿体ぶらずに見せるよ…これが俺の最高の切り札…『二刀流』だ!」

上条がデュエルの最中にキリトの名を叫び、背中の鞘に収めた片手剣を抜き彼に向かって投げた。キリトはその片手剣を受け取ると、その剣を左手で握りしめ、雄々しく二本の剣を構えた

「はあああああああああああああああああああつっつ!!!!」

キンキンキンツキンキンツ!ガキイキンキンツギインツ
ガキイン!

「ツ!?!」

キリトの持つ二本の剣から踊るような斬撃が次々に織り成されていく。上条はそれを盾で防いでいるが、自分の予想を遥かに上回るキリトの勢いに気圧されていた

「ツ!?!これは…早すぎだろっ!?!」

(抜けるっ!!)

「ぜやあああああああああああ

あああああつっつ!!!!」

上条がそこで目の当たりにしたのは尋常ではない速度で二本の剣から次々に繰り出される煌めく星屑のような斬撃だった。それはキリトが自分の脳裏に焼き付いた記憶から再現した流星の如き16連撃。二刀流を使いこなした彼にのみ許されたソードスキル「スターバースト・ストリーム」

ズババババババババババババババババツツ!!!

「ツ!?!がはっ!?!」

キリトが繰り出した16連撃は1撃も漏らすこと無く上条の身体を切り裂き、上条のHPはもはや風前の灯火であった

「とどめだあああああああああああああああ!!!」

ズバアアアアアンツツ!!!

キリトがとどめだと宣言し上条に向けて振り下ろしたのは、奇しく

らず、HPが1だけシステムによって与えられていた

「・・・上・・・やん?」

「俺の負けだキリト。結果はどうあれ、いいデュエルだった」

「ちよ、ちよつと待ってくれ上やん!最後のは一体...!」

「あつはつは...まあ細けえこたあ気にすんな!あ、悪いんだけど俺の片手剣返して貰ってもいいか?」

「え?あ、おう...」

「おう、サンキューな」

キリトは左腕に持っていた上条の剣を返すと、上条はその初期の片手剣を背中の鞆に納めた

(いやあ...コントロールが効くようになったとはいえ右腕を切り落とされちまうとどうにもな...慌てて抑え込んだけど隠しきれなかったか...)

(・・・本人はこう言ってるけど...十中八九あの見えない「力」は上やんのモノだ...もし彼が最初からアレを使っていたら俺は二刀流でも勝てたのか?いやそもそも一太刀でも当てられたのか?本当に底が知れないな...)

「・・・なあキリト、俺は元から1人でどうにかしようと思ってたんだが...今なら分かる。正直あのグランドクエストは俺一人じゃ絶対にクリア出来ない...だからもし...もしキリトさえ良ければ俺と一緒に戦ってくれ!」

「・・・何を今さら。それを覚悟する為に俺がデュエルを申し込んだんじゃないか。もちろん俺は上やんと一緒に戦うよ」

「ほ、本当か!」

「ああ。男に二言はないよ」

「ありがとう!本当にありがとう!」

「ごつちこそ、改めてよろしく。相棒」

そう言ってキリトは右手を上条に差し出し、上条はその右手を取っ

て熱いデュエルを繰り広げようと、これからの共闘の感謝の意を込めて握手を交わした

第51話 絆

「キリトくん！上やんくん！」

「お兄ちゃん！上やんくん！」

「おっ、二人とも戻ってきたか」

「スタツ！スタツ！」

「パパ！お疲れ様です！とつてもすごいデュエルでした！」

「ああ、ありがとう。ユイ」

「はい！」

「上やん君、お疲れ様」

「おう、ありがとよ…とりたいところだけどアスナ、お前キリトの方に行かなくていいのかよ？」

「うん、大丈夫大丈夫、キリト君のところにはユイちゃんがいるし。」

「そ・れ・よ・り……」

ズイツ！

アスナは恋人であるキリトの方ではなく、真っ先に上条の方へと労いの言葉をかけに行ったが、なにやら不気味な笑顔で上条の方へと詰め寄った

「あ、アスナさん？顔だけ笑っていて目が笑っていないんですが…い、一体なんでせう？」

「最後の『アレ』は一体なに？」

「…最後？ああ、俺の片手剣をキリトに投げ渡して二刀流で戦ってもらって俺が負けただけだ…」

「嘘つくんじゃないやありません！私が言ってるのは上やん君が右腕を切られた時のことを言ってるの！どう考えてもあんな感覚は普通じゃありません！」

アスナの質問をどうにかはぐらかして誤魔化そうとする上条だっ

だが、まるでアスナは小言を言う母親のように上条を問いただした

「い、いや別になんでも…」

「まあまあいいじゃないですかアスナさん。スキルの詮索はマナー違反ですよ…」

「それはそうかもしれないけど…」

「それにほら、後ろ後ろ」

「え？後ろって…」

「………」

「む………」

「あ………」

リーファに言われ、アスナが自分の後ろに振り向くとその視線の先には複雑そうな表情をしたキリトと腕を組みながら頬をぷっくりと膨らませたユイがいた

「ママ！デュエルで頑張ったのは確かに上やんさんも一緒ですがそれでもパパを差し置いて上やんさんの方を優先するなんてダメです！」

「い、いやそれはねユイちゃん：別にママだって悪気があったわけじゃ……」

「それに！上やんさんに近づきすぎです！パパも嫉妬してます！」

「え？」

「ば、バカ！お、おかしなこと言うもんじゃないぞユイ！」

「き、キリト君：嫉妬してたの？」

「し、してない！それしきのことで嫉妬なんてしないってば……」

「もお……それならそうと言ってくれればいいのに……」
「すれば私だって上やん君の方より先にキリト君の方に行つてあげたの……」

「だから違うんだってー!!!」

「はいはい、2人ともごちそうさまごちそうさま。……はあく……上やんさんもそんな風にイチヤツける彼女がほしい……」

「えっ!? 上やん君彼女いないの!？」

「いるわけねーだろ…もはやそんな一大イベントが来たこともねーよ…」

「へ、へえ〜? そうなんだ〜? ふ〜ん…／／／」

上条の呟きを聞いて、その呟きに対してリーファが驚きとともにそんな疑問を投げた。そして彼女がいないと分かるとリーファは関心がなさそうに装いながらも、頬が赤く染まり、なにやら嬉しそうに髪の毛をいじっていた

「そうなんだもなにもそうだって言ってるだろ…不幸だ…」

「んっ! んっ!」

大学生になっても彼女いない歴〃年齢という事実にがつくりと肩を落とした上条だったが、キリトが場を仕切り直そうと咳払いをした

「…さて、何はともあれだ。俺は今のデュエルで今自分が何をすべきなのかをしっかり見直すことが出来た。俺は…上やんと協力して世界樹を攻略する!」

「ああ、ありがとなキリト」

「えっと…それで…スグ…さっきのことなんだが…その…」

リーファに向けて言葉をかけようとするキリトだったが、そんな彼に向けてリーファは首を横に振った

「ううん、もう大丈夫だよお兄ちゃん。何も言わなくても分かるから…大丈夫」

「え?」

「あたしの方こそ…ごめんね。あんなにキツイこと言って…本当はちゃんと分かったのに…あたしたちの関係は時間をかけてちゃんと考えたいって…そう思ってたのに…」

「スグ…」

「それなのに、あんな風に持て余した感情をただぶつけるためだけに
お母さんにあたしが全部教えて貰ったことをお兄ちゃんに黙ってて
もらったわけじゃないのに…あたし…あんなに酷いことっ…！」

ギョツ…

自分の言ったことがどれだけ兄の心を傷つけただろうと想像した
リーファの瞳から大粒の涙が溢れた。しかし、そんな彼女の身体をキ
リトが優しく抱きしめた

「ッ!!お兄…ちゃん…」

「もういい…もういいんだ。俺の方こそ…ごめんな。あの時からスグ
や家族のみんなを遠ざけてしまった…でも、SAOから戻ってきてス
グの顔を見た時…素直に嬉しいと思った。数年かけて開いてしまっ
た距離を…取り戻したいと思ったんだ…」

「だから…俺は…これからもスグと一緒に笑って…泣いて…どんな困
難が立ちはだかつて、一緒に戦っていききたいと思った」

「だから…これからどんな世界でも変わらずに…俺の知ってる…俺の
大好きな…どこまでも真っ直ぐなスグでいてくれ」

「うん…うん…！お兄ちゃん…大好きだよ…！」

リーファはキリトの腕の中で何度も頷くと、自分もキリトの身体に
腕を回し互いに抱きしめ合った。そして変わらぬ幸せを願いながら、
上条とアスナとユイの三人は抱き合う二人を温かく見守っていた

第52話 団結

「・・・戻ってきたな」

「うん…次こそは…絶対に…!」

上条とキリトのデュエルが決着し、一行の決意はより強固なモノとなった今、上条達は世界樹のドームの前にいた

「アスナ…本当に大丈夫なのか？確かにアスナと一緒に戦ってくれるのは心強いけど…俺としては…これ以上アスナを…」

「待って。それ以上はダメだよキリト君」

キリトは世界樹の前に戻る時に一緒に戦うと言ったアスナを心配するように声をかけたが、そんな彼の言葉にアスナは手の平を見せ、その言葉を止めさせた

「アスナ…」

「私も一緒に戦う。これは私が自分自身で決めたことなの。確かにこれからまたあの痛みと戦うのかと思うと怖くて堪らない。けど、それ以上に今みんなと一緒に戦えないのはもっと怖い。だから、心配しないで。キリト君が私を守ってくれるように、私もキリト君のことを守るから」

そう言っつて、アスナはキリトに顔を近づけると、彼の頬に優しくキスをした

「・・・よし、分かった。頼りにしてるぜアスナ!」

「うん!任せてキリト君!」

「パパ!ママ!頑張つて下さい!私も私ができることを全力でやります!」

「ああ、ありがとう。ユイ」

「ユイちゃん…このグラウンドクエストが終わったらみんなでピクニックに行こうね」

「はい！約束ですよママ！パパ！」

「よーっし！それじゃあ！」

バツ！

気合いを入れて声を上げたリーファは、何やら自分を含めた四人の妖精から見た丁度真ん中ほどの位置に自分の右手を差し出した

「？どうしたんだよりリーファ？いきなり右手なんか出して…」

「なるほど…そういうことか」

トンツ！

「そうだね、やっぱり団結する時はこういうのが一番だもんね」

トンツ！

上条が疑問を感じる中、リーファに続いてキリトとアスナが右手を差し出し、各々の右手に重ねていった

「ほら、上やん君も！」

「え？俺もって…ああなるほど！そういうことか！」

トンツ！

上条がやつと自分以外の全員が右手を重ねた意味を理解すると、最後に自分の右手を一番上に重ねて円陣を組んだ。そして、その中心である上条の右手にユイがちよこんと座った

「みんな…ありがとう。こんな見ず知らずの俺のために一緒に戦ってくれて…俺はみんなのことを一生忘れはしない！」

「うん！」

「おう！」

「ええ！」

「はいっ！」

「確かにあのドームの中の痛みは尋常なもんじゃない…でも、俺たちならきつとなんとかできる。俺が先陣を切って突き進んでガーディアンをぶつ飛ばす。だからみんなはなんとか俺だけでもあのゲートに届けてくれ。恐らくあのゲートの先にいる最後の敵は…俺にしか倒せない」

「分かった。そういうことなら俺は上やんに続いて前線に道を開ける。アスナとスグは後方から回復を頼む。もしチャンスが来たなら、一緒に前線に上がって一気に道を開いてくれ」

「了解っ！」

「うん！分かった！」

「…正真正銘これが最後の戦いになる。だから…いつかまたみんなに会って礼を言うために、俺の本当の名前を覚えておこうと思う」

「俺の名前は『上条当麻』！」

「あたしの名前は『桐ヶ谷直葉』！」

「俺の名前は『桐ヶ谷和人』！」

「私の名前は『結城明日菜』！」

「私の名前は『ユイ』です！」

「よし…行くぞみんなっ!!」

「…おおおおっ!!」

こうして自分達の勝利を誓って円陣を切った上条達は、無数のガーディアンが待つグラウンドクレストへと挑み、その頂上で待つオティヌスの元を目指すのだった

—————

「ッ!？」

パリンッ!!

とある大学の学生寮の一室で何かが砕け散ったような渴いた音が鳴り響いていた。その原因は彼女、この学生寮の一室に住まう吹寄制理にあった

「・・・今のは…一体なに…？」

吹寄は普段から自炊を心掛けており、この日の夕食も自分の手で調理したものを食した。おかげで手料理には多少なりとも自信がある。故に彼女は滅多なことがなければ皿など割らないのだ。であるにも関わらず、彼女の足元には既に割れた皿のガラス片が散在していた

「…嫌な予感が…胸騒ぎがする…まさか上条のヤツの身に何か…！」

そう、彼女がキッチンで洗浄していた皿を床に落とした理由はただならぬ予感をその肌で感じ取ったからであった。それが何であるかを自分の中で理解してからの彼女の行動は早かった

「とりあえず簡易用医療キットは必要不可欠よね…後は携帯型健康食料…それと栄養ドリンク…化粧品は…ええいつ！この際すっぴん晒してやるわよ！」

彼女は自分の意思の赴くままに、割れた皿など気にせず手に取ったカバンに医療キットや日頃から通販で買い込んでいた健康食品を詰め込み始めた

キユツ!!

「一先ずはこんなものかしらね…急がないと…手遅れになる前に…！行ってきます！」

ドタドタ！ガチャツ！バタンツ！

吹寄は荷物を入れ終わったバックの緒をキッチンと閉めると、部屋の

中を慌ただしく駆け出し、玄関で靴に履き替えると大慌てで家を飛び出した。そして夜に包まれた学園都市を駆け抜け、上条の元を目指した

ピシツ!!

「・・・？」

その時、カエルのマスコットに良く似た顔をした名医、冥土帰しはその日の手術や治療を終え、患者のカルテをまとめていた。しかし、ふと喉の渇きを潤すため妹達の1人が自分の為に淹れたお茶に手を伸ばしたところ、その湯のみに突然ヒビが入った

「・・・これは・・・」

「おや？先生大丈夫ですか？と、ミサカはヒビが入ったにも関わらず中のお茶が漏れなかった湯のみを興味深く見つめます」

「・・・まずいねえ・・・」

「えっ？み、ミサカの淹れたお茶は先生のお口には合いませんでしたか？と、ミサカは悲しみの表情を浮かべます・・・」

「え？あつ、ああいや・・・そういうことではないんだねこれは「？」

冥土帰しの言葉の意図が読み取れず、首を傾げるミサカ10032号を他所に、冥土帰しは自分の感じ取った予感について顎に手を当て、数秒間だけ思考を巡らせた

「まさか・・・いや、でもそれをまさかで否定しきるのは良くないねえ・・・」

「ちよつと悪いんだけどね君、セキュリティ制御室の人に頼んで地下の仮想治療室の鍵を開けておいてもらえないかな？」

「仮想治療室…ですか？と、ミサカは確認を取るとともにそのワケを聞き出します」

「悪い予感がするんだね…僕も医者の方で…患者の容体の異変やそういった僕の勘は…よく当たる」

「それは要するに…ミサカ達の恩人である『彼』の身に何かあったかもしれないということですか？と、ミサカは先生の勘について推測します」

「そうだね…きつとそうに違いない…ともあれこれから忙しくなるかもしれない。一先ずは鍵を開ける方をよろしく頼むよ」

そう言って冥土帰しは席を立ち、自室を出て廊下を歩き、設置されたボタンを起してエレベーターを呼び寄せた。そしてまるで彼らの不安を煽るかのように学園都市を闇夜が飲み込んでいった

第53話 打開策

「でやああああああっっっ!!!」

ズバアアアンツ!!

「おらああああああっっっ!!!」

バキイイイイツ!!

世界樹の中はまさに激戦の最中であった。ドーム内のどこかでは常にガーディアン撃破時の白いエンドフレイムが発生しており、その煙を掻き分けながらキリトと上条は死にもぐるいで天蓋のゲートを目指していた

ヒュンツ!!!

「キリト!!」

「ツ?!しまつt:~!」

「・e i r s l i t a f i m m g r ? n n v i n d r !」

ビュオオオオオオツ!!!ドオンツ!

一体のガーディアンがキリトの背後から弓矢を放ち、上条はそれにいち早く気づきキリトに注意を促したが、キリトが対応するよりも早くリーファが真空攻撃魔法を発動し、風のブーメランが弓矢を弾き飛ばし、そのまま風の刃がガーディアンを切り裂いた

「助かったよスグ!」

「どういたしまして!」

「まだまだ!気合入れてくぞ!」

「ダメツ!上やん君!後ろ!」

「ゴガアアアア!!!」

「ツ!?!クソツ!?!」

ズバアンツツツ!!!!!!

「ぐあああああつ!!!」

「上やん！無事か!?一旦俺が前に入る！下がって回復ポーションを！」

「す、すまん！んぐつ…ぐくつ…！」

上条の背後から一体のガーディアンが迫っていたのをアスナが指摘したが、回避が間に合わず上条の身体を白銀の剣が切り裂き、傷口に赤いライトエフェクトと激痛が走った。その激痛に止むを得ず上条は前線を一旦キリトに託し、ベルトポーチから回復ポーションを取り出してHPを回復した

「もう…！上やん君にも補助魔法と回復魔法が使えれば…！」

ギランツ！ギランツ！

不意に二体のガーディアンが後衛にいるはずのリーファとアスナをその仮面越しに緑の眼光で睨みつけた。それはリーファとアスナを標的にしたことを意味していた

「ちよっ!?な、なんで後衛のあたし達までターゲットされてるの!?!」

「多分、このモンスターは外のモンスターとは違うアルゴリズムが与えられてるのよ！これじゃ前衛と後衛に分ける意味が…！」

ガシツ!!

「おおおおおらあああああああああああああつっつ!!!」

ブオオオオんツ!!!

「?!?!」

ドガアアアアアアアアアアン!!!

「か、上やん君!?!」

「な、なんつー荒技を…！」

回復し、戦線に復帰した上条はリーファとアスナが標的にされたのに気づくと、最も自分の手近にいたガーディアンの首根っこを掴む

と、雄叫びと共に力任せに投げ飛ばした。そのガーディアンを二体のガーディアンに正面衝突させ、三体もろとも撃墜した

「大丈夫か2人とも!？」

「う、うん！ありがとう！でも私たちは大丈夫だから！標的にされた分には自分たちで何とかするから！上やん君は早く上に…！」

「すまん！そうしてくれると助かる！それなら俺は上に…ッ!？」

「か、上やん…アレ……………」

うじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃう
じゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃう
じゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃう
じゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃう
じゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃう
じゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃう
じゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃうじゃう

「……流石に冗談抜きで気色悪いぜ…」

ひたすらに上を目指すキリトと上条が目の当たりにしたのは、天蓋へと続く道を覆い尽くさんばかりのガーディアンだった。もはやそれは壁と称するべき物だった。純白の鎧が幾重にも重なり、もはや天蓋に付けられたドーム内を照らすライトの光さえも届かず、上条達の周囲は不気味なほどに薄暗くなっていた

「こ、こんなの…こんなのもうどうしようもないじゃない…」

「で、でもここで諦める訳には…!？」

「で、でも！一体全体この状況でなにをどうしろって言うんですかアスナさん!?ただでさえここは室内で一本しか道はないのに！あんな風に一面埋めつくされたらどんな凄い勢いでぶつかっても途中で勢いが殺され…ッ!？」

眼前に広がる光景に絶望し、アスナの励ましがもはや気休め程度に

しか感じなかったりリーファは捲したてるように言葉を放ったが、その途中で何かに気づいて驚いたような顔で口を噤んだ

「・・・リーファ：ちゃん？」

「・・・この一本道を進むしかない以上はどうしてもあの壁に阻まれる：要するにあの壁に突っ込む以上もう勢いしか突破口がない：でも、それは裏を返せば勢いさえあれば：！」

最初はその顔を俯かせていたリーファだったが、口に手を当て様々な思考を巡らせ、まるで呪文のように次々に何かを呟いた。そしてその呟き収束していくにつれ、俯いた顔が段々と上を向いていき、完全に顔を上げた彼女の中で何かが閃いた

「お兄ちゃん！上やん君！一旦下がって！考えがあるの！」

「分かった！すぐ行く！」

「えっ!?お、おう分かった！」

「アスナさん！火属性系の魔法スキル上げてますか!？」

「え?ま、まあサラマンダーほどの威力は出せないけどそれなりには：」

「・・・よし、もうそれしかない：」

ヒュンツ!

「来たぜリーファ！」

「スグ！考えつてのは一体どんなのだ!？」

「それは：」

リーファの傍に集まった4人は彼女の考えた作戦を聞く為に背中合わせで密着した。そして目の前に迫ったガーディアンだけを倒しながら、リーファは自分の考えた作戦を口早に説明した

第54話 全身全霊

「そ、その作戦！やったとして成功率は一体どのくらいなんだ!!？」
バキイイイツ
!!!!

四人で背中合わせでそれぞれを守りながら戦い、リーファの作戦の説明を聞いた上条達。上条は目の前に迫ったガーディアンを殴り飛ばしながらリーファにそんな疑問を投げ、その疑問に対しリーファが口を開いた

「そんなの分つかんないよ！みんながみんなコイツらの相手しながらやらないといけないし…でももう私が思いついた方法はこれしかないのー！」

ズバアンツ!!!!

「だったらもうやるしかないんじゃないか!?!どうせもうこのまま普通に闘ってたってコッチがジリ貧だ！俺はスグの作戦に賭ける！」

「も、もし仮にその作戦が失敗したらどうするの!?!」

「…きよ、強行突破？」

「…ははっスグ、発想が上やんに似てきたな」

「要するにもうこれ以上の妙策は出てこないってことね…分かった！私もリーファちゃんの作戦に賛成！いくよキリト君！」

そう言うときアスナは手慣れた口調で魔法の呪文を詠唱した。発音した言語がアスナの周囲を光の文字となって包み込み、キリトを対象にした補助魔法が発動し、彼の身体に不思議な力が働いた

「おお…これが『移動速度強化魔法』ってヤツか…身体が軽い…ありがとうアスナ！」

「その魔法の補助持続時間は1分も保たないわ！キリト君と上やん君は作戦通り早く下に！」

「分かった！」

「ちよっ!?俺まだその作戦了承してな……だー……!!もう分かったよちくしょう!やりやあいんだろやりやあー!」

ギョんツ!!ゴオオオオオオオ!!

上条が半ばヤケクソ気味に作戦を了承する。アスナとリーファはその場に残り、ひたすら目の前に迫るガーディアンを追い払い続けた。だが上条とキリトはそんな二人とガーディアンの大群に背を向け、自分たちの眼下に広がるドームの床をめがけて急降下を始めた

ゴオオオオオオオオオオ!!!

「上やんっ!!」

移動速度強化魔法によりキリトと上条の差はドームの床に近づくにつれてどんどんと離れていった。しかしそんな中、急に前方にいるキリトが上条の方へ振り向き声をかけた

「どうしたキリト!？」

「……勝とうぜ」

「!!!……ああっ!勝つぞー!」

「おうっ!!!」

ゴオオオオオオオオ…ダンツ!

「よしっ!」

キキツ!! シュンツ…

キリトが床に降り立ったのを確認すると、上条は床からアスナとリーファ達までの丁度半分くらいの場所で翅を目一杯に広げ空中でブレーキをかけ翅を閉まった。そしてであろうことか自身の左腕に装備した盾を外し、それを自らの足場にして片膝をついた

「準備オツケーだ!! 頼むみんな! これが世界樹のてっぺんまでたどり着く最後のチャンスだ!!」

「「おおおおおっ!!!」」

全員が上条の言葉に鼓舞され意気込むと、来たる時に向け各々の決められた位置で準備を始める。そして一番初めに動いたのはキリトだった

「いっけえええええええええ!!!」

ダウンツ!!! ゴオオオオオオツ!!!

キリトがその脚に込められる最大の力で床を蹴って宙へと飛び出した。移動速度強化魔法の効果をフルに活用し、上条めがけて彼の身体はまるで弾丸のようにグングンと加速していく

(まだだ…まだ上がる!! もっと…もっと速く…!!)

ギユアアアアアアアアツツツ!!!!!!

「上やん! 行くぞっ!!!!」

「来いっ! キリトツ!!!」

ドツゴオオオオオオオオオ!!!!!!

「ツ?!?!」

!?!?!」

次の瞬間、移動速度強化魔法で出せる限りのトップスピードを保ったまま、キリトが上条の足場となつていている盾に向かって激突し、その衝撃に上条は思わず息を呑んだ。そしてキリトはそのまま盾の裏側の取手を掴み、上に乗せた上条ごと持ち上げながら飛んで連結した列車のようになる、もう一度翅を懸命に打ち鳴らして加速し始めた

「上やん！盾にしがみついて絶対にそこから落ちるなよ!!」

「ああっ!!」

ゴオオオオオオオオツツツ!!!

(ここだっ…!!)

「うおおおおおおおおおっ!!!」

ドンツツツツツ!!!

やがて加速しながら飛び続けたキリトと上条はアスナとリーファを追い越した。そしてタイミングを見計らったキリトが持てる限りの力でトップスピードのまま上条を盾ごと押し飛ばした

「アスナッ!!!」

「Ek verpa einn brandr muspilli,
kalla bresta bani, steypa lund
r dr·ttt!!」
ボゴウツツツ!!!

キリトに盾ごと押し出され、最高速度のまま上条は空中に放り出された。それに続いて今度はアスナが着弾式の爆裂魔法を唱え、その火球が上条の盾に向かって一直線に飛んでいく。その火球が上条の盾に着弾し、爆発しようかというまさにその瞬間!

「リーファちゃんっ!!!」

「·eir sl·ta fimm gr?nn vindr!」
ズドオオオオオオオオツツツ!!!

アスナが唱えた爆裂魔法が爆発するほんの数秒手前でリーファが真空攻撃魔法を発動した。吹き荒ぶように上条の足場の盾の下で旋風が巻き起こり、爆裂魔法の爆発によって発生する爆風の威力を風魔法で無理やり増幅させた

「ッ!!!!」

ゴオオオオオオツツ
!!!!

爆風によって打ち出された上条の勢いはまさにミサイルそのものだった。限界を超えて加速したその身体にかつてないほどの重力がのし掛かるが、上条はそれに抗い自分の脚に力を入れた

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!!」

ドツツツ!!ゴウツツツ
!!!!

自分の足場の盾を脚力が許す限りの力で思いつき蹴飛ばし、背中から翅を広げ空へと飛躍した。己の筋力全てを翅に回し、加速の上さらになる加速を重ねる。そしてその右拳を掲げ、その速さと勢いをそのままにガーディアン の壁へと突っ込んだ

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ
ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ
!!!!!!!

右の拳を掲げ、幾重にも重なったガーディアンを強引に吹き飛ばしながら一本の道を作る。それは、世界樹の頂点へと至らんとする三人の妖精が一人の妖精の為に導いた最後の道だった

「上やん（君）ツツ!!」

て…自分の知る世界だけを肯定して、他の全ての世界を否定するって
んなら…」

バツ!!!

「まずは…そのふざけた幻想をぶち殺す!!!」

ドゴオオオオオツツツツツ
!!!!

「竜王の顎」がガーディアンの壁を喰らい尽くし、ついに上条はその壁を突き抜けた。そして、天蓋へと伸ばし続けたその右拳がついに世界樹の頂点へと続くゲートの岩盤に触れた。するとその瞬間、上条の身体は光に包まれ、別の空間へと転移した

第55話 激突

シユンツ!!

「……ハハハは……?」

世界樹の頂点へと続くと言われるゲートに触れた上条は、見知らぬ場所に転移されていた。そこは何もない空間だった。目に見えるのはどこまでも広がる闇。一切の光はなく自分がどこにいるのか、足に立っているという感触があるだけで、実際に立っているのか浮いているのかすら分からない。その光景に、上条はかつてアインクラッドで最後にアレイスターと激闘を広げた宇宙空間を彷彿とさせていた

コツ…コツ…コツ…

「全く…待ちくたびれたよ。幻想殺し」

「ツ!? オティヌス…!」

不意に聞こえたのは甲高い足音。先の見えぬ闇から一人の少女が姿を現した。その手には小柄な背丈に余るほど長大な黄金の槍。このALLOがモチーフとした北歐神話の最高神、その名を『オティヌス』

「しかしまあ面白いものを見させてもらったよ。まさかあの状況をあんな型破りな方法でひっくり返すとはな」

「ああ…SAOじゃ長いことソロだったから忘れちゃってたよ。常に一緒に戦ってくれる仲間がいるってのは…こんなにも頼りになるのかって実感した」

「そう言う割にはここには一人で来たようだが?」

「ああ…キリト達のSAOは…もう既にキリト達が自分達の手で決着をつけた。だからこの戦いは…俺がたち終わらせなきゃいけないんだ。俺たちのSAOは…俺たちが終わらせる。俺たちが今ここで本当の意味で終わらせなくちゃいけないんだ!!」

シャキインツ!!!

『天叢雲劍』

ビキビキビキツ!パリインツ!!

上条は背中の中の鞘から剣を抜き、その口で日本の神話に実在した剣の名を呼ぶ。すると上条の手に握られた見すばらしいただの剣にヒビが入り、内側で何かが弾けるように黄金に輝く神劍へとその姿を変えた。

「10000人のSAOプレイヤーの願いが剣という形作られた器に集結した神話の剣…それが天叢雲劍か」

「コイツでお前の『槍』をぶった切る。そこに囚われてるみんなを取り戻す!!」

そうやって上条は黄金に輝く剣の切っ先をオティヌスに向け、臨戦体勢に入った

「ふっ…よくもまあこんな『物』にそこまで執着できるものだ…」

そう言うとオティヌスは自分の手に持つ槍をその手の上で転がし、弄び始めた

「…『物』だど?」

「ああ。こんな『妄想』などという誰かが作った偽物で塗り固められた大した意味もない下らん世界と、その世界で作られたなんの価値もない繋がりにそこまで執着するとはな」

「なら、お前は違うのか?」

「…なに?」

「お前が今言った、自分の口で言ったんだぞ。『誰かが作った意味もない世界』だってな。それはお前も同じじゃないのか?」

「私も…同じ…だど?」

「確かにお前は元の世界を望むなら、それは別に人としての道理だ。間違つてない。現に俺もS A Oにいた時は現実の世界を焦がれ続けた」

「だけどな、いくら元の世界に戻りたいからって、それを自分の手で作るなら、それは元いた世界と全く同じでも、所詮は自分で作った偽物なんだよ。そんなんで自分の願いを叶えたところで、待っているのは虚しさだけだ。後には何も残らない」

「・・・言うではないか。なら、この私が間違っているとしても？自分の悲願を果たすために、自分で世界を成し遂げることが間違いだとしても？」

「ああ」

即答だった。その反応の速さにオティヌスは静かに眉間へと皺を寄せた

「お前はその世界でいつか、きつと自覚する。その世界がどれだけ完璧だろうと、そこに住む世界の人たちも、自分が作ったものなんだってな。どんなに幸せそうに笑っても、その笑顔は作られた物だと自覚する」

「・・・」

「だけど、仮想世界は違う。確かにS A OやこのA L Oは、お前やアレイスターが作った偽物の世界かもしれない。だけど、そこには紛れもない人の意思があるんだ。世界は神が：誰かが作るものなのか？俺はそうは思わない。いつだって、世界ってやつはみんなの繋がりで少しずつ回って、少しずつ出来ていくもんなんだよ」

「・・・不毛だな」

コオンツ
!!!!

上条の言葉にもはや眉間に皺を寄せるどころかしかめっ面を浮かべたオティヌスは、自分の手にした槍を構えた

「もはや言葉などいらぬ。来たまえ『人間』。そもそも私という存在が矮小な人間ごときとわざわざ戦ってやること自体が破格の待遇なのだ、貴様は特別だ。少しばかり私の神経を逆撫でしすぎた」
「……」

「『一撃』だ。今から私が放つたつたの一撃で世界は終わる。世界なんて簡単だ…『神』とは何たるかを貴様に教えてやろう」

「そうかよ…なら俺も…全身全霊を持ってその一撃を叩き伏せる!!」

上条当麻は今一度、あらゆるSAOプレイヤーの願いの結晶体である黄金の剣を力強く握った

—————

「……一体どうしたのよこれは…」

ガタガタガタガタツ！ p r r r r r r r!! ドタバタドタバタツ!!
ガヤガヤガヤガヤ!! p r r r r r r r! ドタバタドタバタ!!

吹寄制理は第7学区のとある病院を訪れていた。同じ大学の寮に住まう上条当麻の部屋を訪れたが、そこに彼の姿が見えなかった為、この病院を訪れたのだ。しかし病院に着くやいなや、院内では男女問わず職員全員が慌ただしく動き回っていた

「えつと…とりあえず受付…つてもはや受付にも誰もいないし…」

一先ず病院内に入る為の受付を済ませようとした吹寄だったが、この混雑の所為なのか受付窓口はがらんとしており、受付窓口の奥では職員全員が絶え間なく鳴り響く電話の対応に追われていた

「これじゃ受付しようもないし…かといってこのまま入るというのも規則に反する訳だし…参ったわね…」

「あつ！吹寄さん！」

「はい？あー！いつもの受付嬢さん！」

この煩雑な状況にどうしたものと困り果てていた吹寄の背後から声をかけたのは、彼女や上条が見舞いに通うたびに受付でお世話になっている受付嬢だった

「ごめんね！今から受付の用意するからちよつと待ってて！」

「あ、いえそんな！そちらが落ち着いてからで構いませんから！…でも一体どうしたんですか？受付嬢さんが受付から出てお仕事してるなんて…」

「それが実は今猫の手も借りたいぐらいの緊急事態で…私は普通にナースとしても仕事が出来るから『受付なんていいから患者の方を手伝ってくれ！』って借り出されちゃって…」

「そんな…そこまでするほどの緊急事態って…一体どんな…」

「えつと…それは…」

「おや？誰かと思えば『彼』の見舞い人の女の子だね君は」

顔馴染みの受付嬢と吹寄が話しているところに声をかけたのは、この病院の医者であるカエルによく似た顔をした、その数々の偉業から「冥土帰し」と呼ばれる医者だった

「あつ！先生！先ほどの患者さんの容体は…!？」

「………」

「……そう、ですか…」

「やはりこればかりはね…こちらが意識的にどうかしようとしてどうにかなるものではないんだね」

受付嬢が切羽詰まったような顔で冥土帰しに先ほど対応したのであろう患者の容体を問いかけたが、そんな彼女に対し冥土帰しは首を横に振り、そう告げた

「えつと…すみません、一体なにがあつたんですか？」

「ああつーごめんね！今受付の用意するk…あれ？でも吹寄さん一体誰のお見舞いに…それに後2、30分もすれば今日の面会時間は終わりなのに…」

「あ、えつとお見舞いっていうわけじゃなくてその…」

『彼』だろう？」

「ツ!?やっぱり上条のヤツはこの病院にいるんですか!？」

「え!?!でも先生、上条君はとつくに退院していて…それに御坂さんのお見舞いに来て受付をした覚えもありませんし…」

「ああ、大丈夫分かつているさ。君たちは知る由もないだろうけど、なにしろ彼に関する事情は複雑すぎてね…」

「あ、あの！上条に会わせてもらう訳にはいかないでしょうか!?!私、なんだか嫌な予感がして彼を探しにここまで来たんです！」

「おや？君もだったのか…実は私もだったんだがね…どうやらその彼に対する予感は当たらずも遠からず…といったところだね」

「え?…」

「僕に付いてくるといい。幸いここには普段は受付嬢の彼女も含めて優秀な職員が揃っている。君を彼の元に案内するぐらいは時間を割いても問題はないね。もつとも、そんなに余裕がある訳じゃない。彼の事情は歩きながら説明しよう」

「ほ、本当ですか!?!ありがとうございます！」

「というわけで君、僕が許可するということで彼女の受付は不要ということにしてほしい。それと、しばらく患者のみんなを頼んだよ」

「は、はい！分かりました！こちらは任せて下さい！」

「では行こう。彼はここよりも少し下にいる。その間歩きながら今の現状を話そうか」

「はー…」

第56話 異変

コツ…コツ…コツ…

冥土帰しと吹寄は病院内の地下へと続く階段を降りていた。その移動の間に冥土帰しは吹寄に上条がいかにしてALOにログインしているのかの事情を話していた

「じゃあ…上条はこの病院のメデイキュボイドという機械でALOにログインした…ということですね？」

「そういうことになるね。理解が早くて助かるよ」

「それで私…嫌な予感がしたんですけど…上条は大丈夫なんですか？」

「…結論から言おう。彼の身に異常は何も見られなかった」

「…へ？は…はあああ…良かったあああ…思い過ごししかあああ…」

吹寄は冥土帰しの言葉に一瞬驚いたが、上条の身に何も起こっていないと分かると、深く安堵の息を吐いてその胸を撫で下ろした

「…けれど、その嫌な予感は決して的外れというわけではないんだね」

「…え？」

「君も上で見ていただろう？ウチの職員が目まぐるしく動き回っていたのを」

「え？は、はい…でも上条がいるのはこの下なんですよね？だったら上の状況と上条との間に一体どういう関係が…」

「実を言うと、僕もただならぬ予感を自分の肌で感じとったんだよ。それでついさつき地下にいる彼の様子を見てきたんだが、彼には何の異常どころか変化も見られなくてね。ただの自分の思い過ごしだと思っただが、僕の恐れていた予感は、外れるどころかより悪い形で

現実に表れた…」

「より悪い…形って…」

「病院に入院している意識不明のS A O患者全員の心拍数と脈拍が原因不明のまま急激に低下し始めたんだ」

「!?!?、そんな…!」

「それをもって彼らが亡くなるというわけではない。だが、もし仮にこのまま彼らの容体が好転しなければ…」

冥土帰しは自らの言葉をそれ以上続けることはなかった。しかし、その言葉がそれ以上続いていれば最悪の事態が告げられていたであろうことは想像に難くなかった

「なんとか…なんとかならないんですか先生…!」

「残念だが…僕らの手ではどうすることも出来ない。加えて、奇妙なことにこの事態はこの病院に限ったことじゃない。どうやら世界中で意識不明になっているS A O患者全員が全く同じ症状を見せているらしい」

「せ、世界中…!」

「電話で連絡を取り合っている病院の医者の人たちは口々にこう言っている…『まるで見えない何かに生命を吸い取られているようだ』…とね」

「み、見えない何かって…一体どんな…」

「…分かることはただ一つ。そんな状況でも必死に自分の出来る限りを為し、戦い続けることだ…目の前の彼と同じようにね」

「…上条…」

会話を続けながら歩いていた2人は、気づけば自分たちが目指す部屋にたどり着いていた。ガラス越しに見える部屋の向こうには、巨大な白い直方体の機械を頭に装着した上条がベットに寝そべっていた

「普通ならこのメデイキュボイドは終末期医療を受ける患者が使うべ

き代物だがね、今回だけは特別に僕が彼だけに使用許可を降ろした。彼ならば、今上で苦しんでいる患者のみんなを救ってくれるものだと信じて…」

「…ツ…」

吹寄制理は胸が痛んだ。目の前の彼の姿が見舞いに通い続けている当時の彼と重なって見えたからだ。頭に装着している物こそ違えど、事実上寝たきりの状態の彼を見ると思い出してしまっていた。しかし、吹寄は何かを払拭するように頭をぶんぶんと振り回すと、ガラスの向こうの彼から冥土帰しの方へと視線を戻した

「…もう大丈夫です。上に戻りましょう」

「…え？僕は別に構わないが…彼から離れてしまっていないのかい？確かにこの部屋は普段は滅菌されていて入室は叶わないが…彼の場合には別だから特段入っても支障はないよ？」

そんな冥土帰しの言葉に、吹寄は首を横に振った

「ええ。大丈夫です。きっと今も彼は戦っているんです。そんな時に彼の心配だけしていたら…きっと起きた時に怒られてしまいます。だから、私も今自分が出来ることをしたいと思います。この病院の患者さんの為に私が出来ることはありませんか？お手伝いさせてください」

「…分かった。そういうことなら頼りにさせてもらうんだね。上に戻ったら先の受付嬢君に指示を仰ぐといい」

「はい…ありがとうございます！」

「では、早いところ上に…」

「あ、ごめんなさい。少しだけ待って下さい」

トンツ…

吹寄は上条の眠る部屋のガラスにそっと右手を置いた。そして祈

るように目を閉じると、ガラス越しの彼に話しかけるように話し始めた

「…気張りなさい上条当麻。こっちのことは全部任せておきなさい。だからお前も…精一杯ぶちかましてきなさい…!」

「………」

「……すいませんお待たせしてしまって。今度こそ戻りましょう」

「……そうだね。そうしよう」

そう言っつて冥土帰しと吹寄は彼の部屋を後にした。その時の吹寄の表情にはもはや一抹の不安すらも残されてはいなかった

第57話 神の一撃

「……………」

ヒュウンツ…!

オティヌスは何も口にせず、甲高い音と共に周りの空気を切りながら槍を軽く振った。そして物々しい表情でその槍を両手で持ち直した

『主神の槍』

ゴウツツツ
!!!!!!
「ッ?!?!」

オティヌスがその『槍』の名を告げ、術式を発動した。その瞬間、まるで周囲の空間が捻じ曲がるかのような圧倒的な威圧感に包まれ、上条は思わず息を呑んだ

「言っただろう?一撃だと」

曰く、その一撃は神代の一投。北欧神話より語り草となっているその槍には、いくつかの役割が存在する

- 一つ、その槍の本質は投げ槍である
- 一つ、その槍を投げれば必ず標的に命中する
- 一つ、その槍は途中で撃ち落とされることも、破壊されることもない
- 一つ、その槍は標的を貫いた後、必ず持ち主の手へ返る

そして—————

- 一つ、その槍は人間の権威の象徴を打ち砕く

『主神の槍』が粉々に砕け散った。その金色に輝く破片が黒一色の世界に飛散していく。『人の願い』が『神の意向』を打ち破った

「あ……ああ……ああああ……!!」

隻眼の魔神は、その片目を潤わせながら金色の欠片へと手を伸ばす。しかし、無情にもその欠片たちは彼女の手から漏れていき、その一片を掴むことさえも許されなかった

「……お前は間違えたんだ、オティヌス」

「……間違……えた……?」

上条は黄金の剣を背中の中納めた。黄金に輝く剣はその光を失い、元の見すばらしい始まりの剣に戻った

「お前の願いは独善的な物なんだよ。『元の世界に戻りたい』なんてそれはお前から見た世界でしかない。まして、そこに戻りたいのはお前だけだ。いくら神様だなんて肩書きを並べても、そこにSAOにいたみんなを巻き込んでいい理由にはならない」

「そ、そんな願いは貴様らSAOプレイヤーだって同じではないのか!? 仮想世界に囚われ、現実の……元の世界に戻りたいから必死に足掻いたのではないのか!? その願いの結晶がその剣なんじゃないのか!?」

「違う!!」

「!?」

「確かに俺たちは必死に願ったよ……元の世界に戻りたい。そう思って戦った……だけど! それはお前の願いとは違う! 俺たちは受け入れたんだ! 仮想世界をもう一つの現実だと受け入れて戦ったんだ! 別の世界を違うものだど切り離して自分だけが元いた世界を求めたお前とは違う!!」

「そんな弱いヤツに……そんな一人よがりの願いなんか! 俺たちの1

0000人の願いは負けない！あの『槍』がアインクラッドそのものだとしても！あの世界を乗り越えた俺たちが負けるはずがない！」
「ッ!!」

上条当麻の言葉はどこまでも真っ直ぐだった。その眼光はオテイヌスの片目を真っ直ぐに見つめていた。そして、彼女の心に突き刺していくように語り始めた

「その世界に自分が生きているなら…それは間違いなく本物なんだ！俺たちはそうやってSAOを…アインクラッドを生きた！」

「仲間とバカやって、冗談を言い合って笑うのは…楽しかった」

「どっかの店で食う飯も、自分で苦労して獲った食材を使った飯も…たまにみんなで食卓を囲んで食う飯も…美味いと感じた」

「優しくしてくれたり、世話を焼いてくれたり、心配してくれたりした人の心は…温かかった」

「自分の知らない景色や誰かの幸せを見れば…感動した」

「強敵や強いボス、何より自分の恐怖と戦うのは…辛かった」

「自分や自分以外の誰かがピンチになって死と直面するのは…苦しかった」

「大切な人や何かを失って、泣いている誰かを見るのは…悲しかった」
「例えどんなに不幸でも、あの世界で生きて仲間と過ごした日々の全てが…幸せだった」

「だから本物なんだ…例え誰かに作られた世界でも、日は昇って沈んで、時間は過ぎていく。そのかけがえのない時間を共に過ごしたみんなも…何もかも本物なんだ！」

「だから…生きろよオテイヌス。元の世界だけを望むんじゃなく…今ある世界を受け入れてみる！今ある世界を生きてみるよ！パン屋さんだってお花屋さんだっていい！今自分が生きてる世界を…一生懸命に…後悔しないように…」

「笑って生きろ!!」

「!!」

「それでも…もし挫けそうになったり、もうダメだと思ったら…また俺が何度でも救ってやる！」

「違う世界を受け入れてみて、それでもやっぱり自分の元いた世界がいいって思ったならそれはいい！また違う方法で自分の元いた世界を追い求めろよ！」

「けどな…作っただけで大して見向きもしないで他の世界を否定して、元いた世界に縋り付くなら…俺はお前を止め続ける!!」

「ああそうだよ…例えどんな世界でも根底にあるのは何も変わらないんだよ…自分の生きた世界に大切な物があるから…大切な人がいるからその世界をこれからも生きたいと思うんだ！」

「だから俺はこの右手で拳を握り続ける。俺の現実は…俺の世界はS A Oで生きた人たちを取り戻さなきゃいつまでたつても始まらねえんだ!!」

「だからオティヌス…お前が自分のいた世界だけが本物で他の世界が偽物だって言い続けるなら…」

「そんな幻想は！俺が何度だってぶち殺す!!!」

第58話 人の一撃

バキイイイイイツツツ
!!!!!!

繰り返された上条当麻の右拳は、まるで吸い込まれるかのようにオ
ティヌスの顔面へと突き刺さった

「……………」

殴られた左頬がじわりと痛み、ぐらりとオティヌスの視界が揺れ
る。変わり映えのない黒一面に塗りつぶされた世界がスローモ
ーションのように流れていく。オティヌスは自分の華奢な身体が宙を
舞い、仰向けになりながら飛ばされているのだと理解した

(…………ああ、私は…負けるのか…)

…………ドサツ…………

飛ばされたオティヌスの身体が徐々に落下を始め、HPバーは0に
なる直前で止まった。そして魔神の身体は闇の世界へと静かに落ち
た

「…………本当に…………ひどい一撃だな」

ザツ…ザツ…ザツ…

オティヌスは仰向けのまま天を仰ぐと、少しだけその頬を緩ませ
た。そして仰向けに倒れるオティヌスの元へ上条が歩み寄った

「…………どうする？まだやるか？」

「何をバカな…………今さら『弩』など使う気にもなれんさ…元より『槍』
が破壊された時点でSAOプレイヤーは全員救われ、貴様の悲願は達
成されていたというのに…………」

「……弩?」

「なに、気にするな。今のお前からすればあんなのはただの飛んでくる輪ゴムぐらいにしか感じないだろうさ」

「…お前は間違った。だけど、それはやり方を間違っただけだ。さつきも言ったが、お前の気持ちは間違いじゃない。元の世界に戻りたいのは当たり前だ」

「…もういいよ上条当麻。全部分かっている…何もかもが終わったんだ…私が引き返していい道など…もはやどこにも存在しない」

「オティヌス…」

「やり直すことにするよ。もう遅すぎるかもしれないがな。だが、私は魔神だ。時間など腐るほどある。少しずつ、少しずつ様々な世界を見ていく」

「………」

「一体自分がなにを欲するのか、なにを求めているのかを見つけにくくことにするかな…」

「そうか…見つかるといいな」

「…ここは素直に礼を言おう上条当麻。私にとってなによりも忌々しかったはずの貴様の右拳は…間違いなく私を根本から変えた」

「気にすんな。変わったって思うなら、いつかお前も心の底からちゃんと笑えよな。オティヌス」

「ふっ…神である私を人と同じ目線で見るとは…なんと嘆かわしいことか…だが、貴様は私と似ている。元の世界を取り戻すために抗い続け…元の世界をもう一度始めて、その地を踏みしめる為に自分があるがままに進んだ…そうだな…きつと私は…」

(お前のような…『理解者』が欲しかったんだろうな…)

「……?私はなんだよ?」

「はっ…気の迷いだ、気にするな。それよりも、貴様も自分の言ったことに責任ぐらい持ってもらうぞ?」

「責任?」

「何度だって…救ってくれるんだろ? 私が道を間違えそうになったら。叶うなら…私はいつか、お前と同じように世界を見てみたい。そ

の日までに、私が道を踏み違えそうになったら…よろしく頼む」

スツ…

「…ああ、任せとけ」

ギユツ…

オティヌスは上条に向けて右手を伸ばした。上条は自分に向けて伸ばされた手をしっかりとその右手で掴んだ。そして、隻眼の少女は彼の手を借りながらゆっくりと立ち上がった

…シヤアアアアアアア…

「ん？のわっ!?か、身体が透けて…!?!」

オティヌスを立ち上がらせた上条がその右手を離すと、その身体が光の粒子になりながら段々と消失していた

「慌てるな。ただ元の世界に返すだけだ。もう貴様はこの世界ではログアウトすることすら容易ではないからな」

「え?いやでもここは世界樹の上でALOの世界の一部なんだろう? だったらログアウト出来ないはずが…」

「そういうことではない。先に私が『槍』を用いて発動した術式は『世界ごと相手を消し飛ばす』という術式だ。つまり、もうALOなんて世界はもうこの世のどこにも存在しない。つまり今私たちが立っているここは完全なる無の空間だ。ログアウトなんて概念はそもそも存在しない」

「は、はあっ!?ちよ、ちよつと待てよ!じゃあこの世界にいたキリト達や他のみんなは…!?!」

「なに、命に別状はない。強制ログアウト…という表現が適切だろうな。今頃はこの世界にログインしていた奴らも現実で目を覚ましているだろう。まあもつとも、再ログインを試みたところで延々とエラーを繰り返すだけだろうがな」

「よ、よかった…でもなんだ、このゲームを命懸けでやってたやつもい

ただろうに……こんなあつさり世界ごとなくなっちゃったら発狂するなんてどころじやないだろうな……」

「いや、そこに関しては私が自分で責任を取るさ。完全に元と同じ……とは行かないまでも、もう一度ALLOという仮想世界を作り直して娯楽の場を提供しよう」

「そっか……流石は神様だな」

「その神を右手一つで救ったのは貴様だがな」

「いや……俺だけじゃない。SAOで……このALLOで戦ったみんなで、お前を救ったんだよ」

「ふっ……人間に救われる神……か……存外悪くはない。ならば貴様の世界の住民には私からの謝罪の意を伝えておいてくれ。SAOに囚われた後、ALLOに幽閉してしまったのはもちろんだが、『主神の槍』の術式の発動にいくらかの寝たきりの人間を巻き込んでしまった」

「ったく……とことんはた迷惑な神様だな……まあ分かったよ。みんないいヤツばかりだからさ……色んな世界を見つめて、自分の罪を償ったら……今度はちゃんと自分で謝りに来い」

「はっ……手厳しいな……まあ仕方ない。その条件は神として甘んじて受け入れよう」

「ああ。待ってるぜ」

サアアアアアアアアア……

「おっと、もう本格的に消えそうだな……キリトやリーファ達にちゃんとお別れ言えてねえけど……まあ仕方ねえよな」

「何をいう。貴様らに別れの挨拶など不要ではないか」

「え?」

「再開すると約束したのだろう?ならば別れの挨拶など逆に不躰ではないのか?そんな礼節も弁えていないのか人間というのは」

「……そうだな。それもそうだ」

「ではしばし訣別の刻だ。何か運命の悪戯があれば、もう一度世界のどこかで会おう」

「ああ……じゃあな」

サアアアアアアアアア!!

上条を包む光がより一層強くなり、ついに別れの瞬間が来たのだと告げる。視界が段々と不鮮明になっていき、黒一面の世界が汚れのないう白へと変わっていく。そうして移りゆく世界の中で上条当麻はゆっくりと目を閉じていき、来るべき時を待った。しかし、完全に目を閉じる寸前で隻眼の少女が近寄ってきたかと思うと、お互いの身体がぶつかり合う直前で立ち止まった

「・・・？オティヌス？」

「上条当麻・・・」

スッ・・・

「・・・？！？なっ？！／／／」

「ありがとう」

シャアアアアアアアアアアア...

隻眼の少女の柔らかな唇が上条の頬に口付けをした瞬間、上条当麻の身体は跡形もなく光の粒子となって消え去った。光は少しずつ天に昇っていき、やがて完全に見えなくなった

「・・・悪戯・・・か。これでは『悪戯好きの神』にとやかく言えたものではないな・・・だが悪くはない」

「さて、まずはこの世界の再生からだな・・・どちらにせよ泣き言は言っていないから・・・これから少しばかり忙しくなりそうだな・・・」

そう呟くとオティヌスは漆黒のマントを翻し、どこへともなく歩み始めた。果てしなく続く闇の世界を歩く彼女の表情はどこか少しだけ、笑っているような気がした

第59話 目覚め

ガチャンツ!!

「……つあゝゝ……終わったか……」

ALOから生還した上条当麻は頭部に装着したメデイキュボイドのヘッドギアを外すと、ベットから起き上がり思いっきり上半身を伸ばした

「オティヌスのやつ……最後の最後で……／＼／」

現実世界に帰る直前にオティヌスの唇が当たった頬に手を当て、そのまま赤面する上条。仮想世界での出来事のはずなのに、何故かその感触や唇の熱が残っているような感覚を感じた

「つと、今はそうじゃないな……誰もいないのか……えっと時間は……」

そう言つて上条はALOにログインした3日前から着替えていないズボンのポケットに突っ込まれているスマホを取り出すと、電源を入れて現在の時間を確認した

「朝の6時半か……そりゃ誰もいるわけもないな。とりあえず先生を探しに出るかな……よつと!」

スタスタスタスタ……ガチャ!

ベットから立ち上がると、上条は自分の入っていた部屋のドアを開けて廊下に出た。そしてしばらく廊下を歩いて上に行く階段を上り、またしばらく歩くと病院のロビーに着いた

「えつと…受付…閉まってんな。そりやそうだろうな。そういうことならとりあえず先生の部屋を…おわっ!？」

「すー…すー…」

上条は受付窓口に目をやったが、なにしろ時間が早すぎるため案の定シャッターが閉まっていた。諦めてカエルによく似た顔の医者 of 部屋を指指そうと思い、ふとロビーの周りを見回した。すると、待合所のソファ―に吹寄制理が横たわっており、気持ちよさそうに寝息を立てながら眠っていた

「えつと…なんで吹寄がこんなところに?てかなんでこんな時間に?」

「すー…すー…zzzz…」

「えーつと…吹寄さーん?朝ですよー?上条さんですよー?分かりますかー?」

ペチペチ…ペチペチ…

一先ず眠っている吹寄を起こそうと思い立った上条は、ソファ―の前に跪き彼女の頬を軽く叩いた

「んっ…んー…あさ…?」

「あ、起きた。吹寄ー?こんなところで何してんだー?」

「…かみ…じょう?」

「はーい。上条さんですよー?こんなところで何してんだー?」

「…えつ!?!上条!?!なんでお前こんなところに!?!」

「そりやこつちのセリフだ。なんでお前の方こそ病院のロビー…もんがっ!?!」

グニグニグニグニ…

「平気なの!?!大丈夫なの!?!どこか痛むところとか…!栄養ドリンクとか健康食品ならあるけど何かいる!?!」

ペタペタペタペタ…

目が覚めてソファから起き上がった吹寄は上条の顔を認識するなり、彼の言葉を遮って彼の頬や顔をぐにぐにとこねくり回し、その身体をペタペタと触り始めた

「だ、大丈夫！大丈夫だって！どこも痛むところなんにもねーから！水も食い物も今はいいーって！」

「そ、そう…はあ…よかった…」

彼の言葉を聞くと、吹寄は彼の体から手を離し、ほっと息を吐いて胸を撫で下ろした

「って！それはそうと！貴様が起きてきたってことは！全部終わったのね?!みんな助かったのよね?!」

「…ああ、全部終わったよ。大変だったけどみんなのお陰でどうにかなったよ。でも、もう全部元通りだ。今まで迷惑かけたなふきよsッ!?!」

ギョッ!

「よかった…本当に…本当に…本当によかった…」

言葉の終わりを待たずして吹寄が上条の身体を思いつきり抱きしめた。そしてその瞳から大粒の涙が次々に溢れ出した

「ふ、吹寄…し、死ぬ…生きて帰ったけどここで死ぬ…」

「…はっ!?!／／ち、ちちち！違うのよ上条!?!これはあくまでも貴様をずっと心配してたが故の抱擁であって決して邪な思いがあったというわけではなくて!?!／／」

「ぶはっ!?!だー死ぬかと思った…」

「ご、ごめん…／／」

「ったく…ほら、返すよ。これ」

「え?あ、私のヘアゴム…」

上条は自分の左手に通したヘアゴムを外すと、吹寄に手渡した

「そのヘアゴムのお陰もあつてか、無事に帰つて来れたよ。吹寄には感謝してもしきれねえよ…ありがとな」

「ううん、私の方こそありがとう」

「はあく…まったく、昨日あんなに働き回つたたというのに随分と元気だね、君」

上条と吹寄が騒がしくしていたのを聞いていたのか、ロビーの奥の廊下の方から頭を掻きながら冥土帰しが歩いてきた

「あ、先生！おはようございます！すいません病院のソファアで勝手に眠つてしまつて…！」

「いやいや、こちらこそ君のような熱心な働き手がいてくれたおかげで病院としてもかなり助かったんだね。それよりも…」

冥土帰しは自分を見るなり必死に頭を下げる吹寄を片手で制し、礼を返すと、上条を一瞥し口を開いた

「君が目覚めたということは…全てに決着が着いた…といことだね？」

「はい。先生の協力もあつたおかげです。本当にありがとうございました」

そう言つて上条は今一度息を深く吸い直し、世話になつた冥土帰しへ深々と頭を下げた

「そうか…やつと…やつと終わったのか…いやこちらこそ礼を言わせてもらうよ上条当麻君。僕の患者を救つてくれて…本当にありがとう」

「いや、俺が何も心配せずに仮想世界で戦えたのは先生の貸してくれ

たメデイキュボイドがあつたからです。この病院でログインしたおかげで色々助かったこともありましたが…本当にありがとうございます。ありがとうございました」

「？なんのことはよく分からないが…決して僕だけの力ではないんだね。そこにいる彼女も昨夜は君のためにこの病院の職員と一緒に頑張って頑張ってくれていたんだね？」

「え？そうなのか吹寄？」

「別に大したことはしてないわよ。呑気に寝ていた貴様には分からないだろうけど、昨日は男子寮の貴様の部屋を訪ねてみてももぬけの殻だったからこの病院に来てみれば、もう職員総手の大忙しだね。私も機械出しやら片付けやらを手伝ってたのよ」

「呑気に寝てたつてひっつでえな…俺だつて頑張つたんだぞ？」

「ははは、まあここはみんな頑張つていたということを手を打とう。さて、S A O患者のみんなが今ごろ起き始めるだろうね？これからまた忙しくなりそうだ…」

「あ！先生！私も手伝います！」

「んー、それはいいんだけどね君」

「へ？」

「今日は月曜日だね？大学の方は大丈夫なのかい？」

「…上条、今何時だ？」

「えーつと…さつき起きた時に時間見たら6時半だったから…大体7時ぐらいじゃないか？」

「…限遅れるー！！！！」

ダダダダダダダダツツツ
!!!!!!

上条から時間を聞くなり吹寄は血相を変え、そばに置いておいた自分のカバンを乱雑に掴むと、一目散に病院のドアから飛び出し自分の家に向かって走り出した

「車に気をつけんぞー？」

「もう多分聞こえてないね…まあ彼女なら心配せずとも大丈夫だろう

う。それより上条君？」

「はい？」

「多分これからきつとまた病院内は慌ただしくなる。そうなる前と面会に時間を割くのは難しくなるね？そうなる前に『彼女』に会いに行つて来てたらどうだい？」

「ッ!!」

ダダダダダダダダッッッ!!

冥土帰しの言葉を聞くと、上条は血相を変えて病院のロビーから廊下に向かって駆け出した

「全く…君の方こそコケないように気をつけるんだね？正直今日はあまり病人が増えてほしくないからねえ…まあ患者がここに来る以上、僕は誰であろうと救うがね…さて、まずは昨日寝泊まりしてくれた職員を起こしに行くとしよう」

—————

「はあ…はあ…はあ…」

上条は廊下を走るスピードをそのままに階段を駆け上がると、御坂美琴の病室の前に辿りついていていた。そして病室のドアに手をかけると、彼女の笑顔を想像しながら、期待を胸に勢いよくそのドアを開けた

ガラガラガラガラッ!!!

「美琴ッ!!」

「………」

ピッ…ピッ…ピッ…

「……………え？」

何かの悪い夢だと上条は思った。ドアを開けた先で彼が見たのは、今までと何も変わらない光景だった。ベットで眠ったままの少女。その頭部には黒いヘルメットのような機械。そして部屋に響くのは彼女の鼓動を無感情に伝える機械音。上条は現実を受け止めきれず、その身体から血の気が引いていくのを感じた

スタツ…スタツ…

「な、なんで…なんで…なんでだよ…」

ガタンツ!!

上条は顔面蒼白となり、虚ろな表情で彼女の眠るベットに近づいていく。しかし、彼女の表情は変わらない。やがて上条は美琴の眠るベットの前にたどり着き、彼女のベットに向かって崩れ落ちた

「目を…目を開けてくれよ美琴…俺は俺は…一体何のために…何のために頑張ったんだよ…お前が起きてくれなきや意味なんかないんだよ…美琴…美琴…」

「美琴おおおおおお!!」

ついに上条の瞳から涙が流れた。その涙は彼の頬を伝い、御坂美琴の右手の上に落ちた。上条の喉は嗚咽を繰り返し、やがて涙は彼女の右手だけでなく、ベットにも染みを作り始めた

ピツ…ピツ…ピツ…

ねえええ!?!」

ダダダダダッ!! ガラガラガラッ!! ドドドドドドドッ!!

「あつーちよつと! 行つちやつた…まあいいか…よいしょつと!…
んーっ!」

上条がミサカ10032号を追いかける後ろ姿を見送ると、御坂美琴は身体に少し力を込め、ベットから立ち上がり腕を上げ思いつきり伸びをした

「んーっ!! うあー…やっぱ二年も寝てただけあつて鈍ってる
なんてもんじゃないわね…まあそもそも普通は栄養失調の上に筋力
も衰退して立ち上がるどころじゃないんだろうけど…そこは流石の
学園都市の医療技術つてどこかしら…」

「そう言いながら身体の感触を確かめながら、ふと病室の窓の外に目
を向けた。すると窓からは気持ちのいい風が吹き抜け、清々しく輝く
朝日が学園都市を照らしていた

「…ただいま」

美琴は窓に手を当てると、眼下に広がる学園都市に向かってそう呟
いた。そして…

「嬉しかったわよ…最初にアンタの顔が見れて…」

その言葉は誰に届くでもなく、五月の風に運ばれて飛んでいった。
そして彼女の赤く染まった頬を、朝日が優しく温めていた

第60話 祝宴

「不幸だー！ー！ー！！！！」

季節は夏。上条当麻がALOから帰還し、SAO患者全員が目覚めてから三ヶ月ほどが経過していた。上条当麻はいつもの口癖を叫びながら、夕日に照らされる大学の中庭を走り抜けていた

「何が不幸よ全く！貴様が今日×切のレポートを今日までほったらかしていたからこうなったんじゃない！だからいつも課題は早めにやっておけと言っているのに貴様というヤツは…！」

「すまん!!」

「すまんで済んだら風紀委員はいらないわよ!!」

「怖すぎやしませんか吹寄さま!?!」

そんな彼の隣で同じく夕暮れの中庭を走る彼女は吹寄制理。世話焼きの彼女は今日×切の上条のレポートを手伝う為に夏休みの時間を割いてまで大学を訪れていた

「いやでも普通夏休み中に課題の×切日設けますかね!?!なんで授業もないのにレポートなんざ出しにわざわざ大学に…！」

「貴様の場合は出す前に図書室でパソコンと睨めっこしてワード打つのも込みでしょうが！そんなことよりごちゃごちゃ言ってる暇があったら走れバカ者！このままじゃ本当に間に合わないわよ!?!」

中庭を抜けた二人は大学に隣接する生徒用の駐車場にたどり着いた

「どれだ!?!吹寄の車！」

「アレよ！前に停めてあるあの水色の軽自動車！」

「了解！」

ガチャッ！バタンッ！

上条と吹寄は駐車場に置いてある一台の軽自動車のドアを開けると、上条は助手席に、吹寄は運転席へと乗り込み車のキーを差し込んだ

「場所と時間は!?!」

「第3学区のロイヤルホテル！時間は後30分！てかそれはいいけど吹寄！お前本当に車の運転なんて出来んのか!?!」

「舐めんじやないわよ！貴様がナーヴギアを着けながら寝てる間にこっちはちゃんと教習所行って免許取ってるのよ！」

ブルルルンッツツ!!!

「第3学区か…少し遠いわね…飛ばすわよ上条！シートベルト締めたわよね!?!」

「お、おい！本当に任せて大丈夫なのか!?!」

「ふっ…言っておくけど、軽自動車で初心者マーク付けたてのペーパードライバーだと思って気緩めてんなら…」

ギユルルルルルルルッ!!!

「舌噛むわよっ!!!」

ブウウウウウウウウッツツ!!!

「いいっ!?!どわあああああああああああああああああああああああああああああああ!?!?!?!」

上条達を乗せた車はおよそ軽自動車とは思えないほどのスピードで飛び出した。上条はそのスピードに息を呑み、絶叫マシーンに乗せられているかのように叫んだ。まるでレーシングカーのように疾走する軽自動車は、第3学区に続く道を爆走した

—————

ブウウウウン…キキツ!

ここは第3学区にある高級ホテル。このホテルは元々は学園都市への外交目的で訪れるVIP用のホテルである。しかし今、そんなホテルの出入り口に、不相応もすぎる水色の軽自動車が停車した

「ふーっ、ジャスト5分前。案外何とかなるものね」

「ふう…星が…回る…」

「先に言っておくけど上条、ゲロるなら車の外でゲロりなさい。さもないと同じ速度とコースで後24時間走り続けるわよ」

「わ、分かりまちだ…うっぷ…」

ガチャツ…

そう脅され上条は口元と吐き気を無理矢理抑え込みながら車のドアを開け外に出た

「つぶ…あー…不幸だ…本当に…」

「全く…そんなんで大丈夫なの? 貴様は今から始まるパーティーの主役みたいなモンでしょ? もっとシヤキツとなさい」

「あー分かっている分かってる…サンキュー吹寄…わざわざ送ってくれて…どうだ? なんだったら吹寄も参加してみたら…」

「バカね。私が行ったって場違いにも程があるわよ。いいから早く行きなさい。きつとみんな待ってるわよ?」

「それもそうか…まあ、ありがとな」

「羽目外しすぎて帰れなくなっても流星に帰りは迎えに行かないからね?」

「分かっているって」

「それじゃ、楽しみなさい」

ボタンツ! ブウウウウウン……

上条がドアを閉めると、吹寄の軽自動車は再び走り始め、段々とそ

の車体が見えなくなっていた

「さてと、行くk…」

シュンツ!!

「どわっ!?!」

「ふーっ、ありがとう黒子。おかげで間に合ったわ」

「いえいえ、他ならぬお姉様のおかげですもの。これくらい当然ですわ」

ホテルのロビーに入ろうとした上条の目の前に二人の少女が突如として現れた。空間を丸ごと瞬間的に移動したのであろう登場を果たした二人は、常盤台高校の制服に身を包んだ御坂美琴と白井黒子だった

「ビツクリした…美琴達だったのか…」

「あ、アンタも今来たんだ?」

「ぬがっ!?!そこにいるのはお姉様を誑かす憎き憎き類人猿…!お姉様を下の名前で呼ぶその愚行!万死に値すると思いい知りなさいですわーっ!!」

「やめんかコラー…!!」

バチバチバチバチバチツツツ!!!

「あばばばばbbb!?!?」

ジュウウウウウウ…プスプス…

上条に鉄矢を構えて飛び交る黒子を見ると、美琴の身体から紫電が迸り、その電撃は黒子を全身真っ黒焦げにした

「全く…だから言ってるでしょ。こいつが私を下の名前で呼ぶのはS A Oでの二年間があるから仕方のないことなのよ。アンタもいい加減諦めなさいってば…」

「ううう…認めませんの…認めませんのおお…」

「全く…ほら行くわよアンタ」

「え？いいのかコレほつといて？」

「いいのよ。もうソレも高校生なんだから多少は自粛の精神を覚えた方がいいのよ」

「なんで私指示語だけで呼ばれてますの!？」

「そ、そうか…じゃ行くか。そんなに時間に余裕あるわけじゃないからな」

「そうね。じゃあね黒子。日付けが変わるまでには帰るからー」

「お、お姉ぎばあああああ…」

スタスタスタスタ

「えつと…パーティー会場ってどこのフロアだっけ？」

「2階の大ホールよ。そんぐらいちゃんときなさいよね。そうじゃなくてもこのホテル無駄に広いんだから」

ホテルの中に入った上条と美琴の二人はエスカレーターを使って二階に上がると、大ホールにたどり着き受付を行っているホテルの従業員に話しかけた

「えつとすみません、今日のパーティーに参加しに来たんですけど…」

「かしこまりました。お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「上条当麻です」

「御坂美琴です」

「上条様と御坂様ですね。招待状を拝見させてもらってもよろしいでしょうか？」

「はい、これです」

「失礼いたします……ご提示ありがとうございます。お待ちさせていただきました。本日は心行くまでお楽しみ下さいます」

ガチャッ!

「ありがとうございます」

受付嬢がホールのドアを開けると、上条と美琴はパーティー会場の

中に入った。するとそこには、豪華絢爛な造りのホールが広がっており、机には高級な料理や飲み物がズラリと並んでいた

ザワザワザワザワガヤガヤガヤガヤ…

「広っ!?なんだここ!?本当にホテルの中かよ!?」

「そりや当然でしょ。今日は学園都市内外からSAOプレイヤーを集めてのパーティーなんだから。まあこれでもここには300人そこらしかないんだけどね…でも少しでも多くの人でパーティーを共有できるように世界中のパーティー会場と中継を繋いでるらしいわ」「なるほど…アイツらもここにいてくれるといんだけどなあ…」

ブー…ブー…ブー…

「あ、開会式始まるみたいよ?」

バツンッ!バツンッ!バツンッ!

会場にブザー音が鳴り響くと、会場のライトが次々に光を失い、会場は暗闇に包まれた。そして数秒の間を置くと、舞台に立った1人の女性にスポットライトが当てられた

『本日は「アインクラッド攻略記念パーティー」にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。開会式はここ、日本の学園都市会場から全世界のパーティー会場へ中継でお送りさせていただきます』

『申し遅れました。本日司会を務めさせていただきます「篠崎里香」と申します。不躰な司会ではございますが、本日は最後まで何卒よろしくお願いいたします』

パチパチパチパチパチパチ!!!

「篠崎里香!?ってまさかあれリズなの!?」

「ええっ!?マジかよ!?あのお転婆娘があんなマトモな司会できんのか!?」

『つきましては本日のパーティーの主催者であります「土御門元春」氏から祝電、及び伝言を預かっておりますので私がこの場で代読させていただきます』

そう、何を隠そう全世界のSAOプレイヤーを巻き込んで開催したこのパーティーの主催者は上条がよく知る土御門であった。全SAOプレイヤーを労って開催されたこのパーティーを開くのは、こういうことが好きな彼らしいと言えるだろう

「土御門…ありがとな…」

『…きよ、今日は遠路遙々それぞれの地区に設けられたパーティー会場まで足を運んでくれてありがとうだにや…いや、数少ない友人にSAOプレイヤーを持った俺としても嬉しい限りぜよ…今日 はみんな心ゆくまでパーティーを楽しんで欲しいぜよ…』

「前言撤回だあの恥晒しめ」

『ついでには先にご紹介した俺の友人に今日の乾杯の音頭を取ってもら うぜよー！SAOクリアの立役者である上やんこと「上条当麻」だ にやー！というわけで！かーみやん！後はよろしく頼むぜよー！』

「…は？」

『んんっ！では改めまして、主催者の土御門元春からご紹介いただき ましたSAOクリアの立役者！上条当麻さんに乾杯の音頭を頂戴し たいと思います！学園都市会場にお越しの上条当麻さん！壇上まで どうぞー！』

パチパチパチパチパチパチ!!!

「…野郎マジで覚えとけよ」

「ぶふっ！ほ、ほらお呼びよ。行って来なさいよ！くくっ！」

「こつちは本当に笑えねんだっつの…」

「いいからいいから！思いつきりかましてきなさい！」

「どわっ!?おい押すなよ美琴!?!」

こうして上条は会場の人垣を掻き分けながら舞台上の上へと上がった

第61話 忘れられぬ日

パチパチパチパチパチパチ!!!

「や、どーもどーも…」

壇上上がった上条を迎えたのは会場にいる約300人からの熱烈なまでの拍手だった。上条が舞台の中心に立つと、頭上の照明が彼にスポットライトを当てた

「ほら上条、コップとマイク」

「あ、サンキューリス…てか久しぶりだな。こんなところで会えるなんてビックリつつーか…」

「はいはい！そういうのは後よ後！早くなさいよみんな待ちくたびれてるわよ！」

「い、いやでも上条さん本当にこういうことやったことないから何をどうしたらいいか分からないんでせうが…」

「んなもん適当でいいのよ。さーシャキツとなさい！頼むわよ！」

「・・・マジか…」

上条は半ば自暴自棄になりかけながらも決意を固めると、喉を鳴らしてリズに手渡されたマイクをスタンドに付け、口を開いた

『えー……たった今紹介いただきました上条当麻です…』

パチパチパチパチパチパチ!!!

「ビュービュー！」「待ってましたー！」「シャキツとしろー！」「一発頼むぞー！」

『ははは……実を言うところの段取りとか全く聞いてなくて本当に無茶振りもいいところで……すっげえ緊張してます……』

『でも折角の友人の気遣いもあるんで、俺もその期待に応えたいと思います』

パチパチパチパチパチパチ!!!

『ありがとうございます。それじゃあ一言だけ…』

『…俺たちは、あのデスゲームから生きて帰りました。SAOで過ごした約2年間は…みんなそれぞれだと思います』

『勇敢に武器を取って最前線で戦い続けた人、いつかは最前線で戦うことを夢見て中層のダンジョンを攻略し続けた人、安全圏内の街に留まった人、鍛冶屋や道具屋を営んで多くのプレイヤーを手助けした人…本当に色々な人がいます』

『俺は、もしこの中の誰か1人でも欠けてたら、あのゲームはクリア出来てなかったんじゃないかって…そう思う』

『俺はゲームクリアの立役者なんかじゃない。ゲームをクリアしたのは、あの2年間を一粒になつて生き延びたここにいるみんなと、死んでいったみんなの力と願いなんだ!』

『俺たちは忘れちゃダメなんだ!あの仮想世界で過ごした2年間は紛れもなく!俺たちにとってもう一つの現実だったんだ!』

『だから…仮想世界で俺たちが強く生きたように、これから先の現実でも強く生きよう!死んでいった仲間の分も含めて…精一杯生きていこう!』

『俺は…みんなと一緒に戦えたことを、一生忘れず、誇りに思う』

『今日は今まで続いた2年間の!最も忘れられない思い出の日にしよう!』

『みんな…本当にありがとう!』

『かんぱーい!!!』

「かんぱーい!!!」

ガチャガチャガチン!キンキンキン!

上条が右手にもったグラスを高く掲げると、その乾杯の音頭を皮切

りに会場の人々のグラスがぶつかり合う音があつという間に会場中で反響し、喉を潤す音が会場を包んだ

「ぶはあー!」「美味えー!」「さあ飯だ飯ー!」「食うぞー!」

ワイワイガヤガヤワイワイガヤガヤ…

「だあー…死ぬかと思った…水だ水…ゴクツ…げっ…これシャンパンじゃねえか…不っ味いな…」

無茶振りを終えた上条は安心と共に全身を脱力させ、舞台袖にはけながらグラスに注がれたシャンパンを飲んだ

「お疲れ様上条。名演説をどうもね」

「おおリズム…ありがとよ…でもあんなの二度とゴメンだ…」

「もおー、しつかりなさいよ。こつちの世界じゃリズムベツトじゃなくて篠崎里香なんだから」

「あ、そうか…じゃあ…えっと…」

『里香』でいいわよ面倒だし。今さら呼ばれ方なんて気にする歳じゃないわよ」

「そつか…じゃあ里香。改めて久しぶりだな。会えて嬉しいぜ。最初に司会で名乗ってない時は誰か分かんなかったけど」

「私の方こそまたアンタに会えて嬉しいわよ。そうね…まあSAOじゃ髪の色がピンクだったし分かんなくて当然っちゃ当然よ。ほら!そんなことよりさっさと降りましょうよ!美味しい料理とみんなが待ってるわよ!」

ガシツ!ダツ!

「おわっ!?ちよつりズ!そんな引つ張るなつて!」

「だから里香!いい加減覚えなさいつて!」

そう言つて里香は上条の手を強引に引つ張り、舞台袖の階段を駆け下りると、パーティー会場を自由に回り始めた

「えつと…上条、アンタ誰かツレとか連れてきたの？」

「え？あー、ツレって訳じゃないんだけど…ここまで来るのに途中で合流した美琴が…」

「あ、いたいた！おーい！リズー！」

「へ？あー！！ミコトー！！」

上条と里香から少し離れたところから手を振りながら美琴が走って来た。そして里香と再会するなり両手を繋ぎ再会を喜んだ

「もー！ビックリしたわよりズー！いるかないかってことを考えてたらいきなり舞台上に司会で出て来るんだから！あ、ここでリズは失礼よね。改めて会えて嬉しいわ里香！」

「私も会えて嬉しいわよ美琴！覚えててくれてありがとう！」

「もおー！心配しなくていいわよ破天荒なヤツ忘れようとしても忘れられないわよー！」

「それ褒めてないわよね！」

「やれやれ、とりあえず合流したか…さて、他に会いたいヤツもいるにはいるんだが…果たして上条さんが会いたいヤツはこの会場にいるもんなんですかね…」

「上やんさん！」

「ん？あつ！！ひよつとして…シリカか!？」

「はい！お久しぶりです！SAOではピナと一緒にお世話になりました！」

上条は自分が声をかけられた方向に振り向いた。するとそこには第47層の思い出の丘で共に冒険した少女であるシリカこと綾野珪子がいた

「懐かしいなー！あれから元気にしてたか!？」

「はい！何もかも上やんさんのおかげです！」

「いやいや、俺は何もしてないよ。えーつと…確か名前は…
あああゝ…」

「えっ!? ひよつとして覚えてくれてないんですか!? 私は上やんさんの
名前覚えてますよ!? 上条さんですよね!」

「あ、あー大丈夫だ思い出すから! えーつと…」

「綾野珪子よ。上条」

必死に頭を捻り、思い出を掘り返す上条にリズがシリカの本名を告
げ、助け舟を出した

「あつ! あーそうだそうだ思い出した! …つてあれ? なんでリズがシ
リカの名前を…」

「私たちは学校で知り合ったのよ」

「学校? ああ、学校に通えなかったSAO生還者達の為に学園都市に
新しく作られたっていうあれか?」

「そ。第七学区に新しく学校を建設して、日本中のSAOに参加して
いた学生が通う学校よ。私と珪子は元は学園都市の学生じゃなかつ
たけど、その学校に通うようになって知り合ったのよ。とりあえず通
えば高校卒業資格くれるってんだから儲けもんよね。まあどうせ学
園都市に来たなら能力開発の一つぐらい受けてみたかった気持ちも
なくはないけど…贅沢は言えたもんじゃないわね」

「いーのいーの能力開発なんて。そんなもん受けたところでどーせロ
クな人間になりやしないんだから」

「その理屈でいくと、みこっちゃんもロクな人間じゃないってことに
なるナ」

「ああ!? 何ですって!? てか一体誰よそのチビ!」

「おーおー、ひどいじゃないかみこっちゃん。みこっちゃんに忘れら
れるなんてオネーサン悲しくて泣いちゃうゾ?」

「!? そ、その呼び方…それに無駄に神経を逆撫でするムカつく口調と
喋り方…! アンタまさか…アルゴ!」

「ご名答。流石は血盟騎士団副団長様であり学園都市序列第3位の

『超電磁砲』だな、みこっちゃん」

4人の輪にいる美琴の背後から声をかけたどこか大人びた雰囲気
を醸し出す彼女は、SAOではその確かな情報網と腕前で個人の情報
屋を営んでいた「鼠のアルゴ」だった

「アンタ…SAOじゃずっとローブにフードだったから分かんなかっ
たけど…現実じゃそんなナリしてたのね…」

「まあオレたちはSAOじゃ素顔を全部晒したことはなかったから
ナ。やあ上やん、元気にしてたか？」

「よおアルゴ。SAOじゃ随分と世話になったな。再会出来て嬉しい
ぜ」

「上やんの方も相変わらず元気そうで何よりだよ。どうやら仮想世界
でも現実世界でも相変わらず女の子をはべらせているみたいだな」

「その表現はなんか語弊があるんだが!?!…あれ?でも俺そう言えばア
ルゴの本名知らねーんだけど…」

「まあそこはオネーサンのプライベートだからナ。極秘中の極秘だ。
おそらく私の本当の名前を知ってる人間はここには誰もいないヨ。
それよりホラ。面白いのを連れて来てやったゾ？」

「あ?面白いのって…」

「よお!上やん!ミコト!」

「おーっす!上の字!そして淑女の諸君!」

「あー!エギルじゃねーか!それとその隣にいるダツサイバンダナと
野武士面の冴えないオツサンはクラインだよな!?!」

「なんか俺登場しただけでめっちゃデイスられてねえ!」

「っーか『淑女の諸君』って言葉の意味が相反してるからな…バカ丸出
しだぞクライン」

「まー細けえこたあ気にしなくていいーんだよエギル!」

アルゴが後ろ指で刺した先から来たのはSAO時代で上条が度々
世話になっていたエギルと、上条の悪友であり、攻略ギルド風林火山

のリーダーのクラインだった

「いやー！お前らもパーティー会場ここだったのか！こうしてまた会えて嬉しいぜー！」

「なに、お前の方こそいい演説だったぞ。クラインなんていい歳こいて感動して泣いてたからな」

「ちよーっ!?エギルそれ言うんじゃねーって!」

「あつはっは！相変わらずだな。そうだ、まだ2人の名前聞いてねえや。なんてんだ?」

「ああ、俺は『アンドリユー・ギルバート・ミルズ』だ」

「俺は『壺井 遼太郎』ってんだ。淑女の皆様、以後お見知りおきを」

「あー…：やっぱお前らは面倒だからエギルとクラインでいーや…：」
「ひでえな!」

「ははは、まあ俺の場合は仕方ねーな。改めてよろしくな上条」

「おう、よろしくなエギル。クラインも」

「それはそーと上の字！オメーはミコトという存在がありながらなんでこんなたくさんの女子に囲まれてんだよ!」

「はあ？別に上条さんだって好きでこうしてる訳じゃねーよ。それに美琴というものって言ってもお前な、美琴は別に俺の物じゃねーし、俺も別に美琴の物じゃねーっての」

「問答無用だあ！オメエももう大学生だろ！酒の味の二つや二つぐらい覚えろ！こっから先オメエは男だらけの酒飲み大会だ!!」

「ほら！行くぞ上条！まあ男同士仲良くやろーや!」

「えっ!?ちよっ!?男だらけて!?嫌だああああ!!だったら上条さん女の子と一緒にいたい!!うわああああ!!」

ズルズルズルズル…

2人のおっさんに引きずられながら、上条の断末魔はやがてパーティー会場の喧騒の中に消えていき、後には4人の女性陣が残された

「全く…本当男ってバカばつか…」

「まあいいじゃないのよ美琴！きっとアイツらだって再会が嬉しいのよー！」

「そうですよ！さあ！私たちもじゃんじゃん飲んで食べましょう！」

「そうだぞみこっちゃん。早くしないとゲコ太チョコなくなっちゃうゾ？」

「ええっ!?ゲコ太チョコ!?どこどこ!?!」

「…みこっちゃんはファンシー物好きだって情報は本当だったの力」

「はっ!?べ、別に違うわよ！てかアンタそれどこで知ったあああああああ!?!?!」

「上やんから5000コルで」

「アイツツウウウウウ!!!」

「うえ…気持ち悪い…クラインのやつ…未成年に大人の自分が酔うまで酒に付き合わせるかよ普通…」

あれからクラインとエギルとともにまだ法律上飲むことを許されない酒に付き合わされた上条は、酔いを覚まそうと風に当たる為にパーティー会場からバルコニーへと出ていた

「うううううう…気持ち悪い…」

「…ああ？」

「…ええ?…あつ…」

「酔っ払いのクソ野郎が舞い込んできたかと思えば…ヒーローじゃねエか」

「一方…通行…?」

バルコニーの柵に寄りかかっとうなだれる上条に声をかけたのは、缶コーヒートを片手にベンチに腰掛けていた学園都市第1位の能力者、

一方通行だった

「こんなところで何してんだよ？パーティー会場入んねえのか？」

「ああ？バカかオマエ？俺がああいう場所に溶け込めるツラに見えんのかよ？第一ここに来たのだから不本意だ。家主とクソガキが強引に俺を家から叩き出したんだよ」

「・・・そうか・・・とりあえずは礼を言うよ。SAOでは俺たちと一緒に戦ってくれてありがとな。現実でまた会えて・・・って言ってもまあ・・・お前は元から学園都市の住人だからな・・・まあこうしてまた現実で会えて嬉しいよ」

「ハッ・・・死ぬまで言ってる。言つとくが俺は礼なんて言わねエぞ。大体・・・」

「あつー！いたいた。ちよつとアンタ！一体こんなところで何・・・して・・・」

「あ・・・美琴・・・」

「一方通行・・・」

「・・・オリジナルか」

上条の居場所を探していたのであろう美琴が会場からバルコニーへと出て来た。そして彼女は一方通行の顔を見るなり複雑な表情になり、三人を包む空気にしばしの沈黙が流れた

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・え、えーつと・・・いい、いいお天気ですねー・・・なんて・・・」

「黙つとけ。酒臭エンだよ酔っ払いが。第一オマエまだ未成年だろオが。ヒーローが犯罪なんてやらかしてンじゃn・・・」

「なら、クローンを一万人殺すのは犯罪にならないって？」

「・・・」

「お、おい美琴・・・」

「アンタは黙ってて」

そう言われ上条は固唾を飲んで2人を見守ることにした。彼の目に移る2人の表情はどちらも無表情であり、その表情の奥に隠されている感情を読み取ることが出来なかった

「・・・ああそうだ。俺は平気な顔で罪を犯すヤツだ。俺はその酔っ払いと違って『ヒーロー』じゃねエ。別に誰を殺そうが俺は・・・」
「許してないわよ」

「私、許してないから。アンタのこと。これから先も・・・アンタだけは許すことはないと思う」

「でも、一つだけ分かったことがある」
「ああ?」

「アンタは・・・あの子達を殺したことを罪だと認めて、罪を償おうとしている。それが自己満足だつて自分に言い聞かせてるけど、あの時は間違いない、私を守る為に必死になって戦ってくれた」

「・・・」
「だから・・・許す訳じゃない。でも、アンタが背負い込んでる罪と罪悪感に・・・ほんの少しでも私の分が含まれてるなら・・・その罪と罪悪感は、もう背負ってくれなくていい」

「・・・」
「だから・・・これだけは言っておくわ。あの75層の最後の戦いで・・・私と一緒に戦ってくれて・・・私のことを守ってくれて・・・ありがとう」

そう礼を言つて美琴はほんの数秒だけ頭を下げ、髪をかきあげながら頭を上げると、再び一方通行の顔に視線を戻した

「・・・まったく、ここには聖人しかいねエのかよ・・・辛気臭エったらねエな」

「・・・」

「言つとくが、俺は別にオマエの為に戦つた訳じゃねエ。ただお守りの面倒くせエクソガキと訳分かんねえ花女とかその辺のヤツと面倒な約束をしただけだ。言ってみりゃオマエはオマケだ。オマケ」

「ふっ…あつそ…じゃ、そういうことにしといてあげるわ」

「ああ？そういうことにしとくも何もそういうことでしかねエだろうが」

「はいはい分かった分かった。私も自分が素直じゃないって自覚はしてるつもりだけど…アンタも相当ね。その気持ち分からなくもないから安心なさい」

「…チツ…どいつもこいつも…」

そう言つて一方通行はガシガシと頭を乱暴に掻き毟り、右手で杖を掴むとベンチから立ち上がった

「え？どこ行くんだよ一方通行」

「帰んだよ。見て分かんねエのか」

「いいのか？少しぐらいみんなと話しても…」

「いいつつつてんだろ。俺は別に飯にたかりに来たわけでもねエし、再会を喜ぶ相手なんていねエよ」

「そつか…」

「…だけどまア…」

「？」

「…一番見てエ顔が見れた。それだけで充分だ。もうここに用はねエ」

「あばよ…上条当麻。御坂美琴」

「?!?!」

「…チツ。あああああダリイ…最低の気分だクソが…帰つてコーヒーでも飲み直すかなア…」

ザツ…ザツ…ザツ…

そう最後に悪態を吐くと、一方通行は杖をつきながら歩き始め、バ

ルコニーから姿を消した。そんな見えなくなった彼の後ろ姿を、上条当麻と御坂美琴はしばらく見つめ続けていた

「・・・全く・・・あいつも本当に素直じゃないわね・・・」

「本当だな・・・でも、アレが一方通行なりの優しさなんだよ。きつと」
「・・・そうね」

美琴は上条の言葉に静かに頷くと、そつと目を閉じて微かにその頬を綻ばさせた

「ちよつとー！探しに行った人が戻らないでどうすんのかなよ美琴ー！！」

「あーごめーん！すぐ戻るからー！」

「独り占めなんて感心しないゾー」

「言っておきますけどー！私も上条さんのことは譲らないですからねー！美琴さーんー！」

「うるっさい早よ戻らんかい！／＼／＼」

「はは、みんな元気一杯だな」

「本当・・・誰のせいなんだか・・・」

「え？誰のせいってなんだ？」

「何でもないわよ。ほら、さつさと戻るわよ。ほら、アンタのツレも呼んでるわよ」

「え……………」

「うえっっい上の字ー!?まだまだ酒は有り余ってんぞっ！今度は女性陣の前で飲み比べだっ負けねえぞっ!?!」

「ほら来い上条！現役バーテンダーの俺が特別にバーボンのロックを入れてやるぞー！」

「い、嫌だ・・・もう酒はいい・・・」

「ほら、早く行くわよ！今日を一番忘れられない日にするんでしょ!?!」
「酒の飲み過ぎで全部忘れちゃいますよー!?!あーもー!?!」

「不幸ー!?!だー!?!」

こうして美琴に引きずられながら上条はパーティー会場に戻され
宴の続きを楽しんだ。その後、夜更けまで続いたパーティーは上条当
麻にとっても、同じSAOで生きた仲間達にとっても、決して忘れら
れぬ日となった

最終話 エピローグ

ガチャツ…

「うぁー…ただいま…」

ギィ…ボタンツ！

もう日付けも変わるような夜更けに、学園都市の第七学区に設置されたとある大学の学生寮の一室に一人の男が帰宅していた。そう、先ほどまで『アインクラッド攻略記念パーティー』に参加し、その中心にいた上条当麻である

「あ…頭痛え…とりあえず水だ…水を…」

キュツ！ジャー…トクトクトクツ…

「んごっ…んぐっ…んっ…つぁー…生き返った……ついでに顔も洗つとくか…」

ピリリリリリ!!ピリリリリリ!!

「あ?電話か?」

洗面所で必死に酔いを醒まそうとする上条だったが、急にズボンのポケットに入れられたスマホが着信音を発して持ち主に電話の知らせを気づかせた

「え…と相手は…土御門!?!」

ピッ!

『やつほー!かーみやん!今日のパーティーは楽しんでくれたかにやー?』

「やつほー…じゃねえよこのバカ御門!急に打ち合わせもなしに乾杯の音頭なんかやらせやがって!」

『いやー、喜んでくれてるようで親友名前に尽きるぜよー』

「どこをどう解釈したらそうなんだよ!?!」

上条がスマホの電話に応答し、話し始めた土御門の声はいつもの彼らしい軽々とした口調であり、電話が始まって早々に上条は彼のペー
スに巻き込まれていた

「はあく…つたく…まあとりあえずありがとな。お前らの方も色々
忙しいのにわざわざ俺たちのためにパーティーなんて開いてくれて」
『忙しい？一体なんのことぜよ？』

「え？いやだつて今魔術サイドは覇権争いの真っ只中だつて…」

『あー！はいはい！あれならもうとつくに片付いたぜよー！』
「…は？」

『いやー、実はどつかの魔神様が色々動き回ってくれたせいで魔術
サイド全体で和平条約が結ばれて今後一切は休戦つてことになつち
まったんだぜい。おかげで俺も今は舞香と一緒にバカンスを楽しめ
てるぜよー』

「は、はあ!?!和平条約つて!?!それ一体どうやつて…!」

『それよりも上やん、多分今ごろ部屋のどこかに荷物が届いてるはず
ぜよー。中身は開けてのお楽しみー！それじゃばいばいだにゃ〜』
「えっ!?!おいちよっ…!」

ブツツ！ツ…ツ…

「き、切りやがった…てかそれより荷物つて…あるねえ…」

一方的に電話切られ、役目を終えたスマホをズボンに突っ込んで部
屋を見渡すと、上条の目にリビングの机に置かれた見慣れない小包が
写った

「なんだ…これ？宅急便…なわけねえか。家出る前はなかったし…勝
手に家に上がって荷物置いてく宅急便なんているわけねえし…」

洗い場で酔いを覚ますのを一旦やめ、リビングの机の前に座り込ん
だ上条は机の上に置かれた小包と睨めっこしていた

「爆弾…なんてこたあねえよな？」

「…開けてみるか」

「ビリビリッ！ガサガサッ！

「ん？…ッ!?こ、こいつは…!?!」

上条は恐る恐る目の前の小包に手をかけ、綺麗に中の何かを包む茶色の紙を無作法に破いていくと、その中に入っている何かを見るなり驚愕の表情を浮かべた

「これは…『ALO』のソフトか…?」

そう、彼が小包の中から手に取った「Alfheim Online」と表記されたそれは、通称「ALO」と呼ばれるVRMMO型のゲームソフトだった

「これは…俺が使ってたALOのソフトじゃないよな…」

「…それに加えてコイツは…」

ALOを取り出してもなお、小包の中にはなにやら直方体の形をした箱が残されていた。「Amusphere」と表記されているそれは、ナーヴギアの後継機であり、使用した者を仮想世界へと誘う次世代型ゲーム機の「Amusphere」だった

「ご丁寧にAmusphereまで…これが土御門の言ってた荷物か…?」

「ガサッ…ピラッ…」

「…?封筒?」

小包からAmusphereの箱を取り出すと、箱の下と小包の間に挟まれていた茶封筒がひらりと舞い、床に落ちた

ガサガサツ：

「これは…請求書ってことはないな…手紙か…？」
ペラツ

上条は封筒の中に入れられた一枚の白い紙を取り出すと、その紙に書かれている文に目を通した

「拝啓 上条当麻様

八月の残暑厳しき折、いかがお過ごしでしょうか？

つきましては、暑中見舞いと言ってはなんですがアミュスフィアとALLOを同封させていただきました。どうぞ有意義にご利用下さい。なお、もしこれらを使用しないに至った暁には、あなたの身にさくなる不幸が訪れることを、くれぐれもお忘れなきようお気をつけ下さいませ。

では、私はこの辺で失敬致します。いつの日かあなたと出会えることを楽しみにしております。

敬具」

「…上等だ」

ビリイツ!!!

「さらなる不幸？知るかそんなもん！テメエがどんなツラしてるからなんて知らねえけどなあ…待ってる！今からテメエのその下らねえ幻想をぶち殺してやる！」

上条は手紙の内容に目を通し終わるなり、手紙を真つ二つに破った。そしてアミュスフィアの箱に手をかけ、梱包された銀色のゴーグルのような機械を乱雑に取り出し、ベットの近くのコンセントにそのプラグを差し込み、ALLOのソフトをセットした

「よし、後はこれを…」

カチヤンツ！ドサツ！

そして上条はおもむろに銀色のゴーグルをその頭部に装着すると、そのままベツトに寝転んだ

「・・・一体何が待ち受けてるのかなんて知らねえが…待ってるよ。曲がりなりにもこっちは一度同じゲームをクリアしてんだ。怖い物なんてもうねえよ…」

そして上条はオレンジ色のグラス越しにゆっくりと目を閉じると、次なる冒険の舞台へと意識を落とした

「リンクスタート!!」

—————

「・・・ここは…どこだ？」

仮想世界へと意識をダイブした上条はその目をゆっくり開け、辺りを見回した。ALOの中であろうその世界は既に月夜に照らされており、上条は見知らぬ丘の上に立っていた

「どうなってんだ…？普通はALOに限らずVRMMOを始める時はアバター設定とかチュートリアルがあるはずんだけど…近くに街があるな…とりあえず行ってみるか…」

「おや、随分と早かったな。『幻想殺し』」

「ツ!?誰だ!?……なっ!？」

「私の記憶が正しければ先ほど荷物を届けたばかりのはずなんだが…貴様はそれほどもまでにゲーマーなのか？」

「お、オティヌス!？」

街に向かって飛ぼうと翅を出そうとした上条が背後から何者かに呼びかけられた。その声に上条は咄嗟に振り返ると、そこには隻眼の少女『魔神オティヌス』が立っていた

「・・・ああ、なるほどなるほど・・・お前の顔見たら全部納得がいったよ
：家に置いてあったアミユスファイアもALLOも全部お前の仕事って
ことか。それにどうせ魔術サイドの和平条約つてのも大方お前が
やったんだろ？」

「そういうことだ。気に入ってくれたかな？ 私からのプレゼントは」
「まあそりゃ上条さんの懐事情じゃこのゲームはどんなことがあっても買えねえだろうから嬉しいっちゃ嬉しいんだけどよ・・・だからって別にあんな物騒な手紙書くことあねえだろうがよ・・・」

「なに、あの陰陽師に唆されながら書いたほんの愛情表現だ。気に入ることはない」

「あつ！愛情表現といえよ！お前あの時最後に俺の頬にキスしただろ！ありや一体どういう了見だ!？」

「何を言う。キスなど諸外国では挨拶代りではないか。まあそんなことは一先ず脇に置いてといてだな・・・」

「そんなことと!?モテない上条さんにとって女の子とのキスなんてそんなことで済ませられるイベントではありませんのことよ!？」

「それよりもどうだ?このALLOの感覚は?」

「ああ・・・まあそうだな・・・よくここまで戻したなと思うよ」

「戻した?ははっ、それは違うな人間」

「え?」

「このALLOは貴様がログインしていたALLOを元に戻した訳ではない。そもそもおかしいとは思わないか?」

「おかしいってな・・・あ!確かに何でだ・・・?お前はキリト達の世界の方のALLOを元に戻してたハズだろ?俺はもうあの世界のALLOには行けないハズなのに・・・」

「その通りだ。あの時とは違いタネも仕掛けもないのに自分が住む世界とは違う『並行世界のALO』にログイン出来ている…それはなぜか?ということだが」

「ああ」

「見当違いも甚だしい」

「・・・へ?」

やれやれといった具合に首を横に振って呆れるオテイヌス。そんな彼女の態度に上条は思わず素っ頓狂な声をあげた

「私は魔神だぞ? 成功50%失敗50%の枷こそあれど、その程度の器に収まると思っっているのか?」

「それに忘れたか? 貴様が自宅で手にとってログインしたALOは真正銘、『お前達の世界のALOだぞ?』」

「・・・?・・・はあっ?!?!」

「ふふふつ、その間抜け面。どうやらおおよその察しはついたようだな?」

「えっ…? いやでも…ええっ?!? んな馬鹿な!」

「そう。話は実に至極簡単だ。詰まる所この世界…引いてはALOは…」

『貴様らの世界のALO』と『並行世界のALO』。その二つのALOが1つとなった『新生ALO』だ」

上条当麻の目の前の魔神は、とても簡単なことを言っているような口調で、到底あり得ない事実を告げた

「・・・はあああああああああ!?!」

「どうだ? 驚いたか? これが魔神の器というものだよ人間」

「えっ!?! いやでも! 一体どうやって…!?! キリト達のALOを元に戻すだけならまだしも…どうやって違う世界線の仮想世界を繋げたんだよ!?!」

「なに、元々向こうの世界のALLOは私が自分で作ったものだからな。作り直すのはそこまで手間ではなかったさ」

「確かに完全に元に戻すのは無理だと言った通り、以前とほぼ同じALLOを再構築することしか私には出来なかった」

「しかしなんだ、色々な世界を見て回りたいと言った手前、前回と同じような仮想世界を作ってみても退屈だろうと思つてな。貴様らの世界のALLOの管理者にも許可をとつて二つのALLOの垣根を失くすただけだ」

「・・・おい、許可取つてつて脅したわけじゃないだろうな・・・？」

「まさか。確か：『須郷信之』と言つたかな？彼はALLOを運営する『レクト・プログレス』という企業の新社長でな。かなりの若造だったが、私の『弩』をちらつかせて交渉したところ快く私にALLOの運営権を譲ってくれたよ」

「それを脅したつて言うんだよバカなの!？」

「はははっ。まあそうした後で大型アップデートだと言つて時間をもらつて二つのALLOをくつつけた訳だ」

「・・・いやもう笑えねえよ・・・」

「なに、そう言うな。なにせ私のプロデューサーするゲームだ。きつと元々のALLOよりも格段に面白いぞ？何より二つの世界の人間達が交わるのだ。この世界はわんさか人で溢れるぞ」

「面白くなったつて：例えばなんだよ？」

「グラントクエストは廃止にした。基本的には純粹に冒険を楽しむゲームだ。詳しく説明すれば、この世界のベースをより北欧神話に近づけた。プレイヤーは妖精となつて北欧神話の世界を冒険する：というコンセプトだろうな」

「・・・まさかとは思うけどよ・・・」

「もちろん。事実上のラスボスは北欧神話の最高神である私本人だ」

「・・・ああそお・・・」

上条はオティヌスの無茶苦茶ぶりに呆れを通り越してもはや何も感じなくなつていた

と、夜空一面を覆い尽くさんばかりの妖精達が空を泳いでいた

「うわぁ…すっげえ…」

「よう！久しぶりだな上やん！」

「キリト!?キリトじゃねえか！」

夜空を覆う妖精たちに見惚れていた上条を呼ぶ声が聞こえ、声の方向に振り返るとそこには自分のいる丘に向かって飛んでくるキリトの姿があつた

「ははは！本当に上やんだったか！遠目から見ただ時は幻覚かと思つたけど、またこうして会えるなんて思いもしなかつたよ！一体どうやってこつちに来たんだ!？」

「ああえつと…多分それはここ…アレ？」

丘に降り立ったキリトにそう聞かれ、自分の隣にいる魔神を紹介しようとした上条だったが、もうそこに隻眼の魔神の姿は影も形もなくなつていた

「ははっ…つたく…オティヌスのヤツ…言いたい放題やりたい放題やって帰りやがって…」

「…?…どうした?そこに誰かいたのか?」

「いや、何でも無い。色々あつたんだよ。色々な」

「??…まあいいか。こうして互いに元気に会えただけでもお釣りが来るってもんだ」

「へへっ、そうだな」

「おらー！遅っせえぞ上やん！」

「ん?ああっ!?クライン!?!」

「酔いが覚めなかつたなんて言い訳は受け付けねーからなー！」

そう言つてクラインは上条とキリトの頭上を飛んで行き、夜空に浮

かぶ新アインクラッドへと向かって翅を打ち鳴らした

「今のは上やんの方の世界の仲間か？何か不思議な感じがするな…アイツとは仲良くやっていけそうな気がする」

「いやそれよりなんで違う世界の人が俺以外にも来てることに疑問を感じないんでせうか…？」

「え？いやだってホラ。向こう」

「は？…マジかよ」

キリトが指差した方角に視線を向けると、そこには上条のよく知る仲間たちが夜空に輝く星のように、妖精の双翼の鱗粉を広げながら飛んで来ていた

「おらー！置いてくわよー上やん！」

「一緒に行きましょう！上やんさん！」

「お先！」

「全く…いつまでたっても世話が焼けるナ。上やんは」

リズベット、シリカ、エギル、アルゴと口々に上条に声をかけるとその横を飛び去って妖精の世界の街を目指して夜空へと飛び出した

「あ、アイツらまで…一体いつの間に…」

ドンツ！グイグイ！

「ほーら！アンタもモタモタしてんじやないわよ！」

「はあっ!?み、美琴まで!?ちよ、そんなに押すなよ!?押すなって！俺まだ翅出してねーんだから！」

次々に飛んでいく仲間を見送った上条の背中をグイグイと押すのは、水妖精であるウンディーネに姿を変えた美琴だった

「こちとらアンタよりも長く寝てたせいで身体鈍っててウズウズして

んの…よっ!」

ドンッ!

「どわあっ?!…ッ!!」

ブワッ!

「ほっ…はは、飛ぶのも久々だな…」

「おーい!上やんくーん!キリトくーん!」

「上やんさーん!パー!」

「上やんくーん!お兄ちゃーん!」

「アスナ!ユイ!リーファ!」

すると今度は向かい側からアスナとユイとリーファの三人が上条達のいる丘に手を振りながら向かって来ていた

「まったくアンタってヤツは…なんでそうやってすぐに他の女と仲良くなってるんだゴラアアアアア!!」

バチバチバチバチバチバチ!!

「あつぶな?!いきなり電撃はなしだろ!」

「…ありがと、当麻」

「!!!」

「それじゃ!モタモタしてたら私があつという間にクリアしちゃうわよ!」

ギョーンッ!

「…はは…これじゃ美琴には敵いそうにないな…」

そう言つて上条は美琴が放った電撃を打ち消した感触を馴染ませるように、ゆつくりとその右手を握り、口元を綻ばさせ、飛び立っていく美琴の背中を見つめていた

「さあ!みなさん行きましょう!」

「行こう!キリト君!上やん君!」

「ほら!お兄ちゃんも上やん君も置いてっちゃうよ!」

「ほらお呼びだ！行こうぜ上やん！」

「……ああ！みんな行こう！」

こうして上条やキリト、その仲間達の大冒険はまた始まっていく。その翹で、脚で、まだ見ぬ世界へと旅立っていく。世界の垣根をも超えた彼らを隔てる物など、何もないのだから――

とある魔術の仮想世界

Fin.